

疫病神うずまきトグロ

GGアライグマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゼツのような存在に転生した男（長門世代）が趣味で桃源郷を作る話。

※いろんな意味でとても汚い話です。オリジナル登場人物がとても多くなりまして、他作品の皮を被ったようなキャラを使わせてもらいます。Dr. スランプ、ガンダム系、CLAMP系のキャラは出ます。

目次

第二次忍界大戦の中で

九死に一生の連続 | 1

卑の意志 | 11

自由の戦士の裏切り | 17

自由の謳歌 | 23

抜け忍は肩身が狭い | 28

緑化と融和を目指して

やつと…… | 36

貧乏神綱手 | 44

気分は空海 | 50

決別としがらみ | 57

大国の狭間で | 65

川沿いの戦い

襲撃 | 71

戦場の空気 | 77

紛争から戦争へ | 88

嵐の後に | 99

綱手の権威 | 110

痛みを受け入れよ | 119

木の葉の日向にて三強 | 129

青年団を討て | 140

とびっきりの卑劣対卑劣 | 150

笑えない少年 | 159

第三次忍界大戦へ

ダンゾウの策	173
二枚舌、三枚舌	180
内乱分子を確保せよ	185
木の葉連邦誕生	197
第三次忍界大戦勃発	207
卑遁・大糞降下の術	213
卑遁・千年殺し景厳	221
新事業と暗躍と	231
暁連合誕生と言っているのかどうか	241
スコープオン赤砂の旦那	249
拳で語り合う	258
川影の一日	266
陰謀の犠牲者	277
木の葉新時代	
終戦と川影選挙	285
大波乱の火影選挙	290
この大蛇丸は本物か？	299
木の葉大改革、うずまきの姫は誰の手に？	307
血肉太郎	316
ヒザシが照らすもの	325
科学の進歩、スーパー大蛇丸ゴッド	333
ちびうさと化学反応	340
黒い男と白い男	348
THE FIRST NARUTO	
ファーストキスは突然に	353

忍びの歴史	368
素晴らしき桃色の青春	384
月に移って、お仕置きされちやう	396
竹取物語	407
忍界転生 無職になっても本気出す	419
NINJAの仕事	431

第二次忍界大戦の中で 九死に一生の連続

せつかく転生したのに奇形だった。

お腹にいるときはとても期待していた。耳は聞こえていたから、チャクラとかうずまき一族とか火の国とかそういうのから判断してここがNARUTOの世界だと当たりをつけていた。どんな母か楽しみだった。しかし俺が産まれる数日前、村が襲われ、母は山奥へ逃げることになった。体力を失った母は不衛生な環境で風邪を発症した。そんな状態で出産となった。

難産だった。俺は相当成長してしまっていたようだ。しかしぼた足とかでアシストしたので、ただの赤ちゃんよりは楽だったと思う。産まれた時は夕方だった。しかしずっと暗闇にいたので、あまりにも眩しくてほとんど何も見えなかった。ところが意識して目にチャクラを集めると母の顔が見えた。短い赤髪で青い瞳、しかし日本人っぽい雰囲気。NARUTOのキャラにありがちな顔だった。おそらく美人。年齢も20と若い。しかし、ひどくやつれていた。しかも、俺の顔を見て、ひどいショックを受けたようだった。

「ごっごっごっごっごっごっ」

しかし母は、最期の時を味わうようにゆっくり俺を抱き寄せた。

「ごめん、なさい……。トグロ……」

それが母の最期の言葉だった。

俺は産まれてすぐに一人残されてしまった。ふつうに考えると死ぬしかない。しかし俺はまだ死ぬわけにはいかなかった。死した母の乳にかぶりつき、吸いまくった。食いだめするつもりだった。それでも足りるはずがないので、母が持っていた竹の水筒を開け、中に搾り取れる限りの母乳を入れた。当然それでも足りるはずがない。しかし赤子の肉体ではジャングルで生きていけない。俺はチャクラを使って食料を得る必要があった。

俺はいろいろ試した。幸い胎内にいるころにチャクラを練る方法

は気づけたので、あとは応用だった。赤ちゃんの食事に最も大事なものは火のほずである。ことごと煮て離乳食を作らなければならない。ふつうの赤子には厳しいがチャクラで肉体を強化できる赤子なら生き残れるかもしれない。そんなギリギリの賭けだった。夜の寒さは母の死体にくるまることで凌いだ。

母の大切な母乳はたった一日で尽きた。俺は生後一日で狩りを覚えなければならなかった。カエルやミミズを捕まえることはできた。試しに水溜まりで洗ってから生で食べてみた。よおく噛んだが、胃が受け付けなかった。喉に詰まって死ぬかと思った。しようがないからカエルを分解し、柔らかかそうな足のゼラチン質の部分だけ食べた。当然足りない。俺は死を覚悟した。

何日もそんな日が続いた。俺はガリガリに痩せ細ったが、驚くことに死ななかった。近くに小川があったのは救いだった。川の水にカエルをぐじゅぐじゅにして交せて、喉を潤し、太陽の光に当たる。それだけで活力がわいた。

ある日俺は、頭の後ろにでっぱりがあることに気づいた。小川を鑑に見てみると、緑色の芽みたいなのが生えていた。もしかしてと思つてそこにチャクラを集めてみると、伸びた。

絶望の中に巧妙が見えた。俺は木遁が使えたのだ。

さらに何日もそんな生活が続いた。相変わらず俺は死ななかった。しかし母の死体が腐り始めた。これでは暖を取ることができない。俺はなんとか母から服を脱がし、自分で着た。裸の母にエロスは感じなかった。

俺は穏やかに死に向かつていった。恐怖を感じないように思考しないよう意識していた。いくら時間が過ぎただろうか。ある日俺はしわくしやの婆さんに出会った。

「うぎやああああ！ 化け物おおおお！」

婆さんは俺を見て大声を上げた。それからなんだなんだと大人が集まってきた。木の葉の額当てをしていた。

その時俺は思考できる状態ではなかったもので、後から話を聞くことになった。

しわくちやの婆さんは俺の母の叔母だった。赤子が生まれた時に鳴き声が迷惑にならないように、一人一族から離れてこっちで出産したらしい。婆は母も俺も死んだと思っていたそうだが、俺は生きていた。

しかも俺は、木遁が使える上に目が白かった。その気になれば白眼を発動することができた。母はうずまき一族らしいが、父はたぶん日向だったのだろう。

俺は婆さんに引き取られ、母の従姉の家で暮らすことになった。幸い幼い子供がいたので母乳は出た。しかし家は貧しく、しかも俺は見ただ目が気持ち悪いので嫌われた。俺はマンガのゼツの戦闘時のような崩れた顔面をしていた。肌も茶色というか木っぼいところがあつた。

少ない母乳、少ない水だが俺はしぶとく生き永らえた。母の従姉の子どもとは一緒に遊んだりしてそれなりに仲良くなった。しかしそんな折り、俺は母の従姉の父に連れ出され、山椒魚の半蔵に売られてしまった。木遁はバレていなかったが、白眼がいけなかったらしい。

俺はそこで施設に入れられた。今までより遥かに多くの食事が与えられたが、自由はなく、適度の運動と謎の注射と薬の飲用が義務付けられた。要するに人体実験であり、俺が充分大きくなったら眼球を盗もうというのである。

俺はバカな子どもを演じた。ご飯をもらおうと無邪気っぽく喜んだ。化け物と罵られ、蹴ったり突き飛ばしたり苛められても、頼まれたら犬のように靴を舐めた。しかし内心は焦りまくりで、隙を盗んではチャクラを練る練習をしたし、運動は怒られない範囲でかなりやった。

7年ほど経ったある日、半蔵達は激しい戦闘があると言って遠出をした。施設の管理人がたつた2人の中忍になり、夜は実験体とのセックスに夢中になることもあった。俺にはチャンスだった。今まで隠してきた木遁。木遁は水遁と土遁からなる。俺はチャクラを込めれば地面を簡単に掘ることができた。

俺は一人で施設を抜け出した。やつらに匂いが届かぬよう風下を

進み、道もできるだけ土は踏まないようにした。罨らしき糸や落とし穴は白眼で見切った。

1日歩いて、追手はなかった。しかし腹は減った。俺は再び空腹と戦うことになった。

と言っても、もうカエルやミミズに手間取ることはないし、自分で木を擦って火を起すこともできる。問題は煙を忍者に見られないことだ。それは難しいので3日は生のカエルと光合成で我慢した。生来べらぼうに強かった胃腸が謎の薬で弱っていたので、腹痛との戦いになった。

もうそろそろいいだろうと思って火を起こした。周囲を警戒しながら、竹を鍋にして蛇と魚のスープを作ることにした。俺は白眼による警戒を怠らなかつた。そして見つけた。1000mほど離れて、まっすぐこちらに向かっている子どもの3人組を。彼等も俺かそれ以上に痩せており、目にはやつと希望を見つけたような輝きがあった。俺は急いで火を消し、スープを飲んだ。一度には飲みきれなかつたので、地面に隠した。俺本人も木に登り、木に擬態して隠れた。しばらくして、3人がかつて煙のあつた場所にやってきた。3人は警戒し俺を探っているようだった。

「ね、ねえ。大声で叫んでみようかな」

「いや、まだだ。やつが仲間だと決まったわけじゃない」

「でも、このまま3人でいても、食糧が……」

見るからに親を無くして行き場のない子供だった。年齢も俺と近いし動きは素人。

食事に関して余裕があるわけではないが、俺は餓死しにくい。手を組んでおくべきか？

3人のうち一人は気の強そうな男で、一人は寡黙だが背の高い男、一人は気弱で優しそうな女の子だった。

交渉の前に、立場を分からせておくべき。俺は木遁で木刀を作り、音を消して女の子へ飛び込んだ。

背の高い男だけは俺に気づいた。しかしその時はもう俺の木刀は女の子の首元へ来ていた。

「小南！」

「ひっ」

「動くな。質問に答えろ」

「くっ」

男二人が悔しそうな顔で俺を睨む。女の子は俺の顔を見て蛇に睨まれたように固まっていた。

「お前達は孤児か？」

「あ、ああ。そうだ」

「なぜここへ来た？」

「生き残りがいるかもしれないと思って。それに食料も分けて欲しかった」

「今までどうやって生きてきた？」

「それは……。ばったり会った人に食料を恵んでもらったり、果物を取ったり」

「盗んだんだな。追いかけれなかったのか？」

「うまく逃げたさ」

「森には猛獣がいるだろう。どうやって戦った？」

「石と木だ。でも逃げるのがほとんどだ」

「そうか。まあ、そうなるだろうな」

俺はすつと女の子から木刀を逸らす。女の子はへたへたと座り込んだ。

後ろの長身からプレッシャーが消えた。多少安心したらしい。しかしすごいチャクラだな。あの長身。俺と大差ない。俺も選ばれた子供ばかりの施設でチャクラ量はずば抜けていたんだがな。

すつと後ろを向く。

「ひっ」

「うっ」

「気持ち悪いか？ 俺の顔が」

「い、いや。そう言うんじゃない」

気の強そうな男の子が口で否定しようとするが、顔は苦い。やはり気持ち悪いらしい。

「まあ、それも仕方ない。俺だって自分で気持ち悪いと思う。だが、俺と協力する気なら慣れろよ」

「え?」

「お前達孤児だろう? 俺もだ。仲間が多い方がいい」

「あ、ああ。そうか。そうだよな。よろしく。俺は弥彦。こつちのノツポが長門で、その女は小南」

「そうか。俺はトグロだ。姓は、どうなんだろうな。母はうずまきだが父は日向だ」

「うずまき?」

「日向だ?!」

と、男の子二人は違った感じで驚いた。気の強そうな弥彦は怒った風に、長身の長門は迷っている感じだ。

ガキだと思って姓を名乗ったが、まずかったかもしれない。そう言えばこの世界は部族単位で争っていた。

「待ってくれ。俺は両親ともに会ったことがないんだ。忍者に捕まって実験施設に入れられていた。だから姓に意味はない」

「そうか。まあ、俺たちも似たようなもんだ。村が襲われて、父さんも母さんも死んだ。頼れるものはお互いだけだ」

「すまない。俺達は木の葉と雨隠れにいい印象がないんだ。あいつらが戦争でこのあたりを無茶苦茶にしてしまった」

「なるほど。いや、俺の方こそ軽率だった。すまないな」

「いや、いいって。それと、難しい言葉は分からないから使わないでくれ」

それが長門、弥彦、小南との出会いだった。

俺は白眼と木遁を使って簡単にカエルや魚を取ることができると見張りもできる。だからいつも俺が多めに食料を集め、彼らに分け与えた。彼等はすまなそうにしたが、実質20歳を越える俺が少年達に不平を訴える気にはなれなかった。それに、彼等も必死で食べられるものを探したし、野犬が現れたら協力して戦った。助かったのは風邪をひいた時だ。俺が寝込んでいる間に彼等が水と食料を用意し、自分の分は減らして俺に食べさせてくれた。一人では死んでしまった

かもしれない。

少しずつ山の生活になれ始めた頃、恐ろしい冬がやってきた。食糧が減り、寒さも辛くなる。俺は火の国へ向かうことを提案した。森で薪や木の実を集め、あそこに売る。そうしないととても冬を凌げない。火の国を選ぶのは、ここから近く、最も大きな国だからだ。

長門、弥彦は渋った。火の国が雇った忍び、木の葉のせいで両親が死んだと考えていたからだ。俺は切り換えるよう言った。

「木の葉がどうしても憎いなら、内側から寄生してやるくらいの気持ちで、潰してしまえ」

俺の言葉に乗りはしなかったが、それ以外に方法はないという方向で纏まった。

道中、夜は俺が木遁で風雨を凌げる小屋を建てた。それでも寒いので、中では4人でくつついた。小南とくつついたらうれしいが、彼女は弥彦を好いていたので、横になれる確率は半分だった。

知らない道を長門の乏しい知識を頼りに進んだので、迷いまくりだった。夜盗に見つかることもあったが、幸い忍者とは会わなかった。俺の木遁で楽に対処でき、逆に夜盗の服や食料を奪えるのでよかった。武器も手に入れた。俺は必要ないので3人に渡ったが。

もうすぐ木の葉。俺達は油断していた。ばったり恐ろしい忍者に出会ってしまった。

「あら？ こんな山奥に子どもが4人？ 怪しいわねえ」

蛇みたいなオカマみたいな青年だった。恐ろしい顔で恐ろしい雰囲気。チャクラも並々ならぬものがあつた。

勝てない。死ぬ。

「逃げろ小南！ ここは俺達が！」

勇ましく長門が小南の前に出た。弥彦もビビりながらだが小南を庇おうとはしている。しかし俺は、その声より早く背を向けて逃げ出していた。小南でさえ、二人を残して行けないと悩んでいるのに。

情けない。でも怖い。お前達のこととは忘れないぞ。と考える間も惜しい。

「賢明ね、あなた。でもどうして白眼を持つてるのかしら？」

ひゅつと変な声が出た。絶望が押し寄せる。蛇オカマは弥彦達を無視して俺の方へ来た。しかも一瞬でここまで移動した。まるで弾丸のように。

勝てるはずがない。

気づけば、俺は土下座していた。

「ち、父親が日向らしいのです。産まれた村は山奥で、この戦争で滅びました。本当です！ 許してください！ なんでもしますからー」

「あら。なんでもなんて滅多に口にするもんじゃないわよ。でもいいわ。あなたは生かしてあげる。それだけの価値があるかもしれないからね」

「大蛇丸よ。もしかしてそれは、悪どい実験が目的じゃないだろうのお」

「あら？ 今どき実験してない里なんてないわよ。もつとも、日向を敵に回してしまう可能性を考えると、この子で実験するのは難しいけどね。残念ながらね」

「そういうことを言つとるんじゃないんだがのお」

「分かってるわよ。まったくあなたの甘さにはヘドが出る」

新しく人の良さそうな白髪の青年がやってきた。助かる雰囲気だ。よかった。

その後、綱手というかなりの美女もやってきた。自来也、大蛇丸、綱手は昔からチームを組んでいる木の葉の優秀な忍びらしい。自来也は特にお人好しで、俺達が一人立ちできるまで面倒を見ると言った。綱手と大蛇丸は、自来也なりに戦争の犠牲者に罪滅ぼしがしたいのだろうと言ったが、俺はそれだけではない気がした。ふと気付くと、自来也が長門をじっと見つめているのだ。俺も彼はとんでもない天才だと思っていた。弥彦や小南と比べるとなんでもかんでも出来すぎる。戦闘はもちろん、家事や気配りまでだ。食事だって自分が一番ガリガリなのに他の二人により多く食べさせようとする。このくそつたれな幼少時代を過ごしながら信じられない自己犠牲の精神だ。

自来也は俺達を忍者として育てようとした。と言っても半蔵のようには利益のためには何でもやるのではなく、人情重視だ。甘いのは間

違いなかったが、弥彦達に笑顔が増えていくのはよかった。自来也も暇ではないのでいつでもいるわけではなく、むしろ子どもだけの時間の方が長かった。しかし狩りや家事はもはや手慣れたものだった。

俺達はすくすくと戦闘能力を伸ばして行つた。特に長門が目覚ましく、あつという間に俺に追いついてきた。俺も焦つて本気になり、長門も俺を越えようと頑張り、相乗効果のように二人で強くなつていった。綱手は偶に俺達の様子を見に来た。そんな時に限つて自来也は綱手の下ネタで盛り上がっていたりするので、盛大に殴られていた。小南と弥彦は笑うが、俺は笑えなかった。忍びでなければ死んでいる。ゾツとした。俺に綱手の尻や胸を注視する癖があつたのもその原因だろう。白眼を使つて乳首や割れ目だつて見ていたから、いつバレてしまふか心配だった。

ある日、綱手が俺に話があると云つて、一人だけ離れに連れ出した。俺はどうとうその時が来たかと覚悟した。しかし綱手はいつになく真剣な表情で、ギャグの雰囲気ではなかった。

「血継限界について、自来也は何か言っていたか？」

「ええ。この目や小南の紙のように、血筋でないと使えない術や瞳力のことでしょうか？」

「そうだ。そして貴重な血継限界は狙われやすいのだ。特に三大瞳力の1つである白眼は大昔から……」

綱手の話は、要するにいくら自来也が鍛えても白眼を守りきれるほど強くはなれないから、木の葉に来るべきというものだった。白眼は木の葉の日向家が大層大事に守ってきたので、俺も分家として受け入れてくれるらしい。

「3人と一緒に、という風に交渉はしてみるつもりだ。しかし、木の葉も戦中で余裕がなくてな」

「ええ、そうでしょうか。仕方ないことです。僕はいいですよ。というかありがたい話です。受けさせてください」

「そうか。だがそんなの簡単に判断してしまつていいのかわ？」

「いいですよ。どう考えたって僕がいた方が彼等は危険なんです。だったら木の葉でじっくり力をつけて、時々彼等に仕送りした方がい

い」

「ふん。意外にドライなんだな。だが言っておくぞ。木の葉もそう甘くはない」

「でしようね。大蛇丸さんのような方だっているでしようから」

その後、弥彦達に別れの挨拶をした。皆泣いてくれた。俺はドライなつもりだったが、さすがに命の危機がある中で頑張ってきたことや、彼等の眩しすぎる愛を思うと泣けた。

卑の意志

俺は施設で薬を飲まされた影響で記憶が大分減っている。自分が日向一族とうずまき一族のハーフであることは、施設でも大つぴらに話されていたので覚えているが。

しかし原作知識は薄かった。主人公の名前がラーメンの具だったくらいしか分からない。主人公の里はおそらく木の葉だったが、砂だった気もする。まあこれは、木の葉の顔岩を見た瞬間にやっぱ木の葉が舞台だったと確信できたが。

綱手に連れられて日向の門をくぐった。黒髪長髪で白眼の集団がワツと群がった。

「むっ。本当に赤髪なのだな。うずまき一族だったか」

日向の代表らしきおっさんは俺の髪を見て嫌そうな顔をした。他の連中は俺の顔が気持ち悪いようだった。どっちがましなのだろうか。

「すまん。トグロ」

別れ際、綱手はぼそりと言った。俺にはその意味が分からなかった。

代表らしき男から長い話があった。日向には宗家と分家があるそうで、分家は宗家に従わなければならぬらしい。お前は分家だからわしには逆らってはならぬ、という感じだ。そして誓いとしてよく分からない印を押された。痛かった。しかし痛いだけで終わらないのは、この印は呪いだということだ。なんでも、俺が宗家の意向を無視したらいつでもどこでも殺せるようになってるらしい。なんてひどい脅しだ。人権なんて全くなかった。綱手はこれと言っていたのか。

それでも、我慢すれば安全が手に入る。俺は分家の屋敷に他の孤児と共に入れてもらえた。上下関係はあるが食料は確保できた。

しかし、無能が上から目線で肩を叩けとか、埃が完全になくなるまで部屋を掃除しろとか言ってくるのは堪える。こっちは自分の修行がしたいのに、どうでもいいことに時間を使わされてしまった。

それに比べると、忍者アカデミーはましだった。少なくとも年齢とか血筋による上下関係はない。実力がありさえすれば認められる。将来性豊かなかわいいう女の子もいっぱいいる。俺は顔がぐつちやだから化け物扱いされるけどね。

とかく、アカデミーの教師はまだ公正公平な人間が多かった。俺は実力さえ出せば誉められたし、よく扱ってくれた。

ところがだ。戦争がいよいよ泥沼化してくると、言い訳のようになんて声や聞かなくなった。俺をこき使ってくれた日向の先輩が死んだのは朗報だったが、周囲は「お前が死ねばよかったのに」と言ってくるようになった。そして、その日がやってきた。

「うずまきトグロ、お主を下忍に認定する」

そう言っただけで渡されてしまった。しかも早速任務が入る。

「担当教官と共に物資を前線まで届けよ。後方支援として立派な軍務である。木の葉の忍びとして誇りある行動をとるように」

誇りも何も、俺来たばかりでまだ9歳なんだが。もしかして、この額の呪いがあるから裏切らないと思ってるの？ 木の葉の闇ってそんなに深いのか？

俺が木の葉に対する信頼を完全に失った瞬間だった。

「よお。久しぶりじゃのお」

担当教官は自来也だった。これには助かった。あと二人は、俺に次ぐ天才である波風ミナトと、俺と同じうずまき一族で木の葉に来たばかりのうずまきクシナ。俺が密かに狙っていた子の一人だ。だけど、彼女はなあ。チャクラと体力はあるがそれ以外がなあ。

「先生、クシナって、まともに使える術がないんですよ。多少体力はありますが、戦えるレベルではありません。死にますよ」

「うむ。じゃからお主らやわしがおるんじや」

自来也は妙に厳しい顔で言った。

「いや、違いますよ！ クシナのレベルじゃ明らかに足手まといですよ！ 下手したら一年前の小南にも劣る！」

「な、何言っただってば！ 足手まといになんかならないってばね

！ あんたこそ一番ガキのクセに偉そうなこと言ってるんじゃないってばね！ 他人の心配する前に自分の心配しろってばね！」

クシナがバカ丸出しの口調で言う。まともな大人に見てもらいたいなら敬語を使えばいいのに。というレベルまで頭が回りはしないだろうけど。彼女って日本と比べても小3くらいの子どもつぽさだと思う。本当の年齢は知らないが、胸の発達を見るに12歳以上ではあるはずなんだがなあ。

「まあまあ。彼女は実は意外なところでとんでもない力を発揮するんだよ。きつと僕達を助けてくれるはずさ」

「い、いいこと言うってばね！ ミナト！」

「俺はね、クシナが嫌いでこういうこと言ってるんじゃないんだ。戦場だ！ 本当に死ぬんだ！ はつきり言ってるクシナ程度なら俺でも簡単に殺せるんだ！」

「なにをー！ 憎たらしいやつー！」

「ええ加減にせんかい二人とも！ 特にトグロ！ 忍者が初任務から文句言つとつたら失格じゃわい！」

その初任務で死ぬかもしれないから、文句を言ってるのに。というか今の俺は木の葉への信頼ゼロなんだよな。何せいきなり頭に爆弾押し付けられて、ちよつと強くなったら戦争行けども。逆らったら死ぬだもん。どうやったら素直に従おうと思えるんだ？

俺が予期したようなことは起こらず、任務はふつうに始まりふつうに終わった。俺の白眼と自来也のセンサーが生きた。あと、ミナトが思ったより強かった。本番で実力を発揮するタイプだな。やさしくて身内相手の組手では本気になれないが、敵に対しては躊躇せず殺す非情さも併せ持っている。情には厚く、味方は裏切らない。理想的な忍びだな。

対して、クシナは荷物運びの役に立った。女子なのに妙に力が強い。戦闘では完全にお荷物扱いで、自来也は俺に「クシナから離れるな！」と言ってきた。俺にお守りをさせるつもりらしい。

初任務後、自来也に「クシナってチャクラが2つないですか？」と言ったら「今は聞くな。必要になったら教える」と意味深げに言われ

てしまった。

その後も戦争に関する任務が度々行われた。専ら後方支援ということもあり、肩透かしに思えるほど安全だった。クシナは本当に戦闘に入らず、そも入れるレベルでもなく、なぜメンバーに選ばれたのか分からなかった。彼女の中に2つあるチャクラの内、不気味で巨大な方が関係していると思うが。

任務をしながら修行も行った。全員実力は上がっていく。チャクラコントロールの木登り、水面歩行など俺もミナトも一発でできたが、クシナは一ヶ月も泥だらけになってやっとできた。白眼で見ると、彼女の中にあるもう1つのチャクラが彼女本来のチャクラを邪魔している感じだった。それを自来也に言うとお主がアドバイスしてやれ」と言ってきた。やはり自来也は俺にクシナのお守りをさせたいようである。俺が歳の割に大人で気心が知れているからだろうか。クシナの方は明らかにミナトラブなのだが。

下忍になって一年ほどで、俺とミナトは一緒に中忍になった。そこで俺の班員全員が火影に呼ばれた。

「そろそろお主たちにも話しておくべきじゃろう。何故、術の使えないうずまきクシナを戦場に連れ出したのか。そのくせ後方支援ばかりさせていたのか。尾獣という言葉は知っておるか？」

「えっ、まさか！」

俺はその言葉で理解した。アカデミーで一応習っていた。人間では及びもつかない、膨大なチャクラの塊である化け物。それを使役する存在が人柱力であると。クシナの中の謎のチャクラも、里が急いでいた理由も分かった。ひとつ分らないのは、そんな大事な人柱力の守りを俺やミナトのようなペーパーに任せただ。

三代目火影は俺の疑問を理解しているようにじつと俺を見た。

「お主の言いたいことは分かる。どうして人柱力を下忍と組ませたかじゃろう？ 実はそれにも理由があるのじゃ。下忍ではなく、お主の血継限界が重要じゃった」

「白眼ですか？」

「いいや、木遁じゃ」

「木遁ですか？ 木遁と人柱力と何の関係が……」

「よいか。木遁は、千手一族でも初代火影であらせられる柱間様しか扱えなんだ。そして柱間様は、その木遁をもって全ての尾獣達を押さえることができた、たった一人の忍びじやったのじや」

「そ、そうだったのですか」

珍しいとは思っていたが、それほどだったとは。俺がクシナとペアなのも合点がいった。というかここまで来たら俺とクシナが結婚する勢いじゃないか？ 一生ペア決定みたいな話でしょ？ でもミナトがいるしなあ。どうだろう。

「今後は九尾の封印を緩め、その扱いも修行に組み込むように。これは我が里の存亡に関わる重大な任務である」

すごい話を聞いた。そんな気持ちで帰路についた。モブから急に主役に押し上げられたような……。ところが驚いているのは俺だけで、クシナもミナトもいつも通りだった。

「なあ、驚いたりしないの？」

「ごめん。実は知ってたんだ」

「あつ。ふーん」

どうやら知らないのは俺だけだったらしい。クシナが知っているのはおかしくないが、ミナトもだったとは。こいつはポーカーフェイスだから分からのよなあ。

その後、本当に九尾を扱う修行が始まった。自来也が封印を解き、クシナがもがき始める。俺は自来也が合図するまで待ち、「今じゃー」の声に合わせて木遁でクシナを縛る。

「ガアアツアアアア！」

「おつ、おおつ」

なんだこれ。木がめっちゃチャクラを吸い取る。しかも破裂せず相手のチャクラの大きさに合わせて成長して、確実に相手の動きを止める。すごいなこれ。

自来也は再び九尾を封印する。クシナはふらつと気絶する。

「面倒じゃからこれからはお主が封印も封印解除もやってくれると助かるんじゃないのう」

面倒というより、自来也という戦力をいつまでもこんなことに使ってはられない。だから俺は真剣に封印術に取り組んだ。もともとうずまき一族は封印が得意であり、俺は白眼でチャクラの流れを見ることもできるので、あっさり習得できた。

九尾の修行については、進展のない日々が長々と続いた。クシナ曰く、九尾はクシナを小娘と呼んでおり、バカにして力を貸す気がないらしい。俺が「歌でも歌ってみれば？」「好きな食べ物とか」と言ってみると、クシナはさっそくその日から歌い始めたし料理も始めた。例によって不器用だったが。また、狐を探し回り、餌付けしたり、生態を調べたりもした。モテモテのメス狐を九尾に紹介したときは、激しく怒られたらしい。

自由の戦士の裏切り

九尾の気持ちになって考えてみると、虫けらのように小さな人間に拘束されて、なおかつ人間のために戦えと言われているのだ。これでは協力してくれるはずがない。そもそも人柱力という考え方がいなかった。これが俺の出した答えである。

「つまり、どういうことだつてばね」

「戦争に九尾を使うのは諦めよう。口寄せで野放しにして、彼の自由な心に任せよう。木の葉が正しいのであれば、ちよつとだけなら力を貸してくれるかもしれない」

「それつて、全然解決になってないんじゃない」

「解決できる問題じゃなかったんだよ。勝手に捕まえて働けというのは虫が良すぎる。試しに口寄せしてみよう」

「うーん。分かったつてばね」

俺達は長らく二人で行動するようになっていた。九尾が暴れてもいいよう広い演習場を借りられたので、口寄せしても問題ないと思つた。口寄せの巻物を買ひ、九尾に契約を促す。九尾は「口寄せじゃなくてお前が死んでわしを解放しろ」と言つたらしいが、粘り強い交渉の末契約は結ばれた。

「お？ おお？」

九尾を口寄せするためには莫大なチャクラが必要である。クシナだけでは不可能だが、今回は九尾を自由にするためなので、九尾が自主的にチャクラを恵んでくれた。

「口寄せの術！ うっ、うわわわっ」

そして巨大な九尾が現れる。今まで俺が感じてきたのはほんの一部の力にぎないと知っていたが、それでも本物の圧倒的チャクラと巨体にはビックリした。

「大丈夫か！ クシナ！」

「な、なんとか」

クシナは突然現れた巨体に押されて、けつこうな高さから地面に落ちていた。しかし頑丈な忍者なので怪我とかはないようだ。

「おいガキ共、何をやってやがる」

「危険だ。早く封印しろ」

と、いつも見張りをしている暗部の方がやってきた。俺より弱いくせに偉そうにしてけっこうなことだ。

その時、九尾がぬんと顔を寄せ、暗部達を睨み付けた。

「う、うわあああああ！」

「おいコラ！ 暴走してるじゃねえか！ 早く押さえろ化け物！」

暗部二人は尻餅をつきながら吠えた。なんともみっともない。

九尾は脅すように彼らを睨み付け、大きく息を吸い、吐く。

「うわあああああ！」

「ぎゃあああ！ 死ぬううう！」

ただの風であって、もちろん死んだりはしない。本当に忍者かと思えるビビリっぷりである。俺も木遁がなければビビるだろうけど。

「ふん。ほとほと人間には愛想が尽きた。もうどうでもいい」

九尾はそう言うと、俺に背を向けて歩き出す。

「う、うわあああああ！」

と、途中でクシナを口にくわえた。くわえたまま、ゆっくり森の奥へ歩いていった。

よかつたな。お前はこれで自由だ。

その後、俺は火影に呼ばれた。その場にいたダンゾウと相談役目茶苦茶怒られてしまったが、自来也と火影は庇ってくれた。

蹴る殴るの暴行の後、九尾追跡班に入れられた。メンバーは俺、自来也、ミナト、日向の当主、犬塚家の上忍である。俺は日向の当主に額の呪いを使われ、とても痛い思いをした。「これに懲りたら勝手な行動は慎むように」と言われてしまった。

九尾はなかなか見つからなかった。でかい足跡が途中で途切れていた。変化を使ったか、人柱力に戻った可能性があった。頼れるのは犬塚家の鼻だけとなった。しかし途中で雨が降り、追跡はさらに困難になった。また、追跡の最中、雲隠れの忍者と戦闘になり、彼等も俺達が大切なものを探っていることに感づいてしまった。

「もし見つからなかったら、貴様の命もないと思え！」

日向の当主が脅すように言った。しかし、俺を殺せるはずがない。たった一人の木遁使いなのだから。俺は脅しには屈しないと示すように睨み返した。また呪いで痛い思いをさせられてしまった。

数週間そんな日々が続いた。もう諦めようとした時、岩隠れの駐屯地付近の方から轟音が響いた。急いで駆けつけると、岩隠れの忍びと九尾が戦っていた。

「クシナー！」

ミナトが真っ先にクシナを見つけ、確保する。かと思えば、瞬身の術で彼女を俺の付近に置いた。

「ぐっ。ごめん。こんなつもりじゃなかったってばね」

クシナは脇腹から血を流していた。かなり深く切られているが、九尾の力で急速に戻っている。

俺も白眼を使った医療忍術でその手助けをする。

「回天！」

「ぶん太あ油じゃあ！」

自来也、日向当主、ミナト等がかなり激しく戦っていた。こつちにも来たが、俺の動く木遁の要塞は突破できない。チャクラ吸い取りつつ押し潰してやった。

「先に九尾をどうにかしろ！」

「いや、人柱力から狙え！ そうすれば尾獣も！」

「木遁は何が有効なんだ!? 全て吸いとられる！」

「吸いとられる前に破壊するんだよ！」

岩隠れの忍びは連携も悪く、木の葉の忍びに蹂躪されていった。指揮官が日向当主に殺されると、逃げるものが現れ始めた。

完全に木の葉が優勢。しかしそうなって初めて、九尾が木の葉に攻撃し始める。

「いかん！ 速い！」

「八卦空壁掌！」

「ぐっ。小癩な」

自来也、日向当主、犬塚上忍と九尾の激しい戦いが始まった。ミナトは俺の隣に来て、戦いに参加しなかった。

「おい！ うずまきのガキ！ さつさとこの化け物を封印しろ！」
「えっ？ どっちのうずまきですか？」

「おめえに決まってるだろうが日向のなり損ない！」

犬塚、日向当主等が命令してきた。ちょうどいいからこいつら死んでくれないかなと思つた。そうすれば俺はまた自由になれる。ような気がする。

「トグロ、戦わないのかい？」

ミナトが不安そうに言った。

「何故戦わなければならぬ？」

「先生も戦ってる。このままじゃあ木の葉の忍が殺されてしまう」

「これは九尾の自由をかけた戦いだ。どちらかと言うと九尾を応援したい」

「君の気持ちは分かる。でも、この戦いで九尾が木の葉の人間を殺してしまえば、取り返しをつかないことになる」

「ミナト。俺の夢はな。こんな里を飛び出して、かわいい娘たちに囲まれて暮らすことだよ」

ミナトが瞬身の術を使う。一瞬で俺の後ろに移動する。俺の後ろ首にクナイが当てられる。

「こんなことはしたくない。でも分かってくれ。今、何をすべきかということを」

「俺の望みは自由だ」

「うっ」

ミナトはうつむいた。そつとクナイが離れていく。

「てめえ！ さつさと戦え！ 呪い殺すぞ！」

日向当主が怒鳴りながら、俺に呪いを使った。また激しい頭痛に襲われた。

しかしあいつ、俺を呪いながら器用に九尾の攻撃を捌いている。口だけじゃなくて本当に強い。厄介だな。

「わ、分かった。戦う。戦うから拘束を解いてくれ」

「ふん。初めから従っていればいいものを！ 返ったら覚えておけ！ 厳しい前線に投入し続けるよう火影様に進言してやろう！」

頭の痛みが取れた。俺はゆったりと木遁の印を組む。組みながら、九尾と視線を合わせ、にたりと笑みを浮かべる。九尾も理解したらしく、小さくうなずいた。

木遁、挿し木の術。

大量の木の槍が日向当主に向かう。

「なあっ！ 回天！」

「貴様ア！」

日向当主は己を軸に回転し、チャクラで球体のバリアーを作った。俺の挿し木は全て弾かれてしまう。だが、この程度は織り込み済み。

本当の挿し木は下からだ！

回天の効果が薄いのは回転軸付近の上下。俺は下から日向当主を狙う。

「待つ、それをやったら！」

再びミナトが俺の首にクナイを突きつける。だが俺は止まらない。

「くっ。くおおおっ」

当主は器用に体勢を変え、致命傷だけは避けていく。白眼で地面が見えているのも躲せる理由だろう。しかし手足や脇腹にいくつもの切り傷ができた。多少動きは鈍るはずだ。何より残った挿し木が当主の行動を抑制する。

そこに、九尾の巨大な口が向けられる。口の先には高濃度に圧縮されたチャクラの塊が浮かんでいる。

「しまっ」

九尾が光線のようにチャクラを放つ。日向当主はなすすべなくそれを受けた。死んだな。

「な、なんてことを！ なんてことを！」

「肉体の自由は縛れても、心の自由、夢は縛るすべなし！」

呆然としているミナトの前で、俺は叫んだ。そして挿し木の術の印を組む。狙いは俺本人だ。

「ぐうっ！」

「トグロ！ 何を！」

「ミナト、クシナ、お前達はいいい人間だった。俺みたいに一時の感情で

暴走したりせず、長生きしろよ」

適当にいい言葉を残し、血を吐く。この日のために用意していた。本物の血だ。

本体の俺は、地中深くでじつと堪える。頼む九尾。偽物の死体を吹き飛ばしてくれ。調べられたら木遁分身だとバレる。

「アホが！ 血迷いおつて！ クシナ！ 早く止血を！」

「は、はい！」

自来也とクシナが俺を救おうと駆ける。

「ふん。わしを無視して大丈夫か？」

そこで出てくる九尾。日向当主を粉々にしたのと同じ技を、口元に集めていく。

やった！ 気づいてくれた！ さすがは自由を求める戦士！

「しまっ」

「危ない！」

「きやつ」

自来也はその場を離れ、ミナトもクシナを連れて離れる。九尾から巨大なチャクラの波動が放たれる。俺の木遁分身は木っ端微塵となった。

よっしやああああ！ これで俺は自由だぜえええええ！

自由の謳歌

自由になった俺は、戦争とは無縁の島国、波の国にやってきた。変化で一般人に化け情報を集め、任務で貯まっていた金で土地を買った。山奥の安くて誰もいない場所を選んだ。木遁を使って家を建て、土遁で田畑を耕した。水道も造り、農業用の灌漑も行った。苗は手で植えていった。

夢のスロ―ライフが手に入った。木遁で花や薪を作ればすぐに金になった。木遁で果物の木を作る術も覚えたので、食糧に困ることもない。むしろ分け与えてやった。忍び崩れの野党を撃退することもあった。地元住民の信頼も得られ、食事や遊びに誘われることもあった。

あとは、女である。一人の妻、というよりハーレムが望ましい。戦争は泥沼化しており、孤児は増えるばかり。飢えた少女をこの土地のメイドにしても誰も文句は言わないだろう。そう思った。

木遁分身を3体戦場に向かわせた。一人は岩隠れ方面。九尾とクシナのその後が気になるから、ついでに探らせる。もう一人は雨隠れ方面。こっちも弥彦達のその後が気になるからついでに探らせる。最後は砂隠れ方面。俺は木遁で緑化ができるので、誰もいない無為で無料の砂漠をオアシスに変えることができる。俺の国を作れる。その調査のために良さそうな土地を探してもらおう。

一月が過ぎた頃、雨隠れ方面の分身が帰ってきた。かわいい孤児、また行き場をなくした家族を連れていた。分身曰く、弥彦達には会えなかったが、彼等が暁という組織を作り、山椒魚の半蔵と手を結んだという怪しげな噂は耳にしたらしい。今回の孤児は5人。全員雪一族だ。うち娘は3人。11歳と6歳と4歳で、肌が白くて黒髪が艶やか。かわいい。他、父のいる家庭が3つ。母子家庭が2つ。

男はいらなかったが、まあ捨て置けなかったのだろう。雪一族の1歳の娘がとてもかわいいので些事は気にならない。

「お金は自分で稼げ。家と食糧は出す。警備も行うが、基本的に自分の身は自分で守るように。契約書にサインを」

この契約は現金を出さない生活保護と言ったらいだろうか。俺は彼等に土地と食事を提供する。病気になつたら薬も出す。しかし金は払わない。自分で食糧なり薪なり売って自分で稼げという感じだ。

「よ、よろしいのですか？　これではタダで土地をもらうようなもの」
ハゲ散らかったおっさんがずいぶん低姿勢で尋ねてきた。今の俺は30歳くらいの屈強な木こりをイメージして化けている。

「いいんだ。俺は趣味で人助けをやっている。ただし、戦争が終われば帰ってもらうぞ。甘やかし過ぎてもお前達のためにならない」

「は、はい。しかし、帰れるのですか？　私達の土地は大国に取られてしまいました」

「大国に金を払って土地を買い取ればいい。他所に移住してもいいし、そこは自由だな。俺にはその面倒をみる義理はない。厳しい社会でも生きていけるように頑張るんだな」

「は、はい」

おっさんには厳しい俺。近くで聞いていた雪一族の娘がとても不安そうにしている。しかし若い娘には甘いのだよ。

「聞いていると思うが、俺が目をつけた娘については別だ。メイドの契約をして、戦後も俺の元で働くことができる」

俺はにやりと笑みを浮かべ、契約書を雪一族の娘に渡す。

「仕事も給与も実力に合わせてそれなりに対応させる。休みは週二回で大型連休もあるぞ。お勧めしておく」

「え、ええっと」

明らかな鼻息なので、娘は周りの視線を気にして遠慮している感じだった。しかし俺はチャクラによる圧力を加えてしまう。

「うっ、苦しっ。……い、いえ！　ありがたい話です！　何もかも失った私に、衣食住を提供していただけるだけでなく、仕事まで！　断る道理などありません！」

ほう。意外だな。11歳と聞いていたが、ずいぶん大人びた物言いをする。かなり賢いのかな？　経費の計算とかもやらせちゃおっかな？

なお、他に二人の女孤児がいたが、4歳と6歳では仕事は難しいので、メイド見習いとした。

各家庭に土地と家を案内し、一日の食糧を渡していく。鍋が欲しいとほざくガキがいたが、戦中の鉄のように高価なものを、嫁候補でもない人間に与えるほどお人好しではない。全て土器だ。俺が土遁で作った味気ない土器だ。火も木遁で作った薪を焼いて作らせる。全てタダだ。

孤児は全て俺の家に入れる。一階はリビング、キッチン、俺の部屋などがある。二階は物置にしていたが、今日からこの子達の部屋になる。

「初めの仕事は、模様替えだ。お前達も手伝え。特別に金を払ってやる」

その後、5人の孤児と共にベッドを運んだり本を整理したりした。俺一人の方が速いが、まあ趣味だ。かわいい娘に命令するのは気分がいい。逆らってくることもあるが、まあ幼女なら許せる。男には厳しくいくがな。

二階に子供部屋を男用女用で2つ作った。男より女の方が3倍程度広いのは、愛の違いだから仕方ない。仕事が終わったのでお金を渡し（金額にも愛の違いが出るのは仕方ないこと）景気よく皆で街に向かった。

道中はかなり目立った。俺が子どもを5人も連れていくことも、彼女らが俺に似つかない美少女だということも。

理由を何度か尋ねられたが、ふつうに「戦争孤児を育てようと思いまして」と答えた。たいていは「すばらしい!」と返ってきたが、お金の心配をする声も少なくなかった。中には美少女に目を奪われる子どもや「偽善者が」と吐き捨てるモテなさそうな男もいた。

そうして日々が過ぎていく。少女達を母子家庭に行かせ、料理や編み物を教えてもらうこともあった。料理スキルは徐々に上がっていく。男子は狩りや畑仕事を手伝わせた。

さらに一ヶ月ほど待つと、岩隠れ方面の分身が帰ってきた。彼はクシナとクシナの父に変化したつもりの九尾を連れていた。もちろん

孤児もいる。かぐや一族というのが2人で、9歳と5歳の美少女。他、木の葉のうちは一族の娘と岩隠れのボッチという娘が一人ずつ。互いに殺し合いの末、瀕死だったところを確保したらしい。両方12歳の下忍。今は木遁の縛りでグルグル巻きになっている。

「孤児を世話してるって聞いてすごいって思ったのに、なんかおかしくないかってばね！」

クシナは孤児達を見て言った。今は新しい孤児の自己紹介が終わったところだ。メイド一号である初はお茶を入れにいった。服装は巫女服である。

「何かおかしいかな？」

「男女比がおかしいってばね！ しかも妙に美形揃い！ だいたい木の葉の忍びはともかく岩隠れの忍びを捕まえてどうするつもりってばね！」

「俺もこれは予想外だった。バカすぎる。俺の分身」

煩惱に正直過ぎる、とも。

「あんたの分身はつまりあんたってことだってばね！ 他人事じゃないってばね！」

「分かった分かった。でもいいじゃないか。命が救われたんだ」

「よくないってばね！ 私の感動を返せってばね！ だいたいどうして急に日向の当主様を殺したってばね！ 呪いのことも私達に相談してくれれば！」

「お前は口が軽いじゃないか。今だってこいつらに聞かせていい内容じゃない」

「う、うっさいってばね！ 自分でどうにかしろってばね！」

その後、グダグダとクシナの愚痴を聞いた。30のゴツイおっさんを怒鳴り付ける美少女は、長い間俺の村の噂の種となった。

「ご、ご主人様。お茶の用意ができました」

と、初が盆を持って帰ってきた。

「ご、ご主人、様……!?!」

クシナはまた衝撃を受けたようだった。隣の九尾も呆れている感じだ。

「趣味だ。非難される謂れはない」

「いやいやいや！ 何歳だつてばね！ 歳上にしか見えないつてばね！」

その後、クシナが俺の年齢を暴露しそうだったので、殴って気絶させた。そのまま女部屋に運び、ベッドに寝かせた。

クシナと九尾は2ヶ月ほど滞在した。もつといてもよかったが、木の葉の忍びが近くにいると聞いて、俺に迷惑をかけないために出ていった。

さて、大変なのは捕まえたくの一の扱いである。今は木遁と封印術でチャクラを抑え、地下に閉じ込めている。三食を与え、たまに服を変えるのみという状態だ。かと言って、自由にすれば即刻殺し合いが始まってしまう気がする。この状況から脱する方法はあるのだろうか。

さらに半年ほどで、砂隠れ方面の分身が帰ってきた。厳密にはチャクラが切れて消えたので、やつの記憶が入ってきた。

どうやら、偏西風やら雨の時期やらの調査をし、ダムの位置を計算していたらしい。職人にも話しかけていた。孤児は、あんまりかわいくないな。それに、消える前に綱手に引き渡していたから、たぶん問題ない。

それよりも、俺の興味は国作りだ。土地はどれくらいにするか。産業はどうするか。防衛はどうするか。何より、美少女がどれだけ集まるか。

抜け忍は肩身が狭い

税金でゴツゴツもっていかれた。

長引く戦争で防衛費がかさんだとか言われた。波の国に忍者はおらず、防衛はフリーの忍者や近場の木の葉、霧隠れに頼っている。特に木の葉だ。この場合、防衛費というよりも、揺すられたと言うべきである。やはり軍隊のない国はダメだ。早く俺の国を作らないと。

その防衛を担うことになるかもしれない、今の孤児達。彼等には少しずつ忍者の修行をさせている。力仕事はそれだけで体力作りになる。畑の手伝いや薪割りを女子にも積極的にやらせ始めた。

だが、その程度では足りない。なんとと言ってもチャクラが扱えなければ、この世界では戦えない。術の使えないゲジ眉コンビだつてチャクラはすさまじかった。

幸い、雪一族もかぐや一族もかつては忍の家系らしく、チャクラは多い。特にカグヤ一族が多い。病弱なのが珠に傷だが。雪一族はスピードに優れている感じがする。チャクラコントロールはどちらも上手い。日向には劣るが。

修行を始めてから、孤児達の不満が増え始めた。辛いからストレスが溜まるのは当たり前だ。かと言って、最近は何に練り出しにくくなっていく。道をゆく木の葉の忍びが多い。この島から船で霧隠れに攻め込むつもりなのだと思う。

下忍や中忍なら大丈夫だが、上忍は俺の変化を見抜くかもしれない。特に日向一族がいけない。白眼で俺の正体が一発でバレる可能性がある。だから、細心の注意を払っていたのだが。

「チツ、志村のカス死ね」

「ちよつと寝坊しただけで罰金！ ありえんね全く」

「ああー、クツソー。波の国の姉ちゃん楽しみにしてたのにー」

やさぐれた木の葉の忍二人が、何故か俺の土地に入ってきた。手当たり次第に木を切り裂き、または殴り、倒していく。物に当たるチンピラだ。

俺は孤児達を部屋に入れ、嵐が通りすぎるのを静かに待つことにし

た。しかしなんと言うことか、忍び達は真つ直ぐ俺の家に来て来るではないか。

「ういーっ。誰かいるかー？ つーかいるのは気配で分かるんだけどー」

「何か御用ですか？」

俺がしようがなしに出る。

「いやー。俺たち勇敢な木の葉の忍びだけどさあー。今金に困ってんだわ。上がらせてもらおうぜー」

そう言つて勝手に入ろうとする。要するに大つぴらに盗もうというのだろう。この近くには忍びがないから隠し通せると思つていいのか？ それとも幻術で俺を洗脳か、ふつうに殺して証拠隠滅するつもりか？ どちらにしろ許せん。

俺は両手で二人を突き飛ばす。二人は俺の以外な力に驚いたようだった。が、すぐに怒りの表情に変わる。

「ああっ!? 何しやがんだてめえ！」

「誰のお陰で生きられると思つてんだ！」

調子に乗りやがって。逆に俺が幻術を掛けてやる。

「舐めた真似しやがって。半殺し決定だ」

「謝つても遅いぞ。心からの謝罪と全財産、ついでにボコられる。これ以外は誠意と認めない」

ゆっくり歩いてくる二人。俺は足にチャクラを集め、飛び出す。

「ぐっ」

「うおっ」

再び両手で二人を飛ばす。二人が尻餅をついている間に木遁の印を組む。

木遁、毒花降臨。

二人の周りに眠り粉を撒き散らす巨大な花が咲き乱れる。二人はその粉を吸い、気を失った。他愛のないことだ。

眠った二人の襟首をつかみ、街へと下山を始める。殺してしまつてはまずい。調査隊が来るかもしれない。酔いつぶれたことにして、その辺の道へ放るつもりだ。

ところが、二人の蛮行を懸念したのかどうか、忍びが山を登ってきていた。しかも暗部の仮面をつけていて、動きも素晴らしい。

俺は気配を消し、やり過ぎすことにする。

が、忍びはその気配の変化にこそ気づいた風だった。

「まずい！ このレベルだったか！」

上忍、それも上の方の可能性がある。今の俺で勝てるか？ 勝ったとして木の葉に怪しまれたらどうする？

俺は木遁分身を出し、本体は地中深くに戻る。これもバレている可能性がある。

「その二人はどうした？」

早くも来た。男が木の枝の上から声をかける。

「酔いつぶれたようです。なんでも上司にひどく叱られたようで」

「なるほど。では、二人の胸についた染みはなんだ？」

「染み？」

なんのことだ？ 白眼で見たところ、何も無いが。

おっと、俺の視線が逸れた隙に忍びは動き始めた。白眼だから見えるぞ。

忍びは素早く俺の後方に移動する。クナイをかかげ、俺の首に刺そうとする。

俺はタイミングを合わせて屈み、後ろへ蹴り上げる。忍びはぎりぎり反応し、直前に背中を丸めて衝撃を和らげた。

「驚きました。なぜいきなり攻撃してきたのですか？ 私は善良な一般市民ですよ」

「当てるつもりは無かったが、一般市民でないことは今判明した。そいつらをどうするつもりだ？」

くっ、面倒なことになったか。やはり軍隊のない国はいけない。

「どうって、木の葉に返しますよ。いきなり人の家に入って盗みを働くような野蛮人でした。金輪際お断りです」

「そうか。それはすまないっ、なっ！」

忍びは雷遁を纏い、稲妻のような速さで突っ込んでくる。

俺はその場でジャンプする。一瞬遅れて忍びは眠っている二人の

忍びを両手に捕まえる。そして、そのまま森を下っていった。

俺では追いつけない。速すぎる。九尾のような速度だ。人間だとは思えない。やはり相当な実力者だったか。

問題はその後どうするかだ。幸いあいつが仲間を街に降ろして再び戻ってくるまでは時間がありそうだ。その間に、逃げるか？ それしかないよなあ。調べられて俺だとバレたら連れ戻されるか、最悪殺される。いや、殺されはしないな。貴重な木遁使いだし、呪いを命令に従わせるのも簡単だから。

クソツ。せつかく生活基盤が整ったところだったのに！

とりあえず、孤児は全員回収だ。男児もなんだかんだ育ててきたわけだしな。親がいる子はそのままでいいだろう。取り調べはあるだろうが、木の葉もそこまで外道ではないはずだからな。いや、分からないが。しかし、この大所帯を全員連れ出す余裕はない。悲しいが、残していくしかないな。

後から分かるのだが、この時現れた上忍は木の葉の白い牙という異名を持つはたけサクモだった。彼はこの時、俺の家を調べる前に仲間を街まで降ろしたことで責められることになる。俺の家が実験施設か何かだったかもしれないことと、残された住人への調査からこの場へうずまきクシナらしき人物がいたことが分かったからだ。なお、俺は遺伝子などの証拠を残さぬよう家は燃やした。

俺は孤児達と下忍二人を連れて地下を進んだ。俺の膨大なチャクラによる土遁で一気に掘り、疲れた時は木遁で大地の栄養を補給する。地味に下忍二人のチャクラも吸いとった。ありがたかった。

波の国は島国だから、脱出するには船で出なければならぬ。しかしそれは目立ち過ぎる。少なくとも戦争が激化している今はできない。だから、波の国の別の場所に住居を構える必要があった。と言っても俺にとつては簡単だ。木遁で一瞬で家を作れる。田畑もすぐだ。

俺のせいで子供達に迷惑をかけた。俺はそう思った。修行を多少緩めるべきかとも。しかし、子ども達はむしろやる気になっていた。

「強くならなければ、奪われる。それを再認識したからだと思えます」
初に尋ねてみると、そんな答えが返ってきた。

以後、俺達は修行僧のように山に籠り、一心に修行に励んだ。捕虜となつてしまつたうちにはミグシ、ボッチにも修行や本を読む機会を与えた。

そして3年後、終戦を迎えた。

さすがに3年も山に籠れば子供達も欲求不満になつていた。俺は木の葉の忍び達が島から引いていくのを確認し、子供達を連れて久しぶりに我が土地に戻つた。と言つても、木遁分身はずっと置いていたが。

ボッチは解放した。彼女は下忍だが、空を飛べるので一人で帰れる。

「覚えてやがれ！ おめえはいつかあたいが殺す！ うんそうする！」

彼女はたわわに実つた乳房を揺らしながら、鳥形の泥人形に乗つて去つていった。ちなみに、「うんそうする」というのは彼女の口癖である。金髪で前髪が長く、いつも右目を隠している。

うちはミグシは一人で帰るには実力が低いので、俺の木遁分身をつけてやった。目茶苦茶嫌がつたが。

とかく、子供達は懐かしい親子達と再開した。抱き合つて喜び、万歳したりもした。大きなパーティーを開き、高価な料理を目一杯食べた。

そしてパーティーの終わりに、今後について話し合う。

「俺はここではない場所に新しい国を作るつもりだ」

「えっ」

「なんと……」

場所についてはまだ言わない。彼等が国民になると決まつたわけではないから。

「土木工事、畑仕事、家事、防衛。仕事はたくさんある。来たいやつはついて来い。そうじゃないやつは、ここに残つてもいい。故郷に帰つてもいい。誰も残らないならこの土地は売る。今決めてくれ」

5家庭のうち、父親のいる2家庭と1つの母子家庭は残ると言つた。残りは俺についてくるらしい。

初めの国民となるのは、俺（13）、雪一族の初（ハツ。14）、積雪（セキセツ。10）、涼（リヨウ。8）、長袖（ナガソデ。15）、釜倉（カマクラ12）、豪（ゴウ。41）、薄（ハク。37）、囊（ミヅレ。11）、霰（アラレ。9）、雪解（ユキドケ。28）、雪崩（ナダレ。6）、カグヤ一族の月（ツキ。13）、竹（タケ。9）となった。

男と女の比率は4対10。まあまあである。

大所帯での移動である。食糧や財産や生活用品はもちろん運ぶ。車輪付きの人力車を半日で作った。俺が木遁と土遁で材料を作り、大雑把に加工する。細かい寸法の加工と組み立ては手作業で行った。

夜はもう一度パーティ。深夜は母子家庭の若い未亡人に思い出を作らせてもらった。

明くる朝、出発する。

人力車は修行のために子供達に引かせた。段差の激しい山道は俺が担ぐこともあったが。

街に出ると、名産品を買ったり、3年前の知り合いに挨拶したり、店で食べたりした。新しい国については秘密にし「旅商人を始めようと思ひまして」という設定にした。

食事を終えると、港へ向かう。人が多かった。ここで木遁を使うのは憚られた。しかしフェリーの値段はかなり高かった。まだ戦争が終わったばかりなので、抜け忍や戦争継続派の忍びがはびこっており、危険なのだという。だから高い金を出して忍者を雇っているらしい。

白眼で見ると、木の葉の上忍らしき忍びがいた。というかミナトだった。港だけにとまったところか。

「よお」

「え？ 君だったの？」

話しかけると、ミナトはホツとしたように息を吐いた。

「はあ、焦ったよ。霧隠れの上忍とこんなところで戦闘になったらどうしようかと思った。悲惨な戦争が終わったばかりだっただけにね」

気持ちちは分かるが、期待していた反応と違う。

「反応薄いな。俺が生きてるって知ってたの？」

「うん。クシナに会ったからね」

「え？ マジ？ クシナ捕まったのか!? 俺のこともバレたりした!？」

「いや、捕まったわけじゃないよ。僕だけが彼女と九尾にバツタリ会ったんだ。僕は里に戻るよう言ったけど、フラれちゃった。ははは。九尾が納得するまで里には帰らないんだって」

「そうか。自由意志の尊さに気づいてしまったんだな。お前みたい仲間のために自分を犠牲にできるのも尊いと思うけどな」

「ははは、ありがとう」

ミナトはズーンと落ち込んだ感じになった。クシナに拒否されたのが相当ショックだったらしい。クシナのミナト愛は分かりやすかったが、ミナトの方もそうだったらしい。

「ところで俺は？ 指名手配されていたりしたら、大幅に予定が狂っちゃうんだけど」

「されてないよ。あの事件で死んだことにされている。というかあのあと大変だったんだよ！ クシナと九尾はいなくなるし、日向当主と君は死んじゃったし！ 戦争中なのにいろんな責任問題で大喧嘩になったんだ！ 自来也先生なんて未だに思い悩んでるよ！ 自分のせいで弟子が自殺してしまったって！ 女グセは余計ひどくなった！」

最後のは俺のせいかな？ ともかく、ミナトの苦労は察して余る。すまんかったな。

「ううっ。本当に、本当に。生きていてよかった」

あつ、怒ってると思ったら泣き出した。本当に仲間思いだなあ。俺なんかのためにさ。

その後、俺が国作りするつもりであること。今までの孤児との生活。夜に木遁で船を作って出発するから適当に見逃してほしいこと。などを話した。

「乗っていきなよ。その方が安全だよ。君と僕の二人で守れるし」

「他に木の葉の忍びはいないのか？」

「いるけど、下忍になりたての子だけだよ。君のことは知らない」

「ふーん。でもなあ。金もつたいないんだよなあ。払えない額じゃないが、これからたくさん必要になるかもしれないから」

「そんなこと気にしなくていい。僕が払うよ」

「う？ えええっ!? お前そこまでお人好しなの!」

ふつうに笑顔で言われたから、余計にビックリした。個人で払うような額じゃないのに。しかも、裏切り者の俺にポンと払うか？ ふつうじゃない。

「いや、僕が戦争に奔走している間、君は君で頑張ってたんだと思ってね。すごいと思うよ。というより、感謝したい。僕たちの起こした戦争で犠牲になるかもしれない人たちを、たくさん救ってくれた。僕の財産じゃ足りないくらいだよ」

「はーっ。なるほどなあ。やっぱりお前のその博愛精神は素晴らしいわ。俺は自分優先なところがあつて、孤児を救うにしても女に目が行ってたもん」

「ははは。作戦中に女にフラれた僕に対する当てつけかい?」

「おっと。そうじゃないんだよなあ。これが」

ミナトはまた落ち込んでしまった。しかし、彼のは美しい恋。俺のは醜い性欲。この辺の感覚はないのかなあ。

緑化と融和を目指して やつと……

波の国は木の葉の東にある。俺が目指す砂漠は木の葉の西。いや、厳密には砂漠の手前の山。そこに一旦集落を作って、ダムを作る。平行的に砂漠めがけて運河を作り、完成したら水を流す。それから砂漠に畑を作って、ダムの水で育てていく。そういう流れだ。砂漠を豊かな土に変える方法とかそういうのはいろいろ考えないといけない。

当面の問題は、移動で横切ることになる木の葉だ。俺一人なら、関所だけ地下を通ってすり抜ければいい。国内で怪しまれても逃げられる。夜盗も怖くない。しかし、ここには下忍程度の子ども5人と一般人8人がいる。どうやって切り抜けるかは、悩ましい問題だ。

「ミナト、旅商人って証明書はいるのか？」
「いるよ。関所で買うんだ」

「関所には日向がいるか？」
「もちろんいるよ。たいていはね。白眼は取り調べにもつてこいだ」
「うーん、厳しいな。俺だけ別ルートで入ろうかな？ 豪を仮の代表にしておいて」

「それがいいだろうね。というか、国に入ってからもだよ。あの人力車じゃあ通りを進むしかないけど、人の多い場所は監視が多くて君じゃ歩けないよ」

「はあ。面倒臭いなあ。もう」
彼らを波の国に連れていく時は、人が多すぎてほぼ素通りの難民ルートがあつたんだがな。今はたぶんきちんとチェックしているだろう。

ミナトが言う下忍はたった6歳のはたけカカシという少年だった。天才か、と驚く前にやはり木の葉は狂っていると思った。俺はこつちで使っていたマオという偽名を名乗り、昔ミナトと共に仕事をしたことがあるフリーの忍びということにした。

フェリーが火の国に着くまで、合計3回忍びの襲撃があつた。全て

ミナトが海を走って敵と戦い、敵が船に辿り着く前に殲滅した。俺はカカシ少年と共に、船に飛来するクナイや術を防いだ。

フェリーが着く少し前に、俺だけ船を降りて海面を歩いた。港の前で水に潜り、人気のない海岸へ移動した。さらに岸では土遁を使い、上陸せずに地下の道を進んでいく。やっと地上に出たのは生い茂る山の中だ。

木遁分身の術。

一行の身の安全は分身に任せ、本体の俺は一足先に国境へ向かう。おっと、ついでに川の国の様子も調べさせよう。木遁分身にな。

2週間後、一行は国境にやってきた。うちはミグシと共に。また、300mほど離れた場所で二人の暗部が尾行している。実力は中忍の上位程度か。そう高くはない。

「あいつめ。ボツチみたいに俺の命を狙ってやがるのか」

分身があいつを木の葉に送り届ける間、移住する場所をしつこく聞いてきたからな。「忍者なら自分で探せ」と言っておいたが、ああなつたか。木遁の記憶は幻術で消しておいたが、それも完全だとは限らない。暗部がいるのは俺の存在に気づいてのことかもしれない。

しかしあいつ、長袖に接触多いなあ。手を引っ張ったり、茶屋に誘ったり。あつ、今胸に手を当てさせた。

これって、もしかしなくても、デレてるんじゃないか？

あんな男のどこがいいんだろうねえ。美形だとは思うが、女っぽいし、鈍いし。波の国でもモテてたのけどさあ。捕虜が敵側の男に惚れるかねえ？ つり橋効果か？

「あつ、ほら長袖くん！ 蝶々だよ！」

「う、うん。綺麗だね」

「うん！ 素敵だね！」

満面の笑みで蝶を指差す娘と、頬を染める男。

なんだこれ？ イライラする。俺の理想郷を甘ったるい色恋で濁さないで欲しいんだが。

一行は国境に最も近い宿の前で止まる。

「ふいーっと。マオさんはどこかねえ」

豪が周囲を見渡す。俺は300mほど離れて木に擬態している。

ちなみに、一行にはまだ本名を教えていない。

「あんなやつほつといてさあ！一緒に木の葉で暮らそうよ！」

ミグシが大きく手を広げてアピールする。やはり長袖に気があり、彼を留まらせたいようだ。

「そういうわけにはいかないよ。あの人には恩があるから」

「分からないよ！長袖達を奴隷にして金儲けがしたいだけかもしれない！あんなやつ信用するくらいなら木の葉の方がマシだって！」

ここにはきちんとした警備隊がある！力のある忍者が一般人に悪いことをしないように見張ってるんだ！だけどあいつのところではあいつがルールでしょ!?気分次第で何されるか分かんないよ！」

それは木の葉の理屈だな。本当はチンピラの制御なんかできてないのに。ミグシのやつ、この里の深い闇を知らないらしい。

俺は断言できる。木の葉よりいい里など俺が簡単に作ってしまうと。

「僕たちはさ。静かに暮らしたいんだ。こういう賑やかなところは、旅行ならいいけど、ずつつてのはちよつとね」

「そんなことないって！住んでみれば都会の方がずっと暮らしやすいよ！ほら、竹ちゃんは体が弱いけどさ。ここならすぐに薬が手に入る！腕のいい医療忍者もいっぱいいる！」

「そ、そうだね。都会も悪いとは言わないよ」

「ほらね！しかも戦争が終ったばかりでしょ！今木の葉は人手不足なの！仕事はたくさんあるし、土地だって安いよ！今が一番移住するチャンスなの！」

「そ、そうなの。考えてみるよ」

「うん！是非考えてみて！」

うーん、なんだかなあ。ここまで妄信的だと憐れに思える。実際仕事はあるだろうけどさあ。復旧が終わったらどうすんの？また戦争でインフラ壊して仕事を増やすか？前世にはそういう大国があつた気がするが。

さて、あいつらをどうやって回収するか考えよう。素直に出ていくのはありえない。交戦になったあげく、応援を呼ばれるかもしれないからな。

宿の下に地下を掘るか？　そして夜中に脱出。

いや、こっちは素人がいるからな。明るいうちに脱出する方が簡単かもしれない。こっから暗部が増える可能性もあるしな。今なら確実に勝てる。問題は応援だ。

いや、待てよ。分身で引きつけたらどうだ？　あいつらに俺の分身が見破れるとは思えない。ついでにミグシを人質にとつて……。よし、それで行こう。

木遁分身の術。変化の術。

13人の分身と変化。さすがにしんどいな。だが、ミグシ程度に遅れは取らんよ。

あつ、宿の地下に虫がいやがる。油女一族だな。

面倒くさい。だが、俺ならば蜘蛛の巣のように張り巡らされた虫の隙間を見抜ける。そこを移動すればいいだけのこと。

昼時になって、一行は宿の食堂に入った。雪崩と竹は厠に向かう。

アレを終え、パンティを履く。今だ！

「えっ」

「うぐっ」

土遁で彼女達を土の中に入れ、分身と入れ換える。この調子でどんな行こう。

その後、約一時間で長袖を除く全員を入れ換えることに成功する。

長袖は、ミグシがべったり過ぎる。厳しいな。

あつ、しまった！　日向の忍びが急速に近づいて来てる！　もう行かないと！

「せいー」

「えっ」

「うわっー！」

土遁で二人を地下に引き込む。ミグシには何かされる前に木遁でグルグルに。

「逃げるぞ！ ヤバいやつが来てる！」

「えっ」

説明する間も惜しい。

俺はミグシと長袖を両脇に抱え、全力で逃げる。

おっと、人力車も持って行かないとな。近くの分身に指示を出し、土遁で引き込む。

先に穴に引き込んだやつらは、既に国境を超えて森を進んでいる。簡単には見つからないはず。

「消えたやつがいるぞ！ 分身だ！」

「探せ！ まだ近くにいます！」

「うちはミグシは何をしている!?!」

騒がしくなってきた。本当に大丈夫なのだろうか。心配だ。

地下の道を駆け、地上へ脱出する。地下は埋めておく。

さて、あいつらは……。ちゃんと分身の指示した方向に進んでるな。

先頭は初か。しかも囊をおんぶし、霰を抱っこして走っている。いい判断だ。

2番手の積雪と涼と釜倉もなかなかのスピード。その次は、俺の分身が担いでる豪と薄。ここまでは問題ない。

月、竹、雪解、雪崩。この4人の集団は遅れてるな。よし。応援に行つてやろう。

「わ、私のことは置いて、先に……」

「ダ、メです、よ。こほつ。せつかくここまで来たんですから」

「そうです！ 全然大丈夫です！ 殿にはマオ様がいいます！」

「お母さん頑張つて」

9歳の竹が6歳の雪崩を抱っこし、13歳の月が28歳の雪解をおんぶしている。この雪解が遅れている。体格差も少しあるが、月が風邪気味で足取りが重そうだ。まあ、俺が追いついたから問題ないが。

「長袖！ お前が竹と雪崩を担げ！ 俺は月と雪解を担ぐ！」

「えっ？ えっ？？」

長袖を竹と雪崩の背後に投げる。長袖は上手く体をひねって着地

するが、そこからは不安そうに竹の腰に手を伸ばすのみ。この間、俺はミグシに幻術を掛けて放置する。

「こうやるんだよー!」

俺は月と雪解に手を伸ばし、雪解を右腕に、月を左腕に抱える。ゴツイおっさんに変化しているからこういうこともできるのだ。

長袖は多少恥ずかしそうに俺の真似をした。というか、女子たちがとてもうれしそうだ。イラっとしてきたぞ。見てくれで判断すんなメイド共!

その後、俺達は木の葉の忍びに出会うことなく全員合流した。夕方まで歩いたが、俺も含めて全員疲れきっていたので、暗くなったら土に隠れて寝た。ただし、俺の分身は徹夜で見張りと罨作りに励んだが。こういうことをすると分身が解除された時にドツと疲労が襲ってきて怖い。

翌日、緊張感が張り詰める中、再び出発する。

木の葉には鼻のいい忍びと忍犬がいるので、一度土の中を移動して匂いの道を断っておく。その後は駆け足で移動する。

川の国は山と谷が多く、足場が悪い。素人にはきつい道のりだ。大人は俺と俺の分身が担ぎ、子どもは初と長袖に任せた。また、月の容態がさらに悪化したので、彼女も俺の分身が担いだ。

忍者は出なかつたが、大蛇と熊はしよつちゅう出た。俺がチャクラで脅し、それでも向かってきたら殺した。戦闘は手の空いている子にもやってもらった。

戦争の影響か、いくつかの橋は無くなっていた。俺が木遁で新しくつないだ。渡りきった後にまた壊したが。

食事は朝と昼。おにぎりや忍者の丸薬など簡易なものを食べた。残るは突き進むのみ。

そして、夕刻。ヘトヘトになった俺達は、やっと目的の集落を眼下におさめる。

「長かった。長かった」

皆が感動でうずくまる。喜ぶ元気はない。

「あつー! ご主人様!」

ここは、砂隠れ方面を調査していた木遁分身が作った集落である。記憶にのみあった懐かしい顔が俺を出迎える。というか、わらわらしいな。綱手に預けたはずだが、ほとんどそのままいる。どうやって生活してたんだ？ 家と田畑はあるが、こっちは波の国と違って街がない。大人もほとんどいなかったはずだが、全員の面倒見てたのか？ 「おつそいぞゴラアアアア！」

と、怒鳴り声が聞こえたかと思ったら、苛烈なチャクラを纏う美女が突進してきた。美女はいきなり俺の分身に殴りかかり、粉々に粉砕した。

冷や汗が流れる。本体だったら死んでいた。彼女のギャグは笑えない。

「ありがとうございます。綱手さん。孤児達の面倒を見ていただけのですね」

「お前が本体かオラア！」

あつ、あかん。

綱手はぶち切れた表情で俺の襟首をつかんで持ち上げる。

「何が一時預けるじゃボケがああああ！」

顔を殴られる。一瞬意識が飛んだ。そして直後に激痛が。

「ひいいっ！」

「オラア！ 中忍のガキのクセにこの私に上から物頼んでんじゃねえ！ ボケがああ！ 最後まで面倒見やがれ！ 勝手に死ぬな！ 勝手に生き返るな！ 自来也の覗きがうぜえんだよ！」

何度も何度も殴られる。めちゃくちゃ痛い。変化はとつくに解けてしまった。

そう言えば、なぜ俺は気絶しないのだろう。死んでもおかしくないのに。どういうこと？ 脳ミソぐちゃぐちゃにならないよ？

「あつ！」

「なんじゃゴラアア！」

分かった。この人無駄にすごい！ そして酷い！

殴る衝撃が伝わると同時に、医療忍術で治してるんだ！ 瞬間的なチャクラの流れを感じるぞ！ 何て才能の無駄遣いなんだ！ バカ

すぎる！ サドすぎる！

貧乏神綱手

目覚めた時、子どもたちに囲まれていた。俺の頭の角のような部分を引つ張ってるガキもいる。

「ご主人様起きたよ！」

「小鬼様だけどな！」

「コラ！ 見た目で悪口言ったらいけません！」

「いたっ！」

なるほど。俺の正体がバレて、こういう反応が起こったか。まあ俺は、もともと見た目でモテようなどとは考えていない。重要なのは一緒にいて楽しいかどうかだよな。あと圧倒的力。

ぬんと顔を起こす。

「ふにやあつ。うっ、あああああん！ ぎやあああああん！」

俺の出っ張りを掴んでいたのは2歳くらいの幼児だった。落ちて泣いている。かわいそうに。

ん？ 誰の子だ？ この厳しい3年にせつせと子作りに励んだバカがいたのか？

「おいっ。誰の子だ」

「わ、私です。すみません」

17歳くらいの青髪の娘が手を上げる。そう言えば彼女、去るときには腹が膨らんでいた。胸と尻もデカいからデブと思っていたが、妊娠だったようだ。今はとても魅力的な体つきをしている。

「父親は？」

「あつ、すみません。その……」

彼女はとても悲しそうな顔をした。戦争で死んだのかもしれないが、経験上ちよつと雰囲気が違う。これは、暴徒に犯されたな。たぶん。

「綱手さんは、いるみたいですね」

綱手は椅子に足を組んで座っていた。

「ああ。別れの挨拶くらいはしてやろうと思っただけ」

「そうですか。ありがとうございます」

と、俺から少し離れて、月が寝ていることにも気づく。頭に冷やしたタオルが置かれている。

「おっと、彼女についても言わなければならぬことがあった」

綱手が言う。

「なんですか?」

「あの娘、生まれつき体が弱いそうだな」

「ええ」

「衛生環境の悪いこの村で生活させるつもりか? 医療忍者も足りない

いだらう。木の葉なら」

「いえ、たぶん大丈夫ですよ」

「たぶんだと!?!」

「ええ、僕が多少医療忍術使えますし、この術がありますからね」

「この術?」

俺はジャンプで子どもの輪を飛び越え、ドアを開けて外に出る。

木遁の印を組み、大地に手を当てる。

大地の生命力を感じ、手元に集める。それをチャクラと混ぜ、圧縮する。そして一気に形にする。

小さな木が生まれ、花開く。花卉は次第に垂れ、中から実が現れる。

それを摘まんで千切る。

「大地のエネルギーが詰まった実です。これを食べさせたらだいたい治りますよ」

「なんだと!?! 本当か!?!」

「ええ。理屈は分かりませんがね。かぐや一族にはこれが効くみたいですよ」

「無茶苦茶だ……」

まあ、そんなもんだらう。チャクラなんてものが存在する世界だからな。

その後、久しぶりに畑仕事をしたり、狩りをしたり、薪を割ったりした。昼食、夕食共にパーティのような形で食べ、歌を歌ったりもした。

深夜、綱手が俺の部屋に入ってきた。夜這いかと思って興奮した。

「お前に話すことでもないんだがな」

しかし雰囲気はとても真面目で、しかもどちらかと言うと暗かった。

「自来也がお前達の面倒をみると言ったとき、私はあいつのことをバカだと思った。忍びが余計なことに心を割いては腕が鈍るだけで、何も益はない。忍びは忍びの仕事に集中していればいい。子どもの世話をするのは別の人間の仕事。そうして社会は成り立っている、とな」

長話が始まった。これは、天命とかそういう話だろうか。

「だが、私はこの戦争で大切なものを失った。その時、否応なく忍びとして余計な感情に包まれてしまったのだ。私は数日間冷静でいられなかった。しかし恐ろしいことに、数日経つと冷静になるときが来てしまうのだ。そして迫られる。お前は忍びだ。だから余計な感情は捨てろと」

綱手の両手が震え出す。彼女はその両手を胸の前にかかげ、わざわざ見る。恐怖に引きつった顔で、マジマジと。トラウマを思い出しているかのようだ。

「しかしその時、それこそが、私にとっての最大の恐怖だと気付かされた。大切な思い出を否定した時、私は私で無くなる。私の感情全てを否定することになる。それはできない。しかし、忍びはやらなければならぬ。私は恐怖に立ち向かわされた。そして、負けた……。あれは負けと言うしかない」

うーん、アラサーの忍者でもそういうことで悩んだなあ。

それを俺に話すことは、あの時のことを言ってるんだと思うけど。

こつち方面の木遁分身の記憶だ。半年ほどでチャクラが切れかけて、焦っていた。このままでは孤児を残して消えてしまう。しかし、四方八方で激しい戦闘が繰り広げられているから、子どもを連れて動けない。そんな時、綱手が戦っているのが見えた。彼女はあっさり敵を倒したが、彼女の仲間は深傷を負った。

綱手なら簡単に治せるはずだった。が、彼女は重傷者を前に動けな

かった。チャクラがめちやくちやに乱れ、手が震え、ついにはワアワアと幼児のように泣き叫んだ。

幻術かと思い、出て行って解こうとした。この時点で彼女に恩を売って孤児の面倒をみてもらうことに決めていた。ところが、彼女は幻術にかかっていなかった。どうするべきか分からない。とりあえず俺は重傷者に応急措置をし、彼と綱手を集落に連れていった。

孤児と一緒に重傷者の看病をした。綱手については、歌を歌ったり、孤児が「私もお父さんお母さん死んじゃったけど、皆と頑張ろうって決めたんだよ。辛いけどね」と言って励ましたりした。自分で言うて泣きながら。

綱手は夕食までぼおつとしていたが、俺が野菜を口渡ししようとするのと急に復活した。

「貴様、なぜ生きている？」

俺は殴られる前に孤児達を頼む必要があった。

「皆喜べ！ お姉さんが復活したぞー！」

「ほんと!? わーいわーい！」

孤児の喝采で綱手は再び呆然とした。その隙に、俺は言った。

「綱手さん。一時彼等を頼みます。僕は分身のチャクラが尽きそうなので」

「へ? あつ! おつ、おい! 待つ!」

俺は殴られる前にチャクラ切れを起こし、分身を消した。

ということがあったのだ。綱手は弱い自分を俺に見られてしまったから、話してもいいと思っただろうか。

綱手は不意に月を見上げる。何かを諦めた人のように、ふうとため息を吐く。

「私は、忍びを引退するつもりだ」

衝撃的な発言だった。でも、辻褄があう。戦後の忙しい時期にここに残っていること。孤児達も残ったままであること。彼女はおそらく、長く木の葉に帰っていない。早くから辞める決心はつけていたようだ。

「血がダメになってしまったんだ。この子達の笑顔を見てみると、余計にな。命の重みってやつを、今さら感じるようになってしまった。だから、もうダメなんだ。忍びはな」

綱手は俺に背を向け、立ち上がった。何もせず、ただ空を見上げる。失礼ながら、白眼で表情を覗いてみる。予想通り、涙を流していた。数分そうしていた。涙が乾いた頃、綱手は再びふうと息を吐いた。

「自来也やお前が楽しそうに孤児を育てるから、私も試しにやってみた。なかなかどうして、おもしろいじゃないか。けど、あいつらをお前みたいなガキに任せてはおけんし、一緒にいたいと言われてしまったからな。特別に私も協力してやるよ。名誉顧問って形だな」

「えっ！ 本当ですか!?!」

これは驚いた。思わぬ行幸。勝手に美女がやって来た。

いや、でもこの人俺の趣味にケチつけてきそう。ハーレム禁止はもちろん、メイドや巫女も危ない。あー、どうしよっかなあ。俺のシャングリ・ラがー。

「おい！ なんだその顔は！ うれしいだろうが！ もつと喜べ！」
「は、はい」

あーっ、やっぱ鬼嫁っぽい感じだー。俺の自由の楽園がー。

「まあ私も3年も働いたんだ。長期休暇と3年分の未払金はいただいでいくぞ。私も鬼じゃないからな。あの手押し車に入ってる金全部でいい」

綱手は当たり前のように言った。そして歩き出す。

「どこに?」

「休暇だよ」

「いつまで?」

「さあな。顧問を縛る法はない」

「へ? はえっ?」

うわーっ! あまりの変わり身の早さにビックリしたーっ!

っーかこの人、俺と一緒に理想郷の王になるつもりだ! 同族だから分かる! しかも俺の立場を奪って! どころか顧問って、口だけ出してあんまり働かない気じゃん! 俺よりタチが悪い! それを思

いつくとは、やはり卑の国の忍者か！ 卑の遺志は途切れることなく受け継がれているということか！

なお、綱手は酒とギャンブルに明け暮れ、一週間後にとても機嫌の悪い状態で帰ってきた。一文無しだった。

また、その時にシズネという娘を連れていた。なかなかの美少女だった。綱手曰く死んだ友人の子であり、いつまでもめそめそしているのがあまりにみっともなかったので、無理矢理弟子にしたらしい。やはり卑の遺志か。

気分は空海

俺も子どもの頃には美しい夢があった。

スポーツ選手や大金持ちではない。安定した職やそここの家庭でもない。

弘法大師空海！ その人のように、人々を救うことである！ 特に緑化！ 治水！ 貯水！ 戦争の偉人は敵方にとって悪だが、緑化と治水は生きとし生けるもの皆を救う！ 貧乏な国では医療よりも多くの人を救う！ 俺は、そんなことを成した偉人に憧れていた！ 台湾、インド、中国、ネパール、アフガニスタン！ 近現代の日本人でもできることだった！ 俺も頑張ればできるはずだった！ でも面倒だと思つてやらなかつた！ それでいいのか夢！

よくない！ やるぞ俺は！ かつてはできなかつたが、今やるぞ！ 全身全霊をもつてやり遂げるぞ！ 本当にやりたかつたことを！

地図、設計図を両手に現場を指揮する。隣には土木に詳しいおっちゃん。実家はこの近くにある。木遁分身が3年前に仲良くなつた人だ。近年は木の葉で働いていたが、頼み込んで来てもらった。

「そこっ！ もうちょっと土を盛り上げよう！ 角度をこう、お椀型につけて！ 設計図ちゃんと見て！ あーっ！ 綱手さんそこ崩しちゃダメえ！」

土遁で大雑把な形を作り、細かい部分は手作業で行う。大きなダムなので数回に分けて土を動かす。

特に水の開閉の部分が難しい。強度を強くすればいいという問題ではない。一般人にも改修、修築できる作りにしないと。俺がいなくなつたら後が続かないというのでは、国として成り立たない。

しかし、前世の人間の努力がかわいそうになるほどあつという間にできちゃうなあ。おっちゃんも目が点になつちやつてる。土遁と水遁が便利過ぎる。

平行して、ダムからの水を送る水路も作っている。ここでは皆大好き蛇籠を使う。要するに竹で編んだ籠に小石を詰めて、それを並べて川の両岸にするのだ。木を植えると根が小石の間に入り込み、非常に

頑丈な壁になる。修復が簡単というのも特徴だ。

この竹の編み方は波の国のおばちゃんに聞いた。手先が器用な子に教え込み、今急ピッチで増やしている。竹は近くの竹林を伐採、小石をその辺の石を拾ったり割ったりして集める。作業は近隣住民にも協力してもらった。報酬は薪、食料、医療などだ。山賊や元忍もいたが、素直に従うなら雇った。中には偉ぶって子どもを虐めたり、女を犯そうとするやつもいた。そんなやつは、俺が直々にボコボコにして晒し者にしてやった。一応殺しはせず、幻術をかけて木の葉方面に放った。よっぽど運がよくない限り蛇の餌になるだろう。

そうして、半年が過ぎる。

面積約4キロ平方メートル。堤高50メートル。最大積水量約0、1キロ立方メートルの立派なダムが完成した。水路はまだ完成にはほど遠いが、1キロくらいは伸びた。以後、水路を伸ばしつつ、水路の周りの荒地を緑化していく。平行して開墾だ！ 田畑作りだ！

砂漠では、苗を植えて水をやっても、砂が被って枯れてしまうことがある。砂、いや砂を撒き散らす風を止めるためには、植林が必要である。ここで重要になってくるのが俺だ。木遁で一気に樹海を作れる。砂漠は大地の恵みが薄いのでしんどいが、それでも俺がやれば早い。だが、皆の手で緑化を成功させたい気持ちがあった。よって、俺はあまり出しやばらず、皆で苗木を植えていった。苗木と言っても巨大だが。土遁で根こそぎ取れるし、人力でそれを運べるので。

俺の盛り上がりを他所に「そろそろいいのでは？」という声も出始める。あまり広い土地を耕しても、食べる人がいない。水やり等の管理が面倒になるだけ。

それは正しい。だが、俺は確信している。探せば生活に困っている美少女はまだままだいると。そいつらをこの理想郷に導くのだ。また、雪一族もかぐや一族も滅亡寸前だから、産みまくって増やすべきである。相手がいないならいい男を紹介するぞ。俺だ。

綱手が怖くて大っぴらには言えないので、メイド達には「子ども欲しいか？ 赤ちゃんかわいいよな」とそれっぽく誘導し始める。また「困っている人を探す」と言って木遁分身を各地に遣わせた。今度は

俺はかつこいいところを見せるべく、木遁で巨大な要塞を作り、鳥の逃げ場を無くした。そして要塞を一気に縮め、ボツチをグルグル巻きにした。

「ご、御主人様！ 彼女は！」

「無礼者！ 御主人様に何をするか！」

「クツ、クソ野郎が……っ。次こそは、必ず……っ」

遅れて親衛隊（メイドと言うと綱手が怒るので名称を代えた）がやってくる。大して役には立たないが、いるとうれしい。

俺は皆にボツチのことを説明する。

「根は悪い人間ではない。俺は長年彼女の自由を縛った報いを受けているだけだ。むしろ丁重にもてなし、この村のすばらしさを教えてやれ」

えーっ、という反応が多かったが、初期メンバーを中心に納得してもらった。

ボツチの木遁の縛りを解き、集落へ向けて歩き出す。

その時、背後に悪寒を感じた。

白眼！

「後方から急速接近するクナイ！ 風のチャクラを纏っている！
「っっ」

振り向きざまに指でクナイの腹を突き、弾く。

敵は、……4人か！ 同じ服、黒い生地、赤で模様を付けている、を着て、顔には仮面。うち2人は上忍並みの動きだ！ ヤバい！

「アラレは綱手を呼んでこい！ 戦えない者は集落へ逃げろ！」

言いながら特大のチャクラを込め、先程の要塞より一回り大きく、付近の住民を覆い尽くす巨大な木の壁を作り出す。

さらに内側にもう1枚壁！ そして、壁と壁の間に眠り粉を撒き散らす毒花を咲かせる。

敵の術の火やクナイが木の壁に当たる。火は木の表面を焦がすが、チャクラを吸い取ればすぐに鎮火される。風を纏ったクナイは木を切り裂くが、切断した木に押し潰されて途中で止まる。

よし、簡単には突破できないようだ。今のうちに陣形を整えよ

う。

「親衛隊と警備隊は木の上から敵を狙え！　だがチャクラの多い二人には接近するな！　あいつらは俺と綱手がなんとかする！」

「はいー！」

「了解です！」

親衛隊、警備隊が左右に別れて要塞を登っていく。敵は一人が巨大な鳥を口寄せした。上忍らしきやつだ。それに中忍らしき一人が乗る。さらに一人は、パラパラと身体が紙のようになって浮いた。血継限界か！　厄介な！

残りもう一人は、身体に高濃度の赤いチャクラを纏って突っ込んでる！　五影並みのチャクラだ！　それに、どこかで会ったな。このチャクラは見覚えがあるぞ。

衝撃。耳をつんざく爆音。赤いチャクラを纏ったやつは、一撃で木遁の要塞を粉碎してしまう。

だが、バカめ。かかったな。要塞はもう一枚ある。そこは毒花の地獄だ。

フシューツ、フシューツ、とか言ってふつうに息してやがる。よっぽどうれしかったのか？　散々苦渋を舐めさせられた俺の木遁を破壊できたことが。

「あ？　あれ？」

眠り粉を吸ってフラリと揺れる女。もう正体は分かっているぞ。

俺は残った木で女を縛りにかかる。紙が飛んできて女を救おうとしたが、それより早く木で覆い尽くした。

「はい捕獲。まだお前には負けん」

「く、くやしい……つてば……」

クシナは眠った。さて、他の三人は誰だ？

「油断していいいのか？」

突然後ろから声。上忍らしき男は空から攻めると見せかけて、分身を地面に送っていたようだ。もつとも、白眼に死角はないが。

前を見たまま背中から木の槍を出し、男の分身に突き刺す。カウンターは決まったが、男の方もギリギリ反応し、分身が消える前に俺に

謎の棒を投げてきた。

「ふっ」

もつとも、白眼に死角はないが。手をチャクラで覆い、謎の棒をキヤツチする。

「うっ」

途端、悪寒が走った。チャクラも乱される。なんだこの棒は。気持ち悪い。

俺は手に木刀を作り、謎の棒を真つ二つに切り裂く。

つと、こんな暇はない。メイド隊の応援に行かなくては。

「チエックだな」

「何!？」

しかし、筆頭メイドの初、警備隊隊長の長袖、共に上忍らしき忍びに捉えられてしまっていた。だが、こちらも月が敵の男を一人捕らえている。俺もクシナを捕まえた。

引き分け? いや、敗けた。これではダメだ。自宅警備兵はともかく、俺の宝であるメイドが奪われてしまった。こんな戦いをしちやダメなんだ!

「御主人様! 私など構わず!」

「何者だ貴様! 俺の宝に汚い手で触るな!」

おおっ。なんかかっこいいぞ俺。

「ぶっ」

と、紙の忍者が笑った。女の声だった。

初を捕まえている男も殺気を消す。そして自身の仮面に手をかけた。

「元気でやっているようだな。今の名は、空海だったか」

「長門!」

男の正体は長門だった。懐かしい顔だ。記憶より大分デカくなって、声も低くなっているが。しかし、こんな形で再開するとはな。びっくりした。

紙の女は小南で、月に捕まった男は弥彦だった。うわっ、悲しいな。今は弥彦が一番弱いのか。一番目だちたがりなのに、気弱で戦いとは

無縁だった小南にさえ抜かれてしまったんだな。

「この守りがどんなものかと思つてな。試させてもらった」

長門が悪戯っぽく言う。初と長袖を解放しながら。

「3人仲良くやつてるのか？」

「まあな。俺達も自来也先生を真似て孤児の世話をしている。お前が自殺したと聞いた時は悲しみより信じられない思いが強かったが、彼女に真実を聞かされた時は笑つたよ」

長門はクシナを見る。なるほど。旅をしていたクシナが長門に出会つて、俺のことを話したんだな。相変わらず口の軽いやつ。

と、地面から俺の木遁分身が出てきた。孤児を探しに行かせていた分身だ。俺の目前でそいつが消え、記憶が入ってくる。

ふむ。こいつがボツチに出会つて、長門達やクシナに出会つて、孤児達と一緒にここまで来たわけだな。なかなかおもしろい旅だった。ちゃんと美少女もいるな。つーか今回の難民、うずまき一族がいやがる。俺を売り払った親族だったらどうしてやろうか。まあ美女、美少女なら許すが。

決別としがらみ

長門達を集落に連れていき、ご馳走を用意する。改めて互いに別れてからの話をする。

木遁分身がほぼ話し終えていたので、主にメイドに対するツツコミになったが。弥彦は「不純だ!」「羨ましい!」「俺にも紹介してくれ!」などと言った。釜倉を紹介してあげた。雪一族は中性っぽい体格顔立ちなので、俺のように白眼を持ってない場合は女と見間違ふことがままある。実際弥彦もそうだった。ポオツと顔を赤くして、小南に足を踏んづけられていた。そこで釜倉が「ぼく、男なんだけど」と恥ずかしそうに言うと、弥彦は「ウソだああ!」と絶叫した。逆に小南がドキリとしていた。情けないやつらだ。人を見かけで判断するなんて。俺もだがな。

食後、弥彦が真面目な顔で切り出した。

「実は、俺達の組織はな。ただ孤児の世話をしているわけじゃないんだ。本当の、一番の目的は、世界平和を成し遂げることなんだ」「ほう」

「すごいな。あの弱肉強食の幼少期を生き抜いてその思想が持てるとは。いや、持っただけならできても、行動に移そうと思えるとはな。」

「おかしいかな?」

「いや、すごいと思う。多くの人が願っていることだ。実現できたらすごい」

「ありがとう」

「逆に言えば、いろんな人が挑戦して失敗してきたことだ。その難題を、どうやったら解決できると思ってたんだ?」

「……笑わないでくれよ」

少し恥ずかしがる弥彦。

「ああ、笑わないさ」

「まあ、簡単に言うと、対話だ」

「そうか。……いつ? ええええーっ!」

「なぜ驚く!」

「いやいやいやー！」

そりゃあ驚くでしょう。苦しんだからこそ見えてくる意外な方法とかさ。そういうのを期待していたのに、対話かよ。滅茶苦茶使い古されたネタじゃん！ いかにもガキが考え付きそうな！

しかも、長門と小南も俺が叫んだら不満そうな顔になったし！ お前らまでかよ！

「あのさあ。お前は歴史を考察したりしないの？」

「歴史？ 何のだ？」

「例えば、仲のいい兄弟が金や女を求めて殺し合うとか。飢饉で殺して奪うしかないとか。だいたい対話ってき、皆思いつくことだろう？

つまり、何千何万人もその方法は試してきたんだよ。その上で世界平和は失敗した。俺達は失敗の原因を探るべきなんじゃないか？

対話の可能性に夢を膨らませる前に」

「そんなことなら毎日やってるさ」

長門が立ち上がり、怒ったように言う。チャクラも殺気だつ。

俺が上から目線でうざかったのは分かる。が、本当に対話が大切だと思ってるのなら、怒りを見せるなよな。それは脅しだぞ。

「そういうお前はどう考えているんだ？ 戦いか!? だが、殺し殺され恨みの連鎖ではいつまで経っても進歩しない！」

長門はさらにはつきり怒った。少しガツカリだ。まあ、年相応ではあるけど。

「俺は柔軟にやるのがいいと思うよ。対話を通じる相手には対話。ビビらせて通じるなら脅す。それも通じないなら拘束するか殺す。現状維持がいいって意味じゃないよ。対話を通じる相手を増やすことは重要だ。教育とかでね」

「教育？ それは人格の否定にはならないか？ お前が殺すと決めた相手は本当に殺すしかないのか!? 俺は人殺しが反省し更正する様を見たこともあるぞ！ 殺すしかないなんて決めつけていいはずがない！ どんなに辛くても対話を諦めちゃいけないんだー！」

「分かったよ。そういう思想も大事だよ。だけどな。歴史的にみれば、人間どころか動物でさえ殺しちやいけないうって思想はあったん

だ。犬、猫、牛、豚なんてのはもちろん、ハエや蚊に至るまでな。俺はそういう崇高な思想を持つ人のことを尊いと思ってる。空海って名はその人から取ったしな。そういう思想が広く受け入れられている国では、人殺しも犯罪も激減するだろうし、実際俺もこの村で広めるつもりだ。肉は食うけどな。だけどな、そういう国があっても世界平和は作れなかつたんだよ」

主に強欲野蛮な移民と旅商人のせいだな。

「いや、間違っている！ 立派な話はいいが、お前は論点をすりかえた！ 初めから対話の可能性を否定してかかっている！」

「否定してはいないさ。俺は確率論者なんだ。成功する確率がゼロとは思わないよ。限りなくゼロだけどね」

「確率……っ？ 数字か？ 数字で人間を表現することなどできない！ それは人への冒涇だ！」

「俺が確率にしたのは人間の心ではなく人間の行動だ。だいたい確率って数字とかデジタルじゃなくてアナログを表す方が多いと思うけど」

「うん？ 言ってることが無茶苦茶だ。纏めてから話してくれ」

なんか、俺も苛立って来たぞ。なんだこいつ。喧嘩腰でペラペラと適当なこと言いやがって。

「ご、御主人様！ こんな喜ばしい席でケンカなんてもつての他ですよー！」

「長門、あなたも押さえなさい。どうしたの？ あなたらしくないわよ」

初と小南がそれぞれの前に足って押さえつける。俺と長門は睨み合う。

あん？ なんだあいつの目？ グルグル回ってんぞ。

「いい加減にしろ！ 二人とも！」

ゴン、と綱手の拳骨が脳天に来た。滅茶苦茶痛い。聞いてやがったか。まあもともとこっちにいたしな。今まで出てこなかったのが不思議だった。

「すまないな。お前たちもせつかくここまで来たのに」

「い、いえ。先に熱くなつたのは長門ですから」

「まあ、ゆつくりしていけ。自分で言うのもなんだが、ここはいい村だぞ」

「いえ、そういうわけにもいかないんです」

小南が申し訳なさそうに言う。

「どうしてだ？」

「今、私たちの組織では長門の影分身が防衛の要になっているんです。ここと違って、山椒魚の半蔵を筆頭に強敵がいつ襲ってくるか分からないので、あまり長居はできません」

「そうか。あの男か……」

俺にとつても嫌な思い出の男だ。そう言えば綱手、自来也、大蛇丸に木の葉の三忍と名付けたのもこいつだったか。

「あつ、ですからっ！　ここに来たもう1つの理由はっ！」

小南が続きを言う前に、長門が彼女の口を塞いだ。俺は白眼で口の動きから言葉を読み取れたが。同盟を結ぶこと、とな。

「いい。話を聞いて分かつただろう？　痛みを知るこの男ならと思つたが、相容れない。残念ながら」

「だ、だけど長門っ！」

「お前もそう思つただろう？　弥彦」

長門が弥彦を見下ろして言う。こいつらの組織は弥彦がリーダーだと聞いたが、名前だけのリーダーだな。頭も戦力も完全に長門じゃねえか。

弥彦はふてくされた感じで立ち上がる。こいつも俺の話には不満そうだったからな。問題なく長門に同意する流れだ。

「ああ、そうだな。非常に残念だ。孤児院を作つてると聞いた時は俺達と同じだと思つたが、ぬか喜びだった。女ばかり集めて下品だしな」

最後のはただの嫉妬だな。

「小南、行こうぜ。もう用は済んだ」

不安げな小南を他所に、二人は帰る雰囲気だ。小南も昔に戻つたように大人しくなつて、視線を右往左往させることしかできない。

「小南。俺は同盟を結ぶべきだと思うぞ」

「えっ」

だが、俺は空気を読まない男だぞ。

「何を」

長門が慌てて振り替える。

「一時の感情で自分の仲間を危険に晒してはいけない。多少の食い違いは呑み込んで、実益を取るべきだ。お前たちの言う対話ってのは、その程度の折り合いもつけられないものなのか？」

小南は衝撃を受けたような表情になった。長門はまだムスツとしている。弥彦はちんぷんかんぷんだ。やはりこいつがトップはダメだろう。お飾りならいいかもしれないが。

「仲のいい小南ですら自分の意見を言えないようだ。これがお前たちの考える対話なんだな」

「そんなはずがないだろう」

弥彦がじつと小南を見る。

小南は不安そうに俺と弥彦の間で視線を動かす。

「小南、そんなやつから見限ってこつちにこい。お前のところの孤児もこの村が世話してやる」

と、この発言には怒りの表情になった。急ぎすぎたか。小南があまりにも美少女だったから。

「おいっ、バカなことを言うな！ 小南は同士だ！」

「そ、そうよ！ 私は弥彦と長門を信頼してる！ もちろん足りないこともあるでしょうけど、それは私達が補えばいいだけのこと！」

「残念だ。まあ、足りなさすぎるな。お前たちにとって俺との同盟は有益だが、こつちにとっては損だな。地獄に突っ走るバカのためにこいつらを危険に晒すわけにはいかない」

「なんだと!？」

「いい加減にしろ！」

と、また綱手に殴られてしまった。

長門、弥彦は不満げに、小南は心配そうに帰っていった。

「言い過ぎじゃないかってば？ もうちよつと相手の意見を聞いてあ

げても」

と、去ったところでクシナが言う。意外だな。今まで黙って聞いていたのが。

「可能性を信じるくせに確率論を否定したんだ。議論の余地はないよ」

「でも、あたしはどちらかと言うと長門の言ってることが正しいと思っただけだね」

そうだと思っただ。彼女も理想家だ。だから長門を援護すると思っただが。

「バカだなあ。こいつが歴史の話をしてただろ？ あいつみたいなやつは五万といたが、皆あっさり死んでいったんだよ。なのにあいつは自分だけは大丈夫だって考えてる。不幸な戦争の被害者である自分なら、大国の驕りに立ち向かえるってな。それこそ慢心だぜ。うんそうだ」

ボッチは俺の味方だった。岩隠れの教育は卑の国よりまともな感じがするな。

クシナは集落に残り、俺や綱手と修行すると言った。今は九尾に認めてもらえるよう自分を磨いているらしい。心優しい娘だから俺の村のあり方にも共感し、仕事も積極的にしてくれるようだ。

ボッチも一日クシナと同じ生活をして、「次こそはぶっ殺す！ うんそうする！」と言って去っていった。

長門との同盟を否定した俺。しかし次に直面するのは、防衛の問題。理想郷の王として最も大切と言えるかもしれない、大国との交渉。

まず、砂の忍びがやってきた。強面だが、中忍程度の雑魚。木遁分身を子どもに化けさせ、脅されて従うフリをして集落に連れていった。綱手は「一人でやってみろ」と言って隠れた。

「誉めてやるぜ。田舎もんにしちゃ立派なもん作ってやがる。だがな、所詮ガキの集まりなんだよ。死にたくなかったら池と水路を寄越せ。砂の傘下に入るなら命の保証はしてやろう」

少し、衝撃だった。慢性的に水不足に悩んでいるのは分かるが、い

きなり脅しとは。ビビらせて従わせてしまおうと言うのだろう。忍びとはヤクザだったのか？

「この水路は俺達で作った。俺達のものだ」

当然、俺は突っぱねる。

砂の忍びはとても驚いたようだった。

「いいのか？ 子ども達がどうなっても」

「水が欲しいならくれてやる。仕事もやろう。余った作物もやろう。だが権利はやらん！ ここは俺の理想郷だ！」

砂の忍びは、チツ、ただのバカか、のような反応をした。

「もっと深く考えてからものを言うんだな。我々はそう気の長い方ではないぞ」

「私も気は短いんだ。知らなかったのか？」

「なっ！ 綱手！ くっ」

と、綱手が我慢し切れず出てきた。砂隠れの忍びは驚き慌て、去っていった。

数日遅れて、木の葉の忍びもやってきた。こちらも中忍だった。砂隠れよりは物腰が低く、「水路の防衛をうちに任せる気はないか？」という感じだった。木の葉は水も畑もある豊かな土地だ。このことは、砂隠れに取られるくらいなら、程度の認識だろう。当然突っぱねた。

「譲歩はしない。この里はわしが育てた」

「バ、バカかあんた。戦争で何が起きたのか知らないのか？ 小国が大国から目を背けて生きていくことはできないぞ」

忍びは軽い脅し文句を言って出ていった。

数日後、今度は砂隠れの上忍がやってきた。

多少言葉は上品だが、やっていることは中忍と同じだった。

「忍びが本気になったらお前達ではどうしようもないぞ」

「我々は善良な一般市民であり、忍びに襲われる理由がありません」

「ふっ。善良な人間か。善良ならば富みの独占はしないだろう」

「ですから、余った水と食料はタダであげると言ってるじゃないですか」

「そうか。ならば我々が前達を守ってやろう。だから、代償をきつちり払え」

「勝手に守ってくれる分はいいですが、命令は受け付けません」

「チツ。素人に何ができると思ってる。言っておくが、次が最後だぞ」

そうして砂の忍びは去っていった。俺が無償で提供した水と食糧を持って。

このまま突っぱね続けてもいいが、本当に攻め込まれたら大変である。

俺は綱手と相談し、理想郷の王として砂、木の葉と条約を結ぶことにした。まあ実際に行って話すのは仮代表の豪だが。

大國の狭間で

いつも孤児で賑やかな集落が、不気味なほど静まり返っている。

今日の会議はこの村の存亡に関わるとても重大なもの。子供たちは全員中流の新興地域に移動させ、ここに居るのは砂、木の葉、我が理想郷の要人とその護衛のみ。

砂は、なんと風影が直々にやってきた。護衛もそれに見合った強者揃い。国境付近の地域に対する領土的野心と、慢性的水不足解消への国の意気込みが伺える。

対して、木の葉が送ったのは志村ダンゾウ。三代目火影の右腕にして木の葉の裏の顔と呼ばれる。隠そうともしない溢れつばなしの卑の意志が、いつそ清々しく思えるほどの曲者である。彼の護衛は仮面をつけているが、ダンゾウと同じく後ろ暗そうな雰囲気漂う。

比べて、我が理想郷からは綱手と豪。護衛は初と長袖という悲しさ。俺は1キロも離れて白眼で周囲を警戒している。

組織の実質的なトップは俺だが、名目上は綱手がトップであり外交官は豪である。だから今回の会議も、俺が出ずとも成立する。木の葉との会談は姿を白眼で見られてしまう可能性があるのですが、俺は出たくない。綱手がいて助かった。初代火影の孫で千手一族の実質的な当主でもあるから、権威という意味でも助かる。砂は気に食わないだろうがな。

「この水事業に最も深く貢献したのはうちだ！ 人的資源は半数以上！ だというのに、主要な役職に砂の人間は一人もおらず、給与も支払われていないという！ これは、土地を無断で使用することを許してきた我が里に対する重大な裏切りである！ 即刻謝罪と賠償！そして待遇の改善を要求する！」

「笑止！ ここは川の国であり、風の国の領土ではない！ 事業を始めたのは木の葉の創設者である千手柱間の孫に当たり、自身も非常に優秀な忍びである綱手！ また、孤児や難民に対する無償援助の施設なのだから、給与が出ないのは当然である！ それに集ろうなどという輩は盗賊に同じ！ 必ずや正義の鉄槌が下されることになろう！」

風影もダンゾウも国益優先の言いたい放題だ。妥協する気がない。しかし、やはり風影の方が要求がキツいな。切羽詰まってるのもあるが、もともと強気外交なのだろうな。

ダンゾウは、組織が綱手のものだと思えば勝ちだと思っっている感じだな。たぶん、綱手がいる限りいざとなったら木の葉のために動くと思っっているのだろう。

その後、この土地の歴史やら戦争の状態やら、だからどちらの土地だという舌戦が繰り広げられた。どちらも相手の言葉に耳を傾ける気はなく、壁に向かって知恵比べしているようだった。

動き始めたのは、昼食のときだった。豪がトイレから出たとき、ずっと砂隠れの忍びが寄ってきた。

「お前のガキは、こいつだろ？」

忍びは豪に、アラレとミゾレが写っている写真を見せた。

「かわいいな。誘拐されないか心配だ」

脅しだった。忍びはクナイを舌舐めずりし、豪に見せつけた。豪は汗をダラダラ流し始め、ついには折れてしまった。

「あ、あの、私は砂こそがもつとも事業に貢献し、その富を得る資格があると考えています」

「ほう？」

「待たれよ。その御仁」

しかし、そこでダンゾウが現れる。ダンゾウは豪の額に手を当て、幻術を解く。

「はっ。私は何を……」

「幻術です。砂め、愚かなマネをした。公正な会議の場で」

「そんな……」

「ちっ」

砂隠れの忍びは逃げていく。ダンゾウは豪を守るように立ち、犯人を追いかけるしななかった。

「すみません。犯人を逃がしてしまいました」

「い、いえ。私どもの責任です。まともな護衛がおらず」

「いえ、我々も情けないのですよ。木の葉は痛みを知った。戦後間も

ない今、彼等の機嫌を損ねないよう必死なのです。しかし彼等は我々の意志を理解してくれているのかどうか……」

「そうだったのですか。お察しします」

「ありがとうございます。そのような状況ゆえ、誠に情けない話ですが、今回のことも見なかつたことにしていただければ」

「え、ええ。私は構いませんよ。このようなことはしよつちゆうですから」

「そうでしたか。やはりこれだけの規模の代表となつたら経験が違いますな」

「忍びのダンゾウ様とは比べられませんよ」

ふむ。砂には強引で残虐な印象を。ダンゾウには無害な弱者の印象を与えることに成功したわけだな。さっきの忍びは、議場にいた誰ともチャクラの性質が異なるし、外から入った形跡もないから、口寄せだと思うが。しかし影分身だったようで、フツと消えてしまった。誰が呼んだんだあいつ？ 悔しいが分からなかった。

俺は、ダンゾウが怪しいと思うがな。状況がダンゾウに有利になつたことを考えると。

俺は親衛隊の一人を遣いに出し、そつとそのことを豪に伝えさせた。

午後からはわりと早く決まっていた。

・速やかに風の国側へ水路の拡張を行う。その時の都市計画は風の国が用意し、風の国の了承なしに工事を進めてはならない。

・ダムの水の割り当ては利用する土地の広さに応じるとする。

・ダムの所有権は川の国側とする。

・砂の領土の警備は砂が、川の領土は川が行う。

・川の国は土地の所有者に無料で水を与える。所有者が水やそこで取れる作物を売るのは自由。

・川の国の審査の元で難民への無償援助を行う。風の国、火の国共にこの審査には関与しない。

・以上が守られているかどうかの監査機関を置く。火の国、風の国

から1名以上の3人からなり、選考は川の国側が行う。

その他取り決めもあつたが、大まかにはこんな感じだった。風影は終止「遺憾である」と口では不満げだったが、表情は穏やかになつていった。逆にダンゾウは眉間にシワが寄るばかりだった。

特に二人の明暗を分けたのが、水の割り当ては土地の広さに応じる、というものである。川の国より風の国の方が大きいから、やがて水は風側に取りられてしまう。風影は当然それを理解しており、大人数で押し掛けて川の国の富を絞り尽くすつもりだろう。ダンゾウとしては、味方であるはずの綱手が敵に塩を送っているようなもの。おもしろいはずがない。隣国の繁栄は木の葉の防衛にとって凶なのだ。少なくともダンゾウはそう考えている。

「どういうつもりだ！ 綱手！」

対談後、ダンゾウは綱手に食って掛かった。

「どうも何も、私は生活が困難な人に仕事と食事を与えたいだけだ」

「ふざけるな！ そのような子ども遊びで木の葉を危険に晒そうと言うのか！」

「知るか。私の勝手だろ。別に木の葉を貶めたいわけじゃない」

「な、なんとという愚かな……。初代様も二代目様も、草葉の影で泣いておるわ」

「あん？ じい様がこんなことで泣くわけないだろう。あの人の何を見てきたんだ？」

「ぐっ。……二代目様が泣いておる。火の意志がこんな輩に蔑ろにされていくなんぞ」

ダンゾウは綱手に強く出れないようだった。やはり千手の血は尊いのだろうか。

結局、ダンゾウ達は不満そうに帰っていった。

さて、今回の取り決めで俺達に特だったことなど何も無い。多少の安全の口約束はもらったが、この忍びの世界でそれが何になるのだろうか。俺は全く信用していない。

二里の要人が完全に去つたのを確認してから、俺は幹部を集めた。円卓に並ぶ7人。俺、綱手、豪、初、長袖、イズモ、ついでにクシ

ナだ。クシナはバカだが戦闘力は3番目。美女でもあるし、是非ともこの集落に残ってほしいので、代表補佐という重要そうな役職を与えた。

「今後の防衛と緑化についてだが、まずイズモさんがいるので緑化について話したい。聞いたとは思いますが、水の割り当ては土地の広さに応じることになった。おそらく砂隠れは人海戦術で一気に土地を増やし、水を奪うだろう。畑と呼べないような粗末なものさえ畑と言いつ張ってな。しかし、これはもう止められないこと」

「申し訳ありません」

豪が力なく頭を垂れる。

「いや、いい。俺は、今回のダムはくれてやろうと思ってる」

「えっ」

綱手を除く全員が驚いたような反応をする。俺の治水に対する熱意を知っているからだろう。綱手も不満げだ。

「砂がどういう里なのか分かったのはよかった。豊かな土地に寄生し、吸い尽くしてくる。ならば今度は、囲い込む」

「今度ですか？」

「ああ、二つ目のダムの話だ」

「えっ」

驚きと、まだやるの？、という呆れの反応があった。

やるに決まってるだろう。俺のダムに対する思いはウザいぞ。

「今は大して雨が降らないが、緑化によって定量的に降るようになる場所がある。そこにダムを作る。ただし、次は風の国に水が流れないようにする。川の国の平野が狭いことは分かっている。しかし果樹園ならできるし、平野が足りないなら平野を作ればいい。土遁を使えば山を均すことさえできる。やりすぎると突然地盤沈下するから、ほどほどにだな」

俺は雨が降る予想地域とダム、池、水路の予定地を示す。主にイズモが反論を述べる。

白熱の議論の末、現地調査で一旦決まる。イズモには出ていってもらい、次は軍事を話し合う。

「正直今回のことで砂は憎い。だが、一般人は別だ。俺は、彼等を味方につけるべきだと思う」

「ほう？」

綱手が片眉をあげる。軍事は主に俺と綱手の会話になる。

「俺達が田畑を耕せば、彼等は俺達に感謝するだろう。特に若い忍びに働きかけるのだ。俺達は仲間であり、戦争が起きたとしても攻め込むことはできない、と思いつまさせるように。積極的にな。そうすれば、次の条約で有利に立てる」

「しかし、具体的にはどうするのだ？ 引き込みのようなことをすれば怪しまれ、最悪戦争になるぞ」

「分かっている。だからいつも通りでいい。貧しい人に食事と仕事を与える。共に汗を流し、食事をし、風呂に入る。こういう交流を積極的にを行い、両国民に信頼関係を作る。忍びの合同訓練も行った方がいいだろう。子どもの遊びという形でもいいから」

「ふむ。では砂が理不尽な要求を出したとしても、従う姿勢を見せるということだな。それをこちらの民にも納得させる」

「ああそうだ。従う姿勢を見せていけば、こちらの軍事拡張に対する砂の反発も小さくなる。この間に一気に防衛力を高める。問題はこちらの民の反発。文化が違うのだから、摩擦は起こるだろう。おそらく風の民の方がこちらより野蛮で犯罪が多いだろう。水の配当に対し、砂に富を奪われたという感覚も持つてしまうだろう。彼等に我慢させなければならぬ。俺は、砂の移民が、先の移民に感謝を示すよう誘導する必要があると思う。定期的に感謝のパーティを開かせよう。また、こちらには山奥で静かに暮らしたい者が多い。そういうやつらには、第二のダムで希望を与えるんだ」

「なるほど。そう考えれば第二のダムも無駄ではないな」

その後、忍びの育成の話に移った。人員増強。人選の基準。個人の技量。小隊の編成。修行の評価、見直し。などなど。

また、どうも俺の木遁で作った大地の実がチャクラ増強に効果的らしいので、綱手はそれの実験がしたいと言った。医療の実験と平行して。

川沿いの戦い 襲撃

予想通り、砂は無茶苦茶な土地開発を始めた。適当に砂を掘り起こしただけの場を指さして「畑ができたから水を寄越せ」と言ってきたり、土遁で川のような溝を掘り、勝手に水路につなげたり。極めつけは植林した木の泥棒だ。俺たちの土地の木を盗み、自分の土地へ植えたり薪にして売ったりする。せつかく緑化した俺たちの田畑に、再び砂が被ってしまう。

はつきり言って、予想より酷い。一般市民は大丈夫と思っていたが、大分憎くなってきた。

俺達も、盗みやこつちの領土での土地開発は防ごうとするが、相手は万単位で押し寄せるから対応しきれない。しかも「我が国民に手をあげるとは何事か!」と言って砂の忍者が妨害してくる。警備隊員にも負傷者が出てしまった。報復したいが、相手のバツクが強すぎて大きく出られない。

これが放漫な大国と小国の関係か。思ったより、なす術がない。

俺達に感謝もしない。自国の忍びの力で勝ち取った土地であり、そこに居座るのが当然と思っている。しかも、先に移民していた俺達と自分達を比べ、自分達の土地の方が貧しいからもっと支援しろと言ってくる。ダムだって奪う気満々だ。「人数が圧倒的に多い我々に使う権利がある」とか言って。

俺達も頑張って土地を増やしたが、半年で風と川の水の割り当ては1対1になってしまった。強欲な人間は川の国の木々をすさまじい勢いで伐採していく。禿げ山が目立ち始めている。俺達は「森林の回復能力を考えた計画的な開発が必要だ」と訴えるが、それも鼻で笑われてしまう。風影が欲を煽っているのもいけなかった。「土地を開発した人間はその土地を得ることができる」と言ったのだ。だから適当に大きいだけの畑を作ったり、盗んででも植林したり水路をつなげたりする。

少し風向きが変わったのは、砂側に保守層が出始めた時だ。彼等は勝手に水路をつなげ、木を奪ったが、自分がそれをされるのは許せない。そして砂の忍者に泥棒の監視を依頼する。こうなって初めて、俺達と利害を共有し、協力を求めるようになった。

また、俺が選抜した難民にも風の国出身が多数派となり、彼等も自国に対して発言をし始める。自主的に泥棒を捕まえたり、計画的な開発を訴えたり。彼等には俺の教育がそれなりに行き届いているので、計画的な開発の重要性を理解しているし、ダムを作った俺達に対する感謝の気持ちも持っている。

この状況で、この辺りには大まかに4つのグループができた。

1、俺達。川の国の上流に住んでいる。2、川の国の中流に住んでいる風の国出身の難民や移民。3、砂の国の中流に住んでいる早期開拓者。4、砂の国の下流に住んでいる後期開拓者。

風影は権利の平等を訴え、2、3、4のグループを使って俺達からダムを奪おうとする。革命思想の青年団とやらがポコポコできて、過激な活動を正義と称して行っていく。

俺達は計画的な開発の重要性を訴え、1、2のグループでタッグを組む。それに3の保守層も多少加わった。こちらは自警団を組み、犯罪を取り締まる。特に、貧しさを青年団に利用され、過激な思想に染められた子どもが多くいるのだが、彼等を更正することに力を入れた。

青年団は活発化していくばかりだった。もちろん裏には風影の援助がある。こちらの死傷者は増えていく。親衛隊は意地でも守ったが、警備隊では遂に死者が出てしまった。憎しみを乗り越えるのが大変だった。

他、綱手が襲われたり、それを返り討ちにしたら戦争するぞと脅されたり、孤児を人質に取られたり、働けないジジババを押し付けられたり。とにかく気分がよくないことがたくさんあった。

戦争はいけない。戦争してでも叩き潰したい。その思いで揺れる。

そんな中、綱手が俺に提案した。

「木の葉の中忍試験？」

「ああ。中忍の地位にあまり意味はないが、これは試験自体が擬似的な戦争となっている。最終試験は、各国首脳や大名が見守る中でのトーナメント戦だ。里の力を見せつけ、存在感をアピールするチャンス」

「存在感をアピールする意味はあるのでしょうか？　どのみち砂がその気になったら攻め込んでくるでしょう？」

「言っておくが、そうなった時に木の葉がこちら側に就く保証はないぞ。その確率を高めるためにも、ここを失うのは惜しいと思わせる必要がある」

「なるほど。……そうですね。やってみましょうか」

木の葉は無視できない大国である。人口が多いから、きつとこの集落の思想に共感する人間もいる。特に若者だ。その一部を味方に引き込む意味でも、中忍試験を受けさせることにした。

さて、人選である。当然俺やクシナは出ない。また、出る場合は3人一組でなければならぬ。

実力順に、月、長袖、初。決まりである。

あまり多く出すと国防に関わるし、弱いものを出して木の葉に悪い印象を与えるのもよくない。十分な実力がなければ死ぬこともある。総合するとこの3人でちょうどよかった。

「まずは命を優先。危険だと感じたら辞めろ。逃げてもいい。実力は出し切れ。どうせお前たち程度なら隠すこともない。木の葉の忍びとは積極的に関われ。かと言って卑劣な人間は敬遠するべきだぞ。同志を募るのだ」

そう言って三人を送り出した。特製の大地の実を一人5つずつ手渡して。

一週間後、3人は無事帰ってきた。全員最終試験まで残ったらしい。最終試験は各国大名を募って一ヶ月後に行われる。それまで修行だ。

なお、同志についてだが、思想はともかく、長袖に交際を申し込んだくの一が4人、初と月を勝手に守った少年が2人いたらしい。そのうち、うちはミグシは最終試験出場が決まったようだ。

俺は驚いた。あいつの執念深さと、あの程度でそこまで残れるのかということに。

さて、1ヶ月後。3人は再び木の葉に旅立った。今回は綱手も一緒だ。

最大戦力がいなくなったわけである。俺はこの日のために大地の実を大量に用意し、親衛隊警備隊に配った。また、パーティと称して周辺の人間を集落に固め、守りの配置を簡単にした。

そして、待ち構える。来る、やつらなら。そんな予感はしていた。

10時を少し過ぎた頃、中流の居住域から爆音が響いた。

森を飛び越える巨大な土煙が舞い、その土煙の隙間から巨体が見えた。白眼がなくなると見えるほどの巨体だった。

「なんだあいつは？」

見たことのない謎の巨大生物。膨大なチャクラを纏い、暴れる。そのたった1つの挙動で、いくつの命が失われてしまうだろう。しかしやつは止まらず、悲劇を増やし続ける。

「あいつ一尾だそうだってば！」

クシナが叫び、飛び出していく。

「待っ！ もう木遁分身が向かつ！」

聞いちやいなかった。飛び出したつきり森に消えていった。俺は白眼で見えているが。

確かに、あいつの巨体やチャクラは九尾に似ている。本当に尾獣なら俺の分身だけで押さえられるだろう。俺こそが天敵なのだから。しかし、その場に尾獣以外の敵もいる可能性がある。そう考えたらクシナがいてもいい。人口比で言うと、この集落周辺が800人に対し中流は1500人。なのに守りが木遁分身だけってのは酷い話だしな。まあ国境警備隊って組織があるにはあるが。30人くらいでほぼ全員下忍のレベルだからな。

もっとも、砂の忍びが風の国出身の人間を襲う確率は低いと思ったから、こつちに守りを集中させたわけだが。やつらの闇の深さを見誤って読みが外れてしまった。

と、尾獣とは別の方向から急速に接近する集団あり。1、2、3、4……。ざつと100くらいか。多いな。本気で潰しに掛かって来てやがる。

青年団の見知った顔がちらほらあるな。フリーの抜け忍みたいなやつもいる。あつ、ただ道を歩いてるだけのお爺さんを殺しやがった。何てやつらだ。

ん？ 雨隠れも何人かいるぞ。半蔵め。妙なところで出しやばりやがって。くそつたれが！

「俺の分身を中心に迎え撃て！ 常にチームで動き！ 深追いはしないように！ それと警備隊は意地でも親衛隊を守れよ！ この戦場で生き残ったものには親衛隊との交際も認める！ 親衛隊見習いは待機！ 非戦闘員の護衛と後方支援に徹せよ！ 散！」

警備隊24名、親衛隊45名が、俺の木遁分身と共に飛び出す。親衛隊は3人につき木遁分身一人、警備隊は6人につき一人だ。また、ジョーカー的に綱手の影分身が3人混じっている。木の葉にいる彼女へも、口寄せしたカツユを通して情報は伝わっているはず。応援が来るまで、3時間つてところか。

こちらの实力は俺と綱手が上忍。釜倉と竹が中忍。他は下忍程度だろう。クシナがおそらく上忍の实力を持っているが、向こうに行つてしまった。

対して、敵は上忍が5人ほどいる。総人数も多い。単純な实力では不利かもしれない。しかしここは俺達のホーム。罨と土地勘を考えれば、こちらの方が有利ではあるだろう。問題は死者をどこまで押さえられるかだ。特にメイド隊の。自宅警備兵も、なんだかんだいい子達だしな。

戦場が動いた。砂の忍びが罨にかかって一人脱落。いや、もう一人。さらにもう一人。おつと、大蛇の縄張りに入って戦ってるやつもいるな。しかも苦戦してやがる。

まあ、こいつらは雑魚だから大した意味がないが。

小さな山を1つ越え、谷に向かう忍び達。そこには予め痺れ粉を撒き散らす花を大量に配置している。かかった。一人、二人、三人。よ

し、次々に眠っていくぞ。幻術を解こうとして意味がなかったやつもいるな。こいつは科学であってチャクラではないぞ。

おっと、医療忍者が出てきやがった。気づいたな。風で粉を吹き飛ばし、治療に入る。だが、俺の分身がもう来たぞ。

「土遁、土砂崩し」

予め崩れやすくしておいた山だ。少ないチャクラで大量の土砂が襲いかかる。動けない忍び、治療中の医療忍者にはなす術なし。一気に30人くらい殺ったか？ いや、復活して地面から這い出てるやつもいる。

「木遁、挿し木の術」

地中のやつも串刺しにしておく。女はグルグル巻きで許す。戦後を考えると捕虜も必要だしな。ついでにあいつらのチャクラを集めて、俺の回復もできるしな。

だが、土砂を免れた生き残りがまだまだいる。こいつらは精鋭ばかりだろう。喜んでいる暇はない。別の山から来てるやつらは全員無事だしな。

戦場の空気

集落付近は雑木林が鬱蒼と生い茂り、そこかしこに罨が仕掛けてある。知らない人間はまともに近づくことさえできない。ハズだったが。

「風遁、大カマイタチの術！」

「きやあつー！」

敵の女、青年団であり幹部で密かにかわいいと思っていた、が、扇の一扇ぎで罨ごと林を斬り倒してしまふ。雪一族の氷遁の鏡も、かなり頑丈なはずなのに、ぼつさりだ。あいつを止めなければ終わる。

「土遁、土流壁」

チャクラをゴツゴツそり使い、親衛隊を後方に隠すように土の壁を立てる。

「お前らはミゾレを連れて下がれ！ 相性が悪い！ スリミの班を連れてこい！」

ミゾレはあの傷では戦えまい。どの道このレベルの戦闘では役に立たないかもしれないが。

「隊長が一人残ったか」

「意味はないぞ。富を独占する愚か者を逃がしはしない」

女が後方に下がり、青年団でも一番雰囲気のある男が出てくる。他の男達は遠回りして親衛隊を追いかけていく。心配だが、今はこいつをとめることが重要だ。こいつと後ろの女が最も危険な二人。

男が不意に手を上げる。周囲の砂が意志を持つているように動く。ん？ ふつうの砂と少し違うな。鉄鉱石が多いぞ。砂鉄みたいだな。俺は白眼だから見えるんだが。

まあ、同じこと。好都合だ。

俺がにやりと口端を上げるのと、相手の攻撃はほぼ同時だった。突然俺に急速接近する砂鉄。近づきながらいくつかの塊に別れ、そのそれぞれが弾丸のような形になる。

だが、それがどうした？

俺は両手から巨大な木の根を発生させ、砂鉄を飲み込む。砂鉄は根

を抉るが、チャクラを吸われて失速し、本体も栄養として根に吸収される。根はそのまま男に突っ込む。

「ちっ」

男は後方に飛びながらクナイを投げるが、それも根で受け止めるのみ。起爆札が付けられており爆発したが、先っぽが痛んだところで意味はない。

男は後方に逃げるしかできない。

明らかに、俺はこの男と相性がいい。

「木遁使いがいたとはな」

「私の風で切り裂くわ」

「頼む」

女が前に出て、扇を扇ぐ。カマイタチが発生する。真空の刃に巨大な根がばつさり切られ、なお俺に向かってくる。

「やはり厄介だな」

俺は土遁で土を盛り上げて防風をやり過ごす。いや、そのまま土の中に入る。

「死ね！ 挿し木の術」

美女を殺すのはもったいないが、今は余裕がない。

やつらの周囲全般、地面から木の槍を突き出す。

ん？ 躲したか。女は砂に、男は砂鉄に乗って宙に浮いている。そんな使い方もできたのか。いや、ボツチの泥人形を考えると可能だな。

と、ここまで考えたところで分身は消える。チャクラが尽きたのだ。

「すさまじいチャクラ量だな。こいつが木の葉の用意した綱手の代わりの番人だろう」

「逆にこいつを倒せば、私たちの勝ちね」

男は砂鉄の上でジャンプし、挿し木の範囲外の地面に着地する。そのまま真下の地面に手を着け、土遁をかけてくる。

男は土を砂に変え、渦巻きのように回そうとした。中にいるはずの分身をミキサ―でグチャグチャにするようなイメージだったのだろ

う。しかし、分身の残した根に妨害されて、土は中途半端に動きを止める。

「チツ、厄介だな。木遁の弱点はなんだ？」

「残念ながらはつきりした弱点はないでしょうね。あつたら初代火影は忍の神と呼ばれていない」

「クツ、面倒な」

青年団のトップと分身の死骸の戦いは長期戦に入る。

その頃、逃げていたミゾレ小隊の下に俺の別の木遁分身が到着する。

「はあ、はあ」

「ひゃっはーっ！ 無駄無駄無駄あべしっ！」

男の一人を地面からの挿し木で一突き。他の連中は咄嗟の反応で避けた。具体的には7人。

「ミツ、ミゾレ！」

「早く逃げなさい！」

遅れてスリミ小隊がやってくる。うずまきスリミ（14）、アラレ（11）、積雪（12）からなる。

「霧隠れの術！」

「氷遁、霰走り！」

この小隊の特徴は、積雪が濃霧で敵の視界を奪い、アラレが氷の鏡を出鱈目に動かし、その中を感知能力に長けるスリミが戦うというものである。スリミはうずまき一族の封印術を使う。スピードはないが、封印が決まれば一撃で動きをじられる場合が多い。じつと隠れ、獲物を仕留めるタイプである。

そしてこの三人、皆が土遁で肉体を硬化させることができる。俺の消えた分身の見立てでは、女のカマイタチにも対応できた。おそらくまともに当たれば危ないが、土流壁などでガードすれば十分耐えられるはずだ。

「風遁、大突破！」

「うわっ」

としかし、風の国には風使いが多い。霧は一瞬で晴らされてしまっ

た。

だが、予想通り彼女達にダメージはない。

「ほよ？ どうすんの？」

「土の壁を作るんだ！ それから霧を出せば風に飛ばされることもない！」

「あんだ賢いね！ 偉い！」

アラレはマイペースだから敬語を使わない。しかし天才系でありチャクラ量は初の2倍ほどある。

「大地の実を食べてから術を使え」

「うん！ ほいっと」

アラレの土遁で巨大な土の壁が乱雑に並ぶ。

「霧隠れの術！」

「霰走りの術！」

なお、霰走りという術もアラレが思い付きで作った術である。彼女は天才だということ。

この間、敵は攻撃を待つてくれたわけではなく、俺とスリミが体を張って止めていた。スリミはいくつか切り傷を負うが、医療忍術と持ち前の回復能力ですぐに治癒されていく。これは俺もクシナも持っている力だ。クシナは九尾のお陰だそうだが、うずまき一族に共通する能力でもある気がする。綱手曰く、初代火影もこの能力を持っていたそうだが。

視界を奪われた砂の忍びは、氷に打たれ、紙と鎖に縛られ、また木の槍に刺されていく。

「ちっ！ 外に回り込め！ こいつらは後だ！」

生き残った3人の忍びは遠回りして集落を目指す。

さて、彼女達は天才だからよかった。しかし世の中には凡才もいるのである。

「遅い遅い遅い！」

「待て！ そいつは本体じゃない！ 畏だ！」

「えっ」

自信過剰に突っ走り、注意を怠る者。

「きゃあああ！ 来ないでええええ！」

「避ける！ ちゃんと前見ろ！」

「あっ」

逆に初めての実践に恐怖し、呑まれてしまうもの。

「はやっ、見えっ」

「ナツキイイイ！」

単純に実力が足りないもの。

次々と死んでいった。

「土砂崩しの術！」

「おい！ まだ早いだろ！」

「あっ」

俺も怒りと焦りで我を忘れ、効果的に罫と地形を利用することができなくなっていく。影分身の綱手が指揮を取り始める。

「土遁で全部崩せ！ 早くしろ！ 引け！ 相手の土俵で戦うな！」

戦況は現在俺達に有利。しかし消耗戦の体をなし、死傷者は増えるばかり。

しかも、敵の援軍がもう1000人近く見えた。

「なっ、にっ……」

明らかに過剰戦力。しかし、大国にとっては一部でしかない。十分ありえることだった。

一瞬、心が折れかける。しかし、奮い立たせる。来たのは中流か下流の街のやつらだろう。あれがあるのは俺のせい。だったら俺が諦めてはならない。

しかし、許せない。恩を仇で返すとはこのことだ。なぜそこまで醜くなれる？ なぜ死を賭して俺達に立ち向かえる？ お前達に正義などないだろうに。

「うおおおおお！」

怒りが増え続ける。感情のままに、大規模な術を連発する。

敵は死ぬが、チャクラの切れた分身が消える。指揮に乱れが出て、部下が戦場に取り残されてしまう。

「撤退だ！ 撤退しろ！」

不意に、綱手が叫んだ。

「ど、どうして!?! 今勝ってるのに!?!」

「この消耗戦に意味はない! 大局を見ろ!」

「でも、逃げたところで!」

「部下をちゃんと見ろ! もうまともに戦えるものはいない!」

「えっ」

言われて初めて、部下の状態をきちんと確かめた。

重傷者が動けないのはもちろん、それを運ぶ隊員も、皆どこかしらケガをしている。顔には疲労と哀しみと絶望が浮かぶ。足取りは重く、チャクラは弱々しい。

心が折れている。

初めての実践。死の恐怖。死んでしまう仲間。傷の痛み。全身の疲労。絶え間なく押し寄せる敵。

ふつう、下忍は5分も全力で戦えばバテる。天才は一握りであり、大半は凡人なのだ。

俺は、木遁分身と大技を連発している自身にまだチャクラの余裕があるから、皆も同じだと思っていた。疲れても大地の実で十分回復できると思っていた。

しかし、これが現実なのだ。

今引かなければ、取り返しのつかないことになる。失った命に我を忘れ、救える命を無駄にしてはならない。

撤退しよう。

今まで過ごした集落。皆で作ったダム。全て奪われることになる。それでも、大切な人達の命を思えば安いものだ。

「て、撤退だ! 全員第二ダムまで下がれ! 動けるものは怪我人の回収を急げ!」

俺はどうとう撤退の合図を出した。もつとも、俺が口にする前に綱手が信号弾を打ち上げていたが。

その頃、戦場から少し離れて。ダムの堤防の上に、俺の本体と綱手の分身がいた。

「終わりだな。このダムも」

「ああ、頼む」

「ふつ、口のきき方がなっていないぞ！」

綱手の分身は拳にチャクラを纏い、堤防を一突きする。すさまじい衝撃があつという間に地面まで伝わり、堤防はバコツと割れる。水が溢れだす。

俺は大地の実を5つ口に入れる。

「地獄に落ちろ！ 強欲な野蛮人共！」

水遁、水龍弾。

ダム膨大な水を操り、巨大な龍の形にして、こちらへ登ってきている連中へ飛ばす。彼等は皆無傷であり、ヘラヘラ笑っていた。若者を煽動し、犠牲にし、自分達は裏で指示だけだして、彼等の成果を横取りする。風影と山椒魚の半蔵、そしてその部下達。本隊とでも言うのだろうか。

この二人は強い。部下達はともかく、二人は死なないだろう。だが覚えておけ。お前達は俺を鬼にしまったことを。

撤退には集落の秘密の抜け穴を利用した。当然俺が事前につづいたものだ。

殿は俺の木遁分身が務めた。もともと20人用意していたが、3人しか残っていなかった。

地中では、感知能力に優れ木遁も扱える俺が、無敵に近い。やつらも何度か侵入を試みたが、平均5秒で死亡または敵わないと悟って地上へ逃げた。

俺の本体はクシナの下へ行つた。クシナは九尾を盾に1000人ほどの住民を逃がしていた。方向は第二ダムではなく木の葉だ。

敵は20人程度いた。いや、今九尾が二人殺した。ペースを考えると、元は100人近くいたかもしれない。

対してこちらは、クシナ、九尾、それに国境警備隊4人。俺の木遁分身もいるが、一尾を封印した壺を持っており、チャクラ切れを起こさぬよう戦闘には消極的だった。

「すまん、遅れた」

「遅いってばね！ 何やってたってば！」

「青年団との戦い。それに風影と半蔵の足止めだ。この戦いは初めから勝てるものではなかった。砂は本気で取りに来ていたんだ」

綱手の分身が答える。

「えっ。本当ってば!？」

「ああつ。とっ」

飛来するクナイを指で弾く。ん？ 毒が塗ってあるな。

俺に毒は通用しないぞ。

指を木にして飛ばし、もう一度生やす。これで解毒完了だ。

「あれは！ 砂のチヨじゃないか！ 一人で一城を落とすと言われる！ よく耐えられたな」

「いや、あいつらは今来たところだってば！ 初めにいた50人くらいはほとんど残ってないってばね！」

「なるほど。タイミング的には一尾の回収に来たって感じか。青年団と共に暴れさせ、住民が全滅した頃にやってくるつもりだったのだろう。が、一尾は簡単に封じ込められ、より厄介な九尾が敵に回った。そして俺も来てしまった」

俺は封印した一尾の壺を手取る。蓋を開け、手から根を出し、中に入れる。

「な、何してるってば！」

「チャクラをもらってるっ！ んだよ！」

一尾が暴れるが、根は絡まった。これで吸い取れる。

木遁、ヤマタノオロチ。

8頭の木の龍が砂の精鋭20に襲いかかる。やつらは木遁の存在と術の規模に驚いたようだった。

近くにいた忍びはなす術なし。その他大勢はオロチを足場にしたりして器用に逃げる。カマイタチや砂でオロチに立ち向かう忍びもいたが、あえなく飲み込まれる。いや、ギリギリで糸に引っ張られて事なきを得た。

「バカもんが！ 避けんしゃい！ 相手と自分の力量差も理解できんかね！」

彼等を救ったのはチヨだった。商店街のおばちゃんみたいな雰囲気

気だな。

ヤマタノオロチにより、俺達は彼らと距離を取ることができた。さらに九尾のチャクラ砲が炸裂する。3人死んだな。

と、ここでやつらは5つのチームに別れた。正面から来るのは3人。他は遠回りしている。

後ろの一般人を狙われたらマズい。逆に、もう少し待てば、土砂崩れが使える位置にくる。問題は幼児とジジババが疲労困憊なことだ。ほとんど立ち止まってしまっている。

「国境警備隊は幼児とジジババを運べ！ 戦闘は俺達任せろ！」
「えっ。はっ、はい！」

と言ってもあいつらも疲労困憊だ。人数比で言っても200人近い幼児とジジババは運べないだろう。

しょうがない。俺がやるか。

一尾のチャクラをいただき、木遁分身の術。

一気に50体の分身を作る。やつらを後方に行かせ、遅れている連中を運ばせる。遠回りしている敵と遭遇したらそのまま戦闘にも使える。

が、さすがにクラツと来た。残り全ての大地の実、3つを食べる。あんまり回復しないな。寝不足は寝ないと治らないって感じた。

チヨが強そうな傀儡を10体ほどだす。全員上忍のような動きをする。隣のガキもなかなかいい傀儡を扱う。もう一人のおっさんは体術が得意みたいだな。俺の苦手なタイプだ。

「綱手さん、あのおっさんをお願いします。僕とクシナで傀儡達を」

「チツ。チヨには因縁があるんだがな。毒には気を付けろよ！」

「ええ」

とは言え、まともに戦う気はない。一尾の入った壺に手をかけ、もういつちよ大技。

木遁、樹海降臨。

痺れ粉、眠り粉を撒き散らす樹海を発生させる。木々は傀儡を押し退けもするので攻防一体だ。

しかし、本当に意識がしんどい。

「ぐっ」

大量のクナイが飛んでくる。腕から木の盾を発生させ、ガードする。しかし、そのうちいくつかは爆発した。衝撃で俺は吹き飛ばされる。

「トグロー！ このー！」

クシナは濃密な赤いチャクラを纏い、巨大な封印の鎖を自由に動かす。チヨの傀儡が3つかかり、封印される。しかしやつは肉を切らせて骨を断つつもりだったのかもしれない。残りの傀儡が一斉にクシナに襲いかかる。が、そこで九尾が来た。膨大なチャクラで傀儡の放ったクナイを弾き、傀儡自体も破壊する。

「あまり調子に乗るなよ。貴様ら」

九尾が来たことで傀儡達が戸惑うような仕草を見せる。

そして、俺も術の発動を認識する。

土遁、土砂崩し。

これで一気に距離は稼いだ。あいつらの避難完了まで、あとどれくらい粘ればいいのだろう。何時間戦った？ どれくらい木の葉方面に進んだ？ 援軍はいつ来る？

と、砂のおっさんが猛烈なスピードでこっちにやってくる。綱手の影分身は敗れたのか。クソッ。

おっさんに木遁の攻撃を放つ。巧く躲され、また打撃による破壊で突破される。

やばい！

「あたしもいるってばー！」

クシナが赤いチャクラを纏い、おっさんに突進する。スピードだけなら互角だろうか。チャクラは勝っているだろう。

打ち合いになる。クシナの攻撃は躲され、または巧く防御される。カウンターがクシナに決まる。クシナは血の出る鼻を押さえ、立ち上がる。

「くうっ。影分身の術ー！」

20体の分身が表れる。四方八方からおっさんに突進していく。

おっさんは巧く攻撃をいなし、一体一体着実に消していく。

しかし、動きの自由が限られている今がチャンスだ。

もう一度一尾のチャクラを吸収し、挿し木の術！

クシナの分身もろとも、木の槍がおっさんに迫る。

「ぎやあああー！」

「うわあー！」

「なに!?!」

おっさんは驚愕する。クシナの分身を貫いた槍が、九尾の力を吸って巨大化したからだ。

「ぐっ、風遁、砂嵐」

おっさんは風遁で竜巻のようなものを起こし、槍を飛ばしたりする。しかし勢いに乗った槍は完全には止まらない。やった！ 初めておっさんにダメージが入った！

「ちよっ、何やってるってば!」

クシナは怒ったが。分身のダメージの記憶は本体に戻るからな。いきなり串刺しの記憶がどっと押し寄せたら気持ち悪いだろう。

ん？ まずい！

「クシナ！ 余所見すんな!」

「えっ」

ガキの傀儡2体がクシナに襲いかかる。クシナは一方に気づいたがもう一方には気づかない。

「おい！ 左にも!」

まずい！ そう思ったとき、クシナと傀儡の間に黄色い何かが割って入った。

そいつは傀儡を弾き、クナイを構えて立つ。

「彼女はやらせない!」

ミナトだった。

紛争から戦争へ

「ミナト！」

「お待たせ。クシナ」

やっと援軍の到着。一人だが巨大な戦力。

「ミナト！ 他の援軍は何時くる！」

「綱手様なら、30分！ ってところかな！」

ミナトが傀儡と戦いながら言う。2体相手に優勢だ。やはり体術は一級品。

30分か。希望が沸いてきたぞ。それくらいなら工夫次第でチャクラも持つ。

と、逆に敵は焦ったか。様々な方向から全ての傀儡が突っ込んでくる。いくらか九尾の攻撃で破壊されたが、他は健在。ミナトでもあいつらの毒攻撃には対処できないだろう。

持ってくれ俺の意識。一尾の力を借りて、木遁、木龍。

地面から木の龍を出し、俺、クシナ、ミナトを持ち上げる。200mほどの高さまで。

「うわっ」

「ありがとう。だけど……」

クシナは尻餅をつき、ミナトは巧く足場に適應する。

傀儡達は、皆登ってくる。俺の樹海降臨と九尾の攻撃の影響で、傀儡者は500mも離れているにも関わらず、その影響をほとんど感じない。凄まじい使い手だ。攻撃手段がない？ 傀儡に一方的になぶられる？

いや、逆にチャンスだ。

「クシナ！ ミナトをあそこへぶん投げろ！ そこに傀儡の操縦者がいるぞー！」

俺は雑木林を指差して言う。傀儡の弱点は術者本人！ 俺は白眼で糸が見えるのだよ！ 上手く隠れているつもりかもしれないがね！

「えっ」

「そ、そうなのかい!？」

「早くしろ！ 気づいてあつちに逃げたぞ！ 傀儡が護衛に戻る前に！」

「う、うん。ミナト！」

クシナから、九尾のチャクラが凝縮されたチャクラの手がミナトに伸びる。ミナトがいそいそとそれに乗る。

「またちよつと動いたぞ！ あそこだ！」

「分かった、つてばね！」

「ぐっ」

クシナは気持ちいいくらい勢いよくぶん投げた。ミナトが超スピードで飛ばされていく。傀儡が間に入ろうとするが、間に合わない。

「調子に乗るなよ！」

と、いつの間にかおつさんが俺の横にいた。反応する前に顔面を蹴飛ばされる。

一発で意識が揺らぐ。俺は地面へ急降下する。

「トグロ！」

「バカが！」

クシナと九尾の声が聞こえる。

地面が恐ろしい速度で迫る。し、死にたくない。

土遁、硬化。

ギリギリ間に合い、地面と衝突。ぐおお、い、意識が。体が痺れていく。

「まだ生きているのか。しづとい」

「トグロから離れるつてば！」

「小娘は引っ込んでいろ！」

「ぐえっ！」

俺を助けに来たクシナが、蹴り一発で吹き飛ばされる。おつさんは手刀を作り、俺の首へ伸ばす。

「待て。死にたいか小僧？」

その時、九尾がぬうと顔を近づけた、口許に圧縮したチャクラの塊を浮かべている。俺を殺すなら諸ともという勢いだ。

おっさんは一瞬動きを止めたが、次にはにやりと口端を上げた。「化け狐が。わしに脅しなど通用しない。諸ともこやつを殺せばいいさ。できるのならな」

そして、再びおっさんの手が動き出す。

「ここまで、なのか……？ あとちよつとで、俺の理想郷が……」

「ま、待つんじやエビゾウ！」

ピクリ、おっさんの手が止まる。

「かふっ」

喉が潰された。ギリギリ首の骨は助かった。

チヨの声だった。

白眼の視界におばさんとガキが映る。二人ともミナトに後ろを取られ、首にクナイを当てられている。ガキの方にいるミナトは影分身だ。

「姉ちゃん」

おっさんが寂しそうに言う。このおっさんチヨの弟だったのか？

ダンゾウみたいな雰囲気のクセに。そういや名前も似ているな。

「捕虜の取引を希望する。この2人とその彼。そっちは砂の英雄含めて2対1なんだ。悪い話じゃないだろう？」

ミナトが珍しく強気な口調で言う。

「え、エビゾウ！ あたしやのことはいい！ サソリの命を！」

「姉ちゃん……」

「情けなんぞいらん。どつちに益があるかを判断すればいい。木の葉が約束を守るとは限らんがな」

「これ！ 黙つときい！ あんただけは生きられるようしちやるけん！」

どうもチヨはこのガキに執心らしい。孫かな？ そしてエビゾウはチヨに頭が上がらない雰囲気だ。取引成立だな。

ん？ あつ。このおっさん、密かに土遁で壺を作ってる。俺の持つてる一尾の壺と似せた柄の。密かに取り替える気かな？ 当然ミナトは気づいていると思うが。だって動きが怪しすぎるし、なんで壺が2つあるのって話になるじゃん。

「いいだろう。その取り引き受ける」

「賢明な判断に感謝する」

ミナト！ 騙されるな！ これは3対1の取り引きになっているぞ！ さすがに虫が良すぎる！ この悪魔のような連中に対して！
ちっ。ならば最後に嫌がらせしてやる。

捕虜の三人は縄でグルグル巻きにされた。500mほど離れ、俺とエビゾウ、ミナトと砂の二人が相對する。クシナと九尾に至っては付近の山の頂上まで離れている。距離は2キロくらいだろうか。

一步、二歩、三歩。ミナトとエビゾウは歩いていく。エビゾウは一尾の入った壺を持っている。

ダンツ。二人同時に瞬身の術を使い、ミナトは俺に、エビゾウはチヨに、文字通り一瞬で肉薄する。

「バカもんが！ サソリから先に解きんしゃい！」

チヨはまだ孫バカだった。と、ヤバイな。風影達がこつちに来てる。ダム of 修復をしていたが、終わったのだろうか。

綱手達もそろそろだと思いが、風影の方が早い。やはり嫌がらせは必要だったな。

意識など途切れてしまえばいい。一尾のチャクラを絞り尽くす勢いで、チャクラを吸い、木遁を練る。

木遁、餓者髑髏。

壺から木の巨人が飛び出す。同時に一尾も。

込められたチャクラが無くなるまで、自動で付近の人間に襲いかかる餓者髑髏。プラス人間にいいように扱われて怒り心頭の一尾だ。足止めくらいにはなるだろう。

「おのれ！ 卑劣な木の葉め！」

「何が無償の孤兒院か！ これだけの戦力を集めておきなごらー！」

チヨとエビゾウは愚痴を言いながら怪物と戦う。ざまあ見やがれ。

「何を……。くっ」

ミナトは俺を連れて山へ逃げる。そこで俺の意識は途絶えた。

深く、長い眠りだった。疲労、怒り、悲しみ。過剰なこれらを癒す

には時間が必要だった。

「うっ」

「起きましたか」

初の声が聞こえた。周囲は真っ暗。夜か？

「どれくらい寝ていた？」

「15時間と少し。今は午前3時です」

午前3時か。肝心な戦闘は終わってしまったな。情けない。砂の難民は逃げ切れたのだろうか？ 第二ダムはどうなった？

「そうか。あれからどうなった？」

「私も、私がいたところしか分かりませんが」

初は語り始める。

彼女達は中忍試験中に、カツユを通して砂の侵攻を知った。綱手はすぐさま初達の試験棄権を宣言し、その場で同志を募る。三代目火影は「きちんと部隊を整えるべきだ」と反論したが、綱手も「それでは遅い！ やつらは一般市民を虐殺している！」などと応酬する。情に脆い三代目火影は渋々承諾する。ただし少数精鋭。綱手と月、長袖、初はもちろん、他に、クシナに会いたくてたまらない波風ミナト。久しぶりに綱手に会えてセクハラばかりしていた自来也（殴られて気絶していたので後から来た）。勝手に飛び出したうちはミグシ。妹の恋を応援したいうちはミコト。ミコトが心配なうちはフガク。確認したいことがあるという日向ヒザシ。他、砂が憎くて仕方ない中忍10数名。

優秀な忍びが本気で走れば1時間少しの距離だが、消耗しきった状態で援軍に来ては死ぬだけ。怪物であるミナトを除き、移動速度は抑えられた（ミナトも彼にとっては抑えていたが）。

初が戦場に着いたのは約2時間半後。何百人ものクシナの影分身が歩けない難民を運び、同じくらい多くの影分身が砂の忍びと戦い、侵攻を食い止めていた。が、最も目立っていたのは、巨体と圧倒的破壊力を持つ九尾だ。一尾、木遁の骸骨、巨大な山椒魚も目立っていた。一尾は初めから弱っていたが。骸骨と山椒魚の戦いは激しかった。

うちはミグシ、その他中忍は、戦闘のあまりの激しさに怖じ気づい

てしまった。覚悟ができていなかった。初自身もレベルの違いをひしひしと感じ、私程度に何ができる、と絶望しかけた。

そんな頃、クシナの影分身の一人が初のもとにやってきた。彼女は気絶した俺を抱えていた。

「こいつを頼むってばね！」

「えっ」

「迷ってる暇はないってば！ 第二ダムに連れていくってば！」

そう言っただけクシナは初に俺を渡した。彼女はすぐさま戦場に戻っていった。

「わ、私なんか！ うわっ」

「死ねえ！」

俺を殺そうと砂の忍達が凄まじい勢いでかかってきた。一人だけならこの時点でやられていたかもしれない。

「ご主人様はやらせない！」

しかしそこで、恐ろしい目をした月が出てきた。彼女は元々初より強く、差も開くばかりだったが、この時の動きには信じられないものがあった。苛烈、果敢、暴力的、しかし無駄のない動き、で容赦なく敵を殺していった。怖くもあり、美しくもあった。

「私より、月の方が」

初は月に俺を任せようとした。しかし月の返答は蹴りだった。一瞬遅れてそこに起爆札付きクナイが飛来し、爆発した。

「あなたも足の速さは私とほぼ同じ。だったらこれが一番効率がいい」

「えっ。だけど」

「狼狽えるな！ お前が一番鼻肩されてるんだろが！ 死んでも守ると言え！」

初めて、月の怒鳴り声を聞いた。普段のおだやかな雰囲気とはかけ離れた凄まじい剣幕だった。

これが他人だったらむしろ萎縮してしまっただけかもしれない。しかし、怒鳴った彼女は目を潤ませていた。その表情を見て初の中で何かが変わった。吹っ切れたような気分になった。

「援護を頼みます」

「言われずとも！」

そうして二人は駆け出した。長袖はうちはミグシの方に付き合っていたので来なかった。

「絶対にやつを逃がすな！ 見つけ次第殺せ！」

「仲間の仇だ！ あいつだけは許さん！」

敵の大半は木の葉の精鋭部隊との戦闘に入ったが、初の方にも20人程度やってきた。その多くは青年団であり、負傷が多いのも特徴だった。

月と初は隠れながら移動した。時には霧隠れ、変化させた分身、氷に映る自分の姿、などで敵を惑わせた。相手が劣ると見ると躊躇なく殺した。

「いたぞ！ こっちだ！」

「くっ」

「当たるかよ！」

しかし、ある時実力の拮抗した相手に見つかってしまった。戦闘が長引き、応援がやってくる。

このままではマズい。徐々に囲まれていく。徐々に傷が増えていく。

「かはっ」

「月！」

月が毒を食らっていたようで、吐血する。大地の実を吞んで無理矢理体を動かす。

「霧隠れの術！」

「風遁、カマイタチ」

「あっ」

咄嗟に張った霧も風で簡単に離散させられてしまう。

「終わりだ。偽善のペテン師め」

止めとばかりに砂の塊がやってくる。

月が雄叫びを上げ、砂に突っ込んでいく。

「あゝ ああああああー！」

「何!?!」

骨で砂の壁を破壊、次々に破壊。そして突進していく。

「ぐっ」

骨は青年団のボスに届いた。しかし直後、砂の礫が四方から月を襲った。

「回天!」

としかし、そこで木の葉の忍びが現れた。

「貴様!」

「なっ! その眼は日向か!」

試験会場で「確認したいことがある」と言っついてついでにきた日向ヒザシだった。

「行け! ここは私が預かる!」

「えっ!?! でもこの人数!?!」

「舐めんじゃねえぞポケがあ!」

ヒザシの言葉に触発され、砂の忍が次々と襲いかかる。しかしヒザシは、優雅な独特の動きで躲し、いなす。一連の動きの中で攻撃も加えていく。

結果、5人から攻撃されたにも関わらず、無傷。

「すごい……!」

啞然とする初と月。

「ふっ、覚えておけ。日向は木の葉にて最強!」

「えっ」

「日向は木の葉にて最強!」

なぜか二回言ったヒザシ。表情はとてもイキイキしていた。

「戦場でポケてんじゃねえぞオラあああ!」

「八卦空掌!」

「ぐわっ」

「早く行け! 娘よ!」

「は、はい!」

「ふっ。理想に殉じる日向というのも、悪くない」

なお、ヒザシは行けと言ったが、ヒザシもふつうに初と月について

きた。

当然である。敵の狙いはヒザシではなく、俺なのだから。「私が相手だ！」と言つて待つていても向かつてこない。

それに気づいたヒザシは、月や初と走りながら、敵を煽った。「日向は木の葉にて最強!」「無駄だ!　これが才能の違いというもの!」「砂は強欲すぎる!　自分を抑えることを知らぬ野蛮な人種である!」などと。

しかしヒザシも人間だ。遠距離攻撃により徐々に体力を奪われる。相手が有利になつていく。

今度こそこれまでか。

そう思つたとき、空から大量の起爆粘土と起爆札が飛来してきた。それらは砂と初達を分断するように落ちた。

「なっさけえねえなあおい!　偉そうに言つといてその様かよ!　殺す価値もねえ!」

「砂は引きなさい!　こんな戦いで無駄に命を失つてはならない!」

「お、お姉ちゃん!」

「ほよよー。皆ボロ雑巾みたいだね」

援軍だつた。ボツチの泥人形と小南の紙に乗つて、集落の戦闘員が大勢やつてきた。

「皆!　それにボツチさん!　小南さん!　どうして!」

「私達は戦争の犠牲者を救う活動をしている。今回はあなた達が難民となり、私達の守る対象に入ったということ」

「あたいはバカが死にかけて聞いて獲物を横取りされないよう見張りに来たんだよ!」

「僕達は戦える人を募つてこつちに来ていたのですが、途中で彼女達に見つかつて乗せてもらいました」

「やはり日向の勝利は揺るがぬか。此度の戦、我々の勝ちだ」

皆が俺と初を守るように展開する。人数比が初めて覆つた。その上、新しく来たメンバーのほとんどが元気いっぱい。砂は誰もが疲労困憊。

敵に焦りや絶望の表情が浮かぶ。

「舐めるな！ この程度で我々の、仲間達の遺志を砕けはしない！」
しかし、扇を持った青年団の女は闘志を失っていないかった。

「愚かな……」

「戦いは何も産み出さない！ あなたはまだ悲劇を広めるつもり!?」

ヒザシ、小南が発言する。戦闘に備えて皆が構える。

「カルラ。いい。止めだ」

としかし、そこで青年団のトップがやってきた。木の枝を杖がわりにして、明らかに弱っていた。

「で、でもー」

「ここで戦えば俺達は壊滅する。俺達の意志を受け継ぐものが誰もいなくなるということ。それだけは避けなければならぬ」

「だけど！ 死んでいった仲間が！」

「退けと言っているんだ！ 聞こえないのか！」

青年団のボスは、足を引きずる男とは思えない勢いで凄んだ。敵が
一気に静かになる。どころか、初も小南も吞まれかけた。

「賢明だな」

「ほよよー。声のでつけー兄ちゃん」

いつも通りだったのは、アラレとヒザシくらいか。

そうして青年団との戦いは終わった。俺達の多くはボツチの泥人形に連れられて第二ダムへ向かった。小南とヒザシ、それからアラレと釜倉は砂と木の葉の主戦上へ飛んだ。

綱手達が砂の難民を救うために戦っていた。この頃には、自来也と彼の口寄せした巨大な蝦蟇、それに意外や意外で、大蛇丸と彼の口寄せした蛇もいた。きつと裏があるが、木の葉の三忍が久しぶりに集ったのである。

逆に、クシナがダウンして大量の影分身は消えていた。木遁の罽覬と一尾も完全に停止。九尾にも疲れが見えた。

また、弥彦率いる暁が、難民を逃がすために木の葉側で参戦していた。主に活躍したのは長門である。

砂は暁の意外な力に驚異を覚え、戦闘中に無駄に木の葉以外の人間を殺すことを禁じる。そのしばらく後、岩隠れが雨隠れに侵攻したと

いう知らせが入る。半蔵は顔を青くして部下に撤退を命じた。

これが契機となった。砂は暁が用意した木の葉との対話のテーブルに応じた。一時休戦。ここに仮初めの平和が訪れた。条約など守る気はなく、定期的に襲撃が繰り返されているが。

嵐の後に

白眼で見てもみれば、目の前の天井は知っているものだった。第二ダム近辺に建設中の要塞（俺の家）の医務室だ。ベッドは負傷者で満杯。俺でさえ床行きだったのだから、それだけ重傷者が多かったということだろう。しかし、見る限りでは、戦場で撤退した者は皆生きている。ミゾレも、月も。おっ、クシナもベッドで寝ているな。ミナトについていくかもしれないと思ったが、心は俺の元にあつたか。順調だな。「あつ」

おっと、声が出てしまった。だが驚くのも仕方あるまい。九尾がデカイ図体のまま、庭で寝てるんだから。尻尾を枕にして気持ち良さそう。

気持ち良さそうと言えば、シズネもだな。看病していたのか、月のベッドに上半身だけうつ伏せになって寝ている。まあ、解毒とかをやったのは綱手の影分身だと思うが。

「そう言えば綱手さんは？」

「綱手さんは、木の葉です。砂の難民の対応をするために。それに、この取り扱いについても火影達と協議を。難民も集落も全て上手くいくよう取り計らうから、騒動などは起こさないで欲しいそうです」
「そうか。苦勞をかけるな」

本当にあの人がいて助かったな。有事には俺ができないことをいくつもやってくれる。普段も、なんだかんだ子どもの面倒を見るし、医療ができるし、修行をつけてくれるしな。感謝だ。俺が貯めた金は当然のように全額使うがな。

しかし、難民か。ここにどれだけ入るかな？

ここは第一ダムの南東に当たる盆地だ。俺達が緑化した中流下流の影響を受けて、少しずつ雨が降り始めていた。が、まだダムに水はそれほど貯まっていない。砂のあの連中の伝統を考えると、せっかく緑化した自然もすぐになくなるだろうから、ここから状況がよくなることはないだろう。今いる800人だったら、まあなんとかなるが。雪一族でも温度差を利用して水を作ることはできるしな。

だが、砂の難民を受け入れるのは、どうだろうな。俺が木遁でせつせと食糧を作れば賄えると思うが、それでは完全に俺に依存することになる。健全ではない。いや、緊急事態だと考えれば、それでもやった方がいいかもしれないが。

しかし、食糧以上に砂の侵攻が心配だな。ここも壊滅となったら目も当てられない。木の葉に泣き寝入りして命だけ救ってもらって、俺は奴隷コースだろうか。いや、あれだけ木遁を使ったのだ。既に俺のことはバレただろう。日向の呪印による奴隷コースは免れないかもしれない。

だが、日向ヒザシが俺を逃がすのに協力したというのが気になる。彼も今は日向の分家として生きているから、俺に同情したのだろうか？ そうだとしたら、彼を頼ることはできるかもしれないな。闇の中に薄明かりありか？

「俺の今後については、何か聞いているか？」

「ええ。木の葉の要求としては、難民を受け入れる代わりに、砂との戦争に全面的に協力しろとのこと。私たちも、戦える者はもちろん、戦えない者も後方支援などを積極的に」

「まあ、そう来るだろうな。あいつらなら。そして、従ったからと言って難民の面倒を見るとは限らない」

「私もそう思います。特に大蛇丸とダンゾウが子どもを受け入れについて怪しい動きを見せているようです。綱手さんが言っていました」

「人体実験だろうな。俺も大蛇丸にやられかけたことがある」

「えっ！ 本当ですか！」

ダン、と初が立ち上がった。順調にメイド化しているな。今は夜で皆寝ているから、騒がないで欲しいが。

「あまり大きい声を出すのはな」

「す、すみません」

「いや、いい。それと話の続きだが、俺は日向だったから大丈夫だったんだ。木の葉の日向は、白眼を血族で保存することに躍起になっていて、里の人間だろうとそこに踏み込むことは許さない。ダンゾウも大蛇丸も彼等を敵に回すことを恐れた。だから俺は助かったんだ。今

は当主が変わったから、どうなるか分からないがな」

「なるほど。そんな事情があったのですね」

「そう言えば、戦争は休戦状態と聞く。俺達がいっ木の葉側で参戦するとか、そういう話はあったか？」

「いえ、私のレベルでは、そういう話は聞かせてくれません。明日の昼前に、木の葉から使者がくるそうです」

「そうか。その時に難民の話ができたらいいな」

俺は再び眠気に誘われた。初の頭をゆっくり撫でてから再び横になつた。

翌日、医務室で目覚める。まずは人数の確認から始めた。親衛隊25人、警備隊15人。もう一度数える。親衛隊25人、警備隊15。もう一度。もう一度。しかし人数は変わらない。

「すまない。皆……」

戦争は残酷だ。悲劇しか生まない。起こしてはならない。分かっていたが、泣けた。

「あああああー！ うわあああー！」

「いやだあああ！ ゆりちゃんんん！」

「サツキお姉ちゃんのバガア！ また会えるっでいっだのにい！」

「めええええええい！」

皆も悲しいようだ。特に小さい子が盛大に泣いている。

親衛隊、警備隊の子も目が赤いけど、賢い子が多いから、大人の真似をしてじっと耐えてるな。

「うおっ。うおっ。おっおっ」

お？ かと思えば、14歳のダイナ・イシが泣いている。今回の戦いでは、親衛隊の五番隊長任せた。それも、忍術の才能はなく、厳しい修行により伸ばした体術だけで上り詰めた気の強い子だ。だが、やはり辛い。

俺はそつと彼女に近づき、ティツシュを手渡す。

「あ、ありがびっ。んっ、ングシユウウ」

盛大に鼻をかむイシ。しかし終わると、また泣き始める。

「う、うおおおっ！ うおおおっ！」

普段我慢強い分、失敗に対する悲しみが大きいのだろうか。逆に、失敗に対する恐れが大きいから、我慢強くなれたのかな？ 俺もつられて泣きそうだ。

「すびばせん！ 師匠、すびばせん！」

あつ、うん。なんだか、師匠呼びが間抜けで笑えてしまう。すまないなこんな時に。

「どうした？ お前のせいで負けたと思っているのか？」

「いや！ ちがつ！ 私がつと、上手くやれていたらとは思いますが！ でも、実はそうじゃなくて！」

「そうじゃない？ いや、別に責める気はないが」

「違う！ わ、私は！ 愚かすぎる！ 殴ってください！ 皆が仲間のことで泣いているのに！ 私は自分のことで泣いてしまってます！」

「え？」

いや、俺の目にはそうは見えないが。

足のことを言ってるんだろうか？ 彼女は先の戦闘中に足に毒クナイを受けた。混戦中であり、治療を受けられる状態ではなかったのだ、咄嗟に膝から下を切り落とした。

「あれか？ せっかく努力して強くなったのに、足を失って無駄になったと思ってるのか？」

「は、ばひひひひ！ 自分のことばかり心配してる！ がらだをぎだえで調子に乗って、ごごろはぐさつでだんでずううう！」

「いや、そんなことはないと思うが。それに、足を失うのは悲しいことだろう。泣けばいいさ」

「じ、じじょうううう！」

イシはめちやくちやに泣いて、俺の膝に抱きついてきた。俺のズボンが涙と鼻水でどんどん濡れていく。ちよつと汚いな。美少女だから許すが。

と、今すごいチャクラの揺れを感じたな。これは月のチャクラだ。どうかしたのか？

月は、呆然としたような表情でこちらを向いていた。毒の影響か、顔に大きな斑点がいくつもある。酷いな。

それに、分かったぞ。何故彼女が今、追い詰められたような表情をしているかが。

目の焦点が合っていない。俺は白眼だからそういうところまで見えてしまう。

「ちよつと失礼」

「ご、ごべんなざいいいいい！」

イシに離れてもらい、月のもとへ歩く。

月はこちらを見たまま反応しない。いや、見ているようで見えていないだろう。視力を失ってしまったのだから。

「月」

「あつ」

俺が声をかけると、月は慌てたようにベッドに横になる。そのままふとんにくるまった。

「どうした？」

言つてすぐ、しまったと思つた。この質問は残酷だな。もつと気のきいた言葉はなかつたものか。

「い、いえ。寝起きの顔をご主人様にお見せするのは、恥ずかしくつて」

「そうか。悪かつたな」

「い、いえ！ 私が悪いです！」

うむ。またこの反応か。しかしこの子は、本当に自己犠牲を知っているいい子ばかりだな。逆に心配になるほどだ。俺の教育が良かったか。

どう言葉をかけるべきか。

あれこれ考えながら、ふとんの盛り上がった部分じつと見つめる。不意に、もぞもぞと動いた。かわいい。

もう、あれだな。湿っぽいのは嫌いだし、ぱあーつと行きたいな。

「イエーイー！」

俺はベッドにダイブする。

「きゃあー！」

かわいい声を出す月。俺から逃れるように激しく動く。

俺はそんな月をふとんごと持ち上げ、抱きしめる。

「ああっ！… ぐっつ、ぐっ主人様！… 何をー！」

「お姫様ごっつこだ！… ははは！」

「えっ」

俺は月を抱えたまま走り出す。ただし床はまだ寝ているな人間が
いっぱいいるから天井を走る。チャクラコントロールの基本だな。

「あつ！… 空海さん！… 月さんはまだ安静に！」

おっと、シズネに怒られてしまった。要塞のてっぺんまで行って二
人で風に当たるつもりだったが、庭で我慢しとくか。

俺は要塞を出て、庭の大きな石に腰かける。月をふとんから解放
し、隣に座らせる。

「うっ、あつ」

前のめりのなって転びそうになった月。目が見えていればこんな
不自由はしないだろう。俺は彼女を支え、上体を起こす。

「す、すみません。まだ体調が優れなくて」

ふふっ、どうやら目が見えないことを隠したいようだな。どうし
たっていずれバレてしまうのに。捨てられたくないと思っっているの
かな？

「はあ、はあ、はあ。ごほっ、ごほっ」

おっと、しかし体調が悪いのは事実だろう。とりあえず大地の実を
食わせて、会話も早めに終わらせよう。

石から降り、庭に手を着く。

「ぬっ、ぬうんっ」

この辺は木が少ないから、けっこう俺のチャクラが必要だったな。
まあもうできたが。

「月、大地の実だ。食べ」

「あつ、はい。ありがとうございます」

「あつ。でも毒と薬の兼ね合いで食べない方がよかつたり」

渡してから気づいたが、月は構わず食べてしまっていた。まあ、あ

れは栄養というよりチャクラだし、科学的にダメという可能性は低いだろう。

「ありがとうございます。元気が出ました」

「今日初めて明るい顔になった。よかった。」

「そうか。よかったよ」

「さて、男を見せてやらないとな。」

「月よ。俺はお前達に、人を見かけで判断するなと言ったな」

「は、はい」

「俺は、はつきり言っただけ美女が好きだ」

「はい」

「メイドが好きだ」

「はい」

「だがな。もっと好きなのは心の美しさなんだよ」

「えっ」

「ん？　そこ『えっ』か？　確かに美少女に対する拘りは強いが。」

「い、いえ。はい」

「有能な人間なんて別に好きじゃない。使えるだけのムカつく女がいたとしたら、利用するだけ利用してポイだ。だが、ここにいる子達は見捨てない」

「あつ……」

「なんとなく言いたいことは伝わったかな？」

「まあ女の場合、ムカついても飽きなかったら捨てないけどな。」

「お前は俺の何を見てきた？　俺が利用価値で難民を仕分けたことがあつたか？」

「えっ……。いえ！　いえ！　はい！　はい！　ご主人様は、他の支配者とは違った！　きちんと、ご自身の好みの方を選ばれておりました！」

「よし。いい感じに理解してくれたな。声も元気になった。」

「ただ、月よ。その言い方だと、女ばかり舐んんでいたように聞こえてしまうぞ？」

「実際してただけ。」

「そういうことだ。月よ！心を磨け！あと、お前は美少女だから心配するな！既に俺の頭の中では嫁になっている！」

「えっ………。あつ、はっ、はい！ありがとうございます！ふっつかものですが、よろしくお願いいたします！」

月は顔を真っ赤にし、口許をにやけさせた。さらに、石の上で正座になる。

そこで丁寧に身を縮め、額を地面に着ける。両手は頭の前。嫁入りというより、奉公娘だな。かわいいからなんでもいいけど。

俺は月の腰に手を回す。

「あつ」

また赤くなる月。俺は彼女をゆっくりこちらに寄せ、再び抱き締める。

いくらそうしていただろうか。

月は小動物のように俺に身を寄せていたが、不意に顔を上げた。

目をつぶってじっとしている。顔は赤くなっていく。

これは、あれの雰囲気だな。

そう思ったとき、月の唇がフツと突き出た。

では遠慮なく、いただきましょう。

ちゅーっ。

おおーっ。柔らかくて気持ちいい。大和撫子最高や！

「何やってるの？あなた。こんな朝っぱらから。この大事な時に」

「えっ」

と、何故か不意に小南の声が聞こえた。

唇を離し、門の方を見る。

「分かっているのあなた？今、あなたの国の人が大変なことになっているのよ！」

小南は九尾の手前にいた。氷のような目で俺を睨んでいる。彼女の隣に飛んでいるいくつもの紙飛行機が、救援物資のようなものをぶら下げている。ありがたいことだ。

「ふむ。そうだったな。そして小南。お前がここに来たということとは、暁も何か協力してくれるということか？」

「そのつもりだったけど、嫌になってきたわ。こっちは徹夜で働いてるのに、あんなの見せられちゃあね」

確かに。目の下に大きな隈がある。ひどいことをしたな。

「それはすまなかつたな。謝ろう。ついでに大地の実をあげよう。チャクラ回復、体力回復、病氣撃退の万能薬だ」

「いらないわよ。それよりさっさと話を済ませるわよ。の前に、この食べ物と医療品を早くそっちの子に回して」

小南は紙飛行機を俺に寄せる。

「うむ、いいだろう。お前達！ 出てこい！」

「ええーっ！ なんで分かったってばね！」

いや、お前には気づかなかつた。九尾の上にいたからな。膨大なチャクラに隠れて見えなかつた。

「ご、ご主人様！ お幸せに！」

「お、お姉ちゃん！ おめでどう！」

「つつちゃん！ あたしもつつちゃんと結婚する！」

「アラレは女だろ」

ゾロゾロと出てくる親衛隊達。まああんだけ派手に漢を見せたらな。

親衛隊に物資を渡し、それぞれ要塞と付近の仮設住宅に運ばせる。作業の途中で、本題へ。

「話つてのは、難民のことか？」

「ええそうよ。あなたはどうするつもり？」

「木の葉よりはここがいいような気がする。が、難しいんだよな。衣食住の問題と、安全かつて問題がある」

「先に言っておくけど、私たちが受け入れられる孤児は50人がいいところよ。働ける大人だったとしてもそこに30人が加わるくらい」

おっと、これはどういう風の吹き回しだ？

「お前達、そんなお人好しなことやってくれるの？」

言いながら気づいた。そう言えば戦争被害者を救ってたんだつたな。立派なやつらだ。

「はあ？ 何言ってるのよ！ 私たちの組織は世界平和を目指してるのよ！ その一貫で孤児や戦争被害者を救う活動をしてるって言ったじゃない！」

「ああ、言ったな。言った。悪いな。正直お前達のことを舐めてたよ」「はつきり言ってくれるわね」

「あつ！ ついでに頼んでもいいか!?!」「ついで?！」

「いやさ。実は俺、波の国に仲のいいやつが何人かいてさ。そいつ等、けっこう土地も持ってんだよ。難民受け入れてくれるよう頼んでくれないか？ お前のその紙飛行機で」

「紙飛行機?！」

「ダメか？ なんなら釜倉って美少年を一週間くらい連れ回してもいいぞ」

「釜倉? ……って、だから言ってるじゃない！ そういうことなら協力するって！ ダメなはずないでしょう！」

おお。これもいいのか。全くすばらしいな。

不機嫌そうに言うから断られると思っちゃったじゃないか。

「すばらしい！ お前はまったくもってすばらしい！ 顔もいいしな！ 今度何かあったら言ってくれ！ 全力で応援しよう！ ところで長門と弥彦は?！」

「彼等は他の暁のメンバーと共に木の葉の難民キャンプにいるわ。あなたに会うのはまだ抵抗があるみたい」

「逆に言えば、小南は抵抗がないのか！ いいじゃないか！ お前は真実に気づいたんだな！ 本当に美しいのは顔ではなく心だと言うことに！」

「もうふざけるのはやめて！ 私は仕事で来ただけよ！ 冗談が言いたいだけなら帰るわ！」

「いや待て、俺が感動したのは本当だ」

「ああつ！ もうっ！」

小南はプンスカ怒って飛び立った。しかし相当眠かったらしく、途中で落ちていった。

「あら？ いいベッドがあるじゃない」
徹夜でボケていたのだろう。小南は九尾の耳をふとん代わりにして寝てしまった。

綱手の権威

自来也、大蛇丸、日向ヒザシ、波風ミナト等と共に砂の侵攻を防いだ綱手。砂との休戦条約には火の葉の代表として参加した。その足で、木の葉の重傷者を治療してから、再び木の葉に戻った。ダンゾウと大蛇丸の動きが怪しい。自身の師にして最も信頼し木の葉で最も優秀な忍び、三代目火影である猿飛ヒルゼンに集落の人間の権利を保証してもらう必要があった。

幸い、綱手は木の葉で最も地位の高い千手一族の出であり、木の葉創設者にして初代火影である千手柱間の血も継いでいる。彼女が「通せ」とだけ言えば真つ直ぐ火影の下へ行けた。

ヒルゼンは砂の侵略軍を打倒するための部隊を編成中だった。一応休戦条約は結んだものの、彼らが川の国との国境を破って拡張政策に出たため、対応しないわけにはいかない。このまま黙っていれば大人しくなるような連中ではないことは、少なくともこの場にいる全員が分かっていた。綱手も、戦中はその考えだった。ここ数年、若いトグロが次々と砂の支持者を集める様を見て、もしかしたら彼なら、と少し希望を抱いていたが。しかし結局は侵略という形で裏切られたのである。もはや仏の心は消え去った。

しかし、守るべきは守らねばならぬ。「綱手か。よくぞ無事帰ってきた。休戦までの手腕も見事であったと聞いている」

ヒルゼンは血液恐怖症を患った綱手のことが心配でならなかった。会議中の乱入も中忍試験の無礼も数々の命令無視も全て置いておき、まずは弟子の無事を喜びたかった。

「ヒルゼンよ！今はそのような場ではない！部外者には出てもらい、砂を打ち払う部隊の編成を急ぐのだ！」

対して、露骨に嫌悪感を見せたのはダンゾウだ。彼は珍しく積極的に、自らが司令官になると名乗り出ていた。大戦後初めの大きな武力衝突であり、この戦いで力を見せつけることが、その後の国際関係における木の葉の立場を高めることになる。自身の優秀さを信じてい

るからこそ重大な戦いを牽引したかった。それが1つの理由である。しかし、別の理由もある。今回の戦いで、綱手のもとに九尾と人柱力と木遁使いが揃っていることが分かった。しかも、決して彼やヒルゼンに従わなかった九尾が綱手側に協力的だった。これは、失った戦力を木の葉に取り戻すチャンスである。自身が彼等を部下に置き、効果的に使って戦果をあげれば、今後も彼等を駒にできる可能性がある。そうすれば、三代目火影にも匹敵するほどの戦力を自身に集めることになり、発言力も増す。自身が木の葉を豊かで強い里へ導くことも可能となる。それが2つ目の理由。

また、綱手のもとには孤児が多かった。新術、新薬の開発には人体実験が効果的である。その時にいろいろ面倒事の少ない孤児は都合がいい。彼等を引き抜きたい。これが3つ目の理由だ。

特に2つ目3つ目の理由で、ここに綱手が来るのはまずかった。咄嗟に出ていかせるよう進言したが、効果があるとは思っていない。「何を言うか。綱手こそ今回の騒動に最も深く関わっておる人物ではないか」

ヒルゼンが驚いたように言う。上役のホムラ、コハルもその言葉を否定しない。綱手は当然といった風にヒルゼンの隣に座った。

「綱手よ。お主の口からこのあらましを教えてくれ。この4年、里に顔を出さなくなってお主が何をしておったかについても」

「いいだろう。まあ、重要なのはここ1年ぐらいだが。戦争の途上で血液恐怖症になった私は、隠居するつもりで孤児院を経営することにした。ここまでは言っただろうか？」

「うむ。その歳で隠居とは驚いたがの」

「千手の姫とは言え、あまり好き勝手されては困るぞ」

「3年彼らの面倒を見て、戦争が終わった。そうすると私の孤児院に協力したいというものが現れた。それが、ダンゾウ先生も会っただろう、豪たちだ」

綱手はあえて、トグロが中心人物だということを隠した。自分が真に代表であると思われるためだ。そうすれば、責任を持つことができる。多くの戦闘員やクシナを自分の下に置ける。ダンゾウもそう

やって拾った孤児を自分の手下にしてきたのだから、文句は言えないはずだ。

それをこの場にいる皆に信じさせるのは簡単だった。綱手が10そこらの中忍の下に着くとは思えないからだ。特別な演技は必要なかった。

「孤児院が大きくなっていくに連れ、私が動かせる力も大きくなった。そこでダムを作ることにした。川の国の水を治めれば、より多くの戦争被害者を救うことができるようになる。また、慢性的な水不足に悩む砂に水を供給すれば、友好的な関係を築くことができるようになるかもしれない。そう思った」

「ふんっ、愚か者め！ やつらは戦いしか知らぬ野蛮人だぞ！ そのような思考を理解するはずがない！ 感謝どころか好機と見て喉笛に噛みついてくるわ！」

戦うしかないと煽るようなダンゾウの発言。ヒルゼンは民族浄化の考えを好かない。しかし現実には、平和活動しているだけの弟子が襲われたので、反論する元気がわかない。

「1500人。砂から川へ受け入れた難民の数だ。彼らは我々にとっても友好的だった。たった1年でこれだけの人を変えられた。しかし、砂はそんな彼等を裏切り者と見なした。まともな戦闘員のいない彼らの居住区に、一尾を放つという暴挙がその答えだった。皆殺しのつもりだったのだろうか」

「ふん。しかし、そんな野蛮な砂に富を与え、ダムを奪われたのはお前だぞ。この責任どうとるつもりだ？」

ダンゾウは、以前自らに従わなかったことへの皮肉を込めた。

綱手は眉間を寄せ、拳を握りしめる。

「よい。ダンゾウ。綱手は綱手なりに戦っておったのだ。力によって彼等と反発するだけの我々とは、また違う方法での」

「甘いぞヒルゼン！ 何が戦いか！ 結果だけを見ろ！ 敵に塩を送っただけではないか！」

「そうは思わん。砂だけで1500もの人々が綱手の賛同者となったそうではないか」

「砂漠でまともに働けなかった愚民が増えたところで何になる！ 足を引つ張られるだけ損だ！」

「何をー」

難民を保護してもらおうつもり綱手には、この発言は痛かった。しかしまともな反論は浮かばない。大なり小なり難民が負担となるのは事実だからだ。トグロがあんなに上手くやれたのは、彼の木遁による食住の補給と、彼の周囲に他人を安心させられるおだやかな人間が集まっていたことが大きい。

「落ち着け綱手。そしてダンゾウよ。もう少し柔軟に物事を考えよ」

「何が柔軟か！ 戦乱の世に甘い考えは通用せんのだ！ 殺られる前に殺らなければー」

「それでは、いつまで経っても戦いが終わらぬ」

「終わるとも！ 敵が抵抗しなくなるまで痛い目にあわせればいいだけのこと！ 猛獣とはそうやってしつけるのだ！」

「それはどうかの？ わしは聞いておるぞ、今回は九尾が我々の側で積極的に戦ったと」

「ぐっ」

ダンゾウとしては、嫌なタイミングで痛いところを突かれてしまった。彼が最も欲しい戦力について、会話の主導権をヒルゼンに握られてしまった。

「初代様、そして初代様の奥方であらせられるミト様。二人の偉人が亡くなって以来、我々は九尾を制御することができなんだ。しかし、この綱手はあっさりやってのけたようだぞ。行方を眩ませていた人柱力、そして死んだはずの木遁使いまで味方につけてな」

「そっ、その木遁使いは問題だぞ！」

「どうやら九尾は無理そうだ。ダンゾウは木遁使いに狙いを変えることにした。」

「そもそも、九尾と人柱力を逃がしたのは木遁使いだ！ そして木遁使いを木の葉に連れ来たのは、綱手！ 貴様ではないか！ よもやこうなることも狙って」

「ダンゾウよ！ その先を述べることはいくらお前でも許さん！ わ

しはそのような不肖の弟子を持った覚えはないぞ！」

「ダンゾウよ。もう少し考えて発言してくれ。千手の実質的な当主である綱手にそのような噂が流れれば、それだけで里の内情が揺れる。対外的な沽券にも関わる」

「ぐつ、ぐぬう」

一斉に非難されたことで、ダンゾウも失敗を悟る。やはり里の精神的支柱である千手には触れない方がよかったか。

「ともかく、その綱手は木遁使いを制御できなんだ！ やつは九尾を逃がした！ その九尾の搜索で、日向の当主まで亡くなったのだぞ！ 実質その木遁使いが殺したに同じ！ これをなんの咎めもなく放置すれば、それこそ里の沽券にかかわる！ 無法者が野放し状態となろう！」

ダンゾウは『殺したにも同じ』と言ったように、あのとときの真実を知っているわけではなかった。自来也は死亡したトグロと日向当主の名誉を考え、二人とも九尾との戦いで戦死したと報告していたからだ。ミナトと犬塚家の上忍も自来也に倣った。

ただ、日向当主の息子である日向ヒアシとヒザシ、それに木の葉にトグロを連れていった張本人である綱手には、真実を話した。トグロが九尾と共謀して日向当主を殺し、「心の自由は縛れない」と言って自殺したと。

いや、自来也はそれが真実だと思っていたが、実際はトグロは生きていたわけだが。

さて、真実を知っている綱手である。せつかく、殺したも同じ、と譲歩したような言い方をしてくれているのだから、攻めようはある。もつとも、里抜け自体が処刑もありえる罪であり、加えて九尾と人柱力を逃がしてしまったから、さすがに庇い切ることができないが。

「なるほど。あいつが暴走した責任は私にもあるだろう。しかし、九尾と人柱力をあいつに任ようと進言したのはダンゾウ先生だ。そのダンゾウ先生にあいつを任せる理由もない」

「何!?! このわしでは不十分だ?!?」

「そう言っている。お前とあいつの性格では合わない。私に任せても

「らえれば、二度とあのようなことは起こさない」

「口では何とでも言える！ それにだ！ 九尾と木遁使い、これほどの戦力を録に働かぬお前に任せる余裕は、今の木の葉にない！ そうだろうヒルゼンよ！」

「うむ。まあ、さすがにおとがめなしとはいかん。綱手よ、何か意見はあるか？」

「私の下を離れるというのであれば、次の正当な管理者は日向では？」

「何だと!? あんな若造には無理だ！」

「その話、詳しく聞かせていただきたい」

会議に再び乱入者があつた。さらさらの黒髪ロングで眼が真っ白な青年、日向ヒアシである。

「うむ。噂をすればなんとやらじやの」

「火影様。うずまきトグロの処置、ぜひ私にお任せ願いたく」

「うむ。ちょうどいいところに来た。難しい問題だが、やってくれるか？」

「はっ」

ヒアシは膝を着き、頭を垂れた。日向当主には珍しい服従の姿勢だった。

「気分っておるようじやな。ヒルゼンはヒアシにのし掛かる一族の重圧を感じ取った。自分も里を背負う立場だから共感できる部分がある。」

「待てヒルゼン！ ヒアシはまだ若い！ もう少し当主としての経験を積ませてからでも！」

「若者にその経験を積まさせるのも、老人の役目だ。それに、木遁使い、うずまきトグロだったか、はこの綱手のもとで上手くやっていたそうではないか。何かあれば綱手が後ろから援助すれば問題あるまい。綱手よ、やってくれるの？」

「ああ、もちろんだ」

「ま、待てヒルゼン！ お前が納得しても里の人間は納得しないぞ！

やつが本当に里の忍びとして貢献する気があるのかどうか！ 大罪の処遇もどうするつもりだ!？」

「罪は、地道に償わせるしかなからう。あやつの働きに期待する。信頼関係は少しずつ結ばれていくものだ。しかしダンゾウよ。そこまで気になるのなら、お主が自分の目で確認すればよい。ちやうど此度の戦の司令官となるのだ。日向ヒアシ、うずまきトグロと共に戦い彼等を導いて見せよ」

「ぐつ。……ふん。まあいいだろう。だが、戦いの最中に余計な口は挟まんでくれよ」

「お主の邪魔をする気はない。共に里の将来を憂いる同志じゃ。信頼しておるよ」

「ふん。どうだかな」

ここでトグロに関する話は終わった。

ダンゾウはなんとか最後の切符だけは得られた形になった。

「猿飛先生。トグロはいいが、他の連中はどうするつもりだ？ 私としては、私が率いたい。第二ダムの防衛戦力として残してもらえればありがたいが」

「うむ。わしもそうするつもりじゃった。お主が例の血液恐怖症を引きずっておるなら、代えを考えねばならんだがの」

「待て、ヒルゼン。九尾はどうする？ 寝かせておくつもりか？」

ダンゾウが割って入る。九尾を操りたいのが見え見えだ。

お前だけには渡さない。そんな気持ちでヒルゼンの前に綱手が答える。

「九尾が防衛戦力にあるだけでも十分と考えてもらいたい。やつは気に入った人間の言葉にしか耳を貸さんよ。無理に命令すれば、また逃げられることになるだろう」

「なれば力で押さえつけられ！」

「ダンゾウよ。わしらはそうして失敗してきたのではないか？」

「ぐつ。……まあいいだろう」

こうして集落に関する話も終わった。少しでも自分の戦力が欲しいダンゾウ。集落の仲間を自分の力の及ぶ範囲に置きたい綱手。みんな仲良くやってほしいヒルゼン。ダンゾウの暴走とヒルゼンの夢想を監視するホムラとコハル。そろそろ出ていきたいがタイミング

が見つからないヒアシ。彼等の議論は一般の部隊の編成に移る。

本来、この議論こそがここに上役が集まった理由だった。しかし、部隊編成は効率重視であり、ダンゾウが得意とするものでもあるため、ヒルゼンは特に口を挟まない。あつという間に決まっていく。

綱手は「後方支援なら認める。ただし前線への支援は中忍レベルである初と月と長袖以外認めない」などと発言した。ヒアシは「日向は木の葉にて最強！」などと発言した。

部隊編成が終わると、ダンゾウはノリノリで去っていった。ポーカーフェイスである彼の表情は全くと言っていいほど変わっていないのだが、歩くリズムや肌つやで、古い友人であるヒルゼンやホムラには分かるのだった。戦は一年半ぶりだが、ダンゾウにとっては久しぶりの晴れ舞台となる。粋に感じているらしかった。

綱手にはそれがちようどよかった。ダンゾウなしで難民の処遇を決める話し合いができるからだ。

「猿飛先生、いいかしら？」

もつとも、入れ代わりのように大蛇丸がやってきたが。

綱手は当然、大蛇丸を酷く警戒した。

「自来也と綱手がやってるのを見て、私も孤児の面倒を見ようかな、なんて思っちゃってね。ちようど里は戦力不足だし、才能のある子がいたら木の葉に勧誘することもできると思うの」

大蛇丸は飄々と言った。綱手には全く誠意が感じられなかった。ホムラやコハルもそうだった。

「お前は孤児を新術の実験台にしたいだけだろう！ 大蛇丸！」

「あら？ あなただって薬の実験をしたでしょう？」

「それは……」

綱手は大地の实の実験を思い出し、ひるんでしまう。しかし、思い直す。ここで強く出なければダメだと。

「いや、お前は違う！ 私はあの子達の将来を思って！ お前にそんな感情はないだろう！」

「心外ね。私だって使える子は好きよ。あなたと同じ」
「違う！」

「綱手よ。長くスリーマンセルを組んだ仲間ではないか。信じることも覚えよ。そうでなければ人の上に立つことはできぬぞ」
「くっ」

やつぱり猿飛先生はバカだ。当人を除きこの場にいる全員が思った。

結局、大蛇丸が50人の孤児、火の国が働ける大人とその家族40人、綱手とヒアシが残る300人の孤児と老人を請け負うことになった。もともと1500人いた砂の難民だが、一尾によって500人近くが殺され、木の葉へ逃亡中にも砂の忍びや毒蛇によって250人近くが殺されてしまったのだった。

なお、綱手はヒアシと共に300人の面倒を見ることになったが、厳密には50人を暁に任せ、残る人間は第二ダムへ行くか波の国へ行くか選ばせるつもりだった。第二ダムへの移動は綱手が主導し、波の国への移動は日向が主導する。日向のもとにトグロが預けられることを思えば、この分担が都合がよかった。

この会議で纏まった話は、カツユを通して初に伝えられた。しかし綱手もいい加減眠かったので、「トグロには待つているように伝えろ。昼前に木の葉から使いがくるだろう。戦闘への参加も促されるだろうが、余計なことはするな。集落の人間も難民も、すべて上手くいくように私が取り計らう」と短く言い、ダンゾウの思惑などは伝えなかった。伝えずとも、やつが使いそうな卑劣な難癖くらいは、トグロなら見抜けると思った。砂との交渉で散々理不尽な要求を我慢してきたからだ。日向について伝えなかったのは、トグロが日向当主を殺めてしまったことについて、飾り気なく当主の息子二人と対面し、問題を解決してほしかったからだ。殺される可能性は、ないと思った。あの短い時間で、ヒアシという人間の情熱や、真っ直ぐな人柄を読み取ったからだ。

痛みを受け入れよ

あまり悲しんでいる時間は無い。

今日の食糧のために森に入って狩りと山菜集め。将来の食糧のために畑仕事。攻められた時のために抜け穴作り。木遁分身も利用してそれらをこなしつつ、本体は今後の国造りのための話し合い。相手には豪、初、月、イズモを選んだ。それだって、5人で近辺を周り、水汲みや井戸作りをしながらだ。なお、目の見えない月は俺と手を握りっぱなしである。

「木の葉はここを前線基地にすると思うか？」

「おそらく。第一ダムを取り返すまでは」

「第一ダムを取り返せると思うか？」

「実力で言うとな、5大国でも木の葉が頭1つか2つ抜けています。本気になれば負けることはないでしょう。問題は、木の葉の拡張を恐れた他の国が、砂に手を貸すかもしれないこと」

「第一ダムを取り返せたとして、俺達は自由になれると思うか？」

「今までのようにはなれないでしょう。綱手さんが火影にでもならない限り」

「だよな」

綱手が火影か。それは盲点だったな。

千手一族の実質的な当主だから、火影に近いと言えば近いのだろうけど、どうなんだろうな。本人にその気がなさそうなのと、魑魅魍魎の卑劣達を押さえつけられるかってことと、今の火影が歴代最強と言われているのを考えると。もつと言え、忍者は引退するって言うたしな。昨日の戦いではふつうに動けてたけど。どうにかして血だけは見えないようにしていたのかな？

まあ、どの道明日明後日の話ではない。今、どうやって目の前の難題を乗り越えていくか考えねば。

東には木の葉。西には砂。北は雨。南は海。

逃げ場はないな。どなんしましょ。マジでどうしよう。戦うしかないように思えてしまう。でも、これ以上彼等を死なせるのは、嫌だ。

こんな思いはしたくない。クソツ。

「正直、この地を選んだのは失敗だったように思う」

ああ、言ってしまった。

言いたくなかった。自分の失敗を認めることになる。皆の死を自分の責任として受け止めなければならぬ。また、今までの喜びを偽善として糾弾する必要も出てくる。どっちも辛い。

初と月も同じことを思っただろうか。ハッと顔を見上げています。

だが、今のままではジリ貧だ。前に進むために、過去を乗り越えたい。

「緑化という俺の夢。大国の狭間で苦しんでいる人々を救う喜び。それらを否定してしまいたくはない。しかし、認めなければならぬ。美しい理想に魅せられて、盲目になっていたことを」

初と月は辛そうな表情だ。

この現状を直接的に作ったのは砂。こちらは理不尽な要求をいくつも飲み、見返りを求めることは無かった。嫌がらせを必死に堪えて、仲良くしようと頑張った。にも関わらず、裏切られた。

だから、砂を恨みこそすれ、自分達の非を認めるのは難しいだろう。特に彼女達は美しい生き方に憧れている。俺がそうさせた。実際に今は美しい生き方をしていると思っただけだ。それを否定することは、汚い生き方を肯定することになってしまうかもしれない。そういう嫌悪感もあるだろう。

しかし、豪とイズモは俺の言葉を受け入れているように思う。運命を受け入れているというべきか。疲れたような表情をしている。

「もつと周辺国を知り、世界を知り、慎重に、着実に、時には狡猾に進めるべきだった。もちろん、忍界大戦のようなものがある中で、確実に安全と呼べる場所はないだろう。しかし、波の国のような島国や、人目につかない密林の奥底なら、いくらか安全性は増すだろう。とかく、人目につくのが早すぎたんだ。じつくりと軍事力を増し、他の実力者とのつながりを作ってから、ことに及ぶべきだった」

俺は噛みしめるように言う。自分に戒めを刻むつもりで。

皆、静かだ。足取りは重い。

初と月が酷く悔しそうな顔をしている。失敗を認めたのだろうか。その辛さを乗り越え、大きくなって欲しい。それが若者の特権だ。

不意に、月がギョツと俺の裾をつかんだ。

「ご主人様。ご主人様。しかし、私は思います。そのような安全地帯へ行けない人間こそが、本当に困窮状態にある難民だと。そしてご主人様が救いなさっていたのは、まさにそんな人々でした。私も、物心ついた頃には戦地にいました。母親を奪った男を殺したのが初めの記憶です。私のご主人様と出会えなければ、醜い戦争屋に言いように使われ、この世の全てを憎みながら死んでいったことでしょう」

これは、励ましてくれていたのだろうか。

そうだろうな。実際励まされた。美少女に感謝されるというこの上ない喜び。

裾を握る月の手に、そつと俺の手を覆い被せる。

「あつ」

「安心してくれ。俺も、俺の活動の全てを否定するわけじゃない。お前や初に会えたのは、何よりもの幸せだ。後悔なんかしてない。今後も続けていくつもりだ。しかし、反省するところは反省すべきだということだよ。同じ悲劇を繰り返さないために」

おつと、いい雰囲気だったが、今後も続けていくと言ったところで、月のチャクラが刺々しくなったな。独占欲というやつか。鬼嫁になりそうだな。

逆に初は、達観してるんだけどな。好きになったのなら仕方ないという感じで。控えめなかわいい嫁になりそうだな。

イズモと豪は、呆れている感じだ。まあ2人共嫁さんラブだからな。

「ちよつといいですか。空海さん」

不意に、その豪が口を開いた。

「なんです?」

「先ほど島という話が出ましたね。木の葉の南東には、こう魚の尾ひれのように、南西から北東にかけて長い半島がありますね」

「ええ、ありますね」

尾ひれか。まあそうだな。

「その尾ひれの北東側はご存じのように水の国、霧隠れの諸島があります。しかし南西側には無人島がいくつかあるそうです。そう大きくはないようですが、ここの難民くらいなら過ごせると思えます」

ほう。それは、なかなかいい情報だな。木の葉を除き、五大国からほどほど遠く、ここからは近い。波の国はなかなか豊かな島国だが、遠さと大国を通らずにはいけないことが問題だった。しかしその無人島なら、船を使えば川の国から直接行ける。

「なるほど。そこに移住するのがいいのではないかと?」

「ええ。まあ1つの選択と思っただけければ」

「いいんじゃないですか?」

「え? ええ、はい。ありがとうございます」

「ちよつ、ちよつと豪さん。それもつと早く言っってくださいよ。こんなギリギリじゃなくて」

「は、はあ。しかし私も最近知った情報です。それに、皆が砂と仲良くなろうと頑張っていた時分に、ダムを捨てて逃げ出すような話をするのは厳しく」

「まあ、確かに。僕はダムを諦めなかったでしょうけどね」
希望が見えた、のか?

船は、設計図さえあれば俺の木遁で作れるだろう。

航海は、ジジババの知恵袋か、波の国の友人を連れてくればなんとか。

海賊は、まあ大国の国境つてわけでもないし、大したやつはいないだろう。

食料も俺の木遁でなんとかなる。

いけそうだな。うむ。いい案だ。やってみようか。

緑化は、しばらくお預けだ。

ただな。時間がもうないんだよな。そろそろ木の葉から使者がやってくる時間だ。

念のために、もしもの時の話をしておくか。

俺は木遁で板を作り、指で削って文字を書いていく。

「初よ。これを」

「なんでしよう？ ……子供達をよろしく頼む？」

「俺が拘束されるようなことがあった時、且つ、綱手もいなかった場合だ。お前が中心にこいつらを逃がせ。行き先は波の国が最も安全だろう。しかし、あそこへ行くには木の葉を通る必要がある。綱手と深い関わりがあるとは言え、この人数を安全に動かすのは不可能だろう。そこで、俺が信頼している木の葉の人物を紹介しておく。積極的にそいつらを頼れ。まず、自来也だ。綱手と同じ木の葉の三忍で、俺に忍術を教えてくれた先生でもある。初め俺は、長門と弥彦と小南と共に、彼の弟子になったんだ。その後綱手に連れられて木の葉へ行き、アカデミーで一年学び、もう一度自来也の弟子になった。そこで俺と一緒に弟子になったのがクシナとミナトだ。クシナのこととは十分知っていると思うが、このミナトもなかなか人間のできた男だ。頼るといい」

「はい。クシナさんから話は聞いています」

「うむ。それからクシナの親友にうちはミコトという女がいる。こいつはうちはミグシの姉でもあるから、長袖を使えば交渉できるだろう。さらに、ミナトの友人の忍びにも、猪鹿蝶トリオというのがいる。こいつらはそこそこ思慮深くて正義感が強い。ただしチョウザという男にデブや太いなどと言ってはならんぞ。大らかでかつこいと言えば喜ぶだろう。逆に、木の葉で注意すべきなのがダンゾウと大蛇丸だ。ダンゾウは大勢の部下がいるからそいつらにも注意だ。おそらくやつらは一般人を装って近づいてくるだろう。が、まあ、卑の意志を隠そうともしていないからな。ジメジメとした暗い雰囲気とかで見分けてくれ」

「はい」

「あとは……」

他に何かあるかな？

考えたところで、木の葉の忍びが川の上を走っているのが見えた。ゾロゾロと大人数で来ている。砂と戦争するつもりなのだろう。

綱手は、いないな。ダンゾウが中心にいる。予想は出来たことだ

が、あいつには会いたくなかった。

他に目ぼしいのは、日向ヒアシカ。ヒザシもいる。やはり俺を宗家の呪いで操るつもりなのだろう。ヒザシがどこまで味方してくれるかが問題だ。

ここまで来るのに10分つてところか。最後に、メイド達にハグやキスをして回ろう。

「ぎゃあっ」

「ちよっ、ご主人様！」

「し、師匠！ 自分にそんなつもりは……」

「あっ、あたしは面食いだってばね！」

無理矢理やってやったが、全体的に拒否の方が強かった。まだまだ教育が足りないようだ。

とかく、女の子約40人とハグをした。思いの外時間を食ったので、急いで城壁の近くへ移動した。

初、長袖、豪は先に来ていた。木の葉の忍び、200人くらいいる、はちようど来たところだ。雰囲気がよくないな。人殺しのような目付きのやつが多い。まあこれから砂と戦うんだから当たり前か。

「お久しぶりでございます。ダンゾウ様」

「ふん。お主などに用はない」

ダンゾウは条約の時とうってかわって、豪を粗末に扱う。ズイと俺の前に来た。

「お前だな。うずまきトグロ」

「はい。そうです」

「何がはいか！」

突然叫び、俺の顔面に蹴りを入れてきた。俺も咄嗟に顔を引いたが、間に合わず蹴り飛ばされる。50m近く転がる。痛い。まあ俺なら痛いで済むが、これが並の中忍だったら死んでいる。それだけの憎しみがあるということか。こちらこそ、と言いたいところだがな。

「よくもっ」

「お前達はジツとしているー！」

俺は叫び、初が飛びかかるのを防ぐ。

来たときにダンゾウの両脇にいた忍びが、「チツ」と言つてクナイをしまった。引かなければ戦うつもりだったのだろう。立場を分らせるためと言つてボコボコにしてきた可能性もある。

ダンゾウは初になど見向き見せず、ジツと俺を見下ろしている。チャクラで殺意をぶつけながら。従え、さもなければ皆殺しにする。口で言わずとも伝わってくる。

里抜けだけで死刑でもおかしくないが、その上俺は九尾を逃がして日向当主まで殺した。忍者の世界では、酷い拷問の末に殺されるくらい罪だろう。だが俺は殺されない。利用価値があるし、綱手とも仲がいいからな。

しかし、俺が生きて木の葉と共に戦うことに、全ての忍びが納得するわけではないだろう。俺を殺せないのなら、俺の近くの人間を。そうしてやつらの卑の意志が俺の仲間に向けられる可能性が高い。特にクシナにな。

ここは、大人しく従うポーズを見せた方がいい。親衛隊も警備隊も、今は休息が必要だ。

そもそも砂以上に強い木の葉に逆らえるはずがないか。目の前のダンゾウも、現三代目と火影の座を競っただけあって、かなり強い。タイマンでも負けそうだ。クシナとコンビでやったら勝てると思うが。しかし、こいつに勝ったところで目の前に200を超える忍びがいる。その中には俺とタイマンを張れそうな上忍もちらほらいる。嫌でも上下関係を納得させられる。

俺の木こりへの変化は蹴り一発で解けてしまった。小鬼モード（本当の姿だけ）で立ち上がり、口の血を拭いながらダンゾウを睨む。木の葉の中忍が「ひっ」と声を漏らした。情けないやつらだ。忍者が見た目だけで恐れるとはな。しかもこの圧倒的に有利な状況で。

「お前達の裏切りによって木の葉が被った苦しみ、この程度で済むものではないぞ」

ダンゾウが相変わらず殺気をぶつけながら言う。ダンゾウの部下もそれに従う。

他の忍びには、なんのこっちゃという反応もある。俺が木の葉で忍

びをやっていたことを知らないのだろう。木遁使いとして割と秘匿されていたしな。もちろん、俺のこの見た目だから、一目見たことがある連中なら覚えているようだがな。「あつ、あいつだ!」「あのガキの化け物だ!」なんて声が聞こえる。

「従おう。要求を言ってくれ」

「なんだその口の聞き方は? まだ立場が分かかっておらんようだな!」

再び俺に接近し、攻撃しようとするダンゾウ。しかし、その前に飛んできたチャクラの塊が俺を突き飛ばした。

「若造が。なぜ邪魔をした?」

「ダンゾウ殿こそ、日向との取り決めをお忘れか? その者の処遇は我々に任せると」

「そんなものはこじつけに過ぎぬ! わしがこの方面の司令官を任せられた時点で、お主もわしの部下だ! 上官の命令には従ってもらおうぞ!」

「ダンゾウ殿こそ、お忘れなきよう。我々が木の葉に協力するのは互いの利にかなうと判断したため。宗家が木の葉に従うことがないことは、里の発足時の協定に明記されています。それを認めぬというのなら、木の葉にて最強の我々が、明日からは敵に回ると知れ」

「日向、ヒアシイ……」

俺を吹き飛ばしたのは、日向ヒアシだったようだ。相変わらず髪型以外はヒザシにそっくりだな。

しかし、日向がダンゾウに反発するのは驚いた。宗家に従わぬ者は殺すという、ダンゾウ好みの卑劣だと思っただがな。影の王は二人いらぬということだろうか? しかし、日向って名は似合わないなあ。あんな暗い連中に。

ダンゾウが引き、ヒアシが俺に近づいてくる。ヒザシも少し後ろを歩いてくる。

ヒアシの表情は険しい。無理して演技をしている感じだ。逆にヒザシは、俺ではなく兄に対して嫌悪感を抱いているように見える。やはり分家の憎しみか。

しかし憎しみばっかだな。木の葉つてところは。さすがは卑の国か。

伸ばせば手が届く距離で相対する俺とヒアシ。そのヒアシから、不意に殺気が漏れる。

「余計なこととはせぬことだ。お前自身、そしてお前を思う者のためにもな」

ヒアシはボソリと言って、構えた。

この構えは……。

「八卦一掌！ 二掌！」

やはり八卦六十四掌か！ ぐおおつ、痛ええええ！ 経絡系が焼けるうううう！

「四掌！ 八掌！ 十六掌！」

「がふうっ」

「三十二掌！ 八卦六十四掌！」

「いつ、いぎいいいいいい！」

痛い痛い痛い痛い痛い！ 何これ！ 直接神経を攻撃される痛みって酷すぎじゃない！ 今まで受けてきたあらゆる攻撃より痛い！ 半蔵の毒攻めさえ生ぬるく思える！ ばっさり切られた方がましだ！ 全身を粉々にされるような痛みが増え続けて解放されない！

やはり卑の国の忍者か。日向は拷問でも最強！

「八卦、百二十八掌！」

「いぎひいいいいいつ！ んぎやあああああああ！」

な、なんで六十四で止めないの！ バカじゃないのこいつ！ もう終わった経絡系に痛みだけ残して何になるの！

「八卦……」

「まつ、まさつ。やめつ」

なんで！ なんでまだ続ける雰囲気なの！ ダンゾウだってもう見てないじゃん！ ブサ男の悲鳴なんて誰も得しないただの拷問じゃん！

「おのれ！ もう我慢ならっ、がっ！」

「手を出すな。君達は」

ヒザシがこちらに来ようとした初を止めた。というか後頭部にチョップ一発で気絶させた。いい判断だけど、実力差がありすぎて泣ける。

「八卦、八卦……………」

というか、ヒザシさん。何溜めちやってんの！ 恐怖の時間を長引かせないでよ！ 待つてる間も苦しいんだよ！ まさかそれも計算ずくか!?

「おのれ、日向ヒアシィ……………」

俺の声にヒアシがビクンと眉間を上げる。

「お前も来い！ ヒザシ！」

「……………分かりましたよ。ヒアシ様」

なんだ!?! さっさと始めろつてのに！ また何かやる気か!?! 嫌な予感しかしないんだが。

「あれをやるぞ。抜かるなよ」

「ヒアシ様こそ、私に置いていかれるようなことはないでしょうね」

「口の聞き方になっておらん！ 後でお前も六十四掌だ！」

「いたああああ！」

ヒアシは怒鳴りながら攻撃を始めた。ほぼ同時にヒザシも。

「それだけは、勘弁願いたいですね」

「いてててええやああつ」

「行くぞ」

「ええ」

「禁術！ 八卦千二十四掌！」

「あつ、あかああああああん！」

な、何それ！ おかしいじゃん！ 桁が違うじゃああああん！

木の葉の日向にて三強

ヒアシにとって、父は恐怖であり、憧れであり、また超えなければならぬ存在だった。父が亡くなったと知った時は、さまざまな喪失感に包まれた。まだ自分は父を超えていない。見返していない。親孝行をしていない。なのに……。

また、父の死はヒアシが日向当主となる契機でもあった。彼の双子の弟は正式に分家となり、額に呪印が刻まれた。その時の、世界を憎むような、それでいて諦めているような、弟の顔。印象的だったが、ヒアシも自分の感情の整理に手一杯だったから、気のきいたことはできなかった。

しかしその数日後、日向宗家に自来也が訪れる。彼はヒアシとヒザシを呼び、彼等の父の死について謝った。そして、彼が見た範囲での真相を語った。

「お主らの父は、九尾にも負けておらんんだ。あのままなら死ぬことはなかったじやろう。しかし、わしの弟子であるうずまきトグロが、お主ら父に攻撃を始めてしまったのじゃ。不意打ちじやった。体勢を崩されたお主らの父は、九尾の攻撃によって。そして、仇であるトグロも、『心の自由は縛れない』と言って自殺してしまおうた」

「それは……」
「なんと……」

ヒアシにとっても、ヒザシにとっても衝撃だった。

父を殺した犯人に対する憎しみ、というレベルの話ではない。日向の慣例、宗家と分家というシステムが起こした悲劇だったからだ。それを理解できぬ二人ではない。

ヒアシは、恐怖に苛まれることになった。共に産まれ、共に修行し、喜びも悲しみも分かち合ってきた弟。彼がもし自分に反旗を翻したら、どうなってしまうのか。自分は弟を殺さなくてはならないのか。それとも弟に殺されるべきなのか。本当は自分より弟の方がちよつとだけ優秀だ。しかし、数分早く産まれただけの自分が宗家という支配権を手にし、弟には奴隷の証が刻まれた。その悲しみ、やるせなさ

は、呪いを刻んだあの日の表情に見たばかりだ。

自分は弟に、分家に何ができるのか。どうするべきなのか。ヒアシは毎日悩まされることになった。

対して、ヒザシには2つの感情があった。まずは、部外者が自分と兄と父の關係に割って入って、勝手に父を殺したことへの憤り。ヒザシもまた、父を見返してやりたかったし、親孝行もしたかった。しかしそれと同時に、精々したという気持ちもある。父は分家の憎しみを身をもって知った。兄も、自来也の話を聞いて以来、分家について深く悩んでいる。

そうだ！ 俺達だって人間なんだ！ 何も思わず従っているわけではない！ それを今さら悩んでいるとは、今まで俺達のことをどう考えていたんだ！

ヒザシは心の中で何度も叫んだ。しかし、兄はヒザシが黙っていた方がウジウジ悩みそうなので、放っておいて苦しめることにした。もつとも、苦しむ兄を見ていると、自分も苛立ってしまうのだが。その感情の理由は分からなかった。

ヒザシに転機が訪れたのは、とある任務中に不思議な一行を見たときだった。

木こりのような男が、大勢の少年少女を背にして、忍びと戦っていた。男は強かった。多対一でも、後ろに目があるように対応できた。まるで日向のように。うん？ 日向？

「え？ あっ！」

ヒザシは、男の目に集まるチャクラの流れを見た。白眼のそれだった。

「な、なにー！」

さらに、決定的なことが起きる。男は木遁を使ったのだ。白眼を持つ木遁使いは史上一人。

「まさか、まさか……」

生きていたのか。

様々な感情が渦巻くなか、ヒザシはとりあえず後をつけることにした。向こうも白眼が使えるが、血筋的にもチャクラコントロールに

よつても自分の方が視界は広い。見つからない自信があつた。と言つても本体は里に帰らなければならぬ。尾行は影分身に任せた。

少女達を率いる男は、とても楽しそうだった。移動しながら狩りや採集で食事を集め、少女達に与える。それも足りなければ木遁で木の実を出す。料理を少女達にも手伝わせ、そのときどきに感謝の言葉を述べる。少女達にも述べるよう教育する。野盗や野獣との戦いでは、忍びらしい非情さも見せる。しかし徒に苦しめることはなかった。

上忍の強さを持ちながら、それを金や権力のために使わず、本当に困っている人を救つていく。それを非常に楽しんでいる。

なんてやつだ。我が父を殺しておきながら、自分はこのうのと好きなことをやって。分家の末端のクセに、日向の仕来たりを無視して。あんなに自由に、楽しそうに。人々に好かれて。

ヒザシの影分身は、徐々にトグロの生き方に惹かれていった。是非、本体で会つて話がつたいと思つた。

やがてトグロは、暁という若者たちと合流した。そこである女が、ヒザシの存在に気づいてしまった。ヒザシは慌てて影分身を消した。

その後、暁という組織を調べ、孤児院というキーワードを得る。トグロと孤児院の両方に該当する人物として、綱手がいた。綱手はトグロを日向に連れてきた張本人であり、最近になって突然、孤児院を始めていた。これらを繋ぎ合わせ、トグロは綱手の孤児院にいるという推測をした。

そして、それは合つていた。

砂との戦いを終えたヒザシは、一目散に日向宗家に向かつた。そしてヒアシに「父の仇が綱手様の部下にいる。今、火影邸でいつも関係する部隊を編成をしているところだ」と伝えた。ヒアシは顔色を変えて火影邸に走つていった。

トグロという人物。その人柄を見抜く。ヒアシはチャンスをもらつた気分になつていた。ここ数年悩んできた宗家と分家の問題。それを紐解くきっかけを、トグロが与えてくれるかもしれない。

父の仇だが、殺すつもりはなかった。いや、トグロがどうしようもない人間だったならば、里に仇なすまえに責任を持つて処分するが、

現時点ではその対象ではないということ。また、その可能性は非常に低いと思っている。数年前に突然弟の顔色がよくなったのも、トグロが関わっている気がする。トグロのことを話すヒザシの表情が生き生きしていたからだ。

火影邸での会議を終え、ヒザシと共に隊列に並ぶ。トグロとの対面を心待ちにしながら歩いていく。

ヒアシは第二ダムへ到達する少し前に、白眼で集落の様子を見た。トグロのチャクラは一発で分かった。木遁分身の存在にも気づいた。そして、トグロが予想を上回る人物だと知った。親を失った子、親友を失った子、足を失った子、視界を失った子。皆トグロを頼る。トグロに泣きつき、慰められ、おだやかになっていく。生きる力をもらい、健気に働き始める。これほどのダメージを負っていないながら、集落全体に私意の空気がない。自分のためではなく、人のために働く。なんと美しいことか。

皆のチャクラの流れが美しい。見ていただけでこちらの心が癒されるようだ。視界を失った子、いや九尾でさえ、今ではトグロよりも清々しい。

なんてことだ。あやつは災厄を吸いとる聖人か？

多大に過ぎた評価を持って、トグロと対面することになった。呆けていたせいで、ダンゾウに先んじられた。

ダンゾウがいきなりトグロに蹴りかかった。一見、里抜けと九尾逃亡に関する罰に見えるが、ヒアシはあの会議にいたので知っている。ダンゾウは木遁使いであるトグロが欲しい。トグロを怒らせ、反撃させ、「やはり日向では制御できん！」などと言って自身の操り人形にするつもりだろう。ダンゾウが部下に絶対に逆らえない呪いをかけていることは知っている。やつのは好きにはさせない。同じことをしている日向に言えることではないかもしれないが。

口八丁でダンゾウを下がらせ、自身がトグロに相対する。

己の肉体をもって、トグロに苦痛を与えていく。

未熟な自身に、このようなことをする権利はない。しかしやらねば

ならぬ。里にため。こやつのためにも。

「八卦千二十四掌！」

里向けに、厳しい罰を与えたというポーズのため。越えられない場所へ行ってしまった父へ、兄弟の最高の技を見せるため。宗家と分家という問題の重要さを認識させてくれた男へ、感謝の気持ちを込めて。ヒアシはトグロに打ち込んだ。負けじとヒザシも打ち込んだ。

トグロはただただ絶叫し、ボロ雑巾のようになって崩れ落ちた。

「はあ、はあ、はあ」

「そやつは作戦の中核を担う一人だぞ。動けなくなるまで痛めつけてどうする。感情に突っ走るだけの愚か者に、里の重要兵器を任せるわけにはいかん。やはりわしが」

「いえ、この者は1時間もすれば目覚めますよ。今回私は経絡系を完全に破壊するのではなく、一部残して大きな痛みを発生させたのです。部分的な経絡系の傷は、ヒザシの突き見せかけた早業の治療によつてすぐさま回復させました。彼は中途半端な破壊と強引な治療による二重の痛みによつて絶叫していたのです。ふつうに経絡系を潰してしまうよりこちらの方が痛いのですよ。完全に精神的な拷問のための技です」

ヒアシは、ダンゾウがこう来ることまで読んで、この技を選んだ。さすがというべきは、あれの一言でヒアシに合わせたヒザシか。当然、破壊よりも治療の方が難易度が高い。

「だ、だからと言って、やはりお前では」

「ほよー！ 小鬼ちゃんがボロ雑巾みたいになっちってる！ はっちゃんも寝ちってる！」

ダンゾウが捨て台詞を吐こうとしたが、アラレのとぼけた声にかきけされた。

「あつー！ アラレちゃん！ 来ちゃダメだつて！」

豪が慌てて走っていく。しかしその前にヒザシが出た。いつの間にか拾ったのか、トグロと初を両脇に抱えて。

「アラレちゃん。僕がトグロくんと初さんを治療室に運ぶ。案内してくれ」

「うんいいよ。でもね、小鬼ちゃんは空海って呼ばないとダメなんだって」

「そうかい。これからは気を付けるよ」

「うん！」

ヒザシはアラレの後ろをにかけていく。

ダンゾウはその後ろ姿を忌々しそうに睨むだけだった。

俺が目覚めたとき、今度はベッドの上だった。

「うおおっ！ いたたたたっ！」

全身がめちやくちや痛い。あれだけ突かれたのだから当然か。しかしチャクラは練れるな。体調もそれほど悪くはない。どういふことだ？ 綱手が治してくれたか？

初に尋ねよう。俺の付近の床で、白い目の青年が二人寝ている理由についても。

「初よ。あれからどうなった？」

「忍び達は一部を除き睡眠に入りました。ダンゾウは夜中に奇襲をしかけるつもりです。一部の忍びは砂に抗議の文書を出しに行っています。川の領土から軍隊を引くようにと。砂が受け入れるはずがありませんから、ただの対外的なポーズですね」

「綱手さんは？」

「もうすぐ来るそうです」

「まだなのか？ 誰が俺を治した？」

「私たちと、その日向の二人です」

こいつらが俺を治した？ あんだけズタボロにやられたのに、この短期間で？ そんなに優秀な医療忍者だったのか？

「そうか。日向が俺の付近にいる理由は？」

「三人でチームになったからです」

こいつらとか。俺をボコボコにした張本人。

まあ、俺がこいつらの親父を殺したわけだから、恨み言を吐く気にはならん。それに、さっきの攻撃中、俺に対する憎しみは感じなかったしな。どこか清清しい感じさえした。

しかし、チームか。宗家が俺を縛るために必要なのは分かるが、もう一人も日向とはな。どういう戦いになるんだらうな。

ん？ つーかこのチーム、滅茶苦茶強くねえか!? 体術は敵なしの日向二人と、術を吸いとりまくる俺。接近戦も遠距離もいける。全員が上忍の実力。

おいおい、いきなり砂影と戦ってこいなんて言わないだらうな。まあ勝てそうだけど。だって日向って木の葉にて最強なんだろ!? 歴代最強の三代目火影とか、忍びの神と呼ばれる初代火影とか、いろいろ矛盾している感じがするけども!

まあ、俺はそれなりに安全だと分かった。問題は他だ。

「お前達で戦いに向かわされるのは何人いる?」

「皆、何かしらやりますよ。私と長袖とスリミはご主人様と共に戦います。月達も後方支援はやりますよ」

「何!?!」

俺が応える前に、ヒアシが叫んだ。敷き布団から身を起こしながら。

「私は部隊編成の会議に参加していた。お主達は後方支援のみという話だったぞ。指揮権も綱手殿が持つと言っていた。あの方ならば、お主達を無理に戦場に連れ出すこともなかろう」

「どういうことですか? 誰かが嘘をついている?」

ふつうに考えればウソつきはダンゾウだ。しかし、昨日、初が言っていたよな。自分達も俺と共に戦うようなことを。ってことは、ヒアシがボケてるのか? それともどこかで連絡ミスがあった?

「初よ。お前達は戦わなくていいかもしれないぞ。本当かもしれないから、ちよつと綱手さんが来るまで粘っている。小南を起こしてくる。紙飛行機で連絡させる」

白眼で小南を探す。予想通り、まだ九尾の耳の下で寝ている。

俺は立ち上がり、走ろうとする。しかし初の手によってギュツとズボンを握られてしまった。

「ご主人様は、ここにいてください。私が向かいます」

「ん? ……ああ、そうだな。任せた」

この程度は、メイドがやるべきということか？ 微笑ましいことだな。

「トグロよ。今のやり取りはなんだ？」

ヒアシが信じられないものを見たように目をあんぐり開けている。

「え？ おかしかったですか？」

メイドが、まずかったのか？ でも宗家にだっってお手伝いさんはいるじゃん！

「うむ。お主にとって仲間とは。……………いや、言うまい」

何の溜めだ？ 下品なら下品と言ってくれた方がこちらは楽だが。

「ところでヒアシさん。3人の連携は確かめなくて大丈夫ですか？」

「うむ。やろう」

ヒアシはうなずき、立ち上がる。

「ヒザシよ。起きていることは分かっているぞ。早くせい」

「分かっていますよ。ヒアシ様」

ヒザシは気だるそうに立ち上がった。大きくアクビをし、ポリポリと頭をかく。

「これ！ 人様の家でみつともないぞ！」

「はいはい。分かっていますよ。すみませんね」

ヒザシという男、ずいぶん想像と違うな。もっと切羽詰まった感じだと思っただが、気楽だ。逆に兄の方が神経質な感じがする。

「さっ。張り切って行こうか。トグロくん」

ヒザシは軽く俺の肩を叩き、ウインクまでした。なんだこいつ。馴れ馴れしいな。

「初のやつ何を手こずっているのか。こつちが先に来てしまったぞ」

俺達は三人で庭に出る。初は九尾の上で小南に何やら言っている。小声で聞こえんな。

と、小南がこつちに気づいた。遅れて初もだ。ついでに九尾も片目を開けた。そして不満そうな表情で訴えてくる。

こいつらをどうにかしてくれ。

「おい初！ 何をトロトロやってんだ！」

「ご、ご主人様！ お待ちください！ もう少しで！ ああつ！

待っ！」

初の静止を遮って、小南がこちらに飛んでくる。というか何故初は静止させたんだ？ 俺は彼女と話がしたいと言ったのに。

「ねえ、彼女あなたと一緒に戦いたいって言ってるわよ」

「どういう意味だ？」

俺の班に入れて欲しいのかな？ ダンゾウが認めるかな？

俺としては、気持ちは嬉しいが、来てほしくないな。たぶん足手まといになるだけだ。命を無駄にすることはない。

「小南さん！ 恨みますよ！」

「あの子、本来なら戦う必要のないのよ。昨日ナメクジから聞いたわ。綱手さんが上手くやったって。クシナも聞いたはずよ」

「なんだそれは？ 初がウソをついているってことか？」

俺が言うのと、小南はうなずく。

不意に、初がこつちに突っ込んできた。瞬身の術だ。これは、小南の後ろを狙っているのかな？

「ちよつと失礼」

「えっ、ちよつ」

小南の腕を引き、こちらに抱く。小南がいた場所にもう片方の手を出し、木の根を伸ばす。

「えっ、あつ」

根が初を受け止める。そのままからみついて拘束する。

「まあ、ここまでできたら分かるよ。本当は綱手の交渉で、お前達は戦わなくてもいいことになった。だけど、俺と一緒に戦いたいからウソをついたんだな？」

初はビクンと目を見開いた。次には悲しそうにうつむく。

認めたな。たぶん、俺だけ危険な場所で戦うってことが我慢ならなかったんだろう。

「ありがたい話だけだな。また今度の機会にしてくれ。今は実力を伸ばせ。綱手さんの指示に従って動け。彼女は集落を一番に考えて動いてくれるはずだ。その彼女が信じられないのか？」

「ち、ちが、ぐぶつ」

おおっと、泣き出しちゃったよ。困ったな。今から連携の確認がしたいんだけど。

まあ、泣くのは仕方ないか。これだけ色んなものを失って、一日もせずに切り替えろと言われても、なかなか。

「トグロ！　ここは私に任せるってばね！　あんたがいない間私がこの子達を守る！　だからあんたは修行でも予行でもやってるってばね！」

と、今度はクシナが走ってきた。集落の手伝いをしていたはずだが、いいタイミングで現れたな。九尾が呼んだのか？

さて、連携の確認を行う。俺の体術レベルはそう高くないので。あっさりとは彼等が前衛で俺が後衛と決まる。俺は敵の遠距離攻撃を防ぎ、二人の活路を開く。砂は風使いが多いが、白眼なら真空の刃も見抜けるのであまり問題ない。危険なのは砂だ。日向の柔拳では吹き飛ばしにくく、重しとなって動きを抑制されてしまう。しかし砂は俺の木遁で簡単に止められる。これらを考えると、俺達はとても効率のいいチームだと分かる。自然と3人の頬が緩んだ。

やれる、俺達なら。

修行の占めに、クシナ、小南、長袖、初にも手伝ってもらい、5分ほどの模擬戦を行った。互いに本気ではないが、俺達はとても強かった。

「今、お前は死んだぞ」

「こ、こんなの当たっても平気ってばね！」

開始早々、ヒアシがクシナの喉元で指を寸止めする。

「爆風に紛れて逃げたつもりか？　その程度の紙飛行機で白眼を欺くことはできぬ」

「私、どうして協力させられているのかしら？　平和活動のために来たはずだけれど。帰っていいかしら？」

ヒザシも小南相手に寸止めする。

「ご、ご主人様！　さすがです！」

「いたたたつ。空海さん、僕にだけ当てる気で攻撃してませんか？」

俺も初に寸止めする。

俺達はたった5分の間に、何度も何度も彼等を殺せることを確認した。もちろんこちらは無傷である。これには悟らざるを得なかった。

倒れ伏す少年少女を前に、俺達は3人一列で並ぶ。

「ヒアシ様、最後の占めにあれをやりませんか？」

「ヒザシよ。前置きなどいらぬ。常識であろう」

「さすがに僕も、気づいてしまいましたよ」

白眼三人、何とはなしに柔拳の構えをとる。

大きく息を吸い、腹に力を込める。

「日向は木の葉にて最強！」

「日向は木の葉にて最強！」

「日向は木の葉にて最強！」

太陽の下、凜と立つ木の葉の日向にて三強の忍び。山びこが、わびしく鳴り響いた。

青年団を討て

川の国は傾斜の厳しい山と谷が続く天然の要塞だ。特に谷について、土砂崩し系の術に巻き込まれないよう注意が必要である。

敵の配置も、崖の付近では土砂崩しができる砂使い。密林に覆われたなだらかな山間部では、木ごと敵を攻撃できる風使いが考えられる。

土砂崩しに対抗するには、速さで土砂を躲したり、何らかの方法で宙に浮くのが有効だ。風使いに対抗するには、土の壁で防いだり、火遁で風を押しきるのが一般的。

200人いる木の葉の忍びのほとんどは、土砂崩しに対応できない。ふつうに直進しては攻め込めない。そこでダンゾウが考案したのが、巨大な手裏剣に変化して、誰かに投げてもらい、一気に崖を超えるというものである。投擲主はパワー系の忍び。特に倍加の術が可能な秋道一族が担う。

俺は、土砂崩しを木の根っこで受け止めることができる。風も土の壁で防御できる。俺の守りは効果的なので、木遁分身を4人分、土遁を使えない小隊に回した。

しかし、本体の俺、ヒアシ班と他12名の少数精鋭は、別のルートで敵の本陣を目指す。襲撃に都合のいい道があったのだ。元は脱出のために作ったアレ。第一ダムから第二ダム方面へ続く、秘密の抜け穴だ。

抜け穴は真っ暗で迷路状になっているが、俺なら正しい道が分かる。中で戦闘になっても、俺とヒアシとヒザシなら、月明かりすらない暗闇でも十分戦える。撤退時に穴の各所を埋めはしたが、再び掘り起こすのにそれほどチャクラは必要ない。大地の栄養を吸いながら歩けば、さらに楽だ。

「この一晩で、砂の野望を挫く。容赦するな。雨と結んだ程度ではどうにもならんという圧倒的な力の差、そして恐怖を刻んでやれ。散！」

その声で忍び達が飛び出していく。ダンゾウは第二ダムでお留守

番だ。

精鋭である俺達は、俺を先頭に抜け穴へ向かう。

メンバーは、俺、ヒアシ、ヒザシ、ミナト、うちはフガク、うちはミコト、ダンゾウ影分身、その他面をつけた暗部である。

抜け穴に入ってからのは、さすがにスピードが落ちる。土を退けては進み、退けては進みを繰り返す。光はうちはミコトの火遁で薪に火をつけた。ダンゾウが後ろにいるのは落ち着かないが、さすがにこの精鋭の中で俺を捕獲するのは無理だと思われる。

途中で地下水が溜まっていた。集落で移動する時は、水を吸い上げたり凍らせたりした。しかし彼らは優秀な忍びなので、黙って水面の上を駆ける。なんだかなあ。

油断なく、しかし気負うことなく、進み続けた。地上の峠を2つ超えたところで、迷路を別人に荒らされた跡があった。砂の忍びだろう。

「砂の忍びがここまで来た形跡があります。お気をつけて」

ダムはこの付近の峠を超えたところにある。集落はもつと近い。さあ、風影はどこにいるかな。

ドクン、ドクン。

心臓が高鳴る。この世界でもトップクラスの忍びとの戦いが、直に始まる。昨日は怒りのために恐怖を感じなかったが、今日は薄気味悪い感じがする。どっちがいいのだろうか。

「むっ！ 待てトグロー！」

不意にヒアシが叫んだ。ヒザシも何かに気づいたようだ。俺はまだ分からない。

いや、今分かったぞ！ 3mほど先の土砂に、人のチャクラが混ぜられている！ 感知式だな！ 気付かれたか!?

じつと待つ。反応はない。まだ気づかれていないのだろうか。

「ダンゾウ様、この先にチャクラのこもった砂が散乱しています。おそらく感知式です。真っ直ぐ進みますか？ 横に道を掘りますか？」

「ふむ。ここから集落へどれくらいだ？」

「1キロくらいでしょうかね。急斜面ですので一般人なら30分はか

かりますが。それと、ここで地上に出たら、同じく急斜面の崖です。土砂崩し用の砂使いがいると思います」

「1キロか……」

ダンゾウは顎に手を当てて思案する。ダンゾウのクセに人間っぽくて気持ち悪い。

「よし。波風ミナト、うちはフガク、うちはミコト。お主らはここを50m右に進み、先に地上へ出よ。道はトグロの木遁分身に作らせればいいだろう。地上へ上がった後は、できる限り敵を引き付けよ。遅れて、我々がこの道を進み、集落で出る。お主らが引き付けた敵には土砂崩しを使うゆえ、巻き込まれぬようにな」

当たり前のように敵に囲まれることを要求するダンゾウ。こいつの道具になつたら命がいくつあつても足りないな。

「次に我々の問題だ。おそらく砂は、穴を崩壊か、毒の罠かで我々を殺しに来る。崩壊ならば木遁で防げる。毒であれば、吸い込まなければいい。1キロ程度、よもや無呼吸で走れぬ者はおらんか？」

こいつ、自分は影分身だからってなんて危険なことを言うのか。

俺はそつと手を上げる。

「なんじゃと!? 貴様木遁を使える身でありながら!」

「息を止める修行はしていません。アカデミーは一年で卒業させられたので」

「何がアカデミーか! 卒業後に真面目に修行しておれば!」

修行は真面目にやったけど、俺は長所を伸ばすタイプなんだよね。器用貧乏は魅力を感じなくて。でも、だからこそ木遁はかなり使えるじゃん! 体術だって同年代に比べればすごいじゃん!

「チッ。しょうがあるまい。貴様は木龍を出口に向けて飛ばせ。我々はその後方についていき、道が崩される前に一気に地上に出る。貴様も急いで上がってこい! 分かったな!」

「はい……」

なんか俺がダメな人みたいな言いようだな。俺頼みの作戦なのに。

俺の木遁がミナト達を連れて掘っていく。この間、俺達は待機だ。ダンゾウは念入りに突入後の動きを確認している。こういうところ

だけ見ると真面目な仕事人だな。こいつが権力者じゃなかったらよかったのに。

「風影には徹底的に木遁をぶつける。そして日向ヒザシ、お前が風影を討つのだ。砂のチヨはわしらが風遁で時間を稼ぐ。ヒアシはトグロを守れ。分かったな」

「はい」

「ええ」

と、地面が揺れた。誰かがそれなりの土遁を使ったようだ。早くも戦闘が始まったらしい。

「よし！ 我々も行くぞ！ やれ！」

「はい。木遁、木龍」

足下から飛び出した木の龍。抜け穴に沿って地面を突き進んでいく。

「よし！ あれに続け！」

ダンゾウ達が慌てて追いかけていく。

木遁分身の術！

俺は分身に彼らの後をつかせる。慎重に毒を回避しながらでも、3分くらいで上がれるだろう。本体は、安全なところでボチボチやりましようかね。大地の実でもかじりながら。

それに、確かこの付近に、土砂崩しで生き埋めにした女の子がいるんだよな。生きてたらチャクラ回収に使おう。ついでに有望なら集落に勧誘しよう。

とりあえず大地の実を一個作り、食べておく。分身2個分くらい回復したか？ 心配だから、分身もう5体くらいヒアシのもとに送ろう。こうやって定期的送っていけば、あいつらも助かるだろう。

うーん、娘はどの辺だっけなあ。

地面に手を当てて、エネルギーを感じ取る。

おっ、見つけた。思ったよりずっと下だった。抜け穴を逆戻りだな。まあ逆に進む分は安全だからいいんだが。

うわっ。すごい揺れが来た。俺の分身が大規模な土砂崩しを使ったようだ。しかもそれで、チャクラが切れて分身消えちゃったよ。ま

あ別の分身が向かってるから許してくれるだろう。しかしダンゾウ、本当に俺頼みの作戦をするな。裏切ったらどうするつもりだったんだ？

「おっ、とうっ？」

さっきの土砂崩しで、砂の忍びが5人地面に埋まった。こいつらの方が近いし、先にチャクラを取っておこう。まだ動いてるからな。地上に出る前に仕留める。

根を伸ばし、拘束。そして吸収。あっさりしたものだ。やはり地中の俺は無敵だったか。

気分のいいところで、大地の実をもう一個食べておこう。

さて、本体のトグロがこそこそやっている間に、地上では激しい戦いが始まっていた。

少し時間を遡る。まず地上に出たのはミナト達だ。敵が驚いている間にも、ミナトが若い男の首を撥ねる。別の男には、うちはフガクが起爆札つきクナイを投げつける。それは男に命中して爆発しダメージを与えたが、致命傷には至らない。男は溢れる血を無視して地面に手をつき、術を発動する。途端にフガクらの足場は砂となり、きつい斜面に沿って急降下を始める。ところが、それをトグロの木遁分身が防ぐ。大木を生み出し、地盤を支える。

「おっ、お前があああああ！」

「カルラー！ 一人で突っ走るな！」

木遁の発動を見たことで、青年団の女幹部がブチキレる。膨大なチャクラを怒りのままにトグロ目掛けて叩き込む。

風遁、大カマイタチ。

「おっと、土遁、土流壁」

トグロはもう慣れていたので、反射的に土の壁を発生させた。フガクとミコトもその内側に入る。

「余計でしたか？」

「いや、我々の火では、あれほどの風はどうにもならん」

風は巨大な土の壁をもぎ取る勢いで吹き付けていた。壁の後ろに

入り込む突風でさえ、肌が切れるほどの力を持っている。
「とんでもないですね。チャクラだけならまるで尾獣だ」

トグロは軽口を言いながら壁に木の根を張っていく。補強だ。ここまでしたらさすがに安全だろう。

トグロが思ったのも束の間、風は一層強まり、壁に亀裂が入ってしまふ。

「ヤバイですね。二人は地面にお逃げを」

「ああ、そうさせてもらう」

「ミナトは大丈夫かしら」

二人が砂に潜っていく。軽く1キロは息を止められるそうだから、嵐が止むまでも持つだろう。

その頃、木龍の後を追って集落へ出た木遁分身は、青年団のボスを追い詰めていた。

集落の守りは青年団に任されていた。おそらく風影はダムにいるのだろう。しかし20人程度まで減った傷だらけの青年団では、木の葉の精鋭を止めることはできない。

「ぐああっ！」

「ハンマー！」

「くうっ」

「バキ！」

ヒアシとヒザシの柔拳が次々に決まる。砂の攻撃は俺が木遁で防ぐ。風の刃は白眼で見切る。体術で来たらそのまま柔拳の餌食だ。

圧倒的。こちらは無傷。ミナト方面に引き付けられていた彼らは、さらに山を下っていく。

暴風を何度も出現させている例の女と、青年団のボスがほぼ同じ位置に来た。女はミナト方面の俺の木遁分身に執心だ。こっちに気づかない。

「トグロ！ この辺りを崩せ！ やつらはミナトに任せる！ 我々は体力を温存して風影のもとへ！」

この二人とは決着をつけたかったが、上官の命令だから仕方ない。やりますか。どうせ地下に本体いるしな。

「土遁、土砂崩し！」

分身全てのチャクラを注ぎ、青年団がまるごと入る一帯を土砂に変えて落とす。チャクラ切れで分身は消えていく。

ミナト方面の木遁分身は、ヒアシ方面の木遁分身が大地を土砂に変えようとするチャクラの流れを感じた。

慌ててフガクとミコトを掘り起こす。木で球体状のカプセルを作り、土砂をガードする。地面が流れ、カプセルに入ったまま落ちていく。

「すまん」

「助かったわ」

「いや、まあ、うん」

これ、俺の攻撃だから、とは言いつらい雰囲気だった。

「カルラー！」

「えっ」

女に対する土砂は、青年団のボスが砂で防いでいた。いや、他の仲間への土砂もそうだな。

ただ、遠くにいた味方は守れなかったようで、5人ほど埋まったが。宙に浮いていたのに、ミナトによって土砂に叩き落とされたやつもいたな。

ふふふふつ。あと少しだ。1年に及ぶ嫌がらせ。突然の襲撃。結果、親衛隊、警備隊が何人も死んだ。砂の難民も半分近く死んだ。風影の操り人形とは言え、自らの意志で動いていたことは分かっている。青年団は、ここで壊滅させる。

「ミナト、合わせろ！」

「ええ」

フガクが言い、ミナトが応じる。

「火遁、業火球！」

「火遁、鳳仙火！」

「風遁、大突破！」

うちは二人の火を、ミナトに風が横から扇ぐ。火は巨大化しながら

砂の忍びへ襲いかかる。

「ぐうつ」

砂のボスは、全面に砂の壁を張ることで仲間を守る。しかし火は完全には止まらず、徐々に砂を押ししていく。しかし、不意に砂に、女のチャクラが混ざった。莫大なチャクラによって砂が火を押し返す。それと、砂の壁の形が、なぜかデツカい女になった。

ならば俺は、女を犯す触手軍団といったところか？ いいね。

「木遁、挿し木の術！」

分身は消えてもいつつもりで、全力の挿し木。木の槍がドツと押し寄せ、砂の女を貫いていく。押し倒していく。そして、内部の空間に入った。

いい女は縛るだけで許しておく。だが青年団のボス。お前は確実に殺すぞ。

「ぐつ、くつ」

真つ暗な砂の中で器用に逃げやがる。体術と風遁か。もう少しで捕まえられるが、先にチャクラが切れそうだ。あとは任せたぞ、本体。分身が消える。情報が本体に伝わる。

「何!?! これほどの好機か!」

本体は相変わらず地中で女を回収中だった。死にかけの女には医療忍術さえ施した。

しかし、それらを置いて地上を攻撃せねばならない。素晴らしい好機がやって来た。

「さすがは木の葉の精鋭だ。弱っているとは言え、厄介だった青年団をこの短時間で追い詰めるとはな」

言いながら、木の根を地上に向けて伸ばしていく。地面が出る前に、八方に拡散する。狙いを定めて、今だ！ 挿し木の術！

「死ね！ 青年団！ 忌まわしき記憶と共に！」

男4人にはそれぞれに3本の槍。ただしボスだけは15本。女5人には蛸足のように根っこが出て、縛りにかかる。

「何!?!」

「やらせなっ」

「カルラー！」

例の女がボスに飛びつき、体を張って木の槍から守ろうとする。

いや、違うな。この行為に意味はない。強いて言うなら、死ぬときは一緒という感じか。

「ぐつ、ぐあああああああ！」

「うぎやあああああ！」

槍が男に刺さっていく。ボスは、女が邪魔だから、手足だけだ。この女はチャクラ吸収で利用する価値が高いからな。慎重にグルグル巻きにする。

しかし、ここまで愛が強いとなると、男を殺したら自殺するかもしれないな。どうしようか。

「ぎぎいいいつ。くつそ、がつ」

「風遁、カマイタチ」

おっと、驚いた。男が全員生きている。致命傷は避けたようだな。手足から血がドバドバ流れているが。

しかし生き残りの男達、ボス以外は10代前半に見えるな。なんか急にかわいく思えてきた。男女の愛を見せられたからだろうか。

「人間の心が、あるのなら」

どうして攻め込んで来たんだ。と糾弾したい。そうすれば誰も死ぬことはなかったのに。

落ち着けよ、俺。こいつらはもう動けない。戦えない。この後の風影やチョとの戦闘を考えれば、グルグル巻きにしてチャクラを吸い取った方がいい。

男を皆殺しにする理由は、何だろうな。たぶんない。憎いから殺したいだけだ。

考えると、決意が鈍っていく。俺は知っている。空海なら、ここでこいつらを殺さない。許すことで防げる悲劇がある。

「俺、俺の心も、憎しみに囚われたくはない」

試しに穏健なことを思い込んでみる。この辺で、やめておこう。こいつらは騙されていただけかもしれない。

だが、一度そう思うと、すつと胸が軽くなる。驚くほどあっさり、憎

しみが消えていく。殺生なんてとんでもないとさえ思えてくる。

もう、無理だな。これは。

「すまない、皆。仇討ちは諦めてくれ」

まあ、風影は殺すけども。

青年団全員を木の根で捕獲する。砂の壁が崩れていく。全員埋まる。木遁分身を一体出す。やつらを地下の抜け穴まで引っ張っていきよう命令する。ただし、扇の女だけは別だ。こいつのチャクラは尾獣並み。風影のところまで持っていく。大いに俺の役に立ってもらうぞ。

グルグル巻きにした女を抱え、地上へ出る。

「ミナト！ やつらは全員縛って地下に埋めた！ 俺はこいつを連れてダムへ行く！」

「トグロ！ どうしてここに！」

そりゃあ、俺は木の葉のために命を懸ける気がないからだよ。フガクとミコトがいるから言わないけど。

「お前も来るか!?!」

「僕は足止めを命じられ……。いや、うん。そうだね！」

登ってくる敵を足止めするのが、ミナト達の命じられた役割だ。だが、こつちにはたぶん応援が来ない。風影は青年団を使い捨てくらいに思っているからな。ミナトの今の間は、それを推測していたのだから。

とびつきりの卑劣対卑劣

「奇形が調子に乗りよって！ 作戦を理解できないのか！」

ダンゾウは俺の本体が来るのを律儀に待っていた。拳骨を一発もらってしまつたが、さすがにこの緊張感の中で鬱陶しい責任追求はなかった。

他の連中も怒っていた。ヒアシとヒザシも、口には出さないが少し不満げだった。まあ、怒るのは当然だ。忍者にとって任務は絶対だから。ミナトだけは俺に同情的だったが。

しかし、ダンゾウは俺の能力を把握しきれていない感じがするからな。過大評価で殺されないように、自分の身を自分で守る必要がある。

本体の俺が来るまでの間、ダンゾウ等に砂の襲撃があつたらしい。が、敵は全て中忍かそれ以下のレベルだったそう。やはり風影は青年団を本気で守る気はなかったのと思う。理由はたぶん、風影のウソがバレたら裏切られるから。青年団からはそういう純真さを感じた。愚かであることは間違いないがな。

「チツ。少し変更を加える必要があるな」

ダンゾウは舌打ちする。元の作戦は、とにかく電撃戦だった。

敵の増援が来る前に、全力で風影の命を取りに行く。チャクラを出し惜しみせず、日向の防御が万全なうちに俺の大規模な術を使い、一気に攻め込む。そして逃げる。風影を殺し損ねた場合、撤退のタイミングはダンゾウが見計らう。ダムに風影がいなかった場合は、そのまま撤退だ。

「おい貴様、今出している水準の分身は何体まで出せる？」

ダンゾウが俺に尋ねる。

「30体でしょうかね。本体が戦えなくてもいいなら50体はいけませんが」

これは本当だが、ウソも混じっている。脇に抱えている娘のチャクラを使えば、楽に倍近く出せるはずだ。大地の実も考慮していない。死にたくないから低めに言っておくがな。

「ならば30体でいい。そのうち15体を陽動に回し、残り15体は地中から攻めろ。貴様の本体はヒアシ、ヒザシと共に攻め込め。我々は援護に回る。波風ミナト、うちはフガク、うちはミコト。貴様らは撤退時に殿を勤めてもらう。体力を残しておけ。では先に陽動の分身を送れ。遅れて、我々もダムへ向かう」

ダンゾウの言葉にうなずき、チャクラを練る。女への縛りを強め、チャクラを吸い取る。

「うっ、ぐうっ」

吸いとったチャクラを俺のチャクラに混ぜ合わせる。そして、木遁分身の術。

言われた通り15体を方々に散らばらせる。残り15体はしばらく直進させ、潜らせる。ダムの水辺までは集落からおよそ1キロ。ダム自体が2×2キロの広さを持っており、集落から堤防まではおよそ2キロとなる。地中に潜らせる分身は、敵に出会うまでダムへ近づかせる。そこから地面に入って、水辺まで皆で一本の道を掘る。しかしそこからは分散させる。堤防まで5体送り、他は周囲に散らせる。そんな感じでいけるだろう。

不意に、ダムの方から爆発音が聞こえてきた。陽動との戦闘が始まったようだ。ここからもギリギリ見える。敵は、……ん？ 一般人？ 砂の中流にいた一般人じゃないか？ 何人か見覚えがあるぞ。

だが、何故一般人が忍である俺に立ち向かってるんだ？ しかも俺に友好的だったやつが多い。というかアレ、泣いてないか？ 嫌な予感がする。

あつ！ 自爆した!? 起爆札か！ あつちも爆発した！
なんだこりゃ!? 泣きながら突っ込んで来て、間接が変な方向に曲がったりして、一般人のほずが人間離れた動きを……。

これは、間違いない！ 傀儡だ！
砂の鬼畜野郎。生きている一般人をチャクラ糸で操って、自爆攻撃を。なんて卑劣なやつらだ。

「おのれ……」

「愚か者が……」

当然だが、日向兄弟にも見えているようだ。いつも以上に眼がピキピキしている。

「ダンゾウ殿、敵は一般人を傀儡にし、起爆札による自爆攻撃をしています」

「そうか。まあ予想の範疇だな」

ダンゾウは涼しい顔で言う。さすがは卑の国の表（裏）の顔か。

「しかし、チヨには多くの傀儡があったはず。わざわざ一般人を使う理由が解せん。単に裏切り者への見せしめなのか、果たして……」

ダンゾウはまた人間らしく顎に手を置いて考える。

「考えられるのは、土砂崩し系の広範囲の技か？ 自らの傀儡が埋もれぬよう、生きた人形を使った。……そうだな。咄嗟の判断を早めるために、可能性として心に留めておいた方がいいだろう」

と、ダンゾウが口にする間に俺の木遁分身が一体やられた。

記憶が流れてくる。裸の少女を殺せず戸惑っていたところを、チヨの戦闘傀儡にやられたようだ。許せん。卑劣なクソババアめ。

「よし！ 我々も行くぞ！ ミナト等は脱出経路の確保を頼む！」

「はい！」

「散！」

ミナト等と別れ、俺達は飛び出す。

先頭はヒザシ。少し遅れてヒアシ。すぐ後ろを俺。さらにその後ろをダンゾウ達だ。

「きゃあああああ！」

「助けてええええ！」

前方から悲鳴が聞こえる。白眼だから見える。チヨのやつ、俺の弱点をつくつもりなのか、若い女の服を脱がせてやがる。う、うれしくないんだよ！

「た、助けてくれええええ！」

「ちがっ。俺は違っ」

合計100人近くいるだろうか。木々に隠れるように、砂と川の市民がいる。忍びも紛れてるな。

「八卦空掌！」

「なにっ!? ぐっ」

ヒザシなら一発で見抜けるけどな。

さて、泣き叫びながら突っ込んでくる一般市民。ヒザシは器用に躲しつつ、白眼でチャクラ糸を見抜き、手刀で切る。が、その瞬間起爆札が爆破した。生かす気はないってことか。

「このような輩、相手するだけ無駄だ。風で吹き飛ばしっ、ぬっ!」
ダンゾウの言葉を遮ったのは、チヨの戦闘傀儡の攻撃だった。木々に隠れ、距離を置いて毒クナイを投げる。

「なるほど。大規模な術は本来の傀儡が邪魔をするということか。しかしこの程度の策ではしばしの時間稼ぎにしかっ」

と、再びダンゾウの言葉が遮られた。突然ダムの上に、巨大なチャクラが現れた。警戒して意識を持っていかれたのだろう。

そして、俺はこのチャクラを知っている。一尾のものだ。あいつめ、懲りもせず鴨になりに来たか。

「しっ、しっ、しっ、死ねえええええ! 死ねえええええ!」

一尾は絶叫し、こちらに殺気をぶつける。そうしながら、巨大な空気の塊を放ってきた。

女からチャクラをもらい、土遁。を使おうとしたが、ヒアシが俺の顔の前に手を出してきた。止めろとでも言うのだろうか。

「あれくらいは弾ける。ヒザシならな」
「えっ」

弾くって、空気の塊だぞ? どうやるんだ? 手で触れても突き抜けるだけじゃないか?

「はっ! ぬうんっ!」

ヒアシはいなすように大きく体をひねる。空気の塊を包むように、接するように手で触れ、回転を利用して横つ面を押ししていく。すごいと思っっているうちに、空気の塊は炸裂せずに斜め後方に弾き出された。

「す、すごい! なんだ今のは!」

「柔拳を極めしもののみ可能な、流の極意だ」

次々と飛んでくる空気の塊。ヒザシは全て同じように弾いていく。

木の壁が俺達の周囲を覆うのと、砂の槍が全方位から飛んでくるのはほぼ同時だった。

ずしりと衝撃が来る。さすがは風影。青年団のボスより倍は重い。ならば、女からチャクラを吸い、木遁、木錠壁。

簡単なこと。もう一枚張れば全く問題ない。相変わらず俺の木遁は砂と相性がいい。砂鉄っぽいのが、砂と同様に吸いとれる。恐れることはない。

ん？ これはっ！

「死ねえええええ！」

一尾の風の塊が俺の木の壁にぶつかる。そのまま炸裂する。

「ぬおっ」

「ぐおっ」

一撃で壁が壊れ、余波で後方に飛ばされる。咄嗟に後方の木の壁に穴を開け、皆が衝突するのを防ぐ。

と、また風影からの攻撃が来た。俺は再び木の壁で覆う。再び一尾の攻撃が来る。吹き飛ばされる。

ヤバイな。ループに入った。さすがに木の壁で破裂した空気は、ヒザシやヒアシにも受け流せないだろう。このままでは俺と風影と一尾の我慢比べになる。この間に応援を呼ばれてしまうかもしれない。

「ネイド！ ヨー！」

「はっ！」

「分かりました！」

突然、ダンゾウが部下の暗部に声をかけた。暗部二人は大きな手裏剣に変化する。

「ぬおおっ！」

そして、それをダンゾウが投げた。この方向は、何を狙ったんだ？ そつちには誰もいないぞ？

再び、我慢比べ再開。風影の攻撃。俺の木遁。一尾の風。途中でチヨと日向の攻防。風影の攻撃。俺の防御。一尾の攻撃……。が、来ない!?

「く、来るなああああ！ 来るなああああ！」

これは、俺の木遁分身!? 一部が一尾のもとへ辿り着き、攻撃を始めようだ。

今一体潰されて、情報が入ってきた。一尾はめちやくちやに暴れて木遁から逃れようとしている。俺の木遁分身はあと一歩まで来ているが、エビゾウ等がギリギリのところまで邪魔をしている。

「来るなああああ! うわあああああ!」

おっ、でも状況が変わったぞ。一尾が持ち場を離れて逃げた。まったく振り返らず、どんとん離れていく。

これで、風影を攻撃できるぞ。

木遁、木龍!

ダムの方へ木の龍を放つ。風影との距離はおよそ200。さすがに避けられるが、この間にヒザシが距離を詰めていく。

「舐めるなあ!」

「回天!」

風影の咄嗟の砂鉄攻撃。ヒザシは回天で弾く。

「回転が弱まった隙につ!」

「八卦空壁衝!」

「しゃせんわあ!」

「木遁、ヤマタノオロチ!」

砂の護衛とチヨの傀儡がヒザシに飛びかかる。それをヒアシと俺の大技で蹴散らす。あと少しでヒザシが風影に届く。

「ぬうっ!」

風影は、むしろ突っ込んできた。逃げるのがプライドに障ったのだろう。だが、それは日向に対する自殺行為。

「つあっ!」

「八卦一掌!」

「ぐぬうっ」

ヒザシは風影の突きを軽く躲し、逆に日向の奥義を叩き込んだ。風影のチャクラがグラリと揺らぐ。

「二掌! 四掌!」

「かつ、かはあっ」

よし次も決まった。これはもう勝ちだ。風影は既にまともにチャクラが練れなくなっている。

「し、死ねえええええ！」

しかしここで、途中で振り返った一尾が風の塊を放つ。これは、ヒザシに直撃するコースだ。間に合え。

木遁、木龍。

「止めろ！ 風影を討つのが優先だ！」

ダンゾウ割り込むように叫んでくる。なんだ？ 止めなかつたら風影が一尾の攻撃に当たって死ぬってか？ ヒザシを殺す必要がないだろうが！

「くうっ！」

エビゾウが風影を救いに飛び出す。到達するのは風のタイミングとほぼ同時だ。

「十六掌！ 三十二掌！」

ヒザシの六十四掌も、微妙なタイミングだ。

俺の木遁と風の塊とエビゾウとヒザシと、全てほぼ同時。若干俺の木龍が早いかな？

しかし不意に、後頭部に衝撃がきた。

「ぐっ」

「余計なこととはするなと言っている！」

ダンゾウのやつが、俺の後頭部を殴りやがった。意識が揺れる。木龍は鈍化する。これでは間に合わない。

やはりダンゾウはクソだった。人を道具としか見ていない。

「八卦空壁掌！」

「なっ」

ところが、その木龍に向かってヒアシが八卦空壁掌を放つ。木龍はチャクラの壁に押されて加速。あつという間にヒザシと風の塊の間に入り込む。

「八卦六十四掌！」

「ぐああああああ！」

「風影殿！」

八卦六十四掌はしつかり決まり、直後にエビゾウがヒザシを蹴り飛ばす。いや、ヒザシは蹴り飛ばされながら日向の奥義を発動した。

「回天！」

「ぐぐうっ」

ヒザシ、エビゾウ、風影がそれぞれ飛ばされる。そのうち風影とエビゾウはチヨの傀儡がキャッチした。

「ここまで来たら攻撃できないだろオ！ ギャーッハッハッハッハッハッハ！」

一尾はバカ笑いしながら風の塊を撃ってくる。それを今度はヒアシが防ぐ。チヨの傀儡は、俺の木遁分身が防ぐ。本体の俺はダンゾウのせいでまだ反応が鈍い。

と、ヒアシはうまくやっていたのだが、一尾の攻撃が一部ダム of 堤防に当たった。堤防が爆発し、崩れる。土砂とその奥の水が流れてくる。

「なに!? まだこんなにあつたのか！」

一度堤防を壊したはずだが、水が元の半分近くまで戻っている。半蔵達が執念の水遁で運んだか？

とかく言えるのは、今の俺ではこの水から逃げられないということ。ヒアシが助けてくれるとは思いますが、一旦戦闘は中断だな。チヨも風影を連れて逃げているし。

「チッ！ 撤退だ！ 撤退！」

と、区切りのいいところで、ダンゾウが撤退を指示した。やつは叫びながら上空へ信号弾を射つ。敵の応援が来てしまったのだろうか。

惜しいな。あと一歩で風影を殺せるところだったんだが。

笑えない少年

サソリは非常に優秀な少年だった。砂隠れにおいて、風影と並ぶ実力者とされるチヨを祖母に持ち、彼女の指導のもと彼女の以上の才能を開花させていた。順風満帆。約束されたエリート。将来風影間違いないし。そんな声が絶えなかった。

しかし、彼が齢10の時、彼の両親が死んだ。時は第二次忍界大戦の真つ只中。木の葉の白い牙との異名で知られる、はたけサクモに殺された。

それ以来、彼は無口になった。もともと口数の多い方ではなかったが、両親をよく慕い、彼等には笑顔を見せていた。それが無くなり、自閉的になった。失敗を知らない少年の心に、深い傷が刻まれていた。死体で送られてきた両親に対し、ずっと一緒にいられるようにと、傀儡にしてしまうくらいに。

彼の祖母は「木の葉を憎み、やつらを殺せるように修行に励め！」と言って励ました。一世代上の、若者の集まりに参加させられることもあった。そこでは、歴史的に木の葉がいかにかに卑劣だったかを口をすっぱく教えられ、同志になるよう誘われた。

サソリは断った。戦争に正義などない。砂も木の葉と同じくらい卑劣であると知っていた。世界を俯瞰せず、自己を省みず、風影の言葉に乗せられ、国粹主義的な感情論に突っ走る。そんな彼等は、愚かに見えて仕方なかった。

しかし、彼等は歳上の中でも優秀とされる連中だった。戦争ばかりの老世代を乗り越え、平和的な繁栄をもたらすはずの選ばれた若者が、野蛮さだけをしっかりと受け継ぎ、知能はより愚かになっている。若い世代に対する期待は消え去った。当然、現在の風影達も期待できない。

であれば、彼は何を抛り所に生きていけばいいのだろう。

この世に美しいものなどない。それを表現できるのは、芸術の世界だけだ。

齢11歳になるころには、そう悟ってしまった。

同年、戦争が終わった。風の国は、もともと少なかつた農地が戦争でさらに荒れ、インフラも破壊された。食糧難、水不足は深刻だった。川の国、火の国まで食料と水を調達しに行く。巨大な手押し車、またはラクダなどに、水と食料を乗せて国に持って帰る。サソリも受けさせられた任務だった。畑の収穫を手伝って一部をもらったり、狩りで獣を獲ったり、山菜を採集したり。やり方は何でもよかつた。指示された期間内に、指示された容量以上を持ち帰れば。人から買ってもいいが、里は金がないので自腹だ。砂隠れの忍びは、バレないように奪う方を好んだ。

サソリは真面目であり、優秀でもあるので、盗むことも盗む必要もなかつた。むしろ盗賊を事故に見せかけて殺したりして、治安維持に貢献した。また、彼はかわいらしい見た目をしているので、老婆などが勝手に恵んでくれることが多々あつた。

そんな頃、川の国が孤児や難民を集め、世話をしているという話を聞いた。それに、集めた彼らに、ダムと水路を作らせているとも。

一見、いい話だった。慢性的水不足、食糧難に陥っている風の国にとって悪くはない。働けば家と食事も提供してくれるらしい。しかし、その事業の代表が、木の葉隠れの実力者の綱手であることがいけなかつた。砂隠れでは様々な憶測が飛んだ。「戦争で職がないのをいいことに、タダ働きさせている」「孤児を新術や新薬の実験台にしている」「ダムから水路にかけて住み着き、木の葉の領土を増やす気である」「生命線とも言える水を握ることで、民衆を人質にする気である」などなどだ。

サソリは噂をそのまま信用するわけではなかつたが、木の葉も信用していなかつた。両親を殺された恨みもあつた。何か裏があるのは間違いない。ただ、エリートと称される青年団のように、風影の言葉を鵜呑みにするのではなく、自分の目で真実を確かめたかつた。

幸い、綱手は孤児を積極的に事業に参加させていた。サソリも幸の薄い孤児として、簡単に内部に潜入することができた。

最初は真面目に働いた。やけに老人と若い女性が多かつたので、サソリはかなりちやほやされた。「ちっこいクセに頑張ってるなあ。感

心感心」「うちの子にならんかね！ あんたみたいな真面目な子なら大歓迎だ！」「かつわいい！ 頭撫でさせて！」「きゃーっ！ 抱っこさせて！ むしろして！」などなど。サソリは一応潜入のつもりだったので、あまり派手なことはできず、基本的に屈辱を受け入れた。

数週働き、砂に仕送りをしに返り、再び川の国へ行つて働く。ダムは完成し、水路が広がっていく。水に群れるように、砂漠の民が集まってくる。川の国に選ばれた難民は真面目に働くが、風の国側では盗みが横行する。

そんな様子を見ながら、サソリの中で火の国に対する印象が変わっていった。少なくとも、一般人のレベルでは砂よりマシ。どころか、かなり信用できる。問題は上層部だ、と。

この時点で、綱手の組織の大まかな内情は分かっていた。

綱手がトップ。戦時中から、ほとんど一人で3年間孤児の世話をしていた。孤児、難民からの信頼は厚い。子どもの世話、インフラ整備、書類チェック、医療、戦闘員の訓練、などなど忙しく行っている。時々、木の葉から医療に関する依頼を受けている。また、月に10日は博打と酒飲みでいなくなる。その金は初期メンバーから没収している。

二番手は空海と呼ばれる男。歳は30前後に見えるが、サソリの目算では変化の可能性が高い。初期メンバーからの信頼は厚く、綱手がいない時のトップを任されている。女性ばかりの親衛隊をメイド隊と呼び、男性ばかりの警備隊を自宅警備兵と呼んでいるように、品がない。難民審査に深く関わっており、難民に少女が多いのはこいつの影響だとか。綱手と同じく戦闘員に修行をつける立場であり、上忍の実力がある。おそらく木の葉の実力者。他、苦情の対応、インフラ整備、子どもの世話、などを積極的に行っている。

三番手は豪と呼ばれる男で、主に木の葉との取引を担当する。四番手はイズモ。主にダムや水路の建設を指揮する。しかし彼等は忍びではなく、綱手に雇われている立場だ。

サソリは組織の真の目的を知るために、より細かく綱手と空海の間を調べた。すぐに見つかった怪しい点は、新薬の実験と砂の戦力の

引き抜きである。綱手は戦闘員と病人に妙な丸薬を飲ませ、その後の変化を細かく記録していた。空海は中流域にいる砂の住民と積極的に交流し、特に治安維持に貢献できる人間を奨励していた。砂の住民で戦えるものを集め、国境警備隊なるものまで作っていた。

まず、綱手が黒ということを確認する。そのために、集落から少し離れた隔離病棟の向かうことにした。ここは表向き、感染症患者や精神異常者を隔離する施設だった。しかし、こういう場所は反倫理的な実験施設にもってこいである。

サソリは、患者の家族、患者自身、ナース、等に化けながら実験の実態を調査していった。そしてある時、ちよつとした偶然から、綱手のノートを手に入れた。

大地の実はずばらしい。身体エネルギー、精神エネルギーを直接的に回復するだけでなく、チャクラの潜在量を高める効果がある。一般にチャクラの絶対値は生まれた時に決められていて、赤子から成人しても倍程度までしか伸びない。訓練によって伸び幅を広げることができるが、赤子だったころの3倍程度が限界だ。しかし、大地の実ならばその限界を遥かに伸ばすことができる。

取りすぎると嘔吐や頭痛の副作用がある。これはチャクラ量及び遺伝子に関連しているように思える。日向一族のあいつ、千手一族の私、カグヤ一族の月と竹、竹取一族の道真には副作用が見られなかった。一方、忍びの家系ではない菜穂子が丸薬と間違つて3つ食べてしまった時には、目の周辺に明確な隈が現れた。

この隈の形は、まるで鬼か天狗の化粧を塗っているようで、血管が浮き上がったものではなかった。この変化には心当たりがある。お爺様が昔見せてくれた仙人モードだったか。あれも独特の紋様が目の周囲に現れていた。詳しい仕組みは分からないが、チャクラと自然エネルギーの割合が関係しているように思える。千手の本家にお爺様の残した書がないか調べてみることにする。く

やはり秘匿性の高い実験を行っているようである。サソリは口寄せで巻物を取りだし、急いで要点を纏めた。

ノートを元の位置に戻し、次にサソリは、話に出てきた菜穂子の容

体を調べることにした。

施設から出てきたおっさんに幻術をかけ、尋ねる。

「菜穂子とはどいつだ？」

「ああ、彼女ならあそこに」

おっさんは虚ろな目で二階のベランダを指差した。17歳くらいの娘が風を受けて伸びをしていた。しかし、そこで突風が吹く。

「あっ」

娘の被っていた日除け用の大きな帽子が飛ぶ。病人らしい白い肌、細い体躯、しかしスツと顔の整った美人だった。

帽子は何の因果か、真っ直ぐサソリの方へ落ちてきた。サソリならば反射的に空中でつかんだ。

「ありがとうございます。あれ？ でも雪解けさんって帰ったんじゃない？……？」

「ふふっ。少し忘れ物をしてしまいましたね。今届けますよ」

サソリは変化対象の仕草を真似て応じた。いいタイミングで帽子を拾ったので、返すついでに話をして情報を集めようと思った。

菜穂子は表情豊かで、よく喋る女だった。細い体のどこにそんな元気がと思うほどだった。

「でね、アラレちゃんが、空海さんにいいものあげたって言いましたからね、私は何をつて尋ねたんです。この辺って店はないでしょう？」

だから花の髪飾りかそういうのかなって思いましたよ。アラレちゃんいい子ですから。空海さんには似合わないかもしれないけどね。

でもね、実際は全く予想外のものでした。何だと思えます？」

「さ、さあ。見当もつきません」

「もう！ ちゃんと考えてくださいよ！」

「はあ。ええつと、カエルの玉子とか？」

「ええつ!? それはないでしょう！ カエルの肉ならまだしも玉子つて！ 雪解さんって天然入ってるんですか？」

「はあ。すみません」

「ふふふっ、でも惜しいです。答えはね、茶色くて汚いあれでした」
「は、はあ」

「もうそれはそれは、素敵なお笑みを浮かべて言うんですよ！ 『うんこあげちった』って！ 私も思わずボケてしまいましたよ！ もう4歳くらいお姉さんのうんこだったら喜んだかもねって！」

「ええ!? そうなんですか？」

「ちよ、ちよつと！ 突っ込んでくださいよ！ ウソに決まってるじゃないですか！」

このように、終止相手のペースで押されてしまった。サソリはついに聞きたいことを聞けなかった。別人が病室に近づくのを感じ、慌てて逃げた。

翌日もサソリは病棟に潜入した。雪解けではない人間に変化し、菜穂子の様子を伺った。

病人のはずだが、じつとベッドに横たわっているわけではなかった。昼前にはマスクをして料理を作り、それを他の病人や老人に配りもしたし、洗いもした。ナースは定期的に心配の声をかけるが、菜穂子は笑顔で「大丈夫です」と言った。時に咳き込み、慌てて薬を飲むこともあった。するとナースが駆け寄るが、菜穂子は「自分出歩けます」と言つて苦しそうに自分の病室まで歩いた。ナースは心配そうに横で見守った。

明るく、強く生きようとする娘。そんな娘を手助けしようとする周囲。サソリにはそれには見えなかった。やはり一般人は問題ない。悪いのは上層部だ。

その後も、サソリは調査を続けた。病棟に限らず、博打場や訓練所や交流パーティも調べた。しかし綱手が悪という決定的な証拠は見つからず、むしろ庶民にも砂の里にも敬意を払っているように思えた。そして、人と人の助け合いによって暮らす理想的な共同体を作ろうとしているとも。

気づくと、サソリは理由もなく病棟に足を運ぶようになっていた。菜穂子が笑うと安心し、咳き込むと心配する。病気を押して働いている時には、応援したくなる。実際、密かに何度も助けた。ある時、体を支えようとして、何とはなしに胸をがっしり掴んでしまい、顔を真っ赤にしてしまうことがあった。サソリは、自分で自分に生じる感

情に信じられない思いだった。と同時に、心地よさも覚え始めていた。この世にはないと、自分で断じたはずの美しさを、人の心に感じ始めていた。

そんな時、衝撃的なニュースが入ってきた。

サソリの両親を殺したはたけサクモが、なんと自殺した。原因は、ある任務で任務内容より仲間の命を優先し、結果的に多くの命を失ったことで周囲に厳しく責められ、苛められたため。

敵討ちがしたかったわけではない。しかし、彼を憎み、木の葉に何らかの仕返しをしてやるというのは、サソリの中で人生の大きなモチベーションとなっていた。それがひよんな形で消え去った。

このままでは、はたけサクモに同情してしまう。木の葉という里、その上層部でもなく、サクモを苛めた個人を憎んでしまう。そうなる、自分は忍びとして終わってしまうかもしれない。自分はおそらく、砂の忍びよりも、集落にいる木の葉の忍びを好んでいる。市民レベルでもそうだ。だとすると、砂のために戦う理由がなくなってしまう。

サソリは己の里に対する裏切りの感情をおそれ、集落にできるだけ近づかなくなった。それでも、砂のダムと集落に対する需要を高く、戦って奪うことを正統視する演説が毎日のように聞こえてきた。

そして、とうとう集落の警備隊に死人が出る。青年団は反省するどころかさらに過激化した。

「我が国民は何百と殺され、何千何万と奴隷のような扱いを受けている。我々がこれだけ我慢しているのに、やつらはたった一人、正義の鉄槌に裁かれただけで泣きわめく。何様のつもりだ！」

ひどく歪曲し、戦争するのに都合のいい部分ばかり切り取った演説だった。

このままでは戦争になる。いや、もう戦争は止められない。風影、自分の祖母、青年団を含め、木の葉と戦いたい連中が多すぎる。

サソリは焦り、自分でも理由が曖昧なままに、集落へと走った。祖母には土地の偵察のためと伝えた。

ところがサソリは、集落へ行く前の川の中流で立ち止まってしまった。菜穂子の顔を思い出すと、恥ずかしい気持ちになる。助け出したく思う。しかし、忍びの自分がその感情を認めない。任務は絶対だ。余計な感情に流されるなど。

「綱手と空海を殺れば戦争は止まるか？ いやいや、そんなはずがない。木の葉は千手の姫を殺した砂を許しはしないだろう。全面戦争になる」

「ちよつ、ちよつとあんた！ 何ぶつそんなこと言ってるのよ！」

聞かれた!?! 殺すか!?!

サソリは慌ててクナイに手を伸ばす。人通りの多い道沿いで独り言を言うという、忍びにあるまじき失態を犯した己を呪いながら。

「えっ」

ところが、己に話しかけてきた女性を見た瞬間、体が硬直してしまった。

なぜ、ここにいる？

スツと整った顔。青みがかった柔らかい髪。今は短髪にしているが、こちらの方が明るい印象で、彼女には似合っていた。

「ど、どうしたのあんた？ もしかして私に一目惚れしちゃった？

いやねえ、最近のガキはませてて」

菜穂子はくねくねと体をひねった。小ぶりの胸とお尻が揺れる。サソリはこんな人通りの多い場所でやらないでくれと思いつつ、凝視してしまった。

「はっ。あ、あんた。なぜここに？」

「あんたあ？ あたしは歳上よ。まったく口の聞き方がなってないわね。それと、なぜここにいてるかって？ そりゃあ住んでるからに決まってるじゃん」

「だが……」

「うん？ ああ、あんたもしかして、私が施設にいたって知ってるの？ 祭りの日に歌ってくれた子かしら？ ならありがとうと言っておくわ。風邪は3ヶ月くらい前に治ったの」

「そ、そうか。それはよかった」

「うん。よかったよかった！ だっはっはっはっはっはっは！」

サソリは、うれしいはうれしいが、ちよつと元気になりすぎたかなと思つてしまった。もともと乏しかった乙女つぼさが完全に消えてしまった。

「あ、あんた。近頃この辺を離れる予定はあるか？」

サソリは、なかば無意識に尋ねた。

「ん？ ないけど？ なんでそんなこと聞くの？ とうかあんたじゃなくてお姉さんと呼びなさい」

「い、今すぐここを離れる！ 木の葉へ行け！」

「はあ？」

「砂でもいい！ 岩でもいい！ とにかくここはダメなんだ！」

「はあ？ 何言つてんだガキイ」

「わ、分からず屋！ 愚か者！」

元来口数の少ないサソリにとって、これでも頑張った方だった。忍びとしての自負と、女性への気恥ずかしさに押され、これ以上は無理だった。サソリは走つて自宅へ帰つてしまった。

ところがその翌日、任務が言い渡される。中忍試験で綱手のいなくなった隙を狙い、集落へ襲撃せよと。サソリは青年団と共に前線で戦うことを求められた。

しかし、サソリは珍しく風影に要求した。

「裏切り者の始末がしたい。砂出身の難民が多い中流域に行かせてくれ」

風影は目を細め、「ほう」と言つて請け負つた。別れ際には「さすがはチヨの孫よ。見所がある」とも。

サソリは一尾を封印した壺を川の中流域に運び、解放する役目を任された。厳密にはその小隊の一班員にだが。

自分が、罪を背負うのか。あつらを殺すのか。忍びとは……っ！

さまざまな苦悩を覚えながら走つた。やがて目標ポイントにたどり着く。しかし何の因果か、一番いてはいけない人が、そこに来てしまった。

「あれ？ あんたこの前のガキ。周りにいるのは知り合い？ そんな

ところで何を」

「チツ、見られたか」

「めんどくせえ！ 早く解放しろ！」

小隊長が部下に封印を解くよう命ずる。部下は一人が封印を解き、もう一人が菜穂子を殺しにかかる。

「えっ、なに？ きゃあああつ」

「が？ がは……っ？」

しかし男の刃は菜穂子に届かなかった。振り上げた腕を下ろす前に、サソリによつて首を撥ねられてしまったからだ。

「ガキイ！ 何を！」

「貴様！ いくらチヨ様の孫とは言え！」

小隊長と部下が警戒体制に入る。しかしそこで、より危険な怪物が壺から飛び出した。

「クツソチビ人間どもがアアア！ よくもこの俺をオオオオ！」

「待っ！」

「お、おいコラー！」

一尾はいきなり暴れだした。その足に踏みつけられ、また尻尾に激突し、小隊長と部下は死んだ。サソリは、菜穂子を抱き抱えて逃げ出した。

菜穂子はしばらく、「なんだあれ！ なんだあれ！」と泣き叫ぶだけだった。一尾が暴れる度に、住民の命が散った。

しかし、集落方面から急速に、巨大なチャクラが近づいてきた。赤いチャクラを纏った女だった。確か突然やってきて、空海の補佐にまで任命された実力者。戦闘部隊の指導も行っていた。

そいつは、突っ込んできた勢いのままに激しく一尾を殴り付けた。一尾は明確なダメージを負い、怯んだ。女はそこで巨大な鎖を体から出した。鎖は一尾に巻き付き、拘束した。一尾は縛りから逃れようと暴れるが、行動範囲は劇的に狭くなり、周辺への被害はなくなった。それから程なく、空海と呼ばれる男がやって来て、なんと木遁によつて一尾を縛ってしまった。程なく、一尾は元の壺に封印された。

サソリは空海的能力に驚愕しつつも、頭は冷静だった。住宅の外れ

で、そつと菜穂子を降ろした。

「あんた、砂の忍びだったんだね」

「今日、ここは戦場になる。死にたくなかったら逃げろ」

「なんだつて!？」

菜穂子は驚愕した後、街の中心へ走り始める。

「な、何をやってる！ 逃げるなら木の葉方面だ！」

「あんたの言っていることが本当なら、皆にも伝えなきゃ逃げられないだろうが！」

「バ、バカが！ 自分の命を一番に考えろ！ せつかく難病から回復したんだろうが！」

「だからこそだ！ 皆にはお世話になった！」

ああ、もう。全くこいつは、世話がかかる。

サソリは一瞬で菜穂子の目の前に移動する。

「うわっ！」

驚いて尻餅を着きそうになる菜穂子を、サソリは腕を掴んで支える。そして、そのまま幻術をかける。

「全力で木の葉方面へ逃げろ。生き残れるように」

菜穂子は虚ろな目で木の葉方面へ走っていった。

空海と赤髪の女が全住人に避難を呼び掛けていた。国境警備隊が30人総出で国境沿いに配置した。当然、この程度砂が本気になったらもの数ではない。相手になるのは空海と女だけだ。

一尾がいなくなったことを察知し、こちら方面の青年団が国境を破って攻め込んだ。空海、女、国境警備隊との激しい戦いが始まった。恐るべきことに、赤髪の女は九尾を口寄せした。人柱力だったのだ。その事実は別の意味でもショックだった。

「これほどの兵力を隠していたとは。やはり木の葉はここを前線基地にするつもりで……」

その後サソリは、チヨが来るまで傍観に徹した。そのチヨには、青年団を見殺しにしたことについて尋ねられたが、「愚か者がどう死ぬか見たかった。足手まといはいらない」と答えた。

空海らは上手く九尾を盾にし、砂の猛攻を防いだ。木の葉から若い

男の増援もやってきた。サソリとチヨは一時人質に取られるほど苦戦した。しかし、初めに空海が脱落し、彼の出していた分身が消えた。難民の足が急激に鈍化する。しかもそこで、風影らがやってきた。

今度は赤髪の女が1000近い影分身を出した。うち半分が戦い、半分が難民を連れて走った。しばらく後、木の葉の増援が30人ほどやってきた。人数は少ないが、精鋭が多かった。

激しい戦いの中、赤髪の女の影分身が一斉に消えた。本体が気絶か死んだかしたのだろう。九尾に変化がなかったので気絶の可能性が高い。

とかく、女が消えて再び難民の脚は鈍化した。混戦の中、砂の忍びは一部難民にたどり着く。そして、あるいは反射的に、あるいは意図的に、難民を殺していく。木の葉の忍びにも、大規模な術で難民を巻き込んで死なせるものが数人いた。

サソリは我を忘れて走った。菜穂子を探した。しかし、この混戦の中見つけ出すのは至難。そう思っていると、暁とかいう謎の連中が木の葉側で参戦してきた。こいつらが意外に強かった。さらに、山椒魚の半蔵が突然帰還してしまい、砂隠れに動揺が走った。風影は暁を敵から外すために、一旦対話のテーブルにつくことにした。

休戦はなかったが、戦闘は定期的に行われた。サソリは条約の一文「一般人を巻き込まない」を実践するべく、積極的に道に迷った難民を拾っていった。木の葉に行けとまでは言えず、数時間前に奪った集落に行けと命じたが。

さて、そんな迷った難民の中に、菜穂子はいた。サソリは一安心し、彼女を連れて集落へ戻った。

風影は、サソリ、チヨ等を集落ではなくダムに集めた。木の葉が攻め込んできたときの対応を話し合った。

「日向を我が磁遁で、木遁使いを一尾の風遁で封じる。守り、足止めはお主に任せるぞ」

「あたしやの人形は安くないんだ。そんな使い捨てに使うより、いい駒がある」

「ふっ、俺もそう思っていた。愚かな裏切り者にすばらしい花道をく

れてやろう」

そして、風影とサソリの祖母は最悪の作戦を思い付いてしまった。生きている住民を操り、自爆特攻させるという。

「あたしや戦闘用の傀儡で遠くから援護するけんね。サソリ、あんたは自爆人間を操りな」

しかも、その役目はサソリに割り当てられてしまった。

忍者としての義務。自分の本当の願い。2つの間で揺れながら、しかしサソリは優秀な忍者だった。悩みなど感じさせない巧みさで人間を操り、見事トグロの木遁分身を止めることに成功していた。チヨに女を裸にするよう命令された時さえ、すぐに従った。

しかし、菜穂子だけは、忍者の頭で動かしていなかった。服を着せたまま、ダム方面に走らせた。木遁分身と戦わせ、わざと全身を水につけた。そしてチャクラ糸が切れても、起爆札が爆発しないところを見せた。

風影は日向ヒザシとの戦いに敗れた。八卦六十四掌を受けて虫の息になった。チヨが指揮を取り、中流域まで部隊の撤退を命じた。ほぼ同時、ダンゾウも撤退を指示しており、木の葉の忍びも引いていった。

サソリは山の峠で、去り行く両者と高笑いする一尾を眺めた。傍らに気絶した菜穂子を置いて。

撤退せずに動く影がいくつかあった。鬼の姿をした木遁使いの分身。彼等は難民を救助している。応援に来た砂の忍び。彼等は木遁分身に戦いを挑み、あるいは敗れ、あるいは一尾の風遁の爆破にやられていく。木遁分身も一尾の攻撃で徐々に数を減らしていった。彼等は難民を庇って一尾の攻撃を受けていた。

このままでは難民が助からない。サソリは難民を操り、雨隠れ方面へ下山を始めた。暁という組織なら、彼等を受け入れてくれるかもしれない。そんな狙いがあった。

さて、この翌日、サソリは暁に出会うことができ、無事菜穂子等を弥彦に手渡す。この時に「お前も仲間にならないか？」と誘われたが、断った。「俺にそんな資格はない。それに、やらなければならぬこ

とがある」と言つて。

サソリはその日の夕方に、砂の中流域へたどり着いた。チヨの言葉通り部隊が集まっていたが、様子が変わった。腹を押さえて苦しんでいた、全身に発疹が出ていたり。話を聞いてみると、どうやら木の葉が水路に毒を撒いたらしい。

何かある予感はしていた。ダンゾウが戦闘の途中で、関係のない方向に人の変化した手裏剣を投げた。思い返してみれば、あれは砂の小川がある方向だ。

やはり木の葉は卑劣。しかし砂に同情する気も起きん。

サソリは、前日決心していたことを、今夜実行することにした。

深夜、サソリはひっそりと風影の眠るテントに近づいた。見張りは外側に意識が向いており、内側は無警戒だった。

音もなく忍び込み、クナイを取り出す。吐息を立てる標的。その首もとにクナイを起き、スツと引く。呆気ないものだった。

第三次忍界大戦へ ダンゾウの策

ヒアシに連れられ、一尾の攻撃圏から脱する。

ほどなく、意識がはつきりしたので降ろしてもらった。しかし、木の葉の精鋭の足が速すぎる。追いつけない。

「トグロ、その女は置いていけ」

ヒアシが戻ってきて言う。女は隙間なくグルグル巻きにしてリュックのように背負っているが、白眼だから中身が見えたのだろう。

しかし、捨てる気はない。彼女は重要な戦利品だ。他の青年団の捕虜もな。女を担いでなかったとしても、どうせ木の葉の精鋭には追いつけないし。

「いえ、むしろ僕を置いて行って欲しいです。地面をゆっくり進んで帰りますので」

「そういうわけにもいかん。我々は3人でチームだ」

ヒアシはスツと前方のヒザシに視線を移す。

「ヒザシ！ こちらへ来い！ 我々は例の抜け穴から脱出する！」

これは、なんか悪いな。俺は彼等を放って自分の命優先で動いたのに、彼等はこんなレベルで仲間意識を持ってくれるとは。忍者の習慣もあるかもしれないけど、信頼してくれている感じもする。俺は彼等の父親を殺した男なのに、何故だろう。

集落から抜け穴に入り、入り口には木遁分身の見張りを置いた。

抜け穴の途中で、俺が捕まえていた砂の青年団と鉢合わせた。彼等は合わせて16人いたので、俺はさらに8人木遁分身を出し、両肩に担いで走った。もうチャクラは俺も女もギリギリだった。

木遁分身から、その後のダムのは状況は入ってきていた。自爆特攻の後、放置されていた捕虜が心配だった。一尾の攻撃と砂の増援から彼等を守らなければならない。正直かなり分が悪かった。

しかし、庶民は突然チャクラ糸に操られ、雨隠れの方向に下山を始

めた。その時、傀儡使いのガキが、ある分身に「後は俺に任せろ」と目で言っていた。と思う。思うのだが、本当に任せていいのだろうか。

悩んだところで、俺個人ではもうあそこに行けない。ダムにいた30体の木遁分身全て、ほどなく一尾と砂の増援に消されてしまった。第二ダムに着いたのは夜が明ける前だった。

深夜だが要塞付近は慌ただしかった。綱手を中心に、動けるもの総出で怪我人の治療に当たっていた。

「遅いぞ！ そいつらはなんだ！」

と、ダンゾウに見つかってしまった。捕虜にした青年団も一緒に。しかし、このダム近辺においては、綱手とこいつの立場は同じ。

ダンゾウは綱手に命令できなかつたはずだ。

「彼等は砂の忍びです。もう捕虜として綱手さんに預けました」

だからこう言っておけば、ダンゾウは彼等を奪えないはず。怒るだろうけどね。

「なんだと!? 初めから最後まで勝手なことばかり！」

やっぱり怒った。

ダンゾウはズカズカと荒々しい足取りで近づいてきた。俺の目の前で止まると、乱暴に襟首を掴み、持ち上げる。拳をふりあげる。

「修正してやる！」

「ぐうっ」

かなり強力な拳だった。痛い。骨に染みだ。戦闘中に受けた全てのダメージより大きいかもしれない。

あつ、でもヒザシを助けようとして後頭部を殴られたやつの方が意識には効いたな。あれも結局ダンゾウがやったわけだが。

「まだだ！ 数々の命令無視！ 任務の放棄！ 怠慢！ 話にならない！」

「ぐっ、くっ。ぐききっ」

もう一度顔、次に腹、再び腹と殴られた。俺の服が伸びきって破け、それを契機に暴行は止んだ。

「反省の色が見えん！ 何か言ったらどうなんだ!?!」

どうせ理由を言っても認めないくせに。言い訳するなどか言ってくるんだらう。その手には乗らんよ。

俺は立ち上がり、軽く頭を下げる。

「申し訳、ありませんでした」

「なんだと!?!」

結局怒るのか。

「申し訳ありません」

「何が申し訳ありませんだ! 悪いと思っっているなら初めからするな!」

「不都合なことをしまったようで、申し訳ありません!」

「なにが不都合か! 自分が何をしてしまったかも分からないのか!?! 任務に従うのは基本の基! 貴様の勝手な行動で、結果的により多くの同胞を失ってしまうことになるのだぞ!」

「はい。申し訳ありません」

決して謝罪の理由を明かさない。明かすとしても相手の行動に理由を求める。これ、野蛮人に付け入れられないための知恵。

「何がはいか! やはり日向では教育し切れん! わしが直々に」

ダンゾウは欲を漏らしつつ、再び俺に接近する。今度は蹴りあげようとする。しかし、その足が俺に届くことはなかった。

「日向、ヒアシィ」

「そろそろ止めていただきたい。こやつは私の部下だ」

ヒアシが、間に入ってダンゾウの蹴りを防いだからだ。ダンゾウはヒアシを忌々しそうに睨む。

その感情に呼応するように、ダンゾウの部下がヒアシの回りを囲う。彼等は手にクナイを持ち、逆らうなら容赦しない、と殺気で脅す。当然、ヒアシには通じないが。

「名門を名乗ったところで、たった一部族。日向1つで木の葉という巨大な組織に楯突けると思うなよ」

「その発言は、日向に対する重大な裏切りだ。もつとも、ダンゾウ殿。あなたこそ木の葉の一人間でしかないことを理解した方がいい」

「なんだと!?! 若造ごときがこのわしに向かって!」

「無礼であるぞ！ 上官に向かって！」

ダンゾウの怒りに呼応するように、ダンゾウの部下の一人がヒアシへ飛び出した。しかし彼のクナイもヒアシに届くことはなかった。

「ぐっ」

部下は突然転び、地べたに押さえつけられる。彼の上に、ドンと綱手が乗っていた。

「いい加減にしろよ、貴様」

綱手がダンゾウを睨んで言う。

その声を契機に、近くにいた親衛隊と警備隊が動き出す。他のダンゾウの部下2人も無力化される。一人は後ろ手を拘束され、一人は喉元のクナイを当てられて。

「くっ」

「なんのつもりだ？ 貴様等？」

二人を拘束したのは長袖と初だった。彼等の後ろには、俺たちを囲うように円形となって、親衛隊と警備隊が立つ。

俺が殴られているときに、彼女等が殺気だっているのには気づいていた。我慢できず出てきてしまったのだろう。

しかし、味方同士のやり取りとは思えんな。これが木の葉か。

「チツ。貴様等、覚えておけよ」

ダンゾウはそう言って引き下がった。

「離してやれ」

綱手の声で、ダンゾウの部下達の拘束も解かれる。

「汚い手で触ってんじゃねえ！ 余所もんが！」

「貴様等、後悔しても遅いぞ！ 死よりも苦しい地獄を味わうことになる！」

彼等は汚い捨て台詞を吐いて去っていった。

さて、後味が悪くなつたが、戦争はまだ終わっていない。明日に備えて早めに寝ることにする。チャクラも体力も限界だ。

捕虜は全員俺の部屋に持っていき、グルグル巻きにしたまま寝かす。俺、ヒアシ、ヒザシも俺の部屋で寝る。ハーレムや子だくさんを想定してかなり大きくしてあるから、こういうこともできるのだ。

翌日は、10時に広場へ集合となった。寝ているうちに初が体を拭いてくれたので、風呂には入らず、ギリギリまで寝た。朝食は軽くとった。

「皆知っていると思うが、昨夜の戦闘では我々の精鋭が敵の本陣へ乗り込み、見事、風影を戦闘不能に追い込んだ。やつは既に死に体。経絡系を破壊され、チャクラを練ることすらできぬ。しかし、ここで歩みを止めてはならん！我々がやつとつかんだ平和を、心なきやつらは当然のように破った！拡張主義、覇権主義、野蛮人であるやつらの、強欲な意志を砕かねばならぬのだ！徹底的に！恐怖を魂に刻み込むのだ！二度と逆らえぬように！ひいてはそれが、後の五大国による国際情勢に影響する！木の葉の絶対的な力を世に知らしめよ！我々の栄光のために！」

などという演説の後に、進軍となった。今回は前回の奇襲と違い、コソコソしない。風影を殺し、一気に風の国へ押しかけ、大名に敗北を認めさせるらしい。

事前に情報があつた通り、砂の忍びはほとんどダム付近から引いていた。雇われ忍者や、情報が伝わっていなかった砂隠れの下忍、中忍は少数いたが、上忍はゼロ。彼等程度ではこの大群を前に何もできない。

ある者はいきなり土下座で助命を求め、ある者は無駄と知りつつ突っ込んできて、ある者は逃走を図って簡単に捕まった。捕虜は、即座に自殺するものとダンゾウに従うものとだいたい半々だった。捕虜のくの一を犯そうとする輩もいたが、ヒアシの視界に入ったものは柔拳の餌食となった。

いくつか罨があつたが、全て白眼や犬塚の鼻で見抜けた。

特に問題なく、30分ほどで集落にたどり着いた。さらに1分後、ダムにも。

集落はここ2日の戦闘で荒れていた。金目の物が盗まれた跡もあつた。逆にやつらが置いていったものもあつた。突然の襲撃だったから、物を動かす余裕がなかったのだろう。お互いに。

ダムは一尾の攻撃で完全に決壊していた。残った水は5%くらい

だろうか。今いる忍者160人（残り40人は死亡または重症）なら賄えるが、中流域の街は縮小する必要があるな。

3日ぶりに集落で昼食を取る。ここは温かな食卓の記憶しかないので、おっさんとの食事は妙な感じがした。

一部ダムに見張りを残し、俺達は中流へ下山を始める。しかし、半分も進んでいない頃に、ダンゾウから撤退の合図があった。

不思議に思いながらダム付近の広場へ戻る。ダンゾウを前に整列する。

「砂か、雨やも知れんが、愚かなことをした。上流の川に毒を流すなど。非武装一般人に対する無差別攻撃だ。およそ文明的ではない。何より、自然を汚した。子々孫々に至るまで報いを受けることになるだろう」

ダンゾウは怒りと無念さを滲ませて言った。

衝撃的な内容だろう。ほどなく木の葉の忍びから怒りの声が上がった。

「なんて外道なやつらだ！」

「許せない！ 身勝手が過ぎる！」

俺も、砂隠れの横暴にムカついている時に、チラツと毒流しが頭に過ったことはあった。が、善良な人間を無差別に殺してはいけないと、すぐに取り消した。

それを、実行してしまった連中がいる。とんでもないことだ。俺が救いたかった連中の生き残りは、ほとんど木の葉か第二ダムへ逃がしたが、砂側の中流下流も全員が悪というわけではない。合計2万人近くいたから、たった1%善良だったとしても200人になる。これは集落の初期メンバーよりも多い数だ。

犯人は、ダンゾウ曰く砂か雨。なるほど、風影が戦えなくなつて、木の葉に制圧されて奪われるくらいなら、汚染してしまえというのは理にかなっている。中流下流の自国民が餓えることになるが、やつらにとっては民衆より忍び、いや忍びの主流派が重要なのだろう。特に、もし雨隠れが犯人ならば、風の民はどうでもいい存在だろうしな。

だが、何かが引つ掛かる。なぜだろう。ここでやつらが毒を使うと

は思えない。非戦闘員を操って自爆特攻させたやつらだから、何をやってきてもおかしくないはずなのに。

ダンゾウは急遽部隊の進軍を止め、砂に使いを送った。『毒流しの犯人はおそらく雨隠れの忍びである。やつらを討つために共に戦うならば、これ以上は攻め込まない』と伝えるらしい。犯人が雨隠れではない可能性もあるが、砂が木の葉と停戦して雨隠れと戦うなら、木の葉にとっては吉だ。砂にとっても、木の葉と戦うよりマシだろう。

返答までに与えられたのは3日。砂の上忍が全力で走れば、大名の意向を聞きに行つてこちらへ帰つてくることもできる。誰が毒を撒いたかの調査も、時間は短いが可能だ。雨隠れが犯人だと突き止められないかもしれないが、砂隠れのような野蛮な組織は、真実よりも目の利益で動く。緑化計画の過程で身をもって知ったことだ。

状況、民族性などを利用した、見事な策と言えるだろう。ダンゾウが初めて優秀な指導者に見えた。もつとも、信用などできないし、今回の策も裏があると思えてならないが。

とかく、砂の返答次第では雨隠れと戦争になる。あつちにいる市民への避難勧告と、暁の対応を確認するために、俺は木遁分身を雨隠れへ送った。

二枚舌、三枚舌

暁の本拠地に行くと、小南が出迎えた。

「あなたが私達に会って初めにしたこととは？」

「お前を人質にとつてお前たちの情報を集めた」

「いいでしょう。着いてきなさい」

簡単な本人確認をし、内部へ入る。罨や頑丈そうな壁が基地の周囲を囲っている。俺の集落より物騒な感じがするな。まあ安全のためには必要だと思うが。

基地内部に建物は10ほど。人数は100人くらいと聞いている。俺のような木遁使いがいないから、貧乏なこいつらはギユウギユウ詰めで暮らしているようだ。エロい。

長門、弥彦等は、ちょうど傀儡にされた風と川の民約50人にスーぷを与えているところだった。あの傀儡使いのガキは無事彼等をここへ送り届けたらしい。

しかし、ここも貧乏だから具は乏しい。これに加えて木の葉にいる孤児50人は無理だな。今でも相当無理をしていると思う。まあダムと集落は取り返せたから、全員こっちで引き受けることになるだろうが。

「よお。俺も手伝おうか？」

「………必要ない。それより木遁で何か食べるものを出してくれ」

弥彦が応えるが、俺と目を合わせようとしない。長門は口も利かない。まだあの日のことで拗ねてるんだな。

「いいけど、この体は分身だからそんなに多くは出せないぞ」

「なるほど。木の葉に魂を売ったということか」

「いやいやいや、あの里のことはめちやくちや嫌いだ！ 人質を取られて無理矢理従わされているようなもんだぞ！」

「ここは言つとかないとな。」

「ふんっ。どうだかな」

おっと、やっと長門が喋った。ニヒルな感じで笑いながら。

俺は難民のみならず暁含めて全員分の芋と豆を用意した。チャク

ラがギリギリになった。どうせ話し合いが終わったら分身は消すからいいけど。

食事を配るときに、一言二言声をかける。少年少女は素直に礼を言ってくれるが、おっさんおばさんには不満げな人間もいる。

「しっかし、空海さんが木の葉の若い忍びだったとはなあ。綱手さんの部下だから当たり前っちゃ当たり前だが」

「木の葉のことは嫌いなんで、綱手さんと知り合いのフリー忍者くらいに思ってください」

たいていは、木の葉の忍びだったことに言及された。大国に挟まれて、戦争の度に無茶苦茶に荒らされてきた人達だから、思うところがあるだろう。

「お前のせいで酷い目に遭った！ 何が助け合いの精神だ！」

「私は趣味で人助けをしていたんです。あなたは自立する能力があるようですから、援助を打ち切ります」

「いや待て。その理屈はおかしい」

今回の戦いの責任を俺に求めるやつもいた。砂の中流域の人間に多かった。辛い目にあつて誰かに当たりたくなっているのは分かるが、俺はそんな時でも甘くない。特におっさんおばさんに対してはな。

「私の目の前で弟も親友も死んでいった！ どうして守ってくれなかったの！ 山の人間ばかり鼻負して！ こっちには誰も助けにきてくれなかった！」

「ごめんな。それは俺が読み違つたんだ。あいつら砂の忍びだから、風の国出身のお前たちは殺さないと思っていた。でも、俺達も遊んでいたわけじゃないんだ。青年団と戦つて、戦闘員は4割近く死んだ」

「そ、そういうことは聞きたくないのよ！」

「安全つてのはタダじゃないんだ。命を懸けて勝ち取らなくちゃいけない。今回は負けてしまった」

「ちがつ。うっ。ああつ、もうっ。うううっ」

美少女には甘いけどな！

俺に怒鳴りながら泣き始める少女。俺が抱き締める流れだ。しか

しその前に、後ろにいたイケメンが抱き寄せた。おいコラア！ 彼氏かてめえ！ こいつの男ならお前が愚痴聞きやがれアホんだらがあ！

なんてことがありながら、全員に食事を配り終える。食べながら、長門、弥彦と話をする。

「俺達がダムを取り返したのは知っているな」

「俺達？ お前はやはり木の葉の人間になったのか？ いや、元々そうだったな」

「長門、いちいちトゲを刺さなくていいでしょう」

小南もやってきた。後ろに大勢の子どもを連れながら。特に男子がうれしそうに小南の足や尻に抱きつく。エロガキだな。

「ダムの次に、中流域へ進軍した。しかし途中で川が汚染されていることが分かった。誰かが毒を撒いたんだ。ダンゾウは雨隠れか砂隠れの仕業だと言っている。木の葉に奪われるくらいなら、使えなくしてしまえとな。特に雨隠れの可能性が高い。そこで一旦砂隠れと戦い、協力して雨隠れを討つという話になっているんだ」

一気に話したが、弥彦達の反応が薄い。どうということだ？

「お前達、俺はここが戦場になるかもしれないと言ってるんだぞ？」

「ええ、知ってたわ。こっちにも木の葉の使いが来てたもの」

「こっちにも使いが？ どういうことだ？」

「要するに、木の葉は砂隠れと雨隠れを戦わせたってことだな。こっちに言ってきたのは『砂が川に毒を撒いた。砂はそれを雨の責任にすることで、木の葉と停戦しようとしている。やつらの狙いは木の葉と協力して雨を奪うことだ。卑劣な砂の手を討ち砕くために、諸君が奮闘することを願う。』って感じだった」

弥彦が呆れたように言った。

なるほど。なるほど。つまり、木の葉は毒を理由にして砂と雨を戦わせ、自身は傍観に近い形で二里を消耗させようとしているわけだな。そして最後には木の葉が漁夫の利を得る。

ありえる。むしろダンゾウらしい手だ。となったら、木の葉が毒を撒いた可能性も出てくるな。なぜ気づかなかったんだろう。目から

鱗が落ちるとはこういう感覚だろうか。

「だが、もしダンゾウが毒を撒いたのだとしたら、木の葉はとんでもないことになるぞ。ダンゾウは綱手、火影の主流派から決定的に切り離される。あいつは大勢の部下がいるから、下手したら木の葉が2つに割れて戦争になる。当然、そのチャンスに他の5大国も黙っていない。第三次忍界大戦に突入だ」

「させないさ。俺達かな」

弥彦が決意を秘めたような目で言う。

ありえん。お前には無理だ。

「でもね、たぶん毒は砂が撒いたことになるわよ」

ふと、小南が言った。

「どうしてだ？」

俺が尋ねる。弥彦と長門も不思議そうな顔をして小南を見ているから、彼等にも話したことがなかったのだろう。

「雨隠れは砂隠れと手を結んだことで、岩隠れから攻撃を受けた。木の葉隠れも敵に回した。雨隠れだけでは絶対にこの2つの大国を相手にできない。しかし頼りにしていた砂隠れは、たった一夜で木の葉隠れに風影を倒された。これでは砂にも期待できない。このままでは滅ぶしかない。ところが、五大国最強の木の葉が、雨隠れが砂隠れへ攻撃する条件で手を差し伸べると匂わせた。どうかしら？ 半蔵なら裏切るんじゃないかしら？」

「ちよつ、ちよつと待て！ 岩隠れの侵攻ってそんなに激しいのか!？」
「ええ、かなり激しいわよ。既に10分の1くらい領土を奪われた。というより、国境は常に戦争状態よ。忍界大戦が終わってからもずっと続いているわ」

「それは知ってたが。……うーん。そうすると、ダンゾウの策が成功してしまいそうだな。腹立つことに」

恐ろしい男だな。ダンゾウ。利益をチラつかせて、敵を惑わせ、同士討ちさせる。正義を語って民衆を操りながら、疑念によって民衆同士の信頼関係は崩していく。信じられるものは何もない。しかし指導者は信じるしかない。

そうやって独裁者の地位を築いた人間が、いたような気がする。

「いずれにせよ、毒を撒いた犯人は明らかにする。その上で、これ以上戦乱が広がらないように積極的に話し合っていく」

「だな」

おいおいおい！ この薄汚れた世界のどこに話し合いの余地があった!? やるとするなら指導者の糾弾とか民衆の教育だろ！ 長門の当然のような『だな』がやけにムカつくんだけど！

言ってもケンカになるだけだろうから、言わないけどね。そろそろ本体に情報を渡したいし。

内乱分子を確保せよ

水路の中流域、砂の駐屯地はすさまじい荒れようだった。

撤退後、チヨは風影の詳しい容態を上忍以外に隠していた。士気に影響すると思っただからだ。風影が表に出ないだけでもまずいが、そこは自分が演説でなんとかする気でいた。

そんな時、川から毒が流れてきた。一部の忍びは気づかずに飲み、苦しむことになった。他の忍びにも水の補給に影響が出た。チヨは地下水を掘り当てさせたり、庶民の井戸などから水を没収することで対応した。忍びは潤ったが、庶民は渴いた。毒と知りつつ川の水を飲み、死ぬ者もいた。民衆の砂隠れへの不満が高まった。

「恨むべくは卑劣な木の葉！ やつらに対しては、こちらが死ぬか相手を殺すかしかない！」

その不満は、演説によって沈めた。背水の陣。一般人含めて、玉砕の覚悟でなければ木の葉には勝てない。木の葉に破れるはずなわち死を意味する。そんな内容だった。

半分程度の庶民はそれで納得した。しかし、もう半分は空海の甘さを信頼しており、殺されることはないだろうと思った。玉砕などんでもない。しかし、忍者相手に一般人が抗議してもどうにもならない。重要なのは砂隠れを裏切るタイミングである。

さらにそこへ、木の葉から使いが来る。『毒を撒いたのは雨隠れである。真の悪を共に討つのであれば、休戦も可能である』という内容だった。これにより、チヨの言った戦うしかないという言葉の信憑性が薄れた。やはり玉砕などんでもない。庶民が一気に反チヨへ流れた。

木の葉は中流域に攻め込まなかったが、砂も動けなかった。

単に木の葉の提案が魅力的だからではない。風影が目覚めないうめ、指揮系統が決まらないのだ。作戦も立てられない。

砂は部族間の信頼関係が薄く、部隊も部族で別けられていた。全ての里にそういう節はあるが、砂隠れは特に顕著だった。原則として部族長同士に上下差がなく、命令できるのは風影のみ。風影がない

今、皆自分の部族がかわいいから、激戦区に入ることを拒否する。そうなるも誰も強制できない。

よって砂は、受け身にならざるを得なかった。木の葉が攻め込んで来て、各部族が己の部族を守るためなら戦えるが、自分から死地へは行けないのだ。

議論は白熱する。誰も彼も譲らない。

その間、他の忍びは相変わらず庶民から水と食糧を奪い、糧とする。庶民に文句を言われると、怒って殺してしまうこともあった。

窃盗、暴行、レイプなども横行した。しかし、若者の離反を避けるために、上忍達はそれらについて見て見ぬふりをした。上忍にも下忍関係にも、様々なことに嫌気がさし、脱走する者もいた。

ふつつつと皆の不満が高まる中、とりあえず一日は過ぎた。しかし、その早朝に大事件が発覚した。

風影が、寝室から消えていた。寝室には致死量を思わせる出血の跡があった。

チヨ等は見張りに詰め寄った。焦った見張りの一人が「そう言えば、夕方に帰ってきたサソリの様子がおかしかった」と言った。これがチヨの琴線に触れた。「サソリのせいにするな！」とその見張りはボコボコにされた。

しかし、見張りは自分の勘を信じて調査を行った。すぐに怪しい点が見つかった。現在、サソリが駐屯地からいなくなっており、彼の部屋には彼が最も大切にしていた両親の傀儡が残っていた。

サソリは、逃げたのではないか？ 自分だけ助けてもらえるよう、風影の死体を木の葉に持っていった。

それが見張りの立てた仮説だった。しかし、証拠が薄い。

ところが、風影の治療を任されていた医療忍者の一人が、縄に巻かれ、トイレに放置されているのが見つかった。その医療忍者は幻術にかかっており、記憶が曖昧だったが、その曖昧な中で、前夜にサソリに何かを質問されたことは覚えていた。

「逆賊チヨとその親族を許すな！ やつらこそが風影を殺し、木の葉に献上した張本人である！ やつは我々を謀り全滅させ、自分だけは

生き残つて砂の実権を握るつもりだ！」

見張りは派手に演説を行った。この演説によりチヨへの疑念が沸くと共に、風影が死亡していることが居住区の全域に広まってしまった。

不満はとうとう限界を越え、この見張りの部族を中心に暴動が起こる。多くの住民が、木の葉や雨隠れに逃げていく。

この暴動に関しても、指揮の問題が起こった。戦争レベルではないので、通常ならあつさりとは二番手のチヨやエビゾウが指示を出すところだが、今回は二人が暴動の原因でもある。身に覚えのないチヨは自分が指揮を取ろうとしたが、彼女を嫌う部族長や、そのまま戦争の指揮を取られることを怖れた部族長が反対する。中には暴動を支持する部族もあった。

結局、砂隠れはいくつにも別れ、その派閥毎に指揮権を主張し始めた。嫌い合う派閥同士では殺し合いも起こった。

それらの情報は、すぐにダンゾウの耳に入った。予想以上の成果だった。

砂隠れが烏合の集であり、風影というカリスマを失えば分裂するとは理解していた。しかし風影が内部の者に殺され、チヨが裏切り者呼ばわりされるとは思わなかった。彼としては、砂を裏切る派閥は多くとも3割程度で、その他については、死ぬ覚悟を奪えればいいと思っていた。追い詰められた軍隊は強い。逃げ場を残しておくことで、迷いや恐怖が生じ、攻略が容易くなる。そこを叩く。

しかし、内乱が本格化しそうなので、別の手も使うことにする。彼が信頼を置く部下への命令はこうだ。木の葉へ寝返るつもりで『毒を放つたのを集め、木の葉隠れ、雨隠れ、砂隠れ、全ての場所で』と演説させよ。

なんてことが起きているとは知らず、トグロは暁へ送った分身から得た情報に驚愕していた。カツユを通してそれを綱手に伝える。綱手はダンゾウに怒ったが「どうせ証拠は見つからんだろうな」とあまり言及はしなかった。

それよりも難民と捕虜の扱いである。

「雨隠れは遅かれ早かれ戦場になる。暁へ行った民衆は、できるだけ早く第二ダムへ移動させた方がいいだろう」

「僕もそう思います」

「お前がこつちに来れたら一番いいが、無理でも飢え死ぬことはない。木の葉から借金して食糧を得られるようエロ爺いに頼んでおいた」

「ありがとうございます」

木の葉に借りを作るのは心苦しいが、今更か。

「捕虜はどうするんだ？ 説得できるかもしれないと言っていたが」

「ええ。特にチャクラ量が飛び抜けた娘に、純粹さを感じました。おそらく僕達が根つからの悪人だと本気で信じている。逆に砂隠れはとてもいい人達だと。そして、おそらくですが、それが事実でないと知ってしまったえば、僕達と戦えなくなります。青年団のボスが戦えと言わない限りは」

「それじゃあダメじゃないか？ それとも、青年団のボスも純粹、と言っているのか、とにかくそういうやつなのか？」

「青年団のボスも、話せばまあまあ分かります。仲間の命を大事にし、復讐に囚われることがなかったですから。ただ、心が空虚な感じがしました。だから、自分で考えず、風影に望まれるままに行動してしまっただと思えます」

「それでいいのか？」

「仲間の方を変えれば、おそらく彼も変わります。無理なら全員殺すことになるかもしれませんが。散々苦しめられた敵ですが、それはしたくないですね」

「そうか。まあお前がそう言うなら、私も頑張ってみよう」

「お願いします。できるだけ僕も分身を送って協力します」

自分で言いながら、あんな連中を助けようとしていることが自分でも不思議だった。確かに娘は美人だ。だが、何度も理不尽な要求され、何をしても感謝されず、恨まれ続け、ついには多くの死人が出た。

なのに何故、ここまで失うのは惜しいと思ってしまうのだろうか。女のあの、男と共に死のうとする姿を見ただけなのに。それだけで心を

動かされてしまった。

この間、本体は雨隠れ方面の見張りをしていた。白眼が使えることと、暁と縁があることからトグロのチームが選ばれた。と言っても単に見張るのでは時間がもったいないので、一人を見張りに置き、もう二人は軽く連携のチェックをする。また、情報を集めるために再び雨隠れに木遁分身を送ったり、捕虜を教育するために第二ダムに分身を送ったりした。

第二ダムに着いた分身は、集落住民から歓迎を受けた。

「よく生きて帰ってきた！」

「空海様ばんざーい！」

「砂なんかボコボコにやつつけちゃってください！」

やはりホームは気持ちいい。教育がうまく行き届いている。

なんて思いながら、要塞兼自宅へ向かう。怪我人の治療は一通り終わったらしく、大勢の医療忍者がぐったりして眠っていた。

忙しいのは庭と付近の森だ。初達は、見張りを除いて、各々に厳しい訓練を行っていた。おもしろいことに、手足に包帯を巻いている木の葉の上忍と中忍が、彼女等に指導をつけていた。

体術、手裏剣術、チャクラコントロール、性質変化、感知結界、などなど。

そのうちの一人、月に感知を教えている比較的人の良さそうなおつさんに、話を聞いてみることにした。

俺が近づくと、修行中の月は俺に気づいた。距離は20mくらいだろうか。

「なあにをやつとるか！ 集中力を乱すな！」

「す、すみません」

邪魔してしまったようだ。しかし、この短期間で20mまで感じられるようになったらしい。すさまじい成長だ。盲目になったから親衛隊からは外そうと思っていたが、この分では再び親衛隊最強の座を掴むまで時間はかからなさそうだ。

アラレなど一部を除き、どこも修行に集中していた。失った悲しみ、何もできなかつた悔しさが、彼女達を本気にさせたのだろう。あ

まり気負いすぎてもよくないが。

とかく、修行は順調そうなので、邪魔しないでおく。木の葉の人間は俺を嫌っている感じがするし。その敵意に初達が反撃して、この修行が終わってしまったらもったいない。

よって先に捕虜と話をつけることにする。

捕虜は怒った集落民に殺されないように、俺の部屋に入れ、入り口には複数の結界を施していた。しかし、誰かが侵入した跡があった。急いで中に入る。捕虜は、全員生きている。戦闘の跡もない。が、侵入した理由は分かった。臭う。捕虜が漏らし、その下の世話のために綱手が入ったのだろう。木遁の縛りを、下半身の部分だけ破壊した跡がある。そこは後からうずまき一族の鎖で封じている。

まずは、簡単なところから行こう。青年団でも、見るからに大人しそうで、物分かりの良さそうな少年が一人いる。顔が扇の女とそっくりだから、弟だと思う。茶髪サラサラ、優男系のイケメンだ。年齢は俺と同じくらいだろうか。

そいつの拘束を解く。

「うっ」

少年は辛そうに目蓋を開ける。俺と眼があった瞬間、不安そうな顔になる。少女みたいな反応だ。予想通り大人しい。あの暴力的な砂にこんな人間がいて大丈夫かと心配してしまうほどだ。

「あそこにお前の姉がいる」

俺はとあるグルグル巻きのかを指差し、顔の部分だけ開く。

「うっ」

出てきたのは少年そっくりの美女だ。ただし、今は顔色が悪い。相当消耗しているのだろう。目を虚ろに開いたまま、動かない。ちなみに彼女、漏らしている一人である。

「姉さん！」

やはり姉だったか。

「理解しているとは思いますが、お前達は負けた。捕まった仲間の命は俺の掌の上にある。理解したら滅多なこととはしないことだ」

「くっうっ」

少年は悔しそうに歯を噛みしめる。今の、完全に悪役の台詞だな。「どうしてお前達を生かしたか、分かるか？」

尋ねるが、少年は答えない。俺はすつと彼の姉に手を伸ばす。少年は慌てて顔を上げた。

「し、知らないよ！ 何かの実験台にするためじゃないのか！」

「そうじゃないとしたら、どうする？」

「ど、どういう意味だ？」

「俺はお前たちとなら和解できると思った。なぜなら俺の目的は、風の国と川の国、両方の困っている人を助けることだったからだ」

「困っている人を、助ける？ おつ、おつ、お前が言うか！ お前達が、行き場のない人達を奴隷にして！ 木の葉の基地を作らせてたんじゃないか！」

少年はカツと目を開く。やはり正義感で動く人間のようだ。ならば真実を知らせればいい。

「お前に真実を見せてやる。ついてこい」

「はっ、放せ！」

少年の手を引つ張り、部屋から出る。行き先は、近くの畑でいいだろう。

木の葉の忍びに見つからぬように、隠し通路を使って外に出る。山道を少し登り、作りかけの畑へ到着する。

「おっ！ 空海さん！ 帰ってきたのかい！」

「いえ、この体は分身です。本体は前線にいます」

「なあんだ。そうですか。そっちのかわいい娘？ は、またメイドですかい？」

「メツ、メイドツ？」

「彼は男です。わけあってしばらくここにいますから、一緒に働かせてやってください。こう見えて体力は抜群です」

「へえ。つーことは、元は忍びだったり？」

「そんな感じですよ」

俺は少年の頭をポンポンとはたく。少年は疑わしそうに俺を見る。「というわけで、働きながら真実を探ってください。休憩は自由です。」

感想を聞きたいので、逃げるのはやめてくださいね。それと、我々に害をなした場合は、あなたの姉が地獄を見ることになります」

「けっ、結局脅しじゃないか!」

「ええっ!? 空海さんこんな子供に脅しなんかやってるんですかい!?!」

「やってませんよ。構ってもらいたい年頃なんでしょう」

「なるほどなあ」

「だっ、誰がお前なんか! 違うんですよ! 本当です!」

俺が口で言っても信じないだろうから、後はおっさんの優しさと少年の情報収集能力にかけることにする。

さて、あまり時間はない。他の連中もこの調子でいこう。

二番目におとなしそうなのは扇の女だ。今は疲れ果てているが、あまり元気になると暴れられたら困る。その辺を調整して、少しだけ大地の実をあげよう。

と言っても、実を噛む元気もないだろうからな。ここは口移しでもしようがないだろう。そうすれば量の調節も簡単だしな。

「うっ! んむっ。ぐふっ。んばはあっ」

唇が当たった瞬間、滅茶苦茶嫌がられた。しかし無理矢理口にねじ込み、飲み込ませる。

「ごほっ。げぼほおっ。ぺっ。うえっ」

頑張って吐き出そうとしている。俺の顔には唾を吐いてきた。しかし残念、大地の実は不思議エネルギーの塊だから、一瞬で身体に行き渡ってしまうのだ。

「なっ、何を飲ませた!」

おっ、早速元気になったな。

「チャクラを回復する丸薬だ。あのままでは話をすることもできなかつた」

「きっ、貴様になど話すことはない! んっ、ぐむうっ!」

女が舌を噛みきろうとしたので、口に指を突っ込む。木に変化させた指をね。

「んっ。んんっ! んむっ、んんーんっ!」

女が恨めしそうに俺を睨む。

「分かっていると思うが、お前達は負けた。お前の愛する男の命も俺の掌の上にある。よく考えて行動するように」

そう言っただけはボスの顔を見せる。女は酷くショックを受け、大人しくなった。

その後、先程と同じような問答をした。最後には真実を見せると言う。ただ、彼女が暴れたら非常に危険なので、封印術でチャクラを練り辛くしてから、部屋を出た。また、彼女は下に何も履いてない状態だったので、俺のズボンを貸してやった。彼女自身のズボンと下着は洗濯中だと思う。

女の名はカルラ。青年団のボスがそう言っていた。カルラは問答中に「や、夜叉丸はどこだ！」と叫んだ。弟の名前は夜叉丸だと判明した。俺はカルラを弟と同じ場所に連れていく。

移動中、もう1つ尋ねたいことがあった。

「お前、戦闘中は起きていただろうか？ 砂隠れが庶民を傀儡にして、自爆特攻させていたことについては、どう思ったんだ」

「き、聞くな！ それはお前の幻術だろうが！」

「なるほど。でも、証拠ならたくさんあるぞ。真実だったらどうするんだ？」

「ウ、ウソに決まってる！ 無理矢理やらされたとか……。わ、悪いのはいつも木の葉だ！」

口ではこう言っているが、チャクラの乱れようからしてかなり悩んでいるな。やはり真実さえ教えればこちらに引き込めそうだ。

「弟くんは、頑張っているな」

「えっ」

畑に到着する。夜叉丸はクワを持ってとてもいい笑顔で働いていた。

「や、夜叉丸！ 何を！」

「ね、姉さん！」

カルラは俺から離れ、夜叉丸のもとへ走っていく。夜叉丸は呆然と立つ。近くにいたおっさんは困惑中だ。

「あ、あなた！ どうして逃げないの！ 何をやってるの！」

「だ、だって逃げたら姉さん達が……」

「バ、バカね！ 私の心配なんかしなくてよかったのに！ ほんとにもう。バカッ。甘すぎるのよ。あなたは……」

カルラは夜叉丸をギュツと抱き締めた。眼からは涙が落ちる。夜叉丸の方も、大事そうに姉を抱き締めた。いい絵だな。

「これは、あれかい？ 戦場で別れた姉弟の感動の再会ってやつかい？」

おっさんはいい感じに勘違いしていた。まあそうとしか見えないかもしれないが。

「では、ご自由に調べてください。ただし、暴れたりケンカを売ったりするのはやめてくださいね。お仲間にも迷惑がかかりますよ」

「そ、それじゃあ脅迫じゃない！」

さすがは姉弟。同じ反応だな。

「く、空海さん！ やっぱり脅迫してるんですか！」

「いえ、彼女たちの勘違いですよ。もうすぐ分かります」

その後、俺も協力して4人で畑を耕した。二人は労働の喜びを知っており、笑顔で大人しく働いた。俺が命令するとムスツとするので、指示はおっさんに任せた。

一通り終わると、皆で井戸に行つて水を飲んだ。しばし休憩である。この間、カルラと夜叉丸は積極的におっさんに質問した。俺のもとへ来たのは何時か。俺をどう評価しているか。労働の対価が出ないことをどう思うか。俺は恐くないか。脅されていないか。などなど。

おっさんの返答はこうだ。

「おらあ川の国出身だ。だから、初めからいた。4年から5年前くらいに空海さんがこつちに来たんだ」

「まあ、いい人なんじゃないか？ 孤児を世話して、盗賊を退治して、ダムを作つて、仕事をくれて。女つ気が多すぎるのはいただけじゃないが」

「労働の対価？ そんなもん十分すぎて申し訳ないくらいさ。食事は

くれるし、土地はくれるし、仕事もくれる。安全になったのも大きいな。切羽詰まったような雰囲気はなくなつて、皆が家族みたいに協力できるようになった」

「空海さんが怖い!? いやいや、この人は毎日のように子どもにうんこを投げつけられて遊ばれてるんだぞ! それくらい心が広いってこつた!」

「娘さん。あんた俺を怒らせたのかい? 脅してるのは砂と木の葉だろ? この人はやつらから俺達のような弱い立場の人間を守ってくれてるんだよ」

お手本のような返答だった。聞いているこつちがむず痒くなるよ
うな。

だが、誰に聞いても似たようなことを答えると思う。ここで暮らし
た年月が長くなるほど、信心深くなつていくだろう。

カルラと夜叉丸は、酷くショックを受けているらしかった。自分の
信じていたものが崩れ落ちていく感覚に陥っていることだろう。

不意に井戸に來た爺さん、婆さん、少年少女、にも次々と質問を投
げ掛けていった。

「ほ、本当にあなた方は、ここに満足してるんですか!」

「満足? そりゃあ、ここよりは山の集落の方がうれしいが。多くは
望まないよ。空海さんも綱手さんもよくやってくれている」

「無理矢理タダ働きさせられてたんじやないんですか!」

「若い衆、熱か何かでもあるのかい? 働き詰めもよくない。休憩し
なさい。元気になつたらまた働けばいいけんね」

「ほ、本当にうんちぶつけたの!」

「う、うんちだつて!」

「きやははは!」

「だつてさー、アラレちゃんが、鬼ちゃんが怒るとおもしろいつて言う
んだもーん」

「あの臭そうな顔がいんだよなあ!」

「ぎやははは!」

誰に聞いても、姉弟が望むような返答はなかった。

二人はとうとう打ちひしがれたようになり、俯いて動かなくなってしまうた。

ふと、5歳の女の子が姉弟に近づいた。

「大丈夫？ お腹痛いの？ よしよし」

彼女はいつぱいに手を伸ばし、姉弟のお腹をさすった。

「あ、ありがとう」

「僕も、ありがとう」

「うん。でもね、痛かったらちやんと綱手先生に言うんだよ。分かった？」

「うん。ありがとう」

「どういたしまして。じゃあね。あたしはもう行くよ」

「うん。じゃあね」

少女に手を振る二人。その背中には、哀愁が漂っていた。

木の葉連邦誕生

ダンゾウが砂に与えた猶予は3日。雨隠れは砂より早く動きたいはずだ。ならば、話し合いによる平和を望む暁は、さらにそれ以前に各里の代表者と話を着けなければならぬ。交渉が失敗する可能性を考えると、難民を急いで第二ダムに連れていくべきだ。だが、連れていくと暁の人員がそっちに取られて、肝心の交渉や毒を撒いた犯人の捜索が疎かになってしまう。

ここで弥彦が言った。

「俺が1人でダンゾウの元に行つて時間を稼ぐ。他の人員で難民を第二ダムに連れて行き、綱手を説得する。綱手が無理だとしても同士を集め、できるだけ多数で第一ダムに移動する」

これには長門と小南が反発した。

「無理だ。さすがに15歳の少年一人では、門前払いにあうのが落ちだろう」

「危険すぎる！ それに行つたとしても交渉すらさせてもらえないわ！」

などなど。

2人の剣幕に押され、弥彦は発言を撤回した。結局、長門が「ダンゾウの元には俺と弥彦と小南の三人で向かう。難民の移動はトグロとやつの部下達に任せる」と提案し、それで決まった。他の暁の戦闘員は元の孤児たちと共に留守番だ。

小南が先行してトグロのもとへ飛び、難民移動の警護を求めた。トグロは了承し、自身の木遁分身を雨隠れに放った。またカツユを通して綱手に警護の応援を頼んだ。

「ならば、クシナがいいだろう。もしもの時に影分身で大勢運ぶことができる。戦闘能力も申し分なしだ」

「貴重な人柱力を1人で危険地帯に行かせたら、ダンゾウがごちゃごちゃ言つて来るかもしれません」

「分かっている。だが、それほど遠い場所でもないんだ。スリミ小隊を護衛につければ十分だろう」

という話があつて、クシナを隊長として4人が難民の護衛に加わる
ことになった。

数時間後、トグロの分身が難民のもとへ辿り着いた。そこで意外な
人物を見つけた。

「あいつは、傀儡使いの……」

難民を雨隠れに移動させた傀儡使い、サソリがいた。精巧なおつさ
んの傀儡の中に入っているの、長門にも正体がバレていなかった
が、トグロは白眼で中が透けて見えるので分かる。

戦力として計算していいのか？

口パクで尋ねると、おっさんサソリはさりげなく頷いた。

さらに数時間後、暁の基地付近にクシナとスリミ小隊がやってき
た。彼女達を交えて、第二ダムへ出発する。

道中、トグロの分身はさりげなくサソリに近づき、話しかけた。

「砂を抜けたってことでいいのか？」

サソリはうなずいた。

「俺の仲間になる気はあるか？」

サソリは反応しなかった。否定、もしくは保留だろうか。

「俺は第一ダムを砂と共同で管理し、砂側で暴動が起きたら砂の人間
が押さえるような体制を作りたいと思っている。今までは砂側にふ
さわしい管理者がいなかったが、お前なら任せられると思っている」

これは本当の気持ちだった。砂の不安や不満を抑えるためには、同
じ立場で事業を進める砂側の人間がいた方がいい。

捕虜にした青年団を教育し、優秀な同士になったら、この管理人を
やらせる計画も頭の中にあつた。それを誰にも伝えなかったのは、青
年団よりもこの少年の方が才があると思つたからだ。出会えば、勧
誘するつもりだった。

「ありえんな」

しかし、初めて口を開いたサソリは、否定した。

「なぜ俺なんだ？ 先日まで殺し合いをした人間だぞ。それに、まだ
10代前半だ」

「砂側の管理者にある程度の実力がなければ、砂側の反発を押さえ込

めない。だが、実力があつてかつ融和を望んでいる人間は、極僅かしかない。お前はそのうちの一人だ。年齢のことなら気にするな。容姿だけ誤魔化しておけばなんとかなる。実際、俺も初めてこの事業に参加したのは10歳のときだ」

「そういう問題じゃない。なぜ俺をそこまで信頼できる？　今こうして護衛にきたのも罨かもしれないぞ？」

「なぜと言われたらな……」

トグロは考える。明確な理由は浮かばない。

いや、1つはある。彼が若く、頭もよさそうなので、教育できる自信があることだ。それを言ったら彼のプライドを逆撫でしそうなので、言わないが。

「暁はバカ。青年団は大バカ。お前達は少しだけマシかもしれないと思っていたが、やはりバカだったな」

しかし、サソリが先にトグロのプライドを刺激した。

「聞き捨てならんな。俺があんなやつら同レベルだと？　言っておくが、お前にだつて突然管理者のポストをあげるわけじゃない。こつちの教育を受けさせて、仕事をやらせて、人柄や能力をじっくりと見極めてからだ」

「ふん。そんなものは当たり前だ。だが、いくら言葉を並べたところで、お前の基地は一度砂に奪われた。木の葉の戦力を上手く使えば、ああはならなかった。だからやつぱりバカだ」

「なっ、何を言うか！　お前らだつてたった一日でダムを取り返されたじゃないか！　お互い様だ！」

「俺をあんなやつらと一緒にしないでもらいたい。いや、それ以前に、なぜ国境付近に慈善団体など作った？　戦いに巻き込まれるのは分かっていただろう？」

「そりゃあ危険だとは思ったがな。たった2年でまた戦争が起こると思つか!?　世界大戦の後の準備期間とかは!?」

「何を言っている？　終戦など口で言っているだけだろう」

このガキっ。

トグロは子どもに痛いところを突かれて、感情的になってしまっ

た。しかし、ダム事業は既に失敗だと認めたことである。口ケンカで交渉が失敗してももつたいないので、自分から折れることにした。

「ああ、そうだな。認めてるよ。国境付近に国を作るには、まだ力不足だった。表に出てくるのが早すぎた。もつとじっくり力を蓄え、お前のような人間を多く同士に持つべきだった」

「いや、待ってくれ。俺はどうして国境に慈善団体を作ったのかと聞いたが？」

「ん？ そりゃあ戦争の犠牲者がいっぱいいるからだ。風と火の国の間を選んだのは、ここに砂漠があるからだな。タダ同然の土地を緑化すれば、誰にも文句を言われず豊かな土地を持てる。と、思っていたんだがな」

「それは見立てが甘すぎだ。砂が豊かな土地を欲しないわけがない。綱手はそんなことも分からなかったのか？」

「分かっていたとは思うが、砂が変わってくれと信じたんだらうな。そして、案の定失敗した」

「なんだそれは？ バカ過ぎる。チツ、これだけの力を持っていながら、上の連中が無能過ぎる。なんてもつたいない」

「ん？」

トグロは無能だと言われてムツとしたが、言い方に少し違和感があった。

もつたいないというのは、物事を扱う側の人間が言う台詞だ。つまり、彼は既に、こちら側に立って物事を考えているのではないか？ 本当は仲間になりたいのではないか？

試しにそれなりに重要な仕事を与えてみることにした。

「少し話が逸れるが、いいか？」

「なんだ？」

「実は俺は、先の戦いで十数人の青年団を捕虜にした」

「そうか」

「俺はやつらを砂から離反させるつもりだ。ここにいる難民も加わってもらって、砂のやってきたこと、俺のやってきたことを伝えて、後は思想教育とかだな。お前も加わらないか？ 抜け忍仲間が増える

のは都合がいいだろう?」

「ふん。あんなバカ達とは仲間になりたくない」

「だったら部下にすればいい」

「本気か?」

「俺が指定する3人以外は好きにしている。全部で16人いたから、残り13人から好きなやつを選べ。選べる部下の人数はお前の働きに応じて決める」

「ふん。まあいいだろう。どうせ暇だからな」

こうして、サソリが一時第二ダムに身を寄せることが決まった。

話が長くなったので、クシナや他の難民が訝しんだが、内容をじっくり追及することはなかった。

道中、抜け忍や浮浪者からの襲撃があったが、クシナやトグロの敵ではなかった。上下に厳しい山道が続き、10数人の難民は歩けなくなったので、一部はクシナの影分身で運んだ。クシナ目当ての男がわざと歩けないフリをすることもあったが、彼らはトグロの指示でサソリの傀儡となつて歩かされた。

その頃、弥彦達が第一ダムの近辺にやってきた。

初めに見つけたのはヒアシだった。トグロは一人で彼等のもとへ向かった。

「来てしまったか。まあ、理由は聞かなくても分かるが」

「ダンゾウのもとへ案内してくれ。戦争の無意味さを伝えたい」

「和平とは双方が対話のテーブルに着いて初めて成り立つものだ。3日前はうまくいったかもしれないが、今回は無理だと思うぞ。砂は風影がやられて復讐に燃えているだろう。木の葉に至ってはダンゾウだ。あいつは綱手と違って自分達の利益しか考えない」

「利益ならあるさ。戦争を止めることそれ自体だ」

こりやあダメだ。

トグロはそう思ったが、3日前の恩があるので、彼等をダンゾウのもとへ案内することは請け負った。

4人で集落へ歩く。ダンゾウはトグロの屋敷を作戰本部にしていた。勝手知ったる道を進み、見張りの一人に見つかった。

「おい化け物、見張りはどうした？ そいつらは何だ？」

「彼等は暁という組織の代表者です。先日の戦いでは我々の側で参戦し、休戦協定の場を作りました。今回も休戦の仲介役を名乗り出ています」

「そうか。雨隠れの使者ではないのだな？」

「ええ、違います」

「ならばダメだ。雨隠れの使者以外は通すなど言われている」

「そうですか」

トグロは小南の方を向いた。

「だつてさ」

「だつてさ？ って、私に言われても」

不安そうに弥彦を見る小南。弥彦はズイと小南の前に出る。

「何がだつてさだ。もうちよつと交渉しろよ。毒を撒いた犯人の調査についても」

「そう言われてもなあ」

トグロは見張りの男を見る。男は帰れと言うように、手の甲を二度払って見せた。

「あの、犯人の調査をやりたいと言っています」

「水路は警戒区域だ。出会い頭に殺されても文句は言えないぞ」

「ですよねえ」

トグロは再び小南の方を見る。

「だつてさ」

「だ、だからだつてさと言われても！」

「もつと真剣にやれ！ ふざけているのか！」

真剣にやっても結果は変わらない。トグロは思ったが言わなかった。

なんてやり取りの最中、突然信号弾が上がった。一部を除きほぼ全員本部に集えという合図だった。トグロの班は見張りのために留まっていればいいが、大きく事態が動いたのは間違いない。

「砂が動いたか？ おい！ お前はさつさと持ち場に戻れ！ そいつらは帰らせろ！」

「はい」

見張りの男は本部に駆けていった。

トグロは不満げな弥彦達の背中を押し、自分の持ち場へ戻った。

トグロはがんばって弥彦と長門をここにとどまらせようとした。

ヒアシとヒザシは暁への対応をトグロに任せて割れ関せずだった。

「今回ばかりは無理だと思う。ダンゾウが死んで、砂の指導者も入れ替わるくらいのことがないと」

「俺は諦めないぞ！ 諦めたらそこで終わってしまう！」

「だな」

「こうしている間も惜しい！ ここは多少強引でもダンゾウのもとへ行くぞ！」

「それはやめておけ！ 絶対に殺されるから！ もしくは人質にされる！」

「ああ」

「お前達が暁だな？」

「ああ」

「ん？ ああ！ 望むところだ！」

「意外な動きだった。ダンゾウの方から暁を招き入れるとは。裏があるのは間違いないが、トグロの望むように帰っていれば会話をすることさえできなかった。」

「長門はダンゾウの部下の後ろを歩きながら、不意にトグロの方を振り返り、勝ち誇ったように笑んだ。」

「さて、弥彦達は本部へたどり着いた。トグロの屋敷の前に300人近い忍びが集まっていて、ダンゾウの演説を聞いていた。驚くべきは、その忍びの集団の中に100人近い砂隠れの忍びがいたことだ。ダンゾウの演説中にも、砂隠れの上忍がダンゾウの隣で彼の言葉を肯定する発言をしていた。」

「いつも戦いを引き起こしてきたのは砂隠れである！ 我々は自営戦争をしているすぎないのだ！ 真実に気付いた砂隠れのものが、我々

に協力したいと言ってきた！ わしはこれを受けることにした！
先日まで殺し合いをしてきた相手だが、いつまでも憎しみ合う必要はない！ 先代様が証明してくださったことだ！ 今までの罪が帳消しになるわけではないが、過去に拘るのではなく、今の彼等の姿を評価してもらいたい！ そして、討つべき真の敵を見極めるのだ！」
「毒を放ったのは砂隠れのチヨの一派である！ やつらは守るべき風の民を傀儡で操り、自爆特攻させた事実もある！ そのくせ、形成が不利になると我々を裏切り、風影を殺めたのだ！ 利己的で節操なきことこの上なく、また残忍極まりない！ やつらは砂の人間に支持されていけない！ 力による恐怖で民衆を操っているだけだ！ 砂隠れでも厄介な存在であり、決して主流ではない！」

砂隠れの複数の部族が木の葉側に着き、共にチヨ等と戦うらしかった。これだけの裏切りが出たと考えると、本当にチヨの一派が毒を撒いたのかもしれない。風影が殺されたというのも驚きだった。

弥彦は状況の変化に着いていけず、考えていた演説の内容も忘れてしまった。いや、覚えていても使えまい。和平交渉の砂側の人間は、風影を仮定していたからだ。風影が死に、砂がこのように分裂してしまったから、和平を結ぶべき代表者がいなくなってしまった。

「明日の昼、砂隠れへ攻め込む！ その頃には雨隠れも我らが同士となっっているだろう！」

その言葉でダンゾウの演説は終わった。

弥彦達はその後ダンゾウと呼ばれ、戦闘への参加を促された。

「君達の望む正義の戦いが、ここにあるのではないかね？」

「いえ、断らせていただきます」

「なんと!? では暁と言うのは、口で世界平和を訴えながら、凶悪な連中は恐いから野放しにするの？ 畏れいった」

「そうじゃない！」

「もういい。帰ろう、弥彦」

長門が弥彦とダンゾウに割って入り、話を終わらせた。三人は一礼し、雨隠れ方面へ歩いていく。

ダンゾウは彼等の後ろ姿を見て、何か嫌がらせをしてやろうと思っ

だが、やめにした。あんな小物はどうとでもできる。今は捨て置き、必要になったら利用してやればいい。などと考えていた。

数時間後、雨隠れの使者が第一ダムへやってきた。ダンゾウの狙い通り、雨隠れは木の葉側に就いて砂隠れと戦うと言った。風影が砂隠れに殺されたことは、雨隠れにとっては同盟を破棄するいい口実になっていた。

翌日の昼、木の葉隠れ、砂隠れの反乱軍、雨隠れが一斉に砂の中流域へ進行した。砂隠れ正規軍は一方的にやられ、開戦後1日もせず砂漠へ逃げていった。

連合軍は、砂の中流域、下流域をあつという間に手中に納めた。砂漠を進むのはリスクが高いので、ここで一旦進軍を止める。逃げていった忍びの財産は没収し、一般人からも武器や金目のものは何かと理由をつけて回収した。戦利品と称して若い娘を襲う忍びも多かった。かわいらしい男の子を襲うくの一も。

その後、砂隠れの反乱軍は自分達こそが風影の意志を継ぐものだと名乗った。チヨ等も当然正統政府を名乗ったので、砂隠れは東西で2つに分裂することになった。戦力はチヨ率いる西砂隠れが東砂隠れのほぼ3倍。土地は西砂隠れの方が遥かに広いが、東砂隠れには水路があり、今後緑地を広げていくことができる。

木の葉隠れと雨隠れは当然東砂隠れが正統だとした。他、木の葉の影響が大きい波の国や川の国が加わった。後日、火影と半蔵と東砂隠れ政府が一堂に集まり、改めて三里で同盟を結んだ。

他の五大国は西砂隠れを支持した。また、巨大化した木の葉隠れを恐れ、各里で同盟が結ばれていった。

川の国の周囲が全て味方に就いたことで、ダム近辺はとても安全になった。難民の多くはもとの住居へ戻ることになった。全員ではない。この短期間で大蛇丸へ忠誠を誓うようになった子供や、第二ダムの静かさを気に入った爺婆、逆に火の国の賑やかさを気に入った若者がいたからだ。

トグロ達はダムの修復と水路の毒の浄化を急いだ。ダムには動物の死体と化学薬品の二種類の毒が撒かれていた。死体の方は土遁で

土に返したり、火遁で燃やしたりした。化学薬品は濃度の高い部分を木遁の根で吸いとったり、火遁で蒸発させたりした。

第三次忍界大戦勃発

木の葉が強大化したため、各里は容易に手が出せなくなり、一時の平和が訪れた。

俺の組織もかっちり木の葉連邦に組み込まれた。が、一応東砂隠れや雨隠れと同等の自治権を手に入れた。武力と土地の豊かさを考えると思ふ。

この状態で、いつまでも山の集落や綱手の慈善団体と名乗っているわけにはいかない。正式に桃隠れの里と名乗ることにした。間が抜けている感じがするが、俺の里だと思えば、厳かさとかは無縁でいい。楽園っぽい名前で俺の理想郷のイメージにあっていると思う。

名前に負けず、エッチは盛んだった。戦争による人口減を補うべく子作りを奨励したが、奨励しなくとも皆エッチは好きだと思ふ。戦争の悲しみを癒すために男女がお互いを求めたのもあった。1年後にはポコポコと赤ちゃんが生まれた。

綱手が妊娠出産したのは大きな事件だった。綱手は川影を引退し、俺が後を引き継いだ。まあ元々俺が本当の代表だったからいいのだが。

俺も複数人と関係を持った。おそらく3人俺の子が生まれた。おそらくと言うのは、父親不明の子が何人もいるからだ。

俺は、乱交制を採用した。「戦いに生き残ったら親衛隊と付き合う権利をやる！」と言ってしまったので、自宅警備兵の恋愛を制限できなかった。あのイケメン共が本気になったら奇形の俺はどうなる？俺は複数と関係を持ちたいが、反発をどう抑えればいい？と、いろいろ考えた結果、どうせなら開放してしまうことにした。

気に入っている女が他の男と関係を持つことについては、その場面を想像してしまうと腹が立つが、気にしなければ気にならない。セックスし放題のための犠牲と考えれば納得できる。

里の反応は悪くなかった。公的な場では非難してくるやつも、周りに人がいなくなればコソツと「ちよつと女の子紹介してくれよ」「長袖くんとやらせてください。ご主人様」なんて言ってくるのだった。

綱手も、逆ハーレム攻めをやったら一回で認めてくれた。もともと遊び人だったからこういうノリは理解できるらしい。というより、逆ハーレム攻めをする前から、酒に酔った勢いで長袖や釜倉を押し倒しているとの噂は聞いていたが。

なお、綱手の赤ちゃんの父親は今のところ不明である。大多数と関係を持っていたから本人にも分からないらしい。「あえて言うなら皆の子だ!」。綱手は胸を張って言った。綱手は面食いだが、この里には雪一族筆頭にイケメンが多いから、性獣になるにはよかつただろう。俺もイケメンに変化して10回くらいやらせてもらった。肉付きがよくて気持ちよかつた。

こんな状態なので「赤ちゃんは皆の赤ちゃん」「皆家族」という制度も作つた。もともと孤児にはそういう制度を採用していたので、彼等は当然という反応だった。木の葉からは愚痴愚痴言われたが、内政干渉の一言で突っぱねた。

さて、当然だが、エッチばかりしていたわけではない。

強国を目指して、農夫は土地を耕し、戦闘員は訓練に明け暮れる。木の葉、雨、桃、東砂隠れの合同訓練は何度も行つた。俺は体術が苦手なのでヒザシに柔拳を叩き込んでもらった。他、クシナの九尾制御の特訓に付き合つたり、親衛隊警備隊の修行を見たり、綱手の仙術の修行に付き合つたり、いろいろやつた。

なお、綱手、クシナ、サソリはなし崩し的に桃隠れの忍びとなった。有名どころ以外にも何人か抜け忍がいたが、同盟4里内での移動については基本的に不問となった。

捕虜の青年団は、半年教育してから、4人を除き東砂隠れに返した。その4人は、俺の部下にしたカルラと夜叉丸、それとサソリの部下になつたハンマとバキである。青年団のボスは思ったより人望が厚く、選挙で東砂隠れの風影になつてしまった。よつて返すというよりかつこくよく凱旋してもらつた。

第一ダム及び水路の砂側の管理役は、カルラと夜叉丸を選んだ。2人とも真面目で苦情にも丁寧に対応でき、見た目もいい。砂側の不満を抑えるには都合がよかつた。サソリは「風影を殺した俺が上に立つ

ては外間が悪い」と言つて現場で働くことを選んだ。安値でも真面目に任務をこなし、暇な時はせつせと傀儡を作っている。

暁は相変わらず紛争地に行つては不戦を訴えている。ただ、資金めぐりに困つており、徐々にうちの里に働きに来ることが多くなつた。というのも、強引な対話で四方八方にケンカを売っているやつらに、依頼を出す国がないからだ。俺も小南が来るといふ条件以外では仕事を与えていない。弥彦と長門は勝手に演説を始めて同士を募るくらいに迷惑だ。住民から苦情が山ほど来る。俺は定期的に小南を呼び寄せ、住民の苦情を伝え、扇動がひどい時には謝らせている。かわいそうだが、健気な彼女を見るのはいい。

そうして木の葉連邦発足から2年が経つた。

他の五大国で、同盟や合併などきな臭い動きが出始める。国境付近の小競り合いが再度熱を帯びてきた。

緊張感が高まる中、同盟四里による中忍試験が始まつた。今試験は同盟軍の力を他里へ知らしめるために、いつもより大規模なものとなつた。

桃隠れも、木の葉に命じられるままに多くの実力ある忍びを受験させた。そのうち、クシナ、竹、釜倉、夜叉丸、ハンマ、が本戦出場を決めた。もともと中忍になる実力があつたが、俺が試験に消極的だから参加させていないだけのような連中だつた。

さて、この中忍試験。他里へ力を示すことで戦争抑止につながるといふ名目があるが、試験に要人が集まることで、他里にとってはむしろ狙い目となる。実際、2年前に砂隠れは本戦の日にダムに攻撃を仕掛けてきた。

今回も、このタイミングでの襲撃はありえた。が、俺達はそれを逆手に取ることにした。一般向けには俺や綱手が試験の観戦に行つたと言ひ、それが他の五大国に伝わるのを望みつつ、本当は国境付近で待機した。東砂隠れと西砂隠れの国境沿いは俺と東風影が、岩隠れと雨隠れの国境沿いは半蔵が部隊のトップになつた。木の葉の忍びも多数国境沿いに移動した。

結果、予想通り来た。西砂隠れと岩隠れが二方面から同時に。岩隠

れ方面の情報はカツユを通してサソリから聞いた。

こちらの戦闘は、仙術で怪力を倍増させた綱手が、準備していた大量のミサイル型の巨木を投げたことから始まった。10キロメートル近くある大遠投だった。敵は風で木の勢いを弛め、大量の砂でついには受け止めた。だが、これも想定内だ。

木遁、挿し木の術。

巨木には木遁分身を乗せていた。その分身が砂の内側に木の根を伸ばし、中にいる人間を串刺しにした。

「散れ！ 固まるとさっきのが来るぞー！」

これに対し、敵の西風影は部隊を細かく別けた。

「どおっ、せいっー！」

しかし、綱手は構わずミサイルを次々投げていく。距離があるので向こうが動けば左右の座標は逸れるが、その度にミサイルに乗っている分身の俺が角度をズラすので問題なかった。

敵は次々と串刺し、またはミサイルに内蔵された多量の起爆札で爆散していった。被害を受けたのは下忍より中忍や上忍の方が多かった。距離があるので、チャクラの小さい下忍は白眼をもってしても見えにくいからだ。

見知らぬ戦術による先制攻撃、上忍の死亡、情報と違って俺と綱手がいたこと、は西砂隠れに大きな混乱をもたらした。早々に逃げ出すものや裏切るものが出て、西砂隠れは本来の力を出せず蹂躪されていった。情報伝達ミスか、よく分からないタイミングで一尾が出てきたが、やはりミサイルと木遁のコンビによって数秒で捕獲され、餓者髑髏の餌となった。エビゾウが一尾救出に動いたが、日向ヒザシによって阻まれた。チヨの傀儡はカルラの風で吹き飛ばし、毒クナイは砂の壁で防御した。

混戦状態に入ると、ミサイルは使えなくなった。徐々にこちらにも死者が出始めた。しかしまだまだこちらが有利だった。

不意に、撤退を促す信号弾が上がった。有利な側が撤退するという不思議な合図だ。敵は罫かと思いい、迂闊には動けない。

そんな中、東風影が叫んだ。

「双方戦いを止めよ！ これ以上同胞を殺すのは心苦しい！ ここは、風影同士の対決で勝負を着けないか！ 受けるなら2時間以内に使者を出せ！」

そして俺達は退いていった。

この策は東風影自ら提案したものだ。もし西風影が乗ってきて、一対一で勝って、敵を降伏させることができれば大きな利益になる。西風影が死んでも敵の大部分が降伏しなかった場合でも、烏合の集と化した砂隠れの弱さはよく理解しているところだ。西風影が話に乗らずとも、同胞意識を呼び戻すことで、敵の決死の覚悟を奪うことができる。距離を取ることで再びミサイル攻撃も可能となる。

問題は一対一で東風影が敗れた場合だ。俺達は砂側の土地を明け渡し、戦力は川の国まで撤退することになるだろう。無理にごねるよりそちらの方が被害は少ないと思われる。

とかく、風影の勝敗次第で天と地の差が出てしまう策なのだ。俺は、相性の問題もあってこの男をあまり強いとは思えないので、不安だった。しかしカルラと綱手は東風影の味方をした。カルラは愛ゆえ、綱手は博打好きゆえ。結局俺も折れて、この策を認めた。

さて、約束の二時間まで悠長に待っている訳には行かなかった。こちらは戦況が有利だが、岩隠れ方面は不利との情報が出た。さらに、こちらに戦いに呼応するように、霧隠れと雲隠れまで動き出したらしい。忍界大戦の再開と言ってよかった。

「こちらは私に任せていただきたい。川影殿は雨隠れの増援に」

悩んだが、東風影の言葉通り雨隠れに向かうことにした。もし東風影が一騎討ちに勝てば、俺がいなくとも西砂隠れを制圧できるだろうし、負ければ俺がいても撤退することになるからだ。一騎討ちを拒む可能性は、かなり低い。戦況がこちらに有利とか、実際に同胞意識があるとか、いろいろ理由はあるが、一番は影というのはプライドが高いからだ。

桃隠れの戦力は一斉に雨隠れへ移動を始めた。戦力と威嚇と情報収集のために一応俺の木遁分身を3人残しておいた。

例によってあまり早く動いてもバテててしまつては意味がない。

移動速度は中忍が十分着いてこれる程度とした。

卑遁・大糞降下の術

雨隠れの戦場に着く少し前、東風影が戦いに勝利したとの報告が入った。よかった。心配事が1つ減った。この勢いで岩隠れもひねり潰したいところだ。

カツユを通してサソリから戦況は聞いている。岩隠れは大部隊で並んでいて、一斉に土遁を使うことで、山のように巨大な土を操っている。その土の壁でほぼ全ての攻撃を無効化し、ジワジワとにじり寄って来ているらしい。また、空を飛べる一部の忍びが鬱陶しく空爆を行っている。この被害もバカにならない。半蔵は空中に毒を散布してやつらを追い出している。しかし土影は全てをゴツゴツり分解するとんでもない術を持っており、それで毒を薄めてまた空爆を始めた。りする。

まさに俺の出番だ。木遁で土の壁に入り込み、中にいる人間を殺す。空爆に関してはミサイルと風遁で何とかする。危険なのが全てを分解してしまう術だ。多発できる技ではないらしいので、匣を使って体力を削りたいところだ。

雨隠れはたいいてい雨と霧で視界が悪い。木と雑草も多い。そんな日は俺でも1km先程度しか見えず、ミサイル攻撃の精度も射程距離も落ちる。戦場にいるサソリにカツユを通して敵の座標を聞くのもいいが、不十分だ。もうちよつと位置情報が欲しい。

よってこんな作戦を考えた。まず大雑把に5本ほどミサイルを投げる。そのそれぞれに俺の分身とカツユを乗せておく。俺の分身が白眼で半径1kmの範囲を調べ、敵の位置情報を調べる。カツユを通してそれを綱手に伝える。綱手がその情報を元にミサイルを投げる。という流れだ。

問題はタイミングだ。普段は毒の霧が上空を覆っている。毒を吸い、一定のダメージを受ければ俺の分身もカツユも消えてしまう。よって土影が空を晴らしたタイミングを逆に利用し、突っ込む。

カツユ、サソリを通して作戦を半蔵に伝える。半蔵は作戦後の動きを尋ねた。

「ミサイルつてのが来た後、空の毒は晴らしたままにしておくのか？
オオノキを自由にするのは危険だぞ」

オオノキとは土影のことである。

「こちらにも空で戦える者はいる。任せてもらいたい」

応えたのは綱手だ。

「そうか。精々時間を稼いでくれよ。俺もそろそろチャクラが危ない」

「ではな。おそろく後10分ほどで射程圏に入る」

そうして半蔵は現場での戦闘に戻った。

「綱手さん、本気ですか？ 彼女達と土影を戦わせるのは」

「ああ。部下を信じろ。あいつらはお前より遥かに熱心に修行に明け暮れていたんだ」

土影への対応については、綱手と俺で意見が違っていた。俺は半蔵の毒や風遁で土影と距離を取り、近づかれたら逃げるべきだと考えた。幸い雨で視界が悪いので向こうも探すのは難しい。

だが、綱手は戦わせることを選んだ。それも、雪一族を中心にして。確かに彼女たちは氷遁で空を高速に動くことができる。長袖と初は体術も上忍の域に近づいている。だが、五影と比べると、全てが見劣りしてしまうだろう。綱手は彼女たちこそが土影の天敵だというが、俺には不安で仕方ない。当然、綱手も心配はしているはずだが、それ以上に彼女たちを信頼しているようだ。

「実力を出し切れれば勝てる。オオノキは影の中でも術に依存しているタイプで、体術レベルは高くないのだ。問題はむしろ長袖たちが五影に名前負けして実力を発揮できない場合だ。トグロ、お前があいつらを激励してやれ。それが一番効く」

綱手はそう言った。悩んだが、結局俺は綱手の策を受け入れた。

どの道、土影は避けて通れない相手だ。逃げ続けても、雨隠れを奪われれば次は桃隠れが戦場になってしまう。ならば、早めに可能性の高い戦いをしておくのが吉。

俺は長袖、釜倉、アラレを呼び、作戦を説明した。

「先に俺の分身がミサイルで突っ込み、地上の敵と戦う。お前達も程

なくミサイルに乗って飛んでもらう。狙いは空中の土影だ。と言っても雨でどこにいるか分からないだろうから、ミサイルには俺も一緒に乗る。土影付近でミサイルを飛び降り、氷の壁で土影を囲え。やつは空間を大規模に消し飛ばす術を使う。それに注意し、動き続けろ。雨で視界が悪いが、それぞれがカツユを通して視界をサポートしろ。見失っても動きを止めるな。俺は邪魔者が入らないように地上に集中する。いいか。相手は影だ。一瞬の油断が命取りとなる。この後戦えなくなってもいいから全力で行け。大地の実はどんどん食べる。チャクラがヤバくなったらすぐに逃げろ。倒そうと思うな」

一気に言ってしまった。長袖と釜倉の表情は真面目そのもの。俺の言葉をぶつぶつ復唱している。アラレはいつものほほんとした雰囲気だ。いや、むしろうれしそうだ。口でワクワクと言っている。

「ほーい質問しつもん！」

「なんだ？」

「土影ってあんたよりつおい？」

「ここで聞くか。」

あまり、長袖達を不安にさせるようなことは言いたくないが、無理にウソをつくのもな。

「おそろくな」

「つおい!? うっほほーっい！」

逆に喜ぶのか。まあこういう娘だとは知っていたが。

「と言っても、相性の問題がある。俺は空中を自由に動けない。上空を広範囲に攻撃する術もない。が、お前達はむしろ空の方が速く動ける。十分チャンスはある。ただし、さつき俺が言ったことをよおく頭に叩き込んでおくように」

「うん！ ワクワクワクワクワク！」

絶対聞いてない。まあこういう輩は無理に教え込もうとすると自然な動きができなくなるからこのままでもいいが。

戦場に近づくと、地響きが伝わって来た。敵の土遁部隊が山のような土を操っているという話は真実らしい。雨はさらに強くなり、視界は悪くなる一方だ。

前線まで凡そ5キロ。一尾のチャクラを借り、ミサイル型の木を口寄せする。さらに50体の木分身を作り、それぞれのミサイルに乗せる。桃隠れ、木の葉隠れの忍びも乗っていく。彼等の乗車場所は俺の木遁でミサイルを変形させて作る。綱手の遠投の加速度や、着地に耐えられない忍びは、徒歩で戦地を目指す。

俺の本体は大地の実の量産に入る。綱手は大地の実を食み、仙人モードと化する。

サソリからの指示を待つ。緊張感の持続で疲労しないように適度に気を抜くことを意識する。

「来た！ 空が晴れた！ 俺から見て北北西約500m。高さも500m」

来た。綱手は俺の分身の乗ったミサイルを掴む。

「どおっ、せいっ！」

軽くステップを踏んで、ブオンと投げ飛ばす。木はまさにミサイルのような勢いで飛んでいき、雨の中に消えた。

「おらあ！ もういつちよお！」

さらにもう一本。またもう一本。次々と、計5つのミサイル型巨木を投げる。そこで仙術チャクラが切れたので、再び練っていく。

「毒の霧を抜けて土影を発見しました。私達に驚いています。敵土遁部隊の上空を通過しました。下から左に約60度、距離は400mほどズレています。約10秒後着地します」

カツユから情報も来た。この情報を元に、ミサイルの投擲角を調整していく。

次々と投げ込まれるミサイル。一部は土遁部隊に命中し、俺の挿し木と合わせて多くの敵を殺す。ヒザシなどの精鋭も降り立ち、不意打ち的に戦果を挙げていく。

土影は飛んでくるミサイルを打ち落とそうと、空間をチリにする術を使っている。が、視界が悪いのでタイミングを合わせられておらず、こちらにまだ被害はない。徐々に攻撃が近づいているが。

俺の分身は、空気抵抗を調整してミサイルの放物線に左右のカーブを加える。さらに的を絞りづらくする。

だが、一体だけは、逆に土影に突っ込む。土影に術を使わせ、次の術までのインターバルで雪一族を土影に近づかせるために。

先に雪一族を乗せたミサイルを高い角度で放つ。後に専用のミサイルをほぼ水平に放つ。先に水平のミサイルが土影にたどり着き、すぐ後に雪一族のミサイルがほぼ真上から進入するようにする。投げる綱手と調整する俺と両方とも高い精度が求められる。だがやる！ やらねばならぬ！ 己の白眼を信じて！

「死ね！ 原界剥離の術！」

まず水平に飛んだミサイルは作戦成功。俺の分身が土影の術にやられて消えた。その情報が本体に入ってくる。

白眼で長袖達のミサイルが落ちてきているのも見えた。狙い通り土影の術の範囲外だった。タイミングもばっちり。おそらく、接近は成功するはずだ。

トグロが祈っている頃、オオノキは先ほど消し飛ばした空間を見て笑んでいた。

「もう慣れたぜ。はあ、はあ。わしにその攻撃は通用せん。まあ、九尾あたりがガムシヤラに投げておるのじやろうがな」

「おっさん！ 上だ！ うんそうだ！」

「誰がおっさんか！」

オオノキはボツチの言葉に怒鳴りつつも見上げた。尾獣ほどに巨大な、茶色い何かがゆっくりと自分へ降ってきていた。

「ふんっ。口寄せか」

術の使用で弱っている隙を狙ったのだろう。しかし、自分はそれほど甘くない。

オオノキは、むしろ茶色い何かに突っ込んでいく。おそらくあれは巨大な岩であり、自分が避けたとしても、下にいる岩隠れの忍びに被害が出るようになっていいる。ならば、正面から迎え撃って無効化する。その術が彼にはあった。

軽重岩の術。

オオノキの手に触れた茶色い何かが、途端に軽くなってふわふわ浮

く。

いや、表面がボロツと崩れてオオノキへ流れてきた。

岩じゃない!? なんだこれは!?

うっ、くっさー! うんこじゃねえか!

「木の葉め、戦場で悪ふざけを……」

オオノキはうんこまみれになりながら、不快なデカブツを原界剥離の術で消し飛ばすことに決めた。

うんこの臭さも、うんこまみれを部下たちに見られるだろうことも、軽重岩の術を微妙に破られたことも、全てが彼を苛立たせた。

注意力が散漫になり、しかも無駄に原界剥離の術にチャクラを込めてしまった。

塵遁、原界剥離の術。

立方体のチャクラ型がオオノキの両手から伸ばされる。それがうんこをほぼ全て包み、一瞬の後、塵に変えた。

一先ず、上空はさっぱりした。しかし未だ全身はうんこまみれでも臭い。気分は晴れない。

このまま、おそらく九尾がいるところへ飛んでいき、今回の敵の大將をひっ捕らえて拷問攻めをしたい。が、九尾と戦うには今は体力に不安がある。それがまた彼を苛立たせる。

「ほよよー! うんこが消えちったー!」

「なに!?!」

しかし、不意に背中側から少女の声が聞こえた。かなり勢いよくオオノキに突っ込んできていた。

「しまっ」

もう避けることはできない。せめてガードを。そう思つて手を動かそうとするが、水を含んだうんこが意外に重くて追いつかない。

「ほよー!」

「ぐあああっ」

頭突きがオオノキの脇腹にめり込んだ。頭は鋼鉄のように硬く、衝撃がオオノキの骨を砕き、内臓を潰していく。

意識が揺らぐ。とてつもないダメージ。オオノキは放物線を描い

て飛んでいく。

「くっ、ぐっ。ふぬうつ」

しかし、オオノキにも意地がある。シヨック死してもおかしくない痛みを気合で我慢し、即座に患部をチャクラで補強する。

が、少し回復したばかりの彼に、四方から新たな攻撃が迫る。

「ぐっ、くおああっ」

痛みを我慢して急加速し、それらを避けていく。いや、何本かは当たった。細い針のような武器。非力なくの一や医療忍者が好んで使う千本だった。

それに気付いて間もなく、オオノキは正面から何かのぶちかましを受けてしまう。

「んがばあっ」

脳が揺れ、また意識が揺らいでしまう。額が割れ、血が目のにじむ。そこで見た。自分を覆うように、ドーム状に氷の鏡が展開しているのを。

全ての鏡に、先ほどの娘が映っていた。オオノキはこの術を知っている。雪一族の氷遁だ。

また、先ほどオオノキの額を割ったのは、ぶちかましではなくオオノキが氷にぶつかっただけだったと理解した。

「ぜえ、ぜえ。はあ、はあ」

ダメージを受けすぎた。チャクラ量と意識の揺らぎを考えると、術では目の前の娘に勝てない。

しかし、原界剥離もあと一度が限界だ。使うと気を失ってしまうだろう。

だが、相打ちには持つていける。どころか、もし相手が死ねばオオノキは落ちるだけであり、ボツチに拾ってもらえる。そうすれば死なない。土影として格好のつく勝利ではないが、負けではない。

オオノキは最後の力を振り絞ってチャクラを練る。原界剥離の術は立方体。球の中心から伸ばした場合、球の表面の8分の1を食らうことになる（正六面体の立法格子の考え方です。原界剥離を正確に表してはいません）。生き残れる確率は低い。マダラと戦った時以来の

大博打だ。

敵の攻撃の瞬間に反撃することで、確率を上げる方法はある。しかし、千本は器用に三方向から飛んでくる。今のオオノキではどれが本体か分からない。だから、結局博打になる。

なお、実際はアラレと長袖と釜倉が協力して千本を投げたが、今のオオノキには複数いる可能性について頭が回らなかった。

よし。チャクラは溜まった。後は神任せじゃ。原界剥離の術！

巨大な立方体がオオノキから伸びる。立方体は鏡ごと空間を覆い、一気に塵に変える。

術は無事発動した。オオノキの意識は薄れていく。やったか……？

「ほよー！ あぶなかつたー！」

失敗だった。娘は生きていた。

クソツ。クソだけにクソツ。オオノキは頭の中で悪態をつきながら気を失った。

さて、アラレが危なかつたと言っているように、実はオオノキはアラレに術のタイミングを合わせることができていた。ただ、両手を突き出して立方体を出すまでに間があるので、アラレは見てから回避できたのだった。氷の鏡を移動する時の雪一族の速さを見誤ったことが、オオノキの敗因だった。

と言っても、アラレではなく長袖と釜倉を狙ったならば、殺せていたが。彼等アラレほどの反射神経も、咄嗟に攻撃を中止して回避に徹する器用さもないからだ。

卑遁・千年殺し景厳

気を失った土影がフラッと落ちていく。アラレの作った鏡にドサリと落ちる。

まさかの大金星。長袖と釜倉は、未だ目の前の光景が信じられない。アラレは土影の隣に立ち、千本を手に取った。

「待っ！ 生け捕りっ！」

長袖が咄嗟に叫んだ。殺してしまうよりは、生け捕りの方が戦略的価値が高い。上手く行けば一気に終戦に持っていける。

が、心配は無用だった。

「っーん、つつくっーん」

アラレは土影の尻を突いて遊ぶだけだったからだ。

「ほよよ。動かなくなっちゃった」

満面の笑みでそんなことを言ってくる。どう反応すればいいのか。

「そ、そうだね。僕達が勝ったんだ」

「あんまし強くなかったね」

「いやいや、そんなことはないよ！ ギリギリの戦いだった！ 不意打ちが決まらなければ皆殺されていたかもしれない！ 何より雨で視界が悪かったのが幸いだった！」

「あっ！」

長袖が興奮して捲し立てていると、突然釜倉が叫んだ。と同時に千本をアラレの近くに投げる。

「チツ」

そこにボッチがいた。千本を回避し、急いで鏡の外へ出ていく。黙って土影を回収するつもりだったのだろう。

釜倉と長袖はさせじと千本を構える。アラレは笑顔でボッチを指差した。

「あっ！ ボッチん！」

「アツ、アラレ！ そのおっさんくれ！ おっぱい大きくする方法教えてやるから！」

ボッチは咄嗟に言った。何気に年下への面倒見がいいボッチは、ア

ラレの性格を熟知していたのだった。

とは言え、さすがにそんな言葉には乗せられないよね？ 長袖と釜倉は不安げにアラレを見る。

「ほよ？ いいよー！」

が、満面の笑みで頷いてしまった。

「ええーっ！ ダツ、ダメだよアラレちゃん！」

長袖が慌てて諫めるが、アラレは「ほいつ」と言つて土影を投げ飛ばしてしまふ。

「さすがアラレ！」

「くっ」

ボッチが受け止める態勢に入る。長袖はジャンプして鏡から飛び出す。

「きゃははははは！ あんたらうんこまみれのおっさんが欲しいの？」

アラレの言葉に若干気を落としつつ、すぐさま真剣に戻る。

両者手を伸ばす。ボッチが受けとる方が早かった。

「うっ」

ところが彼女は、うんこまみれの土影を抱えることを躊躇する。手で触れず、落下に任せて泥人形に乗せる。

その時間遅れで、長袖がボッチの泥人形へ辿り着いた。

ところが、長袖は知り合いの女性を前にして、戦闘を躊躇してしまふ。そこで考え直す。殺しが無理なら拘束を、と。

「諦めるんだ！」

そう言つてボッチの胸ぐらを掴みにかかる。

「何をだ？」

「あっ」

ところが、空中だったり戦闘を躊躇したりしたせいで、手が狙い通りの場所に行かなかった。

何の因果か、豊かな乳房をガッツリつかんでしまった。

「離せ！ この野郎！」

「ぐっ」

長袖は空中で蹴飛ばされてしまう。避けることもできなかったが、女性の尊厳を傷つけてしまったので、わざと受けたのだった。

長袖は背後に鏡を出し、落下を防ぐ。改めてボツチ目掛けて飛ばうとする。

しかしその時、二人の間に紫色の霧が入った。

「これはっ！ 半蔵さんの！」

気づいた時には、下から毒霧が一斉に迫ってきていた。長袖は慌ててアラレ達の方を見る。2人とも毒から逃げるように移動を始めていた。

「くっ、こんなことって！」

長袖もアラレを追うように毒から逃げていく。チラとボツチのいた後ろを見やる。濃霧に覆われていて、彼女は見えなかった。

さて、何故半蔵はこのタイミングで毒霧を出したのか。実は、彼の立場になってみればある意味当然だった。

上空の戦闘は、雨と浮遊するうんこの影響であまり見えなかった。しかし戦闘の音とチャクラの気配は伝わってきていた。それが、土影が気絶したタイミングで止んだ。当然、長袖達が負けた可能性が高い。だから半蔵は、土影が地上に攻め込んでくる前に毒をばら撒いたのだ。

ひよつとしたら、土影が戦闘で素早く動けなくなっていて、この毒で死ぬかもしれないという期待もあった。長袖達が勝った場合も、ならば土影の首を持って逃げればいいだけだ。彼等が動けなくなっている場合は巻き添えを食らうが、半蔵にはそこまで気を配る余裕も義理もなかった。

数秒後、土影が敗れたとの知らせが入り、岩隠れは撤退を決意した。半蔵、サソリ等がお返しとばかりに猛攻を仕掛けた。増援に来たばかりの木の葉隠れと桃隠れはさらに勢いがよかった。

岩隠れも粘り強く反撃した。一時は人柱力ハンによって盛り返しさえた。が、木遁使いのトグロに遭遇すると、ハンは不利を悟って逃げていった。

さらに、そこへ中忍試験の会場から走ってきたクシナ等が加わる。

完全に木の葉同盟軍に有利となった。

しかし、ここからが長かった。第二次忍界大戦中、また戦後において、雨隠れは土地の大部分を岩隠れに奪われていた。半蔵は全て奪還することを望み、敵の駐屯地を一つ一つ潰していくことになった。

が、その中には雨隠れか岩隠れか、はたまた石隠れか草隠れか微妙な領土もあった。戦争が続く中、木の葉の忍びが徐々に里に帰っていく。桃隠れの士気も下がっていく。砂隠れに至っては、東西統一後の内戦にかかりきりで、全く戦力を寄越さない。

しかし、戦線は拡大していく。トグロや綱手の手が届かない場所で、被害が増えていく。ミサイル攻撃を有効に使えば、ほとんど無傷で相手を降伏させることができたが、その残弾も怪しくなってきた。

実はミサイルは数に限度があった。大雑把な形はトグロの木遁によつて一瞬で作ることができるが、微妙な寸法合わせや強度の補強は時間をかけて手探りでやっていた。そうでなければ音速を超えたミサイルは狙い通りに飛ばない。

暁は、最初のうちは侵略してきた岩隠れにだけ抗議を行っていた。民間人への残虐行為や民家の破壊、盗みなどに対しては、積極的に攻撃もしていた。しかし、ミサイル攻撃による蹂躪を見ると、トグロも非難し始めた。蹂躪と言ってもできるだけ殺さず捕虜にしていたにも関わらず。半蔵の毒攻撃に至っては、風で邪魔をすることもあった。

雨隠れの土地を約8割奪還した頃、トグロの元に長袖達が大勢でやってきた。そして言った。もう戦争はやめたい。何のために戦っているのか分からない。話し合いで解決できないか。と。親衛隊、警備隊による初めての直訴だった。

「俺もそろそろ頃合いだと思っていた。癪だが暁に頼もうと思う」

「ではー」

「いや、あつても休戦だろう。岩隠れは諦めていない」

「そんな……」

それに、半蔵を説得できるかどうかの問題もあった。

ある日の合同戦略会議で、トグロは冒頭に言った。

「ミサイルが無くなれば、また戦争の被害が酷くなる。戦争が長引けばミサイル自体の対策を取られてしまう可能性もある。勝っているうちに辞めた方がいい」

領土を取り返したい半蔵には都合の悪い話だった。しかし半蔵は怒るどころか、納得したような顔になった。

「そろそろ言うってくるだろうと思っていた。だが、桃隠れから同盟の協定を破ろうとしているんだ。補償はしてもらおうぞ」

トグロの予想より半蔵が弱腰だった。先代風影やダンゾウと比べると、おだやかで平和主義的とさえ思える。逆に罨かもしれないような気もする。半蔵は自分を閉じ込めて人体実験していた男だ。

「うちは、戦後民間人がまともに生活できるまでの支援は、基本的にタダだ。それじゃ足りないか？」

「足りんな。お前が言っているのは、同盟国じゃなくとも受けられるものだ。雨隠れは同盟軍として戦力の補償を求めろ」

「はつきり言って、今回の戦いは初戦に土影を落とした我々の功績が大きかった。大規模にミサイル攻撃を行ったのも我々だ。戦果の優劣を考えれば本来譲歩する必要すらない。これが木の葉なら領土の一部を要求しているだろう」

綱手がそう言うと、半蔵は途端に苦い顔になった。

「分かった。俺とてお前達との関係を崩したくはない。傲慢な大国に囲まれ、常に緊張に晒される中、お前達とは議論をしても心地よくさえあるからな。ならばこういうのはどうだ？ 俺の親族と、お前達どちらかの親族で、婚姻を結ぶというのは？」

突然の提案だった。

しかし、一朝一夕で思いつく話ではない。半蔵は本気で桃隠れと手を結ぶつもりなのかもしれない。

「親族と言っても、俺と深く血のつながりがあるのは赤子だけだぞ」
「私もそうだ。千手一族、うずまき一族ならいるが、血が一番近いのはおそらくクシナだな。だがあいつは問題外だ」

だが、トグロも綱手もすぐに結婚させられるような親族はいなかった。そしてそれは、半蔵程の男なら調べられる内容である。トグロの

親族を辿るのは困難だが、例外的に半蔵だけは知っている。

半蔵はうなずいた。

「俺の子どもも長男が今10歳だ。だから、お前達の赤ん坊の誰かと結婚する、という曖昧な婚約でいい。が、子供同士の交流を深めるために、木の葉のアカデミーのようなものを作りたいと考えている。場所が雨隠れと桃隠れの国境沿いか、桃隠れよりいい。そっちの方が安全だろうか」

半蔵は驚くほどおだやかな口調で言った。実は子煩悩だったのだろうか。

あまり信用するのもよくないが、同盟を強くすることには意味がある。

桃隠れの東は木の葉隠れ。綱手がいるので攻めてくることはほぼない。西は砂隠れ。現在の風影との関係は良好であり、あまり心配せずともいい。南は海。北は雨隠れ。

唯一北の雨隠れだけ、いつ裏切ってくるか分からなかった。ここが磐石になれば、桃隠れの安全はほぼ確立される。

「半蔵殿からそんな言葉が出るのは意外だった。しかしいいと思う」

トグロは綱手の方を見る。

「私も賛成だ。いずれにせよ、戦争を終えないことには取らぬ狸の皮算用だな」

次に戦争を辞める話に移った。

戦争を始めるのは簡単だが、辞めるのは本当に難しい。戦いが長期化し、恨みつらみが積み重なったらなおさらだ。さらに、今回は領土が深く関わる。向こうは大国としてのプライドがあり、小国に妥協しようとはしないだろう。

だが、ここでトグロの情けない女癖が生きる。

「捕虜にした忍びが、100人近くいる。若く美しい娘が80人近い。こいつらを人質に交渉できないか?」

「何!?! いつの間になんか!?!」

これには半蔵も驚いた。

「初めからだ。俺は基本的に女は殺さないんだ」

「それだけ多いとなると、交渉カードには十分だな。と言っても、返した途端反撃もありえる。それを防ぐためには、確実なのは封印術だな。捕虜の女共に、遠くからいつでも発動できる呪いをかけておく」「それも仕方の無いことか。だが、将来の禍根を考えると、女を傷つけ過ぎるのもよくない。終戦の条約に、5年か10年か、何事もなければ女の呪いを解くよう明記させてくれ」

「いや待て。それをするなら、5年以内に解除するのは土影に近い人間、10年以内は土影から遠い人間としてくれ。差をやることで岩隠れの反体制側を煽ることができる」

「なるほどな」

やはり、半蔵もダンゾウと同じのような卑劣戦士だったか。この『なるほどな』にはそういう意味も込められていた。

その後、暁に和解の仲介役を頼み、岩隠れに親書を手渡した。捕虜の取引、領土の取り決め、賠償金の支払いなどが、想定しているものよりやや連合軍よりに書かれていた。どうせ岩隠れも岩隠れよりの内容を要求してくる。細かい部分は話し合いで決着をつけるしかない。

一週間後、岩隠れから返答が来た。

領土を第二次忍界大戦終結時まで戻すこと。賠償金を支払うこと。ミサイルの使用を禁止にすること。捕虜に呪いを仕掛けないこと。土影に失礼を働いた雪一族の娘を引き渡すこと。を、条件に和解に応じるとあった。

桃隠れとしては、最後以外は受け入れられる。が、半蔵にとっては全てダメだった。

戦争が再開する。桃隠れは止めのつもりでミサイルを多投し、さらに勢いよく領土を奪い返していく。

岩隠れは溜まらず土影を復帰させる。その初戦、全身に包帯を巻いた痛々しい姿で、アラレに一对一の再戦を挑んだ。

「娘エー！ お前だけは楽に殺さん！ ひっ捕らえてボコボコにしてやるじゃぜ！」

「きゃははははは！ うんこのおっさん！」

「なんじゃとおおお！」

しかし、出会い頭にバカにされてしまう。それだけならよかったが、土影は怒りで全身に力を込めてしまい、傷口が開いた。

「ぐおおっ、がほっ」

「お、親父イ！ 無理すんなで！」

血を吐いたオオノキに、息子の黄ツチらが群がろうとする。しかしオオノキは片手で部下を制した。

「小娘1人に土影が助けを呼んだとあっちゃあ、名折れじゃぜ」

オオノキは脂汗をかきながら気丈に笑った。

ところがアラレは、そんなオオノキを前に鼻くそをほじっていた。

「ぐっ、おのれエー！ あぐっ」

オオノキはまた怒り、また痛い思いをしてしまう。

落ち着け、わし。冷静に動けば何でもない相手じゃ。

アラレは鼻くそをトグロに飛ばして遊んでいた。その様子を見ながら、オオノキはすーはーと深呼吸をする。

「お、親父い！」

再び黄ツチから声がかかる。

うるさいのお、愚息が。わしがあんな娘に遅れをとるはず無かるう。

オオノキが内心でそう言った時、後ろから娘の声が聞こえた。

「んちゃー！」

「なっー！」

振り向くと、いつの間にか例の氷の鏡がオオノキの後ろにあった。そして娘がすさまじい速度で飛び出してくる。

「ぎよほほほほー！」

満面の笑みだった。今のオオノキにはただ不気味に映った。

オオノキは知らないが、実は氷遁の鏡を作る術は片手印だった。さらに、アラレは鼻をほじっているように見えて、器用にもほじっている側の手で印を結んでいた。そしてトグロに鼻くそを投げながら術を発動したのである。

とかく、ダメージのあるオオノキでは回避できない。またあの鋼鉄

のような頭が？ あの時の悪夢が蘇る。

「ぐっ」

しかし、ガードは間に合った。頭突きから身を守るべく、全身を土遁で強化する。寝込んでいる間に練習した術だった。これでダメー
ジなしとはいかないが、一撃でダウンするようなことはない。

が、アラレは頭突きをしなかった。前傾姿勢のまま印を組むような真似をし、その手をオオノキの尻に突っ込んだ。

禁術、卑遁・千年殺し景蔽（かげよし）。

「んぎゃあああー！」

オオノキは尻から茶色がかった水を放出しながら吹っ飛んだ。

ただの浣腸ではない。指で尻の穴を刺しながら、水遁で水を注入しつつ排泄を促す。トグロから禁術指定を受けた、アラレオリジナルの卑遁だった。しかしこの戦いでは使用を認められていた。

オオノキは叫んだために、傷口は完全に開いてしまった。その傷と下腹部の強烈な痛みで、オオノキはまた気を失ってしまった。しかも、また部下の前でうんこまみれになって。

「親父イ。だからまだ早いと……」

「やっぱつええなあ。アラレのやつ」

土影の再びの敗戦。岩隠れの忍びはショックを隠せない。しかも惨め過ぎる負け方だ。

一時戦いが止まった。岩隠れはショックのあまり。桃隠れと雨隠れは終戦を期待して。

黄ツチがハツとして気付いた。

「おい募ツチ！ 早く親父を回収しろ！」

「ええーっ。いやだなあ、あんな臭そうなの。うんそうだ。前だつてしばらく匂ったんだぜえ。うんこだけにうんそうだ」

「おまつ！ 戦場で何を言っているだに！」

ボツチはただふぎけているわけではなかった。戦争に嫌気がさしていたので、土影が負けたタイミングで辞めたかった。が、投降を口にするには憚られて、このような態度で微妙に表したのだ。

2人が言い合っている間に、アラレは気絶したオオノキをトグロに

投げつけた。トグロはうんこがかからぬよう木の根っこで受け止め、匂いが漏れぬようグルグル巻きにした。

「岩隠れよ！ 此度の戦我々の勝ちだ！ おとなしく投降せよ！」

「もういいだろう！ 戦いは悲しみしか産み出さない！ 対話に応じてくれ！」

トグロと、それに被せるように弥彦が言った。

しばらく両軍動かなかった。実は岩隠れの中でも、戦争をやめたい勢力が多数派だった。

不意に、視線が黄ツチに集まり始めた。両軍からだ。オオノキが倒れた今、指揮を執るのは彼だからだ。

「暁に従おう。我々は一時休戦する」

暁を選んだのは、彼らの方が手温いと思ったからだ。それに、桃隠れに投降したとあつては、後で父に殺されるかもしれない。

新事業と暗躍と

桃隠れの危機はひとまず去った。

岩隠れは相変わらず領土的野心が大きいが、手強い木の葉連合から他の小国や隣の雲隠れへ狙いを変えた。砂隠れは内戦中だが、戦力を要求されるほどではない。木の葉隠れは霧隠れと雲隠れとの戦争に入ったが、三代目火影が甘いので後方支援だけで許してくれる。

とは言え、木の葉には助けられた部分もあるので、少しだけ前線で戦った。ミサイルを利用した安全な戦いのみだが。また、戦争難民から美少女を選びすぎるために分身を遣わしているのも相変わらずだ。分身も自衛のための戦闘はしているから、木の葉に役立つとは思われる。木の葉の忍びに襲われたら反撃することもあるがな。

平和になったので、半蔵との約束通り学校を作った。桃園アカデミーという、いかにもハレンチそうな名前をつけてしまった。どうせだから、忍者コース、技術者コース、学者コース、メイドコース、と一度に作ってしまった。メイドコースは特別枠で各コースと併用可。料理、洗濯、育児、介護、簿記、マッサージ、エッチ、とどこに出しても恥ずかしくない万能メイドになるためのスキルを余すところ無く学ぶことができる。俺の親衛隊希望者はメイドコースが激しく推奨される。

しかし、メイドコースでは世間体が悪いと綱手が言うので、サービス業コースと名称を変えておいた。

ちなみに、川の国にも雨隠れにも既にふつうの学校はある。あえて技術者コースや学者コースを作ったのは、忍者の能力の底上げに彼等の知識も役立つと思ったからだ。新忍術の開発や弾道計算だけでなく、ミサイル攻撃のような新戦略の発想まで。戦闘だけでなく、土木工事や医療行為にも忍術は役立つだろう。

もつとも、俺が欲しているのは専門レベルであって、大学未満は現状の教育機関に任せるが。

ただ、俺には1つ懸念があった。前世の学校は、学校が一番の目的になって社会で活躍するという意識がおろそかになっていた、と。

よって仕事と生活が一番であり、学校は二の次という扱いを明確にした。授業は週三日で、一月ごとに大型連休がある。その代わりに授業は超スパルタだ。基本的に二泊三日で朝から夜までガンガン詰め込む。メイドコースは夜中にウフフもある。

毎回宿泊するのは、生徒同士を緊密にする狙いがある。前世でも、同じ授業を受けたからと言って親しくなるわけではなかった。が、部活などで合宿をすると仲間という感じがした。共に食事をし、共に風呂に入り、共に寝るといふ行為がいいのだと思う。

イメージとしては学校というより修行場だろうか。実際、忍者コースの内容は基本的に今までの修行と変わらない。雨隠れ側の意見も取り入れなければならぬから、毒、殺し、脅し、騙し、等に関するものが増えるが。

アカデミーが始まって1年が経った頃、不意に岩隠れから親書が届いた。

『雨隠れの暁が戦場の各地で暴れ回り、扇動によって若者を引き抜こうとしている。我々は木の葉連合との和解に費やした努力、その後の両国の関係を考え、大きな行動は起こさなかつた。しかし、これ以上の被害に目を瞑ることはできない。このまま何も手を打たないのであれば、木の葉に侵略の意志ありとして、自衛のために再び戦火を交えることになるだろう』

警告だった。とても怒っていることが伝わってきた。

雨隠れの暁と書いているが、木の葉に侵略の意志ありと書いている辺り、暁がどちらかと言うと俺に近いことは岩隠れも知っているようだ。

まあ、任務を依頼したり物資を届けたりしているのはうちだけだから、丸分かりか。

しかし、今回ばかりは暁の味方をしたい。明らかに岩隠れが小国を攻めているのが悪い。どころか、小国を奪い終わったらまたこっちに攻めてくるだろうから、暁がそれを妨害してくれるのはありがたい。戦争被害者を救ってくれるのも、俺の方針に合っている。

桃隠れも、民間人の警備や復興の手伝いと称して、小国に格安でサソリ等優秀な忍びを傭兵として送っている。暁などへの後方支援も積極的にやっている。俺自身も、空海の名で戦地を歩いている。

だが、このままではまた戦争になるかもしれない。どうしたものか。もし戦争をするなら同盟国にも説明をしなくてはならない。

親書が届いてすぐ後に、中忍試験の本戦があつた。そこで火影や半蔵に会うので、暁の処遇について語り合ってみることにした。

本試験には、クシナ、アラレ、半蔵の長男正就、三代目火影の息子猿飛アスマ、等注目選手が出場していた。クシナとアラレは木の葉の要求を飲んで出場させた。半蔵の長男もそうだ。まあクシナは本人にも中忍になりたい気持ちがあつたが。

また、ミナトの弟子であるうちはオビトが4回連続で出場していた。前々回クシナと、前回月と当たって、かわいそうに見せ場無く惨敗していたから、今度こそはという感じだった。

一回戦、オビトの相手はアラレの姉のミゾレだった。彼女の實力はギリギリ中忍程度だが、アラレのお守りのために参加させた。チーム戦ではアラレのとんでもない實力を借りられたので、当然のように本戦まで残ったわけだ。

聞くところによると、既にオビトは十分中忍で通用するレベルにある。ミゾレに勝ち目は薄い。しかし彼女には武器があつた。雪一族に共通する美貌である。

「試験開始！」

「よろしくね、オビトくん」

「え、ええ」

ミゾレは挨拶をしながら胸元をチラツと見せた。オビトはアホ面でそれを覗き込んだ。

オビトがポケツとしているうちに、ミゾレの印が完成する。

氷遁、刺しツララの術。

俺の挿し木の術の氷遁版だった。チャクラ量もチャクラコントロールもまだまだなのでしょっぱい攻撃だが、刺されば人は死ぬ。

「えっ、うおうっ」

オビトはポケットとしていたが、ギリギリで腰を逸らして避けた。よかつた。こんな場面で人殺ししなくって。

体勢の悪いオビトにミゾレは突っ込んでいく。両手を氷の刃に変え、振り回す。俺の木遁のように刃を伸ばしたり分裂させたり、形を変えながら。やはりレベルは低いが。

「よっ、ほっ、ほっ」

オビトは服や肌の表面を切り裂かれつつも、致命的な攻撃は確実に避けていく。動きは軽やかだ。この変は確かに中忍か。

「はあ、はあ、はあ」

対して、様々な術を使い、重い氷を振り回していたミゾレはもう息が切れてきている。勝負あったか。

ふと、ミゾレが氷の刃を落とした。

「はあ、はあ」

「どうしました？ もう諦めましたか？ 気落ちする必要はありませんよ。僕が強すぎるんです」

オビトはにやけ面で得意げに言った。完全に凶に乗っている。

「オビト何やってんの！ さっさとやっちゃいなさい！」

ミナトの弟子の少女が叫ぶ。オビトはビクツと驚いたような反応をし、真面目な顔になった。

「そういうことです。終わらせてもらいます」

オビトはクナイを手に持ち、一転して攻勢に出る。

「ぐっ」

今度はミゾレが防戦一方となった。クナイを避け、腕を弾き、致命傷は避けていく。徐々に傷が増えていく。

だが、意外にも試合は終わらない。オビトが攻め切れていない。逆にカウンターが決まったりする。

現在ミゾレが使っているのは柔拳。彼女は白眼を持っているわけではないので、単に体術として使っている。しかし、オビトがそれに対応できていない。ミゾレは非力だがスピードはある。綱手直伝の一点集中チャクラによる一瞬の爆発力もある。オビトのような広範囲攻撃の無い忍びには意外と辛い相手かもしれない。まあ、オビトが

女相手に手加減するのを止めたら、ある程度簡単に勝てるかもしれないが。

一回戦からしよっぱい試合になった。観客もそんな感想を抱いていることだろう。

「うおっ」

「えいっ」

ふと、試合が動いた。ミゾレがオビトに突進し、押し倒した。そして片手印を結んでいく。

これはまさか、逆転勝利か？

ミゾレの体が冷気を纏い、全身に氷の粒が集まっていく。手のひらには氷の爪。それをオビトの背中に突き刺し、抜けないようにする。

このまま冷やして戦闘不能にしようというのだろう。

対して、オビトは行動が遅い。美人のお姉さんに抱きつかれたことで鼻の下を伸ばし、クナイによる攻撃を躊躇していた。

「降伏してください！ 僕の勝ちですよね！」

オビトはクナイをミゾレの背中当てて言った。ちょうど心臓あたりの位置だ。

「やってみなさい。氷を砕くことができればね」

「えっ」

ミゾレに言われてオビトは軽くクナイをミゾレに刺そうとした。キーン、と金属音がして弾かれた。ミゾレの体は既に氷のように硬くなっていったからだ。

しかし、微妙な試合だ。このまま行けばミゾレが勝つが、ミゾレが氷化する前にオビトが攻撃すればオビトが勝っていた。今回それをしなかったのは、これが試合であり、ミゾレを傷つけたくなかったからだ。実戦ならオビトが勝っていた。すつきりしない。

「残念な結果になりました。私としては、うちはオビトに勝ちをあげたいところです」

「ほう？ 川影殿からそう言われるとは」

「火影様はミゾレの勝ちで問題ないとお考えですか？」

「もちろんじゃ。忍びならばルールの中でも裏の裏をかいて、逆に

ルールを利用してやるくらいの気概で勝たねばならぬ」

「なるほど」

確かに火影の言葉にも一理ある。諸大名に里の力を見せ付けるといふ目的とは合致しないが。

「オビト……！ 何やってんのよ……！」

「アホ」

ミナトの弟子の応援空しく、オビトは情けないアヘ顔のまま動けなかった。結局、氷付けになる前に審判が試合終了を宣言し、ミゾレの勝ちとなった。

試合は次々と進んでいく。順当にクシナ、正就、アラレ、アスマが勝ち上がり、4人による準決勝となった。

先にクシナ対正就があり、次にアラレ対アスマがある。影の息子同士というやつかみがありそうな戦いを避けつつ、負けても仕方が無い實力を持つクシナとアラレに負けさせる。とは言えアラレはいろいろと幼いので、どちらかと言うと腰の低い火影側に負けさせる。かと言つて両者とも準決勝までには進ませる。

誰かがクジの操作をしているとしか思えないくらいでき過ぎていた。

「半蔵殿、そちらの息子は毒霧が使えないでしょうから、クシナにも九尾の能力なしのハンデをつけましょう」

「いえ、お気になさらず。この場で戦うための術を持っていない我が息子が未熟だっただけのこと」

「なるほど。半蔵殿は謙虚ですな」

示し合わせたような会話だった。半蔵と雨隠れに恥を欠かせないための配慮だろう。

試合が始まった。正就は体術で頑張ったが、中忍程度の実力だった。既にも上忍上位レベルにあるクシナの相手にはならず、一方的にボコボコにされて負けた。

試合中半蔵は何も言わなかったが、眉間がピキッと鳴った。チャクラも刺々しかったし、不満だったろうと思う。

次のアラレ対アスマはさらに悲惨だった。うちはミグシが「アラレ

ちやん！ 汚いもの出しちゃダメよ！」と言ってしまったのだ。それはつまり、押すなよ押すなよ、を意味する。

「ほよー！」

試合早々、アラレは巨大うんこを口寄せした。アスマがそれに潰されてしまい、試合終了。さらに言えば、会場が臭くなつて大名が怒つてしまい、本戦終了。俺たちは後から大名をなだめなければならなかった。

大名に散々謝った後、ギリギリでここへ来た本当の理由を思い出した。

俺は火影と半蔵を呼び、暁の名前を出した。

「私としては、この件については放っておくべきだと考えています。やはり今回は暁が正しい。放置した場合、岩隠れが連合に攻め込んでくるかもしれませんが、放置せずとも小国を支配した後に攻めてくるでしょう。ですから、遅いか早いかの問題ではないかと」

「遅いか早いか、か。しかし、それは今の木の葉にとって問題じゃぞ。霧隠れ、雲隠れとの二方面の戦いでギリギリ持っておるが、ここに岩隠れが加われば崩れる。なんとか岩隠れとの衝突を先延ばしにできるんかの？」

火影は崩れると言ったが、表情はそこまで暗くない。先の戦いの結果もあり、雨隠れと桃隠れだけで十分岩隠れと戦えると思っっているからだろう。

しかし、一応火影に従っておく。俺たちだけで岩隠れと戦うより、木の葉がいた方が被害が少ない。何より、もう少し待てば砂隠れが応援に来れるようになる。

「なるほど。そういうことでしたら、頑張ってみましょう」

「よろしく頼む」

「半蔵殿もそれでよろしいですか？」

「……ああ、まあいいだろう」

少し言葉に含みがあった。しかしいちいち気にしてもしょうがない。こいつが胡散臭いのいつものことだ。

桃隠れに帰った俺は、その足で暁の基地に向かった。弥彦と小南は

戦場に出張っついておらず、よりによって長門だけいた。

「用件が無いなら帰れ」

「俺は小南に話がある」

小南が帰ってくるまで暁の基地で待たせてもらった。ただ待つのではなく、畑仕事をしたり、前線に必要な支援を調べたり、岩隠れに対する時間稼ぎの方法を考えたりした。

多くの住民は俺に対し、好きではないが丁重にもてなさなければならぬ相手、という感じだった。弥彦と長戸の教育が行き届いているらしい。小南に近い人間は俺に好意的だったが。

また、驚いたのが、村の規模が急激に大きくなっていったことだ。ダムができた頃の集落程度の土地と人口がある。見知らぬ若い戦闘員も多い。岩隠れが周囲の小国に侵攻を初めてから、暁が果たした役割は大きい。戦闘や避難誘導に留まらず、小国同士の連携の仲介役も担っている。演説に乗せられずとも、各国の若者が暁に希望や憧れを抱くのは自然と言えた。

3日後、小南、弥彦、サソリ等が疲れ果てた顔で帰ってきた。怪我もところどころあった。長門がいなかったから戦場で無傷とはいかなかったのだろう。長門が2人と出かけずにここに残った理由は、中忍試験で俺達が里を空けて、その間に雨隠れを攻められた時に守るためだったらしい。

「木の葉でパーティか。余裕だな。川影様は」

弥彦は皮肉げにいった。

「お前達も一旦休憩してもらいたい。砂隠れが動けるようになるまでな」

「はあ？ 何言っやがる。この瞬間にも人が死んでるんだぞ！ 俺達は一瞬一秒も無駄にできないんだ！」

「弥彦、こいつと話してもそれこそ時間の無駄だ。こいつは既に体制側の犬になったのだから」

「ああ、そうだったな」

「ちよっ、2人とも。それは言い過ぎでしょ」

対話による変革を望んでいるはずのこいつらが、俺との対話を時間

の無駄と言う。しかも、こんな分かりやすい矛盾に気付いているのが、小南だけ。ストレスで大変なのは分かるが、末期だな。

俺は小南とサソリを呼んだ。俺が要求を伝えるときはいつも小南相手なので、特に怪しまれることはない。

「岩隠れから警告が来た。今までとは違ってキツイやつだ」

「ふん。今さらか。やつらにしては時間がかかったな。余裕が無いんだろう」

「どうするの？」

小南は不安げになったが、サソリはむしろ笑った。表面的な言葉を見ず、相手の実情を探る彼ならではの反応だ。

「少し、時間を稼ごうと思う。サソリが言ったように岩隠れは焦っている。もう少しで風の国が安定し始める。そうなると、木の葉連合は完全に手が出せない相手になるからな」

「時間を稼ぐと言っても、相手もこの状況を理解しているだろう。どうやるつもりだ？」

「交渉カードが2つある。1つは、実はこの1年で捕虜にした岩隠れの忍びが約20人いる。そいつらの取引だ」

「あなた、また……」

小南が呆れたような顔になった。だが、1年前に俺の女癖は和平交渉に生きると判明したのだから、ある程度認めてくれてもいいのではなかろうか。

「ほとんどは密入国者だ。桃隠れの血系限界を持つ子どもを攫おうとしたり、破壊活動をしようにしたりな。前線で死にかけの娘や民間人を襲っていた娘を確保したのは6人だけだ」

「6人も……」

別にいいじゃないか。死にかけや悪女だったんだから。

「もう一つはなんだ？」

「こつちから他の小国を奪取にかかるんだ。そうして領土を拡張しても、岩隠れは俺たちを責められない。が、俺たちが強大化することによって追い込まれることになる」

「ほう」

「な、なによそれは！　ありえないわ！」

サソリは満足げだが、小南はやはり怒ったか。言い方がアレだったしな。

だが、よく考えてみるとそこまで悪いことではない。実際同じことをやって砂隠れとは上手くいっただしな。

「奪取と言っても乱暴な手は使わない。各小国から同士を募り、木の葉連合に加わってもらおう。岩隠れの恐怖が現実にある今、連合を魅力的だと思う人間も一定数いるだろう。もちろん自治権は大幅に認める。というより、実を言うと、この同盟は口約束でもいい。重要なのは、岩隠れが攻めたら小国は木の葉側につく、と岩隠れに認識させることだ」

「あつ」

「なるほど。そうすれば侵攻に及び腰になるか」

「ああ。そしてこの作戦の成否は、小南。お前の手腕によるところが大きい」

「えっ」

弥彦と長門にもかかっているが、あいつらは信用したくないからな。あえて小南を指名した。

大勢の命を背負わされてドキッとした小南がかわいかった。

暁連合誕生と言っているのかどうか

俺の策と言うと弥彦も長門も煙たがるので、小南が思いついたことにして小南から2人に話してもらった。弥彦は「すごいぞ小南！ それはいい策だ！」と喜び、長門も「あいつは好かんが、利用できる部分は利用しないとな」と乗り気で言ったという。

「ごめんなさい。あなたの知恵なのに、私がいい思いをしちゃって」
後で小南が謝ってきた。しかし大きな勘違いがある。

「別に弥彦と長戸に褒められてもうれしくない。俺が見ているのはお前だけだ」

小南はとても苦そうな顔をした。

桃隠れも暁も、今まで周辺の小国を歩き回ってきた。既に気の合いそうな連中には目星をつけていた。

例えば俺と仲がいいのは、石隠れの篠崎家。当主篠崎サヨコがメイド文化を気に入ってくれて、よく服を買ってくれる。エツチしたこともある。草隠れのナニガシ。これは偽名であり、本名は教えてくれない。たぶん抜け忍だと思う。孤児院経営の後輩であり木の葉嫌いの仲間でもある。彼女は女手1つで孤児院を経営していて、大変だろうから桃隠れが毎月仕送りをしている。とても感謝してくれているが、エツチは断られた。滝隠れの武装組織餌羽後（えうご）。戦闘隊長の志夜（しや）がよく桃隠れのメイド喫茶にやってくる。小さな女の子を見つけると「あんな少女に労働など」と怒ったフリをするが、口元はにやけている。メイドが子持ちの若妻だったらもつと喜ぶ。

暁と仲がいいのは、石隠れの革命勢力紅月一派。草隠れの武器商人奥撫（おうぶ）。歌って踊れる海賊欄華の一味などだ。夢想的な若者が多く、あまり信用できないが、今重要なのは岩隠れを威圧することだから眼を瞑ることにする。

彼等を中心に、次々と同盟を持ちかけて行った。

石隠れの篠崎、草隠れのナニガシは、すぐに策に乗ってくれた。というより、2つとも規模が小さいからそのまま桃隠れの傘下に入った。餌羽後はそこそこ大きな組織であり、今すぐ同意は得られなかつ

だが、同盟に対しては好意的だった。

欄華の一味は何があつても共闘しないらしい。紅月一派と奥撫は、暁と同盟を結ぶことには同意した。しかし俺たちのことは信じられないらしく、上から目線で『会って人柄を見極めさせろ』と言つてきた。

失礼なやつらだが、会つてやることにした。作戦には多くの命がかかっている。下手に出るのはムカつくが、利用できるだけ利用して、用済みになったら捨てればいい。

時間がないので、同盟する可能性のある連中を一度に呼び、まとめて交渉することにした。場所は暁の基地だ。

連合軍からは、俺、半蔵、それと川の国の大名である天宮を参加させることにした。綱手、砂隠れ、木の葉隠れは省いた。彼女たちを外して大名を連れてきたのは、小国の警戒を削ぐためである。あくまで、小さな組織同士の対等な議論、という形にする必要があつた。ここにダンゾウでも来た日には、議論が纏まらないばかりか突然殺し合いが始まつてもおかしくない。

と言つても、作戦のことは一応木の葉と砂に伝えている。秘密にことを進めすぎて、謀反を疑われたら面倒なことになる。まあ綱手がいる限り大丈夫だとは思うが。

雨隠れには珍しく、会談の当日は晴れていた。

俺は大名の天宮マサキと美女三姉妹を連れて会場入りする。姉妹は上から天宮マリ(20)、ソノミ(16)、ナデシコ(15)。マリは大名の娘のクセに戦闘好きで、以前はアンヌと偽名を使って親衛隊に入っていた。実力は中忍程度。今もサソリの部下として定期的に戦地を巡っている。剣術を使う。彼女が大名の娘だとバレた理由は、イズモの祖先が作ったという川の国の名刀、草薙の剣を持っていたからだ。切っ先に触れたら何であれ切り裂くという恐ろしい刀である。この刀によつてマリは上忍並の実力に引き上げられている。また、彼女は綱手並みに股が緩く、俺もエッチをしたことがある。

今回の大名の護衛は、俺と、遊撃隊隊長のサソリと、名前だけ川影補佐のクシナと、親衛隊隊長の月だ。文句なしに全員上忍の実力者

だ。以前中忍程度の初と長袖に護衛を任せていたことを思えば、涙が出るほど立派になった。下の世代も育ってきているし、10年後には木の葉を抜いて最強の里になっているかもしれない。いや、日向がいる限り無理か。

続々と他の連中もやってくる。

「結！ ちょっと待ってよ結！」

「黙れ帆！ デカイ声を出すな！ みつともないだろうが！」

「神居、お前こそ目立っているぞ」

「す、すみません。桑土呂隊長……」

餌羽後は、志夜と彼が目をかけている神居結（かみいゆい）、帆悠莉（はんゆうり）がやってきた。全員美形だな。

「ぷっ、あいつ男のクセにぐむうっ」

クシナが決定的なことを言いそうになった。ギリギリ、後ろから抱きついて口を塞いだ。危なかった。神居にそれは禁句だ。

「へえ、結って名前なんだ。女の子みたいね」

しかし、大名の次女ソノミがサラツと言ってしまった。これは防げない。皆の前で護衛対象に粗相を働くわけにはいかないから。

「貴様、今なんと言った？」

神居が予想通りブチ切れてしまった。面倒臭いやつだ。志夜もこんなやつ連れて来るなよな。俺も問題児のアラレは留守番させたぞ。

「ちよっ、急に何？」

「大名の娘だからってなあ！ 人より偉いわけじゃないんだ！ 結が

男の名前で何が悪い！」

「やめろ！ 神居！」

「結！ 落ち着いて！ 皆が見てるわよ！」

神居がズカズカとソノミに近づこうとする。志夜と帆が後ろから神居に抱き着く。

俺達も護衛としてソノミの前に出る。

「ね、姉さん！ 女の子の名前をつけるのは、確か子どもの健康祈願だったよね！」

しかし、不意に三女ナデシコが叫んだ。

「え？ ええそうよ。医療の発達していなかった昔は、出産直後の赤子や幼児の死亡率が高かった。身体が少し丈夫に生まれてくる女の子に比べて、男の子には特に顕著だった。だから、願掛けのように男の子に女の子の名前をつける習慣ができたのよ」

「す、すごい！ さすがは姉さん！ 博識ね！」

「別に、これくらいは……」

なるほど。姉を誉めつつ神居を慰めるか。忍びの殺気が飛び交う中で、よくぞ咄嗟に考えついたものだ。

川の国の大名が賢いことはよく知られている。俺が移住するまで録な戦力もなく、大国に挟まれながら独立を維持できたのは、大名の力が大きい。その血が、娘にもきちんと受け継がれていると言ったところか。

次にやってきたのは奥撫だ。

「へえ、しみつたれた場所だと思っただけど、なかなかどうして。美しい花がいくつも咲いている」

「ユウマ！ いきなりなんて失礼な！ 仲間になるかもしれない大切な相手だぞ！」

「仲間？ 客だろ？ 彼等は忍びだ」

「ユウマ！」

次の当主と言われるユウマとユラが夫婦でやってきた。こいつらは忍びではない。雰囲気も違う。

護衛の方は忍びだがな。一人知っているやつもいる。名前は確かタスク。起爆札の早業で有名な男だ。

篠崎家当主のサヨコ、孤児院のナニガシもやってきた。

「うわっ！ たまに見かけるメイドってばね！」

「今日はどうぞよしなに」

「空海さん。いつもいつもありがとうございます」

「いえいえ、大切な友人ですからね」

紅月一派と半蔵は既に中にいるので、これで会談が始められる。

円卓に並べられる俺達。暁の弥彦を中心に、両隣、右が大名の天宮と三姉妹、左が武器商人のユラとユウマ。以後、右は半蔵、サヨコ、俺

と続く。左は紅月、志夜、ナニガシだ。右翼と左翼で分けている気がするのは俺だけだろうか。

「皆、よくぞ集まってくれた。此度の緊急会談は、目下我々の土地に進行中の岩隠れに対するものである。俺は対話を諦めたわけではないが、現実には戦い奪おうとしてくる大国に、丸裸で立ち向かつては殺されるだけだ。この状況を打破するため、俺の同士である小南が打ち出した策が有効だと考える。聞いていると思うが、岩隠れが侵攻すれば我々が団結する姿を見せる、というものだ。自由な意見を求めたい」
初めにユラが手を上げた。

「我々は暁を信用している。お前達と手を組むことに何ら異論はない。だが木の葉、こいつらだけは全く信用できん。以前の大戦では、うちの子どもを何人も攫い、卑劣な人体実験を行った！しかし、その事実に対し、賠償もなければ謝罪すらしていない！どころか、同意の上だったとほざく始末！大国なら何をやってもいいと考えているのか！貴様らは！」

皆の視線が俺に集まった。いや、俺も木の葉嫌いなんだけど。

「私は木の葉隠れの代表としてこの場に来たわけではありません。私は桃隠れの川影です」

「そんな理屈が通用すると!? 綱手など火影と並ぶ木の葉の象徴ではないか！」

失礼なやつだなあ。かわいい娘だが、嫌いだ。青年団時代のカルラを思い出す。まあカルラは過去ではなく現在を見ていたから、現実を見せれば納得してくれたがな。こいつは過去に拘っているから厄介だ。しかも、人体実験なんてまともな証拠が残っていないはずが無い。多かれ少なかれどこの里もやっていたのは間違いないがな。それを感情的に「お前達だけ極悪だ」「証言がある」「謝罪だ賠償だ」と言っても、木の葉も反発するだけだろう。

第一武器商人のこいつらが正義を語るか？ 人殺しで儲けている癖に。

「私のことが嫌いでも、この策を実行することはできると思います。本気で同盟を結ぶ必要は無いのです。岩隠れに我々が手を組んだと

思わせることができれば」

「口で同盟と言ったら被害者を裏切ることになる！ どうせお前達はそうやって戦争犯罪をうやむやにするつもりなんだろう！」

はあ？ 何言ってるんだこいつ。

「ユラ、落ち着きなさい」

「これが落ち着いていられるか！ 我々は舐められているんだ！ 口だけの同盟で人体実験問題の合意を得たと言って、未来永劫に渡って被害者の口を閉じさせようとしているんだぞ！」

ユラは立ち上がってわめいてくる。ユウマが裾を引つ張つて座らせようとするが、ユラは動かない。

いや、しかし全く。ここまでバカとは恐れいった。現在進行形で被害者が増えているのに、もう自由になっている人間の過去に徹底的に執着するとはな。犠牲者を減らす努力とかは考えないのか？ それに、武器商人であるお前達が出してきた被害者はどうするつもりだ？ 未来永劫に渡って謝罪と賠償を続けるか？ それが木の葉だとしても？ やらないだろうよ。

「綱手を引つ張り出せ！ やつの口から被害者に謝罪させるんだ！ 被害者が納得するまでな！ そして、二度とこんな卑劣な行いはしないと約束させる！ 終身にわたる十分な補償を受けさせる！」

ダメだ。殺したくなってきた。抑えないとな。相手はタダのバカな小娘だ。

「トグロ、謝罪の1つでも口にしたらどうだ？」

が、弥彦が言ってきた。さも、ここで謝罪しない俺が非常識、というふうに。

もう我慢できない。

「はあ!? なぜ俺が!？」

「なんだと!？」

言ってしまった。ユラがさらに怒り狂う。弥彦も怒りの表情になった。

これは、作戦も終わりだな。残念だ。だが、こいつらと仲間になるのはリスクが大き過ぎると思う。岩隠れを応援したいくらいだ。滅

んで欲しい。

「聞いたか諸君！ あれが大国の放漫な考え方だ！ 謝罪を迫られると居直つて逆切れする！ 魂が無いんだ！」

「ご、ごべんなざいいいいいい！」

と、ここで驚くことが起こった。

「ナデシコ、何を」

「ごめんなさいいいいい！ 許してくださいいいいいいい！」

ユラの演説を遮るように、ナデシコが謝ったのだ。

「大名の娘さん。あなたに謝っていただく必要はない」

「い、いえ！ 国の代表は我々大名です！ 里があなた方に迷惑をおかけした場合は、我々が責任を持ちます！ と言つても私は娘であつて、大名ではありませんが」

「しかし、実権は千手の綱手が……」

「ユラ、もういいじゃないか。ここは彼女の気概に応じよう」

「しかし……」

もう一度ユウマがユラを座らせようとする。今度は先ほどのように踏ん張らず、フラツと椅子に着いた。

その様子を見て、ナデシコが続ける。

「わつ、私、今すぐ草隠れに行きます！ 行つて被害者の皆さんに謝罪します！ お金も、少ないですが、私のお小遣い全て皆さんに届けますから！」

「ナデシコ、あなた本気なの？」

「もちろんです！ お、お父様！ ごめんなさい！ 勝手な真似を……」
「ナデシコよ。わしに謝つてはならん。この場で発言したならば、その言葉は重みを伴うのだ。自分で自分の発言の責任をとらなければならぬ」

「は、はい！ ご助言ありがとうございます！ もちろん、発言は撤回しません！ 私はこの足で草隠れに向かいます！ 全財産被害者に届けます！ ですから、喫撫の皆さん！ ここはどうぞ、我々の数々の失礼をご容赦ください！」

ナデシコはそう言うと、突然席を外した。あれよあれよという間に

床で土下座を始めた。

申し訳なさと、壞撫に対する怒りが込み上げる。俺たちが護衛すべき対象、しかも何の罪も無い美少女に、こんな真似をさせてしまった。しかもその相手が、自分達の罪も周りの状況も何も見えていない、下劣な愚か者だという。

ナデシコの謝罪の甲斐あって、壞撫からの追求は止まった。紅月一派はボソツと「こちらにも同じ補償を」と言ってきたが。悲しいことにナデシコはそれも請け負った。

以後、特に大きな反対はなく、作戦は纏まった。

会談が終わった後、暁、壞撫、紅月一派と、桃隠れ、雨隠れ、餌羽後に分かれて場所を移した。そこで、口ではない本当の同盟の話し合いが始まった。

その冒頭、半蔵がボソツと口にした。

「あんなやつらを味方につけてどうするつもりだ？ 内側から侵食されるぞ。体内に毒を飼うようなものだ」

「分かっている。だから本当に口だけの同盟だ。作戦後、どこかに攻め込まれても助けてやらん。滅ぶなら滅べだ」

「ほう？ 言質は取ったぞ」

半蔵は珍しく笑みを浮かべた。薄気味悪い感じがしたが、こいつが胡散臭いのはいつものことなので気にしなかった。

スコープイオン赤砂の旦那

トグロの策が功を成し、暁同盟軍は一気に岩隠れを追い出した。突然の息のあった動きに、岩隠れは度肝を抜かれた。しかし、ちよつと待ってみると、同盟軍が一体でないことはすぐに明らかになった。

まず、石隠れの紅月一派が動いた。岩隠れを追い出した後、同盟軍の勢力をもって石隠れの中央政府へ攻め込もうとした。しかし、桃隠れと雨隠れは同伴を拒否し、すぐさま離脱する。暁も戦闘を止め、中央政府と紅月一派を仲介する演説を始めた。中央政府は暁の和平交渉を受け入れた。紅月一派は中央政府への反逆を無罪とされ、一定の地位を与えられた。

次に、草隠れの喫撫。里から岩隠れの脅威が去ってしばらく後、岩隠れに武器を売ろうとした。条件は草隠れに攻め込まないこと。そうしておきながら、滝隠れには武器を売り続けた。条件は同じく草隠れに攻め込まないことだった。

餌羽後はそんな草隠れを許さなかった。岩隠れ、桃隠れ、雨隠れと不戦協定を結び、単独で草隠れに攻め込んだ。草隠れは金にあかせて抜け忍の角都等を雇った。対して餌羽後も桃隠れのサソリ等を雇った。

両者が戦闘に明け暮れる中、チャンスと見た岩隠れは草隠れに攻め込んだ。しかしそこで暁が参戦する。岩隠れは狙いを変えて、滝隠れに攻め込む。桃隠れが滝隠れにさらなる援軍を投入する。ならば、さらに狙いを変えて、戦力の空いた石隠れを。岩隠れはすばやく戦力を動かし、石隠れを手に入れた。

岩隠れと石隠れ、暁と草隠れ、桃隠れと雨隠れと滝隠れ、三勢力による三竦み状態となった。

北東の国境は、岩隠れと滝隠れが接する。岩隠れは単独で桃隠れ連合に勝てないので、攻め込めない。

中央東側の国境では、暁連合と桃隠れ連合が接する。両同盟の盟主である桃隠れと暁が互いに深くつながっており、互いと戦いたくないため動かない。草隠れと滝隠れによる小規模な戦闘に起こるが、実力

は伯仲しており決着がつかず、互いに消耗することになる。

中央西側の国境は、岩隠れと暁連合が接する。岩隠れはこの暁連合になら勝てるが、下手に恐怖を与えたらまた暁が桃隠れと手を組むかもしれないので、動けない。

そんな中、風の国がいよいよ安定していく。このまま時間が過ぎれば桃隠れ連合の勝利か？

焦ったのは岩隠れと草隠れだ。利害の一致した両里は同盟を結び、そこに暁も入れようと画策する。

「わしはこの年でやつと真実に気付いたんじゃぜ。暁の言つとることが正しかった。戦争なんて何もいいことがないんじゃぜ。これからはお前達の仲間として共に活動させて欲しい」

土影のオオノキは見事に狸を演じきった。弥彦は感銘を受け、自身の『対話による世界平和』という思想に自信を深めた。

当然のように、同盟が結ばれた。

ここで焦ったのは桃隠れ連合、そして小南だ。彼女はトグロと戦わないように必死に弥彦と長門に懇願した。

「小南、心配すんな。俺たちは相手が誰であろうと戦いという手段は最後まで使わない。今までだってそうだったろう？」

「え、ええ。そうね」

「問題は、やつに対話を通じるかどうか。だな」

「ちよ、ちよつと長門！」

「落ち着けよ小南。まあさすがに、あいつも対話の無限の可能性に気付いた頃だろう。あの頑固な土影さえ動かしてしまったのだから。

この世に不可能などないということだ」

「だな。もつとも、あいつが未だ俺達を否定するというのなら、救いようのないバカということになるがな」

「ありえないだろ。さすがに」

小南は嫌な気しかなかった。その後も、トグロが今まで行ってきた善行や、彼がどれだけ我慢強いかを長々と2人に説明した。

草隠れと滝隠れの小競り合いは続いていた。暁は両里の和平交渉の仲介役を買って出た。両里の代表と、その後ろにいる実力者を雨隠

れの暁の基地に招いた。

以前の同盟会談と違い、会談前から両勢力共に殺気立っていた。特に餌羽後と塙撫のにらみ合いが凄まじい。トグロは弥彦と長門の方に視線を移すこともあったが、わざとらしくため息を見せるくらいで、睨んだりはしなかった。小南には笑顔で手を振る余裕もあった。そして、会談の時間となる。暁の三人を中心に、左右に両勢力が並ぶ。

左が、塙撫の当主ウツミとユラとユウマ。岩隠れのオオノキ、黄ツチ、募ツチ。石隠れ傀儡政権代表である浦切（うらきり）スザク、戦闘隊長に上り詰めた紅月ナオト。

右が、餌羽後の代表宇恩と戦闘隊長志夜。桃隠れのトグロ、綱手、サソリ。雨隠れの半蔵。プラス、特別ゲスト2名。

条約の内容は、大まかにだが事前に両者の合意を得ていた。

両軍武器を納め、お互いに軍縮する。具体的には、草隠れは武器の販売を50%削減する。桃隠れはミサイル攻撃を金輪際禁止にし、残ったミサイルは全て破棄する。戦争被害者についてはお互いに謝罪と賠償を行う。というものである。

細かい部分では折り合いがつかない。

「ミサイルが正確に破棄されたかどうかを確認するため、内部を探らせる」

「構わんが、小南を指名させてもらう。彼女は暁が最も信用する人間であり、探索能力も高い。お前達も信じられるだろう」

「ダメだ。1人では限界がある。最低各里から3人ずつ送る」

「多すぎる。テロでも起こすつもりか？」

「木の葉の綱手さん、平和を望む相手を疑うような行為はやめていただきたい」

「全ての里に3人ずつ送り、監視の目を張り巡らせるといのはどうだ？」

「監視？ 人質になるだけじゃないか？」

「志夜殿も、監視など平和な世界には必要ありません」

暁は明らかに左側の肩を持っていった。

右側の怒りがふつふつと湧き上がる中、宇恩が爆弾を投下する。

「武器の密輸を封じるため、闇市場を潰さないか？」

「なっ！」

闇市場があるのは、桃隠れを除きどこの里も同じ。しかし闇市場で一番設けているのは塙撫だった。

「そんなものはない！ いい加減な発言はやめていただきたい！」

「いや、俺も何度か見た。あれは潰したほうがいい。平和な世界に必要なものだ」

「ぐっ」

ここで、初めて暁が右側に味方する。塙撫の顔色が悪くなっていく。

さらに、凶ったように右側の特別ゲスト2名が到着した。

「すまない。遅くなった」

「わしもじゃ。許してもらいたい。何分戦争で忙しい身ゆえ」

「なっ！」

百戦錬磨のオオノキ、闇世界の実力者ウツミ共に、驚きのあまり声を上げてしまった。他の左側の曲者も、どころか暁も同じような反応だった。

「火影様、風影様、どうぞこちらに」

「うむ。よろしく頼む」

「久しぶりだな。今日はお手柔らかに頼むぞ」

「ははっ、今日は味方ですよ」

トグロが呼んだ特別ゲスト二名は、火影と風影だったからだ。

風影が間に合ってしまったという事実。火影がバツクにいるという忘れてかかった現実。その2つが左側に重くのしかかった。

オオノキを除き、左側の人間は途端に元気がなくなってしまった。最初に攻めてきたのは岩隠れだった。俺たちは正当防衛の権利を持つ

「ぐっ。じゃが、お前達が不用意に軍備を拡張してわしらを脅すから

「じゃぜー！」

「ならば武器を売る草隠れを叩くべきではないか？ 何故味方している？」

「それは、うむ。武器は使う側に問題があつてじゃろう」

「岩隠れに武器を売った草隠れもいただけない。あれでは武器を使つて戦争しろと言つているようなものだ。実際岩隠れはその武器を使つて戦争している」

「いや、武器は買う側に問題が」

「この程度の思考しかできない連中だ。こんな草隠れの味方をした暁には、配慮が足りなかつたとしか言えないな」

半蔵とサソリの攻めがネチネチと続き、長かつた。オオノキの理屈を否定する返答があまりに早く、巧みだつた。オオノキ人ではとても捌けない。暁も、対話を重要視している割に論戦は得意ではない。ほとんど口を挟めない。

徐々に、右側が正しいという雰囲気が議場を包んでいく。暁から左側を責める言葉が出始める。

「は、話にならないわい！ 木の葉が平和を語るなどちゃんちゃらおかしいじゃぜー！」

「そちらが力で我々をねじ伏せようと言うのなら、我々は自衛戦争をするしかない！」

結局、オオノキとウツミは怒つて帰つていった。

さて、これでお開きとはならない。最後に大きな問題が残っている。

「それで、暁はどつちに着くんだ？」

サソリが言った。長門と小南は弥彦を見た。他の、この場にいる皆の視線も弥彦に集まる。

「どつちも何も、俺達は平和の味方だ。あえて言うなら、戦争を起こさうとしている方の敵になる」

「では、今回は岩隠れと草隠れの敵ということでもいいな？」

「いや、それはない」

木の葉連合陣の雰囲気ガラツと変わった。怒りや悲しみ。バカめ。また戦争が。そんな感じだ。

長門は当然という態度だった。対照的に、小南は絶望したような顔になった。

「あいつらは俺たちの思想を理解してくれている」「だな」

「小南！」

不意にトグロが叫んだ。皆の視線がトグロに、次いで小南に向けられる。小南はビクツと怯えたような反応だった。

「なんだトグロ？ また戯言か？」

長門が言うが、トグロは彼を見さえしない。

「小南！ 言いたいことがあるなら言え！」

「うっ」

「おいおい。小南に何をさせようって言うんだ」

「小南は大切な同士だ。妙なことはやらせんぞ」

弥彦と長門は少し警戒しながら小南の前に立った。小南はうつむいている。しかし、何やらぶつぶつ呟いている。

「わ、私は……。私は……」

「小南！ こいつらに足りないところがあつたら自分が補佐する！

お前はそう言ったよな！ 勇気を出せ！ お前にはこいつらとは別の世界が見えているだろう！」

「私、私は……」

「お、おい小南！」

「おいトグロ！ わけの分からん言葉で小南を当惑させるな！」

小南はさらにぶつぶつ言い続ける。

自分の意見は決まっている。しかし、それを口から出すには恐怖がある。この2人に反発したらどうなってしまうのか。嫌われ、裏切り者扱いさえ、最悪見捨てられてしまうかもしれない。

悪い例があつた。トグロだ。かつて兄弟ほど仲がよく、2人に信頼され尊敬されていたのに、今では目の敵にされている。トグロは自分より賢く能力が高いにも関わらずだ。自分にはトグロのような能力が無い。何かを自分で始めることができない。人にすぐることしかできない卑怯な女だ。そんな自分だから。従順さによつて認められ

ていただけで、一度歯向かえば永久に否定されてしまうかもしれない。実際トグロと弥彦達は、一度の仲違いが今もずっと続いているのだ。

でも、従順なだけでいいの？ それって本当の仲間なの？
違う。少なくとも私がなりたい仲間とは違う。

小南は、恐怖に歪んだ顔で言葉を絞り出そうとする。喉のところまでは出掛かっている。あと少し。あともう少しの勇気だ。

動け！ 私の顎！

「わっ、私は……っ！ 長門、弥彦！ あなた達が間違っていると思うわ！」

出た。驚くほど素直に出た。

面食らったような弥彦と長門。小南は2人をジッと見つめる。心の中で、ぱあーっとかかが開けていく。恐怖が引いていく。

心地いい。初めて大空に飛び立ったときのような気分だ。

「お、おい小南！ 何を言ってるんだ！」

「俺達の何が間違ってるんだ？ いつも通りだろ？」

「違う！ 根本的な部分を否定させてもらうわ！ あなたが言っている、対話！ 対話で、全てを解決することなんてできないのよ！」

「何!?!」

「何だど?! おい小南！ いくらお前でも！」

「トグロが以前言っていたでしょう！ 数年前、初めてケンカ別れした時のことよ。対話を通じるなら対話、ダメなら脅し、それもダメなら拘束し、それもダメなら殺すしかない。だけど、重要なのは教育によって対話を通じる相手を増やすことってね」

「小南、お前熱があるんじゃない？」

「幻術か？ おのれ木の葉め！ 卑劣な手を！ 待っている。今すぐ解除してやる」

「触らないでー！」

小南は再び叫び、迫る弥彦と長門の手を弾いた。

これは男2人にとって格別な衝撃となった。あの大人しい小南が、自分達を否定した象徴のような行為。三人でずっとやってきた。自

分達は切っても切れない仲間だったはずなのに。

逆に、小南には2人がとても小さく見えた。身長差は幼少期よりも増している。しかし、かつて全ての悪から守ってくれるくらい大きく感じた背中が、今は頼りなく思える。

「私の言葉が信じられないの!?! 私があなた達と違うことを言うのがそんなにおかしいの!?!」

「ちがっ、そうじゃない! そうじゃないだろ! 小南!」

「おい貴様等ア! 俺達をバカにするのもいい加減にしろオ! 早く小南の幻術を解け! さもないっ、ぐっ!」

小南が突然後ろから弥彦に襲い掛かる。手馴れた素早い動きで、弥彦の腕を取り後ろに捻り、その格好で胴体を前のめりに倒す。これにはトグロも驚いた。

小南は弥彦の上に跨り、好きだった男を見下しながら言った。

「今までの数々の無礼、お許しください。目下にいる危険人物は、牢に入れることをお勧めします。私も自首します。しかし、改心の兆候が見えたならば、監視つきでもいいですから、解放していただけないでしょうか」

小南は言い終えて、トグロ、綱手、火影を見た。綱手と火影はトグロに視線を向けた。皆の視線もトグロに集まる。

「拘束はさせてもらうが、牢は必要ない。俺が桃隠れで一から教育し直す」

「いつもいつも寛大な心遣い、ありがとうございます。感謝の言葉しかありません」

「な、なんだ……。これは……」

呆然としたままの弥彦と長門。小南は弥彦の腕を紙で拘束し、立ち上がらせる。さらに、後ろから押して歩かせる。行き先はトグロだ。

その場で、自身も両腕を合わせ、拘束してもらいたいかのようにトグロに差し出す。トグロは木遁で小南の両手を縛った。

彼女の目は人が変わったような冷酷なものになっていた。しかし、不意に、つーつと涙が流れた。

いけない!

小南が慌てて涙を拭おうとする。が、腕を拘束されているためできなかつた。

そこに、そつとトグロの指が出てくる。つーつと涙が拭われる。小南はドキリとしてトグロを見た。自身の顔が紅潮いくのを感じた。

その場面を、長門は見ていた。

「お、お前！ やはりお前かああアアア！ 疫病神うずまきトグロお
おおオオオオオオオ！」

長門は怒り、トグロに飛び掛つた。

計つたように横からサソリが飛び出て、傀儡の針で長門を刺そうとする。まるで警戒していなかつた長門は首の動脈に直撃を受けた。

「あへあ」

長門はあへ顔で眠ってしまった。

「えええーっ！ 今の俺がかつこよく決める場面でしょおおお
!？」

「お前にゃ無理だ。実力がほぼ変わらん上、体術はこいつに分がある」
情けない男の悲鳴が、主人を失つた小さな隠れ里に響いた。

拳で語り合う

長門はトグロの持つどんな封印を施しても、輪廻眼のチャクラ吸引によって解除することができる。

彼を縛れるのは、うずまき一族に伝わる魂ごと封印する禁術、屍鬼封尽か、日向の宗家に伝わる、ヒザシやトグロでも全く抗えないずば抜けて優秀な封印術のみ。

うずまき一族の封印術は、使用した術者が死んでしまう。だから却下だ。心苦しいが、トグロはヒアシに頼んで日向の封印術で縛ることにした。

これは、全方位にケンカを売った暁に罰を与えろという意味でも、不穏分子の手綱を握っているとダンゾウに示す意味でも、必要なことだった。

長門と弥彦を拘束する数日前、トグロは半蔵に出会っていた。そこで聞かされていたのだ。

「ダンゾウが輪廻眼を狙っている。俺に共謀を持ちかけてきた。この情報は18年前から後の7年間の“借り”を返すものだと思ってくれ。無駄にするなよ」

「ええ。十分です」

日向の封印術なら、対象が眼を奪われようとしたら術者は気付くことができる。これで眼を盗むのは格段に難しくなる。また、日向が輪廻眼の手綱を握ることで、ダンゾウが『危険だからわしが眼を管理する』という理屈を使えなくなる。それでも強行に出る可能性はあるが、規模は小さくならざるを得ないだろう。

さらに、トグロはダンゾウに釘を刺すために、火影にも長門の処遇について伝えた。ダンゾウが狙っているから注意して欲しいとも。その代わり、トグロは霧隠れと雲隠れの前線に桃隠れの戦力を送ることを約束した。

ところが、いぎヒアシを呼んでみると、彼は別の方法を提示した。

「この呪印は日向のもの以外に使うことを禁じられている。だが、点穴を突けば、チャクラを封印することができる」

考えてみれば、白眼専用に使ってきた封印術を輪廻眼にも適用するのは強引だった。どんな副作用が出るか分からない。本当に効くかも分からない。

よって、トグロもヒアシが言った方法で行くことにした。ただし、木の葉へのカモフラージュとして、呪いを模した刺青は刻む。長門本人にも本物の呪いだと伝える。時期を見て真実を話す。

長門が眠っている間に、刺青が刻まれた。長門はほどなく目覚める。呪いの話を聞くと怒り、トグロに挑みかかった。

トグロは人里離れた場所へ逃げ、そこで受けて立った。
多重木分身の術。

修羅道、口寄せの術。

トグロが50体もの分身を出す。

長門は修羅道で他世界の兵器を口寄せする。それをトグロに向け、ビームを放った。

「ふっ」

「何!?!」

トグロは大いに驚いた。

仙法、光合成。

しかし、自身の特性を思い出し、咄嗟に光を吸収してみる。

実際、できた。光に当たった箇所がチヤクラが増し、肉体が膨れる感覚があった。

「チッ」

天道、神羅天征。

長門はそんなトグロを神羅天征で弾き飛ばす。

「ぐおっ! つと」

挿し木の術。天然ゴム。

トグロは天然ゴムを混ぜた枝を地面に刺す。それで踏ん張り、徐々に自身の飛ぶ勢いを抑えていく。

木遁、ゴムの鎧。

さらに、自身の全身もゴム系の木で覆う。もう一度神羅天征を使われた時に、衝撃でダメージを負わないようにだ。

口寄せの術。

そこで、先の戦いで猛威を振るったミサイルを口寄せする。大地の実を食べ、一瞬仙人モードと化し、ミサイルを長門に投擲する。

天道、神羅天征。

「ぐっ」

しかし、またもや神羅天征の衝撃が出る。トグロはミサイルごと自身も弾き飛ばされた。

が、そのすぐ後、トグロの分身が地面から長門に迫る。

木遁、挿し木の術。

「ぐっ、ふっ」

長門は大量の木を避け切れず、押しつぶされていく。トグロは致命傷にはならないように加減していた。しかし木は当たったところから長門のチャクラを吸引していく。

餓鬼道、封術吸印。

が、逆に長門もトグロの木からチャクラを吸引にかかる。本来2人のチャクラ吸引スピードはトグロの方が若干速い。が、分身と本体では長門の方が有利だった。

しかし、そこで分身の1人が仙術チャクラを練ることを思いついた。あれは慣れていない人間にとって毒だ。分身は地面から自然エネルギーを集め、長門と触れる木に流し込んでいく。

「うっ。ぐおおおっ！」

策は成った。長門は突然苦しみ出す。頭を押さえ、もがき叫ぶ。

人相に変化が始まる。目元に隈が浮き出てる。次には、頭に木の角が生え始める。

天道、神羅天征。

しかし、長門は咄嗟に天道に切り替え、周囲の全てを吹き飛ばした。

「はあ、はあ、はあ」

「はあ、はあ、はあ」

両者息切れが見えてきた。殺しはしないが、全力の戦いだった。

神羅天征の影響で2人は1キロ程度離れている。が、2人共とても目がいいので、お互いに表情がよく見えている。

「やるな！ 前は俺より大分弱かったんだが！」

「はあ、はあ。……ふんっ。昔の俺と同じはずがないだろう！」

これは、サソリの言ったようにヤバイかもしれないな。

トグロは苦い顔で笑った。幼い少年の顔を思い出しながら。あの頃は歳の離れた弟か甥っ子くらいに思っていた。素直でやさしく、かわいらしかった。それが、無駄に力だけつけて、信じられないほど頑固になり、自分に立ちはだかっている。面倒だが少しおもしろくもある。

長門も、どこかすつきりした顔で笑っていた。戦闘自体が楽しいというよりは、自分の力を、思いをぶつけられるのがよかった。彼も心のどこかではトグロを認めていた。このしみつたれた世の中で、自分達以上に上手く立ち回っている。しかし、それを認めなくなかった。長門は誰よりもトグロを超えたいと思っていたからだ。

「うおおおおおー！」

「柔拳法……」

この戦いに、下手な小細工はいらない。

2人は言葉を交わすことなく、同時に体術による闘いに移った。

「つあっ！ らあっ！」

「ぐっ。ぬんっ！ はっ！」

「くっ」

身体能力自体は長門の方が高い。しかし、チャクラ量はトグロの方が上で、チャクラコントロールもそうだった。さらに、柔拳の変則的な動き。長門は対応し切れなかった。

勝てる！ まだ勝てるぞ！ いやっしやあああああ！

「せいっ！」

「ぐあああっ！」

鳩尾にトグロの掌低が決まる。長門は吹き飛び、とうとう倒れ伏した。

トグロはゆっくり長門に近づいていく。

「覚えておけ。はあ、はあ。日向は木の葉連合にて最強。はあ、はあ」「はあ、はあ、はあ」

「……今から言うことは、真面目に聞け」

「はあ、はあ、はあ」

トグロはそう言うと、ゆっくりと長門の隣に座った。

「ダンゾウが輪廻眼を狙っているそうだ」

長門が気だるげにトグロを見上げる。

「そうか」

短くそれだけ言った。

「白眼で点穴を突けば、お前のチャクラを練れなくすることができる。だがしない」

「何の話だ？」

「俺は桃隠れでお前を拘束しない。お前が自分で自分の身を守れるようにな。だが、お前も黙って逃げたりはしないでくれ。3年、いや、1年でいい」

「何故言葉でそれを求める？ お前は対話を否定したんじゃないのか？ こんなものまで刻んでおいて」

長門は視線を上げて、自身のおでこを示した。

「そうだったな。忘れてくれ」

トグロは苦笑いして立ち上がった。

また、長門に手を差し伸ばし、自身のチャクラを分け与えながら、彼を立ち上がらせた。

「器用なもんだな。全く」

2人はそろって集落に戻った。なお、この戦いは親衛隊や近場の住人も見ていた。ヒアシはいつでも止めに入れるように準備していた。月などは、長門に襲い掛からんばかりの勢いだったので、綱手が必死に押さえたのだった。

長門、弥彦、小南の桃園アカデミー入学が決まった。その初日、長門と弥彦はアウエーの空気を味わうことになった。

「あいつが、ご主人様を……」

「しっ。殺されるわよ」

忠誠心の高い娘達は長門と弥彦に怒りを覚えていた。警備隊候補の少年達も、暁が桃隠れを裏切って草隠れに就いたことは知っている

ので、いい気はしなかった。

なお、年齢については大した問題ではない。この学園はできたばかりだ。年齢よって段階的に学年を上げるのではなく、能力によってクラスを別けている。修行場としての意味もあるから、現役の親衛隊、警備隊の人間も生徒としてやってくる。技術者コースと学者コースは言わずもがな、高等教育を終えた大人の勉強と研究のための場所だ。メイドコースですら、20代どころか30代の“女子”も通っている。

3人の案内はクシナに任せられた。川影のトグロが出向いては3人を特別扱いし過ぎることになり、他の生徒が余計に警戒してしまう。桃園アカデミーの門を潜ってすぐ、大きな張り紙が壁一面に張っていた。

「あれは成績表ってばね。競争意識を煽ってるらしいってば」

見ると、『学期末共通試験の結果』と書いてあった。自然と一位に目が行った。

「なっ！ 綱手さん!？」

一番上、492という数字の横に、綱手の文字がある。これには3人とも驚いた。彼女は生徒ではないはずだ。

しかし、さらに見ていくと、どういうことか分かった。

順位	点数	名前	役職
1	492	綱手	名誉顧問
2	461	サソリ	遊撃隊長
3	450	イズモ	技術者主任
4	446	千石	学者主任
5	435	フジタカ	学者歴史
7	419	アンヌ	遊撃隊二
9	400	トグロ	川影
10	365	タズナ	技術者建築
12	345	初	親衛隊副
15	337	長袖	警備隊長

・・・

110	239	スリミ	親衛隊六
113	235	ミゾレ	親衛隊四
122	210	月	親衛隊長

...

217	140	クシナ	川影補佐
220	138	ダイナ	親衛隊五

「なるほど。綱手さんが幹部の中で一位だったということか。さすがだな」

要するに、主要な役職に就いている人間の成績だけ載せているのだ。弱い立場の生徒ではなく、強い立場の教師が体を張って競争意識を煽る。そういうことだろう。

「そこ。5と7の間の6位が抜けてるのは？」

小南が5と7の間を指差す。6位は生徒なのだろうと予想はできるが、一応確認だ。

「ああ、6番はアラレちゃんだつてばね。あの子は隊長とか幹部じゃないから名前は出ないつてばね」

「なるほどね。……え？」

あの子つて、そんなに賢かったの？

「ほ、本気!!」

「何がつてば？」

「いや、だってアラレちゃん!」

ほよよのイメージしかない。

天才だとは思っていたけども。けども! そういう意味の天才なの!?

「へえ、すごいじゃないか。このメンバーで6番か」

「アラレちゃんつてどの子だっけ？」

小南は叫びたかったが、長門も弥彦も反応が薄かった。

それでいいの!?! あなた達それでいいの!?!

小南は心の中で叫んだ。

「ぶふっ。トグロのやつ8人に負けてんじゃねえか。川影のクセに」

「ま、忙しいから勉強の時間がなかった、とも考えられるがな」

長門と弥彦は「ははは」と軽く笑った。

しかし、不意にクシナがずーんと重い雰囲気になった。

「トグロはこれでちょうどいいってばね。これ以上賢くなったら私が点数取れなくなるってばね」

3人とも触れなかったが、見えていた。ビリ2がクシナがあることは。

しかし、少し言い方がおかしい気がした。小南が尋ねる。

「トグロが賢くなっても、クシナの点数には関係ないでしょう？ あなたは自分の点数を上げればいいじゃない」

「違うってばね。テストはトグロが400点になるような問題を作り、採点されるってばね。だからあいつが忙しくて勉強できないと助かるってばね」

「それは問題があるだろう。徐々にテストが難しくなる」

「あんたから言って欲しいってばね！ あいつ厳しくなる分には構わないとか言ってるってばね！」

「そうだな。機会があればな」

なんて言いながら、4人は最初の教室に向かった。

川影の一日

よく寝た。朝が気持ちいい。やはり戦闘で疲れた後はハーレムに限る。

「おはようございます。旦那様」

「ああ、おはよう」

起きてすぐ横に美女がいるのもいいな。いきなり癒される。

「ぱぱ。ぱぱ」

「おお、新芽。よしよし」

「きゃっきゃっ」

赤ちゃんもかわいいな。癒される。

さて、歯あ磨いて食事にしますかね。

「おはようございます。旦那様。今日の朝食は、ご飯とサンマの塩焼きと豆スープです。漬物もありますよ」

「うむ。適当にいただこう。いただきます」

おいしそうだな。どれ一口。

おっ、おお？ これは、うんうん。なかなかの塩加減。豆スープはどうか？ うーん、うんうん。山菜がいっぱい入っていて、体の芯から温まる感じがするな。うむ。

とりあえず、朝飯うめええええ！ 有能なメイド妻最高や！

「美味かった。はなまる」

「あ、ありがとうございます！ もったいないお言葉です！」

「楽にすればいい。お前達は妻だ」

「はっ、はひいっ！」

若いっていいな。一年以上たつが、未だ初々しい。今後10年は新婚気分でいられる気がする。

「ふうっ。今日も1つ頑張るかな」

「い、行ってらっしゃいませ！」

「行ってらっしゃいませ！」

「ふむ」

「行ってらっしゃいませ！ 隊長も！」

「ええ」

新鋭隊長の月を伴って玄関を出る。空気が美味しい。朝日が気持ちいい。

さて、今日の予定はなんだったか。

とりあえず戦力の見直しをやって、風影との会談をやって、岩隠れと草隠れの動きを調べて、餌羽後に使いをやって、ダンゾウの動きもチェックして、学園の修行を見て、フジタカに自伝の内容を伝えて、長門達の状況を調べて、小南を雨隠れに連れて行って、半蔵と会談をやって、……。まあそんな感じか。今日もハードだな。分身が消えた後にドツと疲れそう。

木分身の術。

「えーっと、君は木の葉方面ね。君は学園。君は岩隠れ。君は草隠れ。君は川影邸。餌羽後は、まあ後でいつか。さすがに今日は戦闘の疲れが残っていてしんどい。俺は風影と対談してくるよ」

「へへ。腕が鳴るぜい」

ポキッと本当に鳴らす俺。

「俺にいい、任せとけえ！」

芸人の真似をする俺。

「ああ。行くのはいいが、別に嫁とエッチをしてもかまわんのだろう?」

「空腹の娘を助けてしまってもかまわんのだろう?」

懐かしいキャラの真似をする俺。

「うむ。というか我慢できないのは本体の俺だって知ってるから」

しかし、俺の分身はおふぎけが好きだな。俺が好きだから分身もやっているわけだが、なぜか自分1人でやるより分身にやらせる方がおもしろいんだよな。不思議だ。

「おもしろいです旦那様! さすがです!」

月よ。『さすが』ってのは笑いに対する評価としてどうなんだ?

忠誠心は伝わってくるが。

とりあえず、風影の下へ向かう。あいつは中流域にきているはずだ。1時間も歩けばつくだろう。本気で走れば3分かからないが、そ

れはする理由がない。

家を出てすぐのところ、クシナの家がある。

「クシナあああああ！ 起きろおおおおお！」

「はっ、はひいひいっ！」

寝坊した時は月が怒鳴って起こす。いつも寝坊するわけではない。夜中まで働いたり、気絶するほどチャクラを使ったりすると寝坊する。ミナトが夜に来ていたりしても、次の日に寝坊する。やることやっているのだろう。

また、俺がハーレムを楽しんだ次の日に、クシナが寝坊している確率が高い。覗きか盗み聞きかやって興奮しているのだろう。ちなみに、俺はクシナとやった時が3回ある。全て、地中深くで2人つきりで待ち伏せしている時だ。暇すぎてついやってしまう。やる時はミナトの姿に化けて、クシナがその気になるまで甘い言葉を投げかける。クシナはやった後に猛烈に反省する。殴られたこともある。

中に出したことはない。赤ちゃんができたら九尾の封印が緩んだりして大変らしいからな。クシナが九尾を制御できるようになるまでお預けだ。

「よし！ 行ってくつてばね！」

「女は身だしなみに気を使うものよ」

クシナはボサボサのポニーテールでやってきた。と言っても地毛がサラサラだから、時間と共に勝手に落ちていくが。

「トグロにいい姿を見せても仕方ないってばね！」

「ふん。バカね」

月はバカと言いつつうれしそうだ。ライバルが減ったと思ってるのだろうか。

しばらく歩くと、視界の開けた場所につく。果樹園と農園が効率的に配置され、ダムの水が注がれる。色鮮やかな作物が育つ。芸術的だ。

「おはようございます！ 川影様！ 月様！ クシナ様！」

「おはよう」

「おはようございます！」

「ご主人様！ 今日も一段と凜々しくあらせられ！」

人が増えてきた。犬の散歩をしていたり、洗濯をしていたり、水汲みをしていたり、修行をしていたり。

と、そろそろだな。

「気をつけるよ。そろそろ危険地帯だ」

「はい」

「分かってるってばね」

「一応俺から離れておけ。やつの狙いは俺だけだ」

「そんなわけには行きません！ 私が身を挺して庇います！」

「川影補佐の出番ってばね！」

「いいから離れとけ。風影はまだいいが、チヨにうんこまみれを見られたらマズい」

その時、遠くから聞きなれた娘の声が聞こえてきた。

「きiiiiiiiiん」

やはり出たか。この辺はアラレ注意地帯。

まだ遠い。だが近づいてきている。覚悟していた方がいいな。

「んちゃー！」

「おはようアラレちゃん。今日も牛乳配りかい」

「うん！ ほい！」

「ありがとう」

「きiiiiiiiiん！」

うわっ。いきなり真っ直ぐ来た。

「ほよー！」

俺に気付いたアラレが急停止をかける。アラレは砂ぼこりを巻き上げながら、目の前で止まった。

「んちゃー！」

満面の笑みで言ってきた。

「こんにちはー！」

「んちゃー！」

「おはちゃー！」

「ほよ」

ワンパターンではつまらんだろう？ アラレの真似をして変わった言い方をしてみただぞ。

「あんな頑張ってるみたいだからいいもんあげるね」
来た。いきなり来た。

アラレは後ろを向いて何かを口寄せする。

うんこなら即逃げ。へびならキャッチ。アメならもらっておいてクシナにあげる。さあどれ！

白眼でアラレの背に隠れたものを見る。

やはりうんこか！

「ほいー！」

投げられる前に避ける！

「うんこ分身の術！」

「ダニイツー！」

「うわっ」

「なんですって!?!」

アラレが印を組むと、アラレが投げたうんこが数百もに増えた。そして襲いかかってくる。

「くうっ」

両手から木の根を出し、自身と月とクシナの身体を包む。彼女たちもこれら全てのうんこは防げないだろう。

最低限、肌や服につかないようにしなくてはな。

「うんうん！ 似合ってる似合ってる！ かっこよくなったよ！

じゃあね！ ばいちゃー！」

アラレはそう言うと、牛乳箱を持って去っていく。まさに嵐のような娘だ。

「す、すみませんご主人様。力になれず……」

「あれは三代目火影様の手裏剣分身の術と似た術だつてばね。あの子とどどんおかしい方向にすぐくなってるとつてば」

アラレが過ぎ去り、少しその場に待つ。うんこが泥に変わった。土遁の分身だったようだ。

さて、進みましょうか。

中流域は風の国出身が多い。徐々に遊牧的なテントや馬、牛、羊が増えてくる。川の国側の領土では教育が行き届いており、俺に対する感情もいいが、忠誠心というよりは感謝や能力に対する尊敬という形になる。

「川影様ー！」

「今度こつちにも学校作ってくださいーい！ あそこは遠くつて！」

「月様ー！」

「クシナさん結婚してくれー！」

人が多くなってきた。適当に笑って返す。しかし歩きづらいな。

村の中心に近づくほど人が集まってくる。凶らずも大所帯で移動となる。が、風影の宿泊所に近づく途端に静かになり、スツと人だかりが引いていく。まだ砂隠れはが恐いらしい。

「お待ちしておりました。空海様。どうぞ中へ」

出迎えたのは夜叉丸だった。この姉弟は俺の部下だが、地元砂隠れが内戦で大変なときに元青年団仲間を助けたいだろうから、援軍として風影に預けていた。他にも風の国出身の戦闘員を20人程度送っている。今日は久しぶりの再会となる。

「どうせだから姉の方ができてくれたらよかったがな」

「すみません。姉さんは赤ちゃんの世話に忙しくつて」

「誰の赤ちゃんだ？」

「姉さんです」

「はあ？」

「えっ」

いや『えっ』はこつちの台詞だよ。

「いや、いやいやいやいや！ おかしいでしょ！ お前達俺の部下だよ！ 地元が内戦で大変だろうから、泣く泣く貴重な戦力を送ったんだよ！ それを、何男と遊び呆けてんの!?! いや、遊んでもいいけど、妊娠出産したら戦えないだろう！ 中に出させたらダメだろう！」

「す、すみません。てっきり知っているものだ……」

俺もこんな時期まで隠されてビックリだよ。どういうことなんだ、これは。

あの娘、それと中に出したおっさん、教育が必要だな。

「カルラのことは許してやってくれ。俺がやってしまったんだ」

風影が階段から降りながら言う。やはり父親はこいつだったか。

「恐れ入りました。まさか国と睦で内戦をやっていたとは」

「ふむ。何とでも言うてくれハーレム王。甘んじて受け入れよう」

皮肉に皮肉で返すか。確かに桃隠れも、綱手とか初とか出産して隊から外れてたからな。許さんでもない。でもやっぱり俺の部下を勝手に孕ませるのはどうなの!? 俺の好意を無下にしてるんじゃないの!?

今日は話す内容がいつぱいあるからこれ以上はツツコまないけどさ。

「石隠れの浦切政権が、国内の分裂を防ぐために外敵を作ろうとしている。反桃隠れ反砂隠れ政策を始めたらしい。俺達をテロリスト扱いして、実権を大名に戻せと言っている」

「聞いている。皮肉なことに『暴力では何も解決しない』が口癖だそうだ。政治的にも心情的にも草隠れのユラ嬢とくつつくだろうな」

ユラ嬢か。確かに気が合いそうだな。矛盾とかを無視して、言葉だけ繕っているやつのが好きそうだ。

「何か対策はあるか?」

当然無策ではないぞ。いつもいろいろと考えているからな。主に俺と綱手とサソリと千石が。

「草隠れにノーマと呼ばれる部隊がある。孤児だったり親に借金があつたりで売られて、奴隷のような扱いを受けている忍びだ」

「聞いたことはある」

「奴隷の扱いを受けていたのだから、当然現政権には不満を持っている。暁はそんなノーマの一部と接触し、待遇改善の計画を練っている。暁は俺の仲間になったから、今は俺もその計画を受け継ぐことができる。安寿という女を革命勢力の柱として期待している」

「ほう。だが大丈夫か? 学のない連中は加減が利かないものだ。紅月一派の悪例もある」

「分かっている。だが、墮撫を打倒しない限りあの地域は安定しない。

それに、俺達がやらずとも安寿は動くだろう。滝隠れもそのタイミン
グを見逃さず攻めるだろうから、ノーマ側が勝つと思う。ならば、現
政権打倒後のノーマ政権が上手くいくように積極的に関わっていつ
た方がいい」

「言っておくが、風の国は大国であり、教育が行き届いていたんだ。そ
れでも悲惨な内戦が起こった。草隠れで独裁者が死ねば風の国どこ
ろではなく無秩序な状態になるぞ」

「こっちの領土に入れてしまうことも考えた方がいいな。問題は、草
隠れと桃隠れの文化的摩擦か。それで昔はお前達に俺の意図を理解
してもらえなかったしな」

「あれは昔の火影が卑劣過ぎたのも大きな原因だ。木の葉は信用でき
ないというイメージが固まってしまっていた。文化的摩擦だけとは
言えん」

「そうだな。それを考えると、石隠れのイメージ戦略は厄介だな」

「ああ。戦争の基だ」

「必ず潰さなければならぬ。浦切スザク。新しいリーダーも用意し
ないとな」

「だな。京都六家という勢力は知っているか？」

「ああ。石隠れを古くから支配していた六つの士族だ。浦切スザクの
浦切家はその一つだろう？」

「ああ。だが最も位が高いのは皇神（すめらぎ）家だ。大名とも近い。
その皇神の唯一の生き残りである（う）息女が、スザクを好かんらしい」
「なるほど。ならば皇神を支援してみるか」

戦略会議は続いていく。

問題の大枠から始まって、徐々にそれをまとめていく。本当は戦略
担当のブレンとかがいればいいが、お互い人材不足なので二人で考
える。後で綱手とか千石とかにも相談するがな。

具体的な戦力配置も、ある程度決めておく。

「チヨさんがサソリに会いたいと言っていた。草隠れで一緒に任務さ
せてやってくれ」

「仕方がないな」

「サソリについてだが、実は砂隠れを抜けておらず、桃隠れに潜入捜査していることになっている。それがチヨさんとの和解の取引だったんだ」

「まあ、形だけならそれでいい。とりあえず、チヨとサソリがいれば草隠れの戦力は十分だな。石隠れはどうする？」

「ここはあまり無茶をできない。干渉しようとすれば岩隠れが出てくるだろうからな。隠密に長けた忍びはいるか？」

「サヨコというくの一がいる。石隠れ出身で土地勘もあるし、ちょうどいい。後は俺だな。地中をスイスイ進める」

「ではお前に任せる。こちらからも隠密に長けた上忍を送る」

「あまり暇ではないが、まあいいだろう」

皇神の姫にも興味あるしな。

他、木の葉への援軍、ダンゾウ対策、合同訓練、中忍試験、子どもがかわいいかどうか、エッチは気持ちいいかどうか、と重要な話し合いが続く。話が終わった頃には夕方になっていた。

「では、達者でな」

「うむ。川影殿も」

頭をいっぱい使って疲れた。美味しいもん食って帰ろう。

「空海様ー！」

「月ちゃん！ 奢るよー！」

「どうぞどうぞ！ 食ってってよー！」

勧誘が激しい。若い娘に呼ばれるとつい入りそうになるが、不味いのは食いたくないからな。押さえなければならぬ。

うおおっ、びっくりした。突然木分身が消えて、記憶が入ってきた。木の葉方面の分身だ。大蛇丸に見つかっただから、追いかける前に消えたようだ。あいつもダンゾウ並みに危険なんだよなあ。どうしようか。

ご飯を食べて、一休み。集まってきた子どもにも術を見せたり、自分の活躍を語ったりする。将来性の高そうな女の子には、メイドコースへの勧誘もしておく。

帰りは訓練も兼ねて走った。

帰ると、時折分身の情報が入ってくる。

「ぐうぐうぐう。はあ、はあ、はあ」

悲惨な光景、ムカつく悪人の話、種々の計算、戦闘の記憶、と情報は様々だ。これを一気に処理するのがとてもキツイ。ハーレムで癒されないとやっていけないと思う。

長門、弥彦は、予想通りある程度煙たがられているようだ。授業自体は問題なく、真面目に受けていた。実力は4つ年下の竹と同じくらいだがな。

気になっていたのは歴史の授業だ。俺はフジタカに弥彦達を討論に参加させるよう命じていた。テーマは歴史上(現代含む)で平和を目指した人物とその人物が失敗した理由だ。細かい部分はフジタカに任せた。

授業では、生徒に人物の名前を上げさせ、フジタカが1人1人の略歴を語ったようだ。その後、平和を実現するための手段ごとに人物をグループ別けして、最も共感するグループに生徒を移動させた。そして討論だ。

人物名としては、空海、六道仙人、綱手、風影、柱間、半蔵、ヒルゼン、イズモの姫、クシナ、小南、扉間などが上がった。小南の名を出したのは桃隠れの少年だ。彼女は桃隠れでも人気があった。弥彦、長門、小南はじつと黙って聞いていたが、フジタカに『弥彦さんは誰か思い浮かびますか?』と尋ねられ、クシナと応えたのだった。

空海、六道仙人、綱手、イズモの姫(名前を出したのはナデシコ)は、力による統一と、弱者救済と、教育に共通性があるとして同じグループ①。

風影、柱間、半蔵は、尾獣による相互確定破壊の保障と、大国主導の連邦主義が共通しグループ②。

ヒルゼン、クシナ、小南は、隣人愛的な生き方が共通するグループ③。

扉間(名前を出したのはアラレ)はフジタカの頭脳では量れないとした。

弥彦、長門は当然小南がいるグループで討論に参加した。小南も恥

ずかしがりつつ二人に従った。

桃隠れでは俺が一番人気で、次が綱手、次がクシナだ。①のグループに最も人が多く集まり、次に③となった。②は少なかつたので、フジタカが適当に①から引き抜いて②に入れた。

討論自体は、①のグループが優勢だった。桃隠れの方針としてそうでなくては困る。情報が曖昧な六道仙人を俺のグループに入れたのもそういう理由がある。

長門達は反論もしたが、フジタカの分かりやすい説明もあって納得しながら聞いていたらしい。また、フジタカは①グループを鼻負しないよう注意し、俺の失敗や六道仙人の意志が様々に捻じ曲げられている現実についてもきちんと説明したようだ。

陰謀の犠牲者

トグロの潜入捜査により、石隠れの皇神カグヤが幽閉され人質になっ
ていたことが分かった。

トグロはサヨコと共にカグヤを捜索し、3日後に見つけ出した。そ
してその日のうちに奪還した。

そこでサヨコが明らかにした。実は、サヨコはカグヤの部下であ
り、カグヤから空海の情報を集めるように命じられていたと。サヨコ
は趣味でメイド喫茶に来ていただけではなく、仕事でもあったのだ。

カグヤが空海の情報を集めた理由は、誰か力ある人間の協力を得
て、国に巣くう膿を除去するため。14歳のカグヤには兵を動かす実
権がなかった。他所から力を借りて、現政権を倒して権力を取り戻
し、それから国を治めるつもりだった。しかし、他所から戦力を連れ
てくるのは、そのまま実権を奪われるリスクを負う。慎重に行う必要
があった。よってカグヤは長らく名を隠していたのだ。

「ありがとうございます。空海様。よろしければ私を妻にしてい
ただ
けませんか？」

トグロに助けられたカグヤは、己の命運を託す相手にトグロを選ん
だ。いきなり求婚したのはその表れだ。何も無しに他所の国のため
に戦えとは言えない。自分の恋愛感情は、国のために捧げるつもり
だった。もつとも、サヨコから空海の活躍を聞いて、以前から猛烈な
空海ファンになっていたが。彼は自分の相手にふさわしいと彼女自
身も思っていた。助けられたことで思いはさらに燃え上がっていた。
「いいですよ。うちはハーレム制ですけどね」

カグヤは14歳の美少女だったので、トグロはにべもなく頷いた。
ただし、ハーレムの一員という形で。

「まあ！うれしいですわ！ 私は妾でよろしいです！ よろしくお
願ひいたします！」

カグヤも問題なく喜んだ。こうして彼女がハーレムに加わること
が決まったのだった。

カグヤが味方についたことで、石隠れの反スザク政権分子と意思疎

通が可能になった。草隠れのノーマ隊ともある程度連携は取れた。後は、作戦決行あるのみ。

雨隠れ、滝隠れ、桃隠れ遊撃隊、チヨの部族、ノーマ軍、が一斉に草隠れの奥撫政権に攻め込んだ。と同時に、石隠れカグヤ派、桃隠れ、砂隠れも、一斉にスザク政権に挑んだ。

もともと数の利が桃隠れ側にあつたが、奥撫もスザクも嫌われていたので、部下が次々と離反し、または逃げ出した。桃隠れ側が圧倒的に有利となった。焦つた岩隠れは、草隠れを切り捨てて石隠れに増援を集中した。ところが、何を思ったか浦切スザクは石隠れを捨てて、草隠れのユラを助けに行った。

事態は急転した。あつという間に石隠れはカグヤ派に制圧された。岩隠れも呆れ果て、裏切り者スザクを殺すために草隠れに攻め込んだ。

全方位から攻撃されたことで、さすがに闇の支配者奥撫もなす術がなかった。当主ウツミは娘のユラを逃がし、自身は城に立てこもつた。当然、多少の時間稼ぎしかできない。ほどなく焼身自殺を図つた。様々な書類、闇の証拠も、燃えて消えてしまったのだつた。

ユラ、スザク、タスク等は逃げ切つてしまった。次世代の悪の芽を摘むことはできなかつた。どころか、彼等を搜索している間に、安寿とその仲間のノーマもどこかへ消えてしまった。

結局、草隠れは西半分を岩隠れが管理し、東半分を桃隠れ連邦が管理することになった。

この時点の国力差を考えると、岩隠れに草隠れの半分をあげる必要はなかつた。しかし、あげれば終戦の和平条約に応じると言ってきたので、トグロはその要求を呑んだのだつた。

こうして桃隠れ周辺の戦争が終わつた。トグロは再び子作り開放宣言を出した。桃隠れはさらにピンク色な里になったのだつた。

しかし、木の葉は相変わらず霧隠れ雲隠れと戦争を行つていた。たくさんの悲劇が起こる中、ある男の陰謀も動き始めていた。

「カカシのやつ桃隠れ行つたんだってさー！ この大変なときに！」

「くそーっ！ あいつ上忍で金持つてやがるからなー！ 羨ましい

！」

木の葉のとある繁華街。少年達が大声で話し合っていた。

「むしろ憎い！ くーっ！ 中忍試験で見たような綺麗なお姉さんがいっぱいいるんだろうなー」

「ハーレム公認だもんなー。まるで夢の国だー」

しかし実はこの少年達、ある男が変化した姿だった。男の狙いは、カカシをライバル視する少年にこの話を聞かせることだった。

「何!? カカシが!? あの野郎!」

うちはオビトは、その噂を耳にした。男の狙い通り、行動に出た。

オビトは全力でカカシの下に駆けた。彼を見つけると、すぐさま怒鳴りつけた。

「カカシ！ 見損なつたぞ！」

「何の話だ？」

「お前桃隠れに行つただろう！ なんでこんな時に！」

「別にいいだろう。俺の勝手だ。俺は俺の金でやりたいことをやっただけだ」

「カカシイ！」

オビトはカカシに殴りかかった。カカシは頬を殴られ、しりもちをついた。

「ぐっ。何しやがる！」

「里が大変な時に！ それに、リンの気持ちを考えやがれ！」

オビトが叫ぶと、カカシはバツが悪そうには視線をそらした。

「別に、俺が誰を好きになろうが勝手だろ」

「えっ」

カカシは小声でポロツと言った。ところが、何故か名前の出てきたリンがオビトのすぐ後ろにいた。そして先ほどの声を聞き取ってしまったのだった。

実は、偶然居合わせたわけではない。オビトに噂を聞かせた男の仕事である。彼は引つたくりを装い、リンをこの場に走らせたのだった。

「り、リン！ どうして！」

「カカシ、今のって」

「いや、これは、その」

カカシはリンからも視線を逸らした。

リンは泣きそうな顔になった。しかし涙を見せる前にカカシ達に背を向けて、走り出した。

「お、おいリン！」

オビトが声をかけるが、リンは止まらない。

「おいカカシ！ 何故リンを追いかけない！」

「チツ。俺には関係ないだろ。お前が追いかけるよ」

「なんだとお！」

オビトは再びカカシに接近し、顔を殴ろうとした。しかし、カカシが気まずそうな顔をしていることに気付き、彼が本音で話していないと分かった。本音が何かまでは分からないが、このまま殴るには気分が悪かった。

オビトは拳を下げ、リンが去ったほうへ振り返った。

「カカシ、お前に言っておく。仲間を見捨てるやつはクズだと。お前にとつて、俺達は仲間でも何でもなかったのかもしれないがな」

オビトは捨て台詞を残し、リンを追って走った。

追いかけるはいいが、オビト自身も何と声をかけていいか分からなかった。カカシの悪口を言えば慰めになるかもしれない。しかし、仲間の悪口を言っただけ好きな女を自分に振り向かせるのは、男として情けない。

リンは人里離れた方へ走っていた。国境近くまで来て、オビトはやっと危険に気付いた。

「リ、リン！ あまり離れるな！ 国境に近づいてるぞ！」

「わ、私のことは放っておいてよ！」

「そういうわけにはいかない！ あっ！ リン！」

オビトは、霧隠れの忍びがリンに近くづくのを見た。

「右だリン！」

「えっ」

リンもやつと反応する。しかしもう遅い。いや、霧隠れの忍びが速

すぎるのだ。間違いなく上忍だった。

「がはっ！」

「リンー！」

リンを一蹴りで吹き飛ばし、飛ばされたリンは木々を折りながら直進していく。

すさまじい体術。即死でもおかしくない。オビトの心臓がバクンと跳ねる。

「きっ、きっ、貴様あああああ！」

オビトは激昂し、霧隠れの忍びに飛び掛っていった。うちは一族の秘宝、写輪眼が人生で初めて発動していることにも気付かずに。

オビトの怒りも空しく、実力差はどうにもならなかった。オビトは一方に攻められ、すぐに動けなくなった。

「ちく、しょう……！」

自分は負けてはいけなかったのだ。すぐさま目の前の敵を倒し、リンを回復させなければならなかった。だが、もう体が動かない。2人とも死んでしまう。

自分が浅はかにも、リンがいると気付かずカカシに詰め寄ったせいで。告白もできず、情けない嫉妬で好きな女を殺してしまった。悔やんでも悔やみきれない。

「くっ」

しかし、突然霧隠れの忍びが眉間にしわを寄せ、その場でジャンプした。

直後、そこに巨大な木が振ってきた。今大戦で有名になった、桃隠れのミサイル攻撃だった。

オビトも知っていた。あれが来たということは、近くに川影がいるということ。

「チツ。小僧だけでもを殺つとくか。今は雑魚だが写輪眼の発現者だ」

霧隠れの忍びはそう言うと、何故か水分身を1つ出してリンの方にやった。

「待っ！ リンはやらせな……っ！」

オビトは必死で這い蹲り、リンへと駆ける水分身へ手を伸ばす。川影が自分の救援に来るとしたら、その間にリンが殺されてしまう。あの子の命が助かると思つてすぐさま、結局自分のせいだ……。

「少年よ！ お前の気持ちは受け取った！」

ところが、猛スピードで駆けてきた川影は、オビトではなくリンの方へ走った。まるで迷いなく。

「やはりか。時間つぶしになればいいが」

そしてそれは霧隠れの忍びの狙い通りだったらしい。

霧隠れの忍びは改めてクナイを構え、オビトの胸を切り裂いた。

「かはっ」

さらに、土遁の術を使い、オビトを地面の下に埋めた。

トグロが瀕死のオビトを助けようとすれば、時間が稼げる。水分身を倒し終わったトグロが、すぐに自身に向かつてこないよう“見せかける”ためだった。

霧隠れの忍びはすぐさまその場を離脱した。

トグロが水分身を倒し終えたとき、リンは瀕死の状態だった。

今のトグロは分身である。チャクラを分け与えることでリンを治すことはできるが、そうすると自分は消えてしまう。あの霧隠れの忍びが戻ってきたら、リンは確実に殺されてしまう。

「賭けになるな」

しかし、迷っている暇はなかった。リンは今すぐ治療しないと本当に危険だったからだ。

トグロは土遁を使い、リンを連れて地中深くに潜った。そこでリンを治療した。せめて、自身が消える瞬間を敵に見られないためだった。

チャクラを渡していく。リンの大怪我が、見る見るうちに治っていく。しかし、治り切る前にチャクラが切れ、トグロの分身は消えてしまった。

霧隠れの忍びに“憑りついていた”男は、すぐさま地中に潜り、オビトを回復させた。回復してすぐ、彼を連れて全力でアジトへ戻った。普段の男にとって、地中の道は絶対の安全圏。しかし今は、自身

復歸した。彼は奇跡的に一命を取り留めていたのだった。しかし、リンの置かれている状況を見て愕然とした。

「何故誰も、リンを助けてやらない！ なぜそんなに冷たくなれる！？ 優秀だから付き合っていたのか！？ 使えなくなったら用済みか！？ それがお前達の考える仲間なのか！」

オビトは同期の忍びにそう言って回った。彼等の返答は「今は戦争中で、時間に余裕がない」「戦争で障害を負う忍びは大勢いる。手や足を失っても、頑張って忍びに復歸した人間もいる。甘やかしたって彼女のためにならない」「俺だって戦争で家族を亡くしたんだよ！ 怒ってばかりの他人を構ってやる余裕はないんだ！」というものだった。

オビトは同期の連中に心底落胆した。いや、一部言いたいことは理解できるので。だからこそ心が抉られた。

誰も彼も自分のことばかり。他人を構う余裕なんてない。こんな世界では、誰も幸せになれないんじゃないか？ 世界の仕組みを変えなければならぬんじゃないか？ 彼の中でそんな考えが育ち始めた。

カカシの態度も、彼を苛立たせた。「医者任せなんだ」「脳は回復しない」。やつはそう口にした。苦しそうな表情を浮かべているが、自分で現状をなんとかしようとはしない。諦めてしまっている。オビトにはそんな考え方は認められなかった。

「自分から諦めるな！ 諦めたらそこで終わってしまうんだ！」

そう言っつて、何度もカカシに殴りかかった。カカシも「この分からず屋が！」と激昂して反撃することもあった。しかし、いつも別の誰かが止めに入ってきて、消化不良のままケンカは中断するのだった。

木の葉新時代 終戦と川影選挙

風の国の内戦終結。岩隠れと桃隠れの和睦。桃隠れ砂隠れの、霧隠れ雲隠れ戦線への本格参戦。

戦況は徐々に木の葉連邦へと有利になっていき、1年後、とうとう第三次忍界大戦が終結した。

和平に当たって様々な取り決めがなされた。各国の領土を大戦以前へ戻すこと。ミサイル攻撃の禁止。桃隠れが戦争で保有するに至った一尾、三尾、四尾、の再分配。大名に実権を戻すこと。闇市の禁止。軍備縮小。などなど。

それらと並んで重要なのが、火影、並び桃隠れ里長の交代だった。霧隠れ、雲隠れともに、自分達に戦争責任があるとは認めなかった。「和平に応じて欲しくば、お前達が戦争を起こしてしまった責任を取れ！」

本当は、霧隠れも雲隠れも負ける戦をこれ以上続けたくなかった。しかし、見栄を重視する彼等にとって、敵国に罪を認めさせることが重要だった。雷影や水影が罪を認めれば、内乱が起こってしまう可能性すらあった。

戦争を辞めたい木の葉同盟は、この要求を呑んだ。ヒルゼンにとって火影交代はさしたる問題でなかった。どころか、新しい世代なら平和を築けるかもしれない、なんて期待さえあった。トグロにとってはトップの変更は問題だ。まだ人材が揃っていない。しかし、名前だけ変えて裏で里を動かせばいい、と考えて受け入れた。

また、木の葉連邦内だけで使われていた川影の名が、正式に他の国でも認められることになった。本来、五大国である火、風、土、雷、水、の里長以外は影を名乗ることを許されていなかった。しかし、木の葉に次ぐ強国となった桃隠れが、いつまでも木の葉の傘下という立場なのは不自然だった。というより、木の葉以外の里にとって、桃隠れの自治権が増してくれると、木の葉の横暴な振る舞いを防ぎやすいので

ありがたかった。

さて、世界で二強となった国のトップを決める日が近づく。

二里とも、里内の全忍びによる直接選挙という方法をとった。立候補者、並びその支持者による演説が各地で行われるようになった。

有力な候補者とその主な情報は以下の通りである。

木の葉隠れ

綱手

木の葉の姫、綱手姫とも呼ばれる。忍びの神、とまで言われた初代火影千手柱間の孫。三代目火影ヒルゼンの直弟子でもある。木の葉隠れの始まりは、千手とうちはが手を結んだこととされる。しかし実際は、柱間の人柄と能力に惹かれた各部族が集まってできたようなものだった。柱間が亡くなって数十年経つが、40歳以上の者は柱間の輝きを鮮明に覚えている。その輝きを、綱手にも重ねて見ている。実際、綱手は非常に優れた忍びであり、木の葉の三忍と呼ばれる。人柄も、大雑把で酒と博打が好きなど、どこことなく柱間に似ている。容姿もいい。40歳以上の忍びと独身男性に絶大な人気を誇る。問題は本人の帰属意識が桃隠れにあることか。

自来也

綱手と同じく三代目火影の直弟子にして、木の葉の三忍と呼ばれる。実力も人柄も申し分なし。綱手と違い、木の葉を離れたりせず、里と共に戦い続けたことが評価される。しかし、スケベで間が抜けたところがある。綱手ほどの求心力はない。

大蛇丸

綱手、自来也と同じく三代目火影の直弟子であり、木の葉の三忍と呼ばれる。戦闘能力は三忍で一番とも言われる。二代目火影扉間の意志を色濃く受け継ぐ。非情であり、オカマであり、ヘビをこよなく愛する。人体実験など黒い噂が耐えない。ダンゾウなど二代目火影を信奉する者からは信頼が厚い。

波風ミナト

自来也の弟子。戦闘能力は師に勝るとも劣らず。今大戦で一躍名を上げ“木の葉の黄色い閃光”と恐れられた。頭脳明晰で人柄も問

題ない。容姿は紛うことなきイケメンである。23歳と若く、甘いところがあるが、逆にそれが女性の庇護欲をそそる。全世代のくの一と若い男性に人気。

うちはフガク

そろそろうちにはにも栄光を、と立ち上がったうちはの若き当主。上忍の戦闘能力を持つが、五影としてはやや劣る。性格はやや過激なところがある。また、周りからの押しに弱い。うちは一族から人気。

志村ダンゾウ

三代目火影と共に長く木の葉を支えてきた。里が次期火影の話題に盛り上がる中、「わしの名が聞こえんのう」と寂しそうに呟いたところ、ヒルゼンに「老世代は潔く去るべし。そう言ったのはお主ではないか。お主は棄権すると皆に伝えておいたぞ」と言われてしまった。ダンゾウは酷く怒ったという。多くの部下から人気、というより絶対的な命令を下し、票を集めることができる。

うちはオビト

木の葉の上忍。今大戦の終盤に奇跡的な復活を遂げ、人が変わったように高い戦闘能力を手に入れた。若きうちはのホープ。老人に世話をするのが趣味で、老世代から人気がある。しかし、いかんせん14歳では若すぎる。思想も甘さや怖さを見せる。

桃隠れ

綱手

ほぼ最初期から孤児院の経営に関わり、桃隠れ創設時には里長となった。彼女が「私に投票しろ」と言ったらほぼ全員が彼女に投票するくらいの人気がある。問題は木の葉の一部が火影への就任を望んでいることか。

うずまきクシナ

九尾の人柱力であり、多重影分身の術によって多くの一般人を救ってきた。戦闘ではトグロとコンビを組むことが多く、今大戦でも重要な局面で多く活躍した。“赤い血潮のハバネロ”、“トマト”などの異名を持つ。戦闘能力、人柄ともに問題ない。容姿もいい。ただ、頭

が悪い。本人もトグロの仕事っぷりを見て、自分に川影は無理だと思っている。全世代に人気がある。

小南

トグロの最初の仲間の1人。主に桃隠れと同盟各国の橋渡しの活躍をした。戦闘能力は並みの上忍程度。人柄、容姿ともに素晴らしい。“天使様”の愛称で親しまれる。頭はいいが、まだ若さがある。暁など比較的最近他国から入ってきた忍びに人気がある。

サソリ

桃隠れの遊撃隊長。今大戦ではトグロ、綱手に並ぶ活躍をした。“赤砂のサソリ”の名で恐れられる。抜群の頭脳と高い戦闘能力を誇る。思想はおそらく問題ないが、一般人には理解できないところがある。容姿がよく、女性人気が高い。幼い少年からの尊敬も厚い。問題は本人が「絶対に川影になどならん」と公言していることか。

選挙の前に、綱手の扱いをどうするかという問題があった。綱手本人は桃隠れに帰属しているつもりでいる。しかし木の葉の一番人気は綱手である。このままでは、川影でありながら火影になってしまう可能性があった。

「絶対に私を選ぶな！ 火影になつてもすぐさま破棄するぞ！」

綱手は繁華街で演説をした。木の葉の忍びは「そんなこと言わないでー！」「姫エー！」「わしらを見捨てるのか！」となかなか諦めなかった。

実は、ヒルゼンも綱手に帰ってきて欲しいと思っていた。よってそんな状況を放置していた。

ダンゾウも、綱手が戻ってくることで自体には賛成だった。しかし、今は綱手の周りにいる人間がいけなかった。

桃隠れは大きくなりすぎた。うずまきトグロ、長門、うずまきクシナ、サソリ、アラレ。彼等は“桃の五鬼”と呼ばれ、全員が五影に近い力を持つとされる。実際、トグロは現風影を捕らえたことがあるし、アラレもほぼ単独で土影に勝っている。火影になった綱手が、桃隠れの忍びを重鎮に据える可能性は高い。そうなると、今の木の葉の

実力者が政権から一掃されてしまう。それはダンゾウには認められなかった。

「我々も、千手の威光から独り立ちする時期に来ているのではないか？ 綱手を川影とし、両国の同盟を一層強固にすることこそが、未来の木の葉の繁栄につながるのではないか？」

ダンゾウはそう言ってヒルゼンを諭した。ヒルゼンは悩んだが、結局は泣く泣く受け入れた。

綱手を桃隠れの忍びとし、火影選挙に彼女を選ぶことは無効とする。

選挙前に両里で合意がなされた。綱手は70%の圧倒的投票率で川影に再任した。

なお他は、クシナ8%、サソリ8%、小南4%、空海10%（無効票）だった。

大波乱の火影選挙

ダンゾウは事前に聞き取り調査を行った。その結果、波風ミナトが勝ちそうだと分かってしまった。圧倒的な女性人気のためである。

木の葉は戦争で多くの忍びを失った。しかし実は、女はあまり死んでいなかった。同班の男が女を庇いやすかったことや、ヒルゼンが女を後方支援に集めたことや、トグロが女を鼯肩して助けたことがその理由である。現在、木の葉全体の男女比は4対6。若い年代には3対7の代もあつた。しかし、立候補者の中で女性人気が高いのはミナトのみ。彼が勝つのは当然と言えた。

ダンゾウとしては、そんな理由で勝たれては困るのだ。彼はかつて二代目火影が目指したような、他国の脅しに屈しない、規律正しく内憂がない、強い木の葉を目指している。そのためには、自身が火影になるのが一番いいが、悲しいことに自分に人気がないことはよく分かっていた。

しかし、唯一認められる候補がいた。大蛇丸だ。頭脳明晰で戦闘能力も申し分ない。何より思想がダンゾウの好みだった。必要なときはいつでも非情になることができる。俗っぽいものに惑わされたりもしない。大蛇丸が火影になれば、ヤクザ紛いの雲隠れ霧隠れにも、情報工作が得意な岩隠れにも、凄まじい勢いで巨大化する桃隠れにも、対抗できるだろう。そんな思惑があつた。

ダンゾウは、大蛇丸勝利のために裏で動くことにした。何よりもまず、ミナトを支持する女性層を崩さなければならない。この手の女が最も嫌うことは知っていた。ダンゾウは扇動工作を得意としている。

ダンゾウは部下に命じた。

「波風ミナトが演説する場に行き、その演説を遮って叫べ。桃隠れにミナトのお気に入り入りの女がおり、毎晩のようにやりまくっていると」

「な」
作業員には、くの一とイケメンの男を複数用意した。野次馬的な女は、不細工な男の言葉に耳を貸さないと知っているからだ。

さて、部下は目的の演説広場へ走る。波風ミナトの周辺は、予想通

り女に埋め尽くされていた。

「僕は波風ミナトと言います。今回、四代目火影に立候補することになりました」

「きゃーっ！ ミナトきーん！」

「黄色い閃光ーっ！」

次々と黄色い声飛んだ。応援演説をする自来也が、嫉妬して拗ねてしまうくらいだった。

「言つとくがのお！ こいつだつて男じゃ！ 鼻血出しながらエロ本読んだことだつてあるんじゃないぞ！」

「黙れエロ親父イ！」

「てめえが見せたんだろうが変態！ ミナトきゅんになんてことをしてくれたの！」

「ミナトさんから汚い顔を離せ！ 病原菌が移ったらどうしてくれる!?!」

自来也がミナトの悪口を言っても、女達のミナトに対する熱気は変わらない。むしろ自来也を責めた。そしてこれは、ダンゾウの予想が正しければ、自来也がイケメンではないからである。イケメンが発言すれば、女達は信じるはずなのである。

「えーっ！ それマジーっ！」

突然、女の1人が叫んだ。ダンゾウが送った作業員だった。

「マジマジ！ ミナトのやつ桃隠れに女がいるんだよ！ しかも、木の葉を裏切った抜け忍の犯罪者！ 戦争中だつてやりまくつてたんだぜ！ 時間があれば里を出て、夜明けまでガチセックス！ 中田氏7連発のイカせまくりだつて聞いたぜ！」

「ええーっ！ 抜け忍と!? 私たち皆で頑張つてる時に、修行もせず!?! うげえーっ」

「ガチ絶倫だぜえーっ！」

「うげえーっ！ 最悪じゃん！ 純粋なフリしてるから余計に性質が悪い！ 汚れまくりじゃん！」

どよどよ。女達に噂が広がっていく。驚き、反論、悲鳴でこつた返しになる。

「う、ウソでしょ……?」

「ウソつくなアホ! ミナト様がそんな破廉恥なことするわけないじゃん!」

「ケンカはやめてよお! せっかく戦争が終わったばかりなのに!」

ここからが重要だ。工作人員の女の額に冷や汗が受かる。

「マジだつてマジ! 桃隠れの女の子達の間じゃすつごい噂になつてるの!」

「ここは木の葉でしょ!」

「なんであんたが知つてんのよ! あんたこそ戦争中に桃隠れで遊び呆けていた裏切り者なんじゃないの!」

「あつ! それ俺も聞いたぜ! クシナだろ!? 九尾の化け物のうずまきクシナ!」

ここで、別のイケメン工作人員も割り込んだ。

「えっ」

「クシナつて、あの?」

「ちよつと前に逃げて話題になつていた、あのトマト? 暴力女?」

クシナの名が出たことで、女達が一気に静まり返つた。彼女は裏切り者として有名であり、今戦争で活躍した英雄としても有名だった。安易に発言することはできない。

「皆、そんなに気になるんだつたら直接聞いてみれば? あそこに本人がいるんだからさ」

イケメン工作人員はミナトを指差した。

ミナトはとても苦い顔になつていた。自来也とミナトの同期の支持者達もだ。それがいつそう女達の不安を煽つた。

「ウ、ウソですよね? ミナト様」

「あんな裏切り者、違いますよね?」

ミナトは苦い顔で笑つた。何も応えることはできなかつた。それがさらに女達を不安にさせてしまった。

イケメン工作人員がさらに畳み掛ける。

「ひゅーっ! やっぱり童顔ミナトくんの正体は、桃の淫乱売女が大

好きな変態さんでしたか！ しかも戦争中に！ 仲間が頑張っている間に！ 回復のために割り当てられた時間を利用して、わざわざハーレムの国にまで行くとはね！ 恐れ入ったよ！」

「ち、違うー！」

「おいミナト」

ミナトは暴言に耐え切れず、反論を始める。自来也の静止にも止まらない。

「僕をいくら悪く言ってもいい！ だけど、クシナを辱めるような発言は許せない！」

「ほらな！ やっぱ裏切り者に夢中だったんだ！」

「裏切り者じゃない！ 彼女は！」

「ミ、ミナト様ア！ どうして！」

「ウソでしょう！ あんな、抜け忍の大罪人に！」

「どうしてあの女なのですか！ ミナト様も私達と同じ木の葉の忍びじゃないですか！」

「これは、問題かもねえ」

ミナトがクシナを庇ったことで、野次馬の女達が爆発した。工作人員もここぞとばかりに暴言を吐きまくった。大人しい一般のくの一も、徐々に釣られていった。

「ちよ、ちよと待って欲しい！ 僕はそんなつもりじゃ！」

「ウソをつくなア！ お前は先生失格だろうがア！」

全ての声を掻き消すように、1人の少年が怒鳴り声を上げた。あまりにも大きい声だったので、女達も驚いて少年の方を見た。

「お前は、こんな状態のリンを放って、桃隠れの女のところに遊びに行ってたんだらうが！ 今苦しんでいる教え子よりも、ハーレム女の方が大事なのか!? お前にとつて弟子は仲間でも何でもないのか!? なんとか言ってみろ先生よおおお！」

少年はうちはオビトだった。リンの乗る車椅子を押しながら、群集の外からミナトに近づいていた。

「オ、オビト！ 違うー！ 僕はリンのことも心配していた！ だけどっ！」

「心配してるなら、なぜ見舞いにこない！　なぜ、この子が！　こんな状態になつても頑張っているのに、放置してられるんだ！」

「ちがつ、そんなつもりじゃ！」

ミナトは必死に気持ちを伝えようとした。過失はあつたかもしれないが、リンやオビトを苦しめたかつたわけではない。その思いを伝えなかつた。オビトが未だ、わざと悪いことをしたのでなければ許すような、やさしい少年だと信じながら。

実際、オビトは苦虫を噛んだような表情になつていた。ミナトにだつて事情があつたはずだ。それを察する心はあつた。しかし、それでもこの現状を認めたくない。諦めたくない。そう思うから余計に苦しかつた。

オビトに押されるリンは、その「察すること」もできなくなつていた。ここ一年、彼女は怒り続け、若い眉間にしわが寄るほどになつていた。今回も、いつもの不満顔で叫ぶのだった。

「死ね！　死ねクソ先公！　変態ドスケベ！　自分だけ幸せになろうとしやがつて！　オラア！　真面目ぶりやがつてエ！　調子に乗つてんじやねえぞオラア！」

「リ、リン！　そんなことを口にしちやダメだ！」

「あつ、あたしに口答えしてんじやねええええ！　ドクズがあああああ！」

病的な叫びだった。女達も障害を察するほどの。しかし、一部察せない女がいて、リンを悪く言うのだった。

「何あいつ。きもつ」

「頭わいてんじやねえの？　調子にのんなよクソガキが」
「ぶっさいくな彼氏連れやがつてさあ。何様のつもり？」

実は、ここにも工作員が混じつていた。ダンゾウの工作員と、リンに障害を負わせた存在の、両方が。

その声が聞こえ、リンは途端に怯えたようになる。女達の顔色を伺い、自分への敵意を認識してしまう。

「し、死ねよおおお！　クソ女どもおおお！　あたしを悪く言つてんじやねえよおおお！」

これがさらに女達を煽ってしまった。オビトはしまったという顔になり、リンの車椅子を反転させて逃げようとする。

「おい逃げんじゃねえよ。マジでいっちょ懲らしめてやんないとな」
「何その車椅子？ 同情誘ってんの？ お前みたいな人の好意につけこむやつが何より最低最悪なんだよ！」

「いなくなった方が世の中のためだ！ あたしが死なない程度にぶつ殺してやんよ！」

一部の女達が、リンと彼女を押しオビトを追いかけ始める。オビトは手裏剣を手に持ち、女達を脅す。しかし女達は止まらない。
まずいっ。

オビト、ミナト、自来也等は皆焦った。しかし、ミナトには飛雷神の術があり、リンにはそのマーキングもしていた。ミナトはすぐさまこの術を使い、リンのすぐ横に現れた。

「み、みんな止めてくれ！ その子は！ 止めてくれ！」

ミナトが女達の前に出て言う。両手にクナイを持ち、腕を左右いっぱい広げる。さすがに女達は立ち止まった。今の今まで憧れていたイケメンと戦うことはできない。

「どうして！ あんなやつ甘やかしたら！」

「ち、違うんだ！ 彼女は脳のケガで！」

「殺してしまええええ！ あんな女ア！」

「止める！」

しかし、作業員がまた女達を煽るのだった。

ミナトの支持者達が総出となって、女達を止めに入った。自来也は一人だけリンの下へ向かい、彼女を抱えて走った。

リンは逃げ切れたが、もう演説どころではなかった。ミナトは女達に謝って回り、なんとかケンカだけはせずに解散してもらった。

この事件があつて、ミナトの支持率は急落してしまった。野次馬的
女達は、次の支持者に大蛇丸を選んだ。自来也、フガク、オビトに比べるとイケメンだからだ。オカマではあるが、だからこそミナトのよ
うに「裏切られる」ことはない。怪しい雰囲気も、色っぽいと表現し
て、キヤーキヤー言うのだった。当然、この流行の影には、ダンゾウ

によって派遣された工作員の活躍があつた。

そうして選挙が始まつた。諸々の予想に反し、接戦となつた。

30% 大蛇丸

25% 日向ヒザシ（ミナト事件を知つて急遽立候補した）

15% うちがフガク

10% 波風ミナト

10% 自来也

8% 千手綱手（無効票）

2% うちがオビト

結果は大蛇丸が一位だつた。

しかし、ヒルゼンからは物言いが出た。1位の投票率が低すぎる。

上位二名で再度選挙するべきではないかと。

これに強く反対したのがダンゾウだつた。

「そもそも里長を決める権限は大名にある！ 今、我々の中で選挙の結果が出た！ これをもう一度行うなら、大名に意見を聞いてからだ！ 大名を軽視するのかわ！？」

これは、大蛇丸を火影にしたいための詭弁だ。ホムラとコハルはダンゾウの真意を理解していた。しかし、この2人もまた、大蛇丸の支持者だつた。

ミナトが火影なら構わなかつた。彼の思想は好かないが、彼とその支持者には里を動かす力が無い。結局は自分達が裏で木の葉を操ることになる。

しかし、日向は強大だ。それも、桃隠れとつながりが強く、現政権からは遠い。ヒザシが当選すれば、現政権を一掃し、自分に近いものを重役に据えることになるだろう。それは認められなかつた。

ヒルゼンは、ふつうにダンゾウの言葉が正しいと思つた。よつて、大名に選挙結果をそのまま報告した。

「大蛇丸はダメじゃのう。黒い噂が多すぎるゆえ」

ところが、上層部の予想に反して大名が大蛇丸を認めなかつた。

実はこれには、日向一族が関わつていた。日向ヒアシとヒザシは選挙の流れを見抜き、桃隠れに働きかけていた。

「大蛇丸が火影になれば木の葉は分裂する。再び悲惨な戦争が始まってしまう。そちらの大名から、こちらの大名に働きかけてくれないか？」

トグロはヒアシの依頼を請け負った。大名の娘であるマリ、ナデシコを通じ、川の国の大名にことの顛末を説明した。

「なるほど。火の国の大名に大蛇丸を認めさせなければいいのだから？」

川の大名もトグロの依頼を請け負った。そして、火の国の大名のもとへ行き、大蛇丸がいかにも悪どいかを説明したのである。

選挙は無効となった。しかし、単純に再選挙とはならなかった。

何より、無効だと公表するのが難しかった。上層部の思惑もある。珍しくノリノリでやる気になっている大蛇丸に、真実を伝えるのもしんどい。伝える役はヒルゼンに任せられたが、ヒルゼンはなかなか動けなかった。それほど大蛇丸が生き生きしていたからだ。生まれて初めて生きがいを見つけたような。結局、現状維持のまま数週間が過ぎた。

大蛇丸は苛立っていた。毎日のように火影邸に通うようになった。

「ねえ、猿飛先生。いったいいつ引退してくださるのかしら？」

「しばし待て。他国との兼ね合いがあるのだ」

「そんなものないですよねえ。雲隠れも霧隠れも、一刻も早く先生が引退することを望んでいますよ。いい加減なウソをつかれても不快なだけなのですけれど」

「わしは忙しいのだ。後にしてくれ」

「先生、醜いですよ。今になって地位に固執するのは」

この日も、いつものように煮え切らない会話が交わされた。大蛇丸は、長い舌でねっとりクナイを舐めたり、間違つてクナイを落としたりフリをしてヒルゼンに投げつけたりした。簡単な脅しのつもりだったが、当然ヒルゼンに効果は無かった。

しかし、突然廊下が慌しくなった。ヒルゼンの護衛を任されている暗部が部屋に入ってきた。

「ほ、火影様！　大名様が何者かに暗殺されました！」

「何じゃと!?!」

事態は急転する。木の葉は全力で犯人を探した。しかし証拠となるものは何一つ見つからなかった。

新しい火の国の大名が就任する。ダンゾウは就任式のドサクサに紛れて、選挙結果を大名に見せた。新大名は暗殺に怯えていた。ダンゾウの言葉に応じることしかできなかった。桃隠れもさすがにこのタイミングでは干渉できなかった。

結局、大蛇丸が四代目火影となった。

この大蛇丸は本物か？

戦争の趨勢が決まり、木の葉連邦が和平の条件を模索していた頃の話である。

ヒルゼンは綱手、トグロ、半蔵、風影等実力者を火影邸に呼び、何度も話し合ってきた。

「わしと川影殿の引退、並び戦争の起因となったことに対する謝罪によって、和平に応じると言ってきた」

「やっと妥協してくれましたか。ホツとしました。受けましょう。その程度ならば」

「話が早くて助かる。しかし、後進の育成は済んでおるのか？」

「いえ、自分が裏で里を支えるつもりです。もともと空海の名でやっていたことですから」

「なるほどの。わしは、いい機会じゃし、世代交代をと思つとるんじやが……」

ヒルゼンは言葉を濁しながら綱手を見る。

「綱手よ。ここは一つ」

「断る」

「む？」

「断る」

「綱手よ。話くらいは」

「断る」

ヒルゼンは綱手を火影に指名するつもりだったが、全力で断られてしまった。心の中で、次は自来也に頼んでみることに決めた。

しかし後日、その自来也にも同じように断られてしまう。自来也はミナトを推薦した。

「やつは数十年に一人の天才です。心優しいが、根性は筋金入り。何より本人にやる気があります」

ヒルゼンもなるほどと思った。しかし23歳と若く、管理者としての経験が浅い。上役等から反対が出るだろう。指名によっていきなり火影とするのは憚られた。

後日、再びトグロと会う機会があった。

「体裁としては、わしらが責任をとって政権から身を引く形になる。そのわしらが次期里長を指名するのは、少し問題がある。どう考えるか？」

「確かに。形だけでも、自分達は次の政権に無関係だと装ったほうがいいかもしれませんね。まあ、私は誰が川影になろうと裏で操るつもりですが」

「軽々しくぶっそうなことを言わんで欲しいのお」

「すみません」

ヒルゼンもトグロも苦笑する。この頃にはもう余裕があった。

「ただ、そうですね。将来を考えると、投票で決めておくのも手ですね」

「ほう？　なぜ投票が将来につながる？」

「その、うちはハーレム制ですよ」

「婉曲な表現はできんかの？」

「すみません。とかく、たくさん子どもが生まれますよね。ですから、いずれ多くの子が川影候補になります。兄弟ゲンカをさせないためには、選挙で決めるのが一番いいと思うのです」

「ふむ。なるほどの。選挙か」

その後ヒルゼンは、自分からの指名、上役からの指名、部族長による話し合い、部族長による選挙、上忍による選挙、中忍以上の選挙、と様々な方法について頭の中でシミュレーションを行った。例えば自分からの指名なら、後で雲隠れ霧隠れからケチがつくだろう。ダンゾウとうちは一族も怒るに違いない。上役からの指名では、やはりうちは一族から非難が出る。また、戦争ばかりの老世代から脱却するとう、自身が一番望んでいることを行えない。部族長による決定では、部族に入っていない忍びをないがしろにすることになる。また、部族の中でも抜きん出た力を持つうちは一族は、他の一族と同じ一票であることに不満を持つだろう。

残るのは、上忍で区切るか、中忍で区切るか、下忍以上の全ての忍びとするか。これならば、いずれで区切っても批判は出にくいだろ

う。うちは一族も、有力部族出身でない者も、それ相応の声を発することができるからだ。さすがにアカデミー生はなしだが。

しかし、うちの不満は厄介じゃのう。

さておき、ヒルゼンは思う。今大戦では、下忍も上忍と共に前線で戦った。むしろ下忍が最も苦勞をした。人数でも割合でも最も多く亡くなっている。であれば彼等にも、政界に関わるチャンスを与えてあげた方がいいのではないだろうか。

未熟さはある。情報に対する弱さ、デマに対する耐性のなさもある。しかし、彼等とて一人前の木の葉の忍びである。忍びなら、騙されるのではなく騙す側にならなくてはならない。彼等ならなれるはずである。と、ヒルゼンは期待する。

今回は、若い世代に賭けてみるのもいいのではないだろうか。里の今後を担うのは彼等である。戦争ばかりだった自分達とは、違う道を歩んでもらいたい。老世代におんぶに抱っこではなく、自分達が木の葉を変えてやる、よりよくしてやる、という気概を持ってもらいたい。その意味でも、選挙による政治参加はいい機会になるのではないだろうか。

などなどと考えて、ヒルゼンは全忍びによる総選挙を行うことにした。立候補する側も、上忍下忍年齢性別問わずとした。

上役のダンゾウ、コハル、ホムラに内緒で、集められるだけの上忍を集めた。そこで、選挙の旨を伝えた。その最中に「老世代は潔く去るべしと言っておった。ダンゾウは棄権すると考えてよいじゃろう」と漏らしたのだった。

とかく、四代目火影が大蛇丸に決まった。

連邦の同盟国として桃隠れも祝福しないわけにはいかず、綱手とトグロは就任式に出席した。

大蛇丸は別人かと思うほどすっきりした顔になっていた。上機嫌に笑んで、綱手やトグロに手を振るほどだった。各人挨拶を済ませ、大蛇丸から決意表明が行われる。

「誰もが未永く幸せに。安心して暮らせる火の国。そのための強い

里。強固な同盟。その全てを目指して、尽力していききたいと思います」

常識的な挨拶だった。あいつに常識があったとは、と綱手が言った。トグロも同じことを思った。

大蛇丸の演説の後、新しい上役が発表された。

「相談役、自来也、うちはフガク」

呼ばれて、自来也とフガクが大蛇丸の隣に立った。どちらも気まずそうだ。

トグロも綱手も既に2人の人選を聞いていた。しかし、大蛇丸が素直に別の三忍とうちはを受け入れたのは気持ち悪かった。

おいしいものをたくさん食べて、就任式は終わる。大名には帰ってもらい、各里の幹部が集まる。同盟の話が始まる。

簡単な挨拶の後、大蛇丸が言った。

「前大戦では、拙い連携が互いの足を引っ張るケースが目立ったわ。どうかしら？　ここは1つ、木の葉、桃、砂、雨、合同の同盟軍を常設するというのは」

「ほう？」

半蔵が興味深げに眉を上げた。

正論である。上手く行けば、どこにとっても益がある。それを大蛇丸が口にするのは、裏があるような気がしてならないが。

「同盟軍の有用性は理解する。しかし、戦力の配分や指揮権に問題がある」

「ええ。だから小規模なモデルケースから始めるわ。そうして問題点を修正しながら、徐々に大きくしていく」

「なるほど。いいのではないか？」

上から半蔵、大蛇丸、風影である。風影は言いながら綱手の方を見る。

「チツ。まあ問題はないな」

舌打ちしたのは、大蛇丸があまりに柔軟で、逆に怪しいと思ったからだ。

「舌打ちは失礼じゃないかしら？」

「ふん。それはすまなかつたな」

その後、同盟軍のモデルケースの規模や人員の話へ移った。

大蛇丸は、できるだけ若い世代で組ませようと言った。全里それにならずいた。しかし、次に述べられた言葉に、綱手もトグロも噴出しそうになった。

「木の葉隠れからは、代表者として波風ミナトを推薦するわ。桃隠れは、どうかしら。うずまきクシナを選んでもくれるとお互い喜ぶと思うのだけれど」

「うっ、くっ」

「こいつ、ここまで気が利くオカマだったのか？」

「うちの里としても、そちらの里としても、尾獣再分配の問題が曖昧なまま残っていたでしょう？ この際、曖昧なままでもいいと思うの。決着が付きそうにないからね。でもね。同盟軍の一員って形にすれば、どちらにも属することが出来るわ」

「うへいつ？」

「何かしら？」

綱手はつい変な声を出してしまった。あまりにも大蛇丸の気が利き過ぎているからだ。

「こいつって、もしかして有能なんじゃ……」

「考えたくない言葉が頭に浮かんでしまう」

「場所は雨隠れでいいわ。地理的に同盟国の中心だし、接している国も多いからね」

「ふむ。妥当だな」

「でも、同盟軍が成功すれば木の葉の東側にも軍を作って欲しいわ。木の葉だけで霧隠れ雲隠れの相手をするのは大変なもの」

「まあ、それぞれの負担を考えながら、妥協点を探っていくのがいいだろうな」

その後、正確な位置や人数比が決められていく。木の葉、桃、砂、雨、石、で5、4、3、3、2と決められた。滝隠れ草隠れからの参加も認めるとした。同盟軍の仮の代表は、地元ということで半蔵になった。

「後は、医療と教育についてなんだけど」

大蛇丸はさらに画期的な提案を続けた。

医療知識の共有。大病院の設置。忍者アカデミーの留学制度。合同の研究機関の設置。などなど。

全て、各里に配慮した、無理のない範囲の事業計画だった。利もあるの、各里共に疑いつつうなずいたのだった。

大蛇丸は最後まで爽やかな笑みを浮かべていて、ついぞ腹黒そうに笑うことはなかった。

トグロと綱手は、後から自来也に聞いた。本当に大蛇丸は変わったのかどうかを。

「トグロ、お前本物か？ 生きておったのか？」

「今さらっ!？」

実はかなり久しぶりの会話だった。ちよつとした殴り合いがあった、本題へ。

自来也は不意に一冊の本を取り出した。桃園アカデミーの初等教育で使われている教科書だった。

「この本、お主等のやってきたことが書いておるの。綱手とトグロのページが最も多く、次にサソリのページが多い。根性、協調、話術、文化の違いなどを、身近な英雄の人生を追いながら学べるようになってる」

「それがどうかしたか？ 木の葉だって爺様のやってきたことを学ぶだろう？」

「そうだが、中身が大分違うだろう？ 大蛇丸が言っとったよ。このままでは、木の葉は桃に置いていかれるとな」

「ちよつと、気になりますね」

トグロは無理に持ち上げられているようで気持ち悪かった。それ以上に、あの大蛇丸が自分の本を褒めているらしいのが驚きで、好奇心を煽られたが。

「自身の失敗を書いておるだろう。細かく。その原因や別の方法を使えばどうなったかという分析付きで。これがやつには衝撃的だった

らしい」

「なるほどな。人間は失敗を認めたくないものだ。認めて、そこから立ち上がるとなるとさらに難しい。木の葉では、一度落ちた人間に冷たいしな」

「それもある。認めることの難しさもな。だが、わしの予想なんだが、失敗を認めることの意味についてもあやつに衝撃を与えたと思う」

「意味？ あいつも実験が好き男だ。失敗は成功の母くらいには思っているはずだが」

「いや、失敗を生かすことの意味ではない。失敗を見せることの意味だ」

「へえ」

トグロが得意げに笑った。それは、トグロの教育方針に近いことだったからだ。

「大人が子どもに自分の失敗を見せる。それでも奮起して、助け合って生きている姿を見せる。子どもはそんな大人の姿に強さと思いやりを学んでいく」

「その通りだ！ もう一つ言えば、そのやり方でも子どもは大人を尊敬するようになるー！」

「人心掌握に脅しは必要ない？」

「そうじゃ！ 何せ、実際にそれをやっておる桃隠れの子どもが、お主等を教祖のように崇めておるからのー！」

「ふんっ。それは私が実際に素晴らしいからだ！」

綱手が豊かな胸を張って言う。しかし、これは照れ隠しだ。顔が赤らんでいて、視線を横に逸らしている。

「何にせよ、あやつは変わったよ。おぬし等には感謝せねばならんかもしれないの」

「お前に言われてもな」

「あやつは今、お前達を超えることを目標としている。自身が育てる里と、お主等が育てる里と、どちらがより優秀になるかという形での。思想であれ制度であれ、盗めるものは盗み、改善を加えていく。あやつの深すぎる思考が、このまま平和な競争に使われ続けたらよいのだ

がの」

「盗めるものの中に、人の命は入ってないだろうな？」

「正直、自信はない」

「おい！」

これが冗談かどうかは分からない。しかし、綱手もトグロも一先ずは安心したのだった。

木の葉大改革、うずまきの姫は誰の手に？

大蛇丸の改革は木の葉内部にも及んでいた。

まず、大きいのが木の葉警備部隊の解体だった。これは、里内の治安維持を目的とした警察部隊であり、二代目火影扉間が創設したときから、数十年の間うちは一族のみで構成されてきた。理由は、うちは一族の戦闘能力の高さと、政権に関われない彼等に特別な地位を与えることで、不満の矛先を逸らすためである。忍びを取り締まるのだから、より優秀な忍びが求められるのは当たり前である。うちは一族は写輪眼という戦闘能力を著しく引き上げる血継限界を持っており、この点で不足はない。うちは一族を政治参加させるのは難しい。彼等は一族間での仲間意識が強く、万人を平等に扱うような気遣いが苦手である。うちはマダラの裏切りがあつて、里の一部から恨まれてもいる。しかし、うちは一族は同族が蔑ろにされるのを許せない。諸々の事情を考えると、彼等を地位という餌で遠ざけておくのは、扉間会心の政策であつた。

しかし、時代は移りゆくものである。一度はその特別な地位に満足したうちは一族も、子どもの世代になるとそれが当たり前と感じてしまうようになる。他人にあつて自分にならないものばかりに目が行つて、不満が溜まつていく。名誉ある職の警備部隊を、枷と感じるようになる。地位にあぐらをかいた横柄な振る舞いが増えていく。他一族からさらに憎まれ、うちはがさらに政界から遠ざかっていく。さらに不満と憎しみが溜まつていく。

「悪い連鎖を断ち切らなければならないのよ」

大蛇丸は、自来也とフガクに上記を力強く説明した。

自来也は、まさか大蛇丸がここまで変わるとはのう、という感じだった。フガクは感銘を受けて、その後、率先して警備部隊の解体事業に関わるほどだった。

もつとも、警察組織自体は必要である。うちは一族のみで構成されていたのがまずかった。効率性を重視しつつ協調性を知った大蛇丸は、日向ヒザシを新警備部隊隊長に据えた。

「選挙で2番だったし、里の皆も彼が上に立つならある程度納得すると思うの。戦闘能力は問題なし。白眼だつて捜査にとても役立つと思わわ」

「大蛇丸よ、重要な言葉が抜けておるぞ」

自来也が言う。

「何かしら？」

「地位には腐敗が付きものだ。その点でも、日向ヒザシの人格なら問題ないということ」

「へえ。その言い方だと、うちはは腐っていたようにも聞こえるけど？」

大蛇丸がフガクを横目で見る。自来也は慌てて両手を出して否定する。

「い、いや、そんなことは言うたらんぞ」

「いえ、自来也様。お気になさらず。横暴な愚か者が複数人いたのは事実です」

「フガクよ。我々是对等なのだ。敬語はいらぬ」

「す、すみません。あつ、いや、すまないな」

フガクは緊張を隠すように下を向いた。

大蛇丸はそんなフガクを見て、密かに舌なめずりしたのだった。

大蛇丸は、ダンゾウが公然の秘密として運営している“根”の解体にも着手した。いや、根の場合にはむしろ木の葉の正式な組織とした。名称を木の葉特殊部隊と変え、表の警備部隊では手の届きにくい特殊な捜査やスパイ活動を行う。組織のトップはダンゾウのまま。ただし、その上に火影を置き、上層部が組織を管理できるようにした。当然ダンゾウは怒った。しかし、大蛇丸は「大名を殺したのは誰かしら？」と言つて黙らせた。ダンゾウは「この恩知らずが！」と怒鳴つたが、武力行使することはなかった。

大蛇丸は本当に軍縮をした。余った費用は医療福祉に回し、介護ではうちはオビトにも発言の機会を与えた。これによって、ヒルゼンやダンゾウに発言できる老世代を味方につけた。また、選挙で高い票数を得た全ての人間にそれなりの地位を与えることで、彼等を選んだ忍

びにも一定の配慮を示した。飴と鞭作戦であった。

新しい政策が次々と施行されていく。

同盟軍が結成され、初めて合同訓練が行われる。これには各里長を初め、大名、空海やヒルゼンなどの実力者、フガクの長男イタチ、綱手の長男縄也、カルラの長女テマリと次男カンクロウ、家出放浪中の募ツチとその長男デイダラ、うちはミグシと長男うちはウルシ、も見学に集まった。

トグロはハーレム要員と大勢の子どもを連れて堂々の入場である。「なあ、空海僧正。僧侶って恋愛禁止じゃなかったか？ うんそうだろう」

「俺が作った宗教だから俺がルールだ」

「さすがです！」

「さすがパパ！」

「しやすが！」

「おいおい。どんな教育してんだよ」

トグロの子どもが満面の笑みで母親の真似をする。しかし、言いながらもトグロの頭の角を引っ張ったり、裾を引っ張ったり、懐に潜っていたり、父親で遊んでいた。

「それよりもボツチ、募ツチってなんだ？」

「ん？ あたいは募ツチさ。土影の縁者だと知られたくない時はボツチって呼ばせてたのさ」

「え？ お前土影の縁者なの？」

「まあ姪に当たるな。あんま気にすんな。うんそうだろ」

「ふーん」

「さすがパパ！」

「うずまきイカセ！」

「うんこのトグロ！」

「コラ！ あんた達！」

「きゃーっ！」

イタチ、テマリ、カンクロウ等は、子ども達の自由っぷりに圧倒さ

れてしまう。トグロについても驚きだ。大国を裏で操るすごい男だと聞いていた。子どもに為されるがままの姿は全くイメージと異なる。

「オイラも混ざっていいか？ うん」

「ああいいぞ。うんそうだろう」

「いよし！ 爆発のないじり方を見せつけてやる！ うん！」

逆に、デイダラはトグロの子供に混じってトグロをいじり始めたが。

さて、訓練自体は順調に進んでいく。小隊戦、集団戦、地中移動、複数での大規模忍術、などなど。食事は共にとり、談笑を交える。

「この膝の傷は、木の葉にやられたもんでよお。毎朝痛えの何のって」

「はははっ。俺なんて、毒の後遺症で毎晩うなされてるぜ。どうしても発狂しちまうんだ」

「そりゃあ奥方もびっくりするだろうなあ」

「はははっ。でかい赤ちゃんの夜泣きだっつって、その場で慰めてくれるぜえ」

「くくくっ」

男達は男の勲章、戦場の傷跡で盛り上がる。

「ねえ聞いた？ 一番隊隊長ができてるって」

「うん知ってる。クシナさんとでしょ」

「ええーっ。どうして知ってるの？」

「木の葉じゃ常識よ。めちやくちや有名だもん」

「そんなあ」

女達は色恋沙汰にうつつを抜かす。忍者も人間であった。

今日は初訓練なので、早めに終わる。しかし、閉会の挨拶の際に、ヒルゼンが粋な提案してきた。

「1つ、ゲームでもやらんかね。我々もただ見学するだけではつまらんじやろう。若い衆に頂の高さを見せる意味でも、各里隊長格のみで旗取り合戦でもせぬか？」

「いいだろう。受けて立つ」

「おもしろそうだな」

「あたしもかまわないわ」

現川影、火影、風影が賛同する。あまりにも合意が早かったので、トグロには事前に話し合いが済んでいたと分かった。それも、自分には内緒で。

嫌な予感がした。そしてそれは、チーム別けを聞きながら核心に変わった。

Aチーム

半蔵 大蛇丸 風影 カルラ 長門 ミナト クシナ（フラッグ）

Bチーム

ヒルゼン 自来也 トグロ 募ツチ 月 小南 綱手（フラッグ）

明らかに、ミナトとクシナの結婚を組ませ、トグロを負かせようとする布陣。ミナトとクシナの結婚を認めさせるためのゲーム。明らかにAチームの方が強い。募ツチ、月、小南を同チームにする意味が分からない。

しかし、各里トップの影が認めたことだから、反論しても意味がない。

そして分かる。4影は全員ミナトの味方についている。まともな7対7の戦いではない。自来也もミナトを応援するだろう。月と小南も、トグロのハーレム要員が増えることを嫌うので、あまり本気ではやらないだろう。つまり、トグロに勝ち目はない。

「舐めやがって。クシナをそう簡単に手に入れられると思うなよ。と
うかカルラも早く返しやがれ」

「ゲームだとか言って、あたいに負け戦をやらそうなんざいい度胸
じゃねえか。吠え面かかせてやる。うんそうだ」

「ミナトよ！ お前はまだ師を超えておらぬ！ 何より愛の大きさで
のう！」

訂正、自来也は本気で戦うらしい。

ルールは簡単。フラッグ役の女性を先に捕まえたチームが勝ち。ただし、フラッグ役は回避以外をしてはならない。決められた空間の外に出てもならない。また、各人は広範囲忍術や殺傷力の高い術を禁止される。ヒルゼンの火遁、半蔵の毒霧、長門の神羅天征、トグロの

挿し木の術などだ。

試合が始まる。クシナとトグロが分身でいきなり100体が増える。

ミナトが飛雷神の術のためのクナイを投げる。ヒルゼンが手裏剣でそれを弾く。落ちているクナイもトグロの分身が封印していく。それをカルラの風が邪魔する。風影の砂が綱手に迫る。それを自来也が破壊していく。

ミナトがクナイをトグロの本体に投げる。ヒルゼンはそのクナイを落とさない。あからさまな癒着である。

ミナトが飛雷神の術でトグロの付近に飛ぶ。トグロは一步引き、月がミナトに襲い掛かる。トグロの分身がクシナに迫る。半蔵と大蛇丸が体術で1つ1つ消していく。

長門が綱手に迫る。小南の紙が行く手を阻もうとする。輪廻眼の力で一瞬で離散させられる。自来也が長門の前に出る。ボッチも自来也を援護する。

案外いい勝負になった。ヒルゼンと自来也と月が、トグロが思っていたより真面目に戦ったし、ミナトと長門が女性に本気で攻撃できなかったからだ。

「チツ。トグロ！ お前はミナトと戦え！ 川影命令だ！ 月も！ ミナトの相手をするな！」

綱手があからさまにミナトを鼻直し、トグロと戦わせようとする。しかしトグロは命令に従わない。月も基本的にトグロの言葉以外には耳を貸さない。

「くっ。ぐあっ」

とうとう、月の骨がミナトに当たった。手加減できない娘なので一撃で大ダメージだ。

トグロがこの隙にクシナの分身に木遁を仕掛ける。一気に消滅させていく。その時に、胸や太ももをエッチな感じに締め付けたりするのは、ゲームへの当て付けである。

「すまぬ！ 間違えた！」

「見えてるぞ！」

と、ヒルゼンが卑劣にも、トグロの後ろから手裏剣を投げてきた。白眼で見抜き、回避したが。

「うわっ、すまん！」
「ぐっ」

今度は綱手だ。巨大な岩を、仙人モードで投げてきた。さすがに回避が間に合わず、木遁の根で受けた。

「おい中年女！ てめえ攻撃禁止だろうが！ ご主人様に何しやがる！」

「中年？ なっ、なんだとゴラア！」

「中年でも愛しとるぞ！ 重要なのは中身だ！」
「黙れエロガエル！」

何故か綱手と月の間で戦いが始まる。自来也が2人を止めに入る。

この間に、ミナトはヒルゼンの治療によって回復する。もはやルーも何も無い。

「ありがとうございます」

「しまった！ わしとしたことが幻術で操られた！」

いや、ヒルゼンはまだ騙し騙しやっているつもりらしい。

ミナトは立ち上がり、戦時中のような雰囲気ですぐグロを睨む。数瞬の後、ミナトはトグロの付近のクナイへ飛んだ。

「くっ、くっそー！」

トグロが柔拳と木遁で迎え撃つ。ミナトは体術と飛雷神のコンビネーションで攻める。

体術はミナトの方が上だが、トグロはゴムの鎧で衝撃を吸収する。トグロの柔拳は少し触れただけでもミナトにダメージを与える。スタミンアを考えると、このままではトグロの方が有利。

「螺旋丸！」
「ぐおわっ！」

しかし、ミナトの螺旋丸はゴムの鎧を抉って本体へ到達した。トグロのチャクラ吸収により完全には決まらなかったが、確実にダメージはあった。

「ふん。この程度なら」

しかし、トグロは大地の実を食べてあつという間に回復してしま
う。ミナトは螺旋眼により疲労したただけだった。チャクラを吸収で
きるトグロには、幻術も捕縛もほぼ不可能。今回は大地の実で回復し
たが、そうでなくとも莫大なチャクラにより何度も回復できる。ミナ
トのスタミナでトグロを倒すには、殺傷力の高い一撃で気絶させるし
かない。優しいミナトには厳しい状況だ。

「ずるいぞ貴様！」

「うわっ」

「あたしも混ぜてよね」

「ひえっ！」

ところが、そこで風影と大蛇丸がミナト側で参戦する。Bチームは
誰もトグロの増援に來ない。頼みの自来也は綱手と月を止めるのに
必死で、小南とボツチはふつうに長門に負けた。ヒルゼンは幻術にか
かったフリをして傍観。

「クソッ、この手は使いたくなかったが……」

突然、トグロが大きく息を吸った。

「クラマあああああああああああ！」

そして、叫んだ。

数秒後、クシナのチャクラが揺らぐ。さらに数秒後、彼女から破壊
的なチャクラが噴出した。

「グオオオオオオアアアアア！」

九尾が表に出てきたのだった。クシナは九尾の赤いチャクラを纏
い、トグロ目掛けて飛び出す。

「待っ」

「何を……？」

事態の急変に、ミナト派は見ていることしかできなかつた。

クシナはトグロの手前で急停止する。トグロはクシナの頭に手を
伸ばし、撫で撫でし始める。クシナはニヤリと口端を上げ、なされる
がまま。

不意に、トグロが言った。

「はい捕獲。俺の勝ち」

「はあああああああああ!?!」
ミナト派の叫びが場を包んだのだった。

血肉太郎

「つまり、クシナは俺の嫁つてことでもいいのかな？」

クシナの頭を撫でながら周りを見渡す。勝利宣言のときは、綱手とカルラがかなり勢いよく叫んでいた。今は呆然とこちらを見ている。半蔵に視線を向ける。『俺に聞くな』とでも言いたげに睨まれ、パイと視線を逸らされた。大蛇丸はクツクツと腹黒そうな笑みを浮かべている。ヒルゼンはしまったという顔だ。

月は俺が勝つたと知って笑顔だ。小南もホツとしている感じがする。後から聞いたのだが、この2人はクシナが桃隠れにいた方が本人のためにいいと思っていたそうだ。桃隠れなら木の葉のように化け物扱いされない。逆にとても人気がある。ミナトに関しても、逆ハーが合法だから問題ない。などが理由だ。

ふと、クシナが話し始めた。クシナというよりクラマだが。

「わし、……………。あたしを舐めくさりおつて。ゲームの勝敗で結婚を決めようなどと。だが、逆にこの機会を利用してやるわい。わし、……………んっ、ががっ、ごほんっ。あたしはトグロの妻になる。……………つて、てばね」

クラマよ。それでクシナの真似をしているつもりか？ 目茶苦茶恥ずかしがってるじゃないか。かわいいと思えばいいのか？

「ク、クシナ、そんな……………」

しかし、ミナトには通用したらしい。負けた衝撃で頭が真っ白になつてただけかもしれないが。

ミナトは呆然としてクナイを落とす。金属音が響く。

「おいミナト！ これは違うだろう！ 明らかに九尾じゃないか！」

「おいトグロ！ 醜い真似はやめろ！」

「さすがですごい主人様！ 勝利ですね！ その女はどっちでもいいですけどね！」

自来也、綱手、月がこちらに駆けてくる。

月は両手を広げて俺にダイブ。俺も両手を広げてキャッチする。

「きゃふっ。さすがです！」

「うむ。また勝ってしまったな」

「わしも入れろ。つて、てばね」

「ふむ」

と、クシナも後ろからに抱きついてきた。クシナというより九尾だが。クラマと言った方がいいか？

両手に花だ。まあハーレムには両手で足りないくらいいるがな。

「ミナト！ しっかりせい！ こんなもの不正だ！」

「クシナが、クシナが僕じゃなくてトグロを……」

「おいミナト！ チャクラを感じれば分かるだろう！ あれは九尾だ！」

「ミナト、心配するな。うちはハーレム制だ。愛しあつた男女には全組にチャンスがある。なんだったら私が慰めてやろうか？」

「つ、綱手え……」

と、綱手の発言で自来也まで魂が抜けたようになってしまった。

「な、なにくそーっ！ 諦めないど根性！ それでわしは勝利をつかんだ！」

いや、すぐに復活した。この男は綱手が遊び人だと知っているからな。

その後、俺達は微妙な感じで解散した。帰り際に、若い女達がミナトのもとへ集まっていた。傷心のイケメンを狙っているのだろう。性欲に満ち満ちているのはいいことだと思う。

この日は桃隠れメンバーで同じ宿舎に泊まった。おいしいものを食べて、お酒を飲んで、お楽しみへ。ハーレムの中に九尾状態のクシナも交じった。

クラマは上機嫌だったが、やっている途中で、クシナの眼からつーつと涙が落ちた。

そこで、クラマの独り言が始まった。クシナと言っているらしかった。

「いい加減諦めろ！ 貴様等が勝手にわしを封印したんじやろうが！ 何故わしが小娘の恋愛事情を優先せねばならん！ 我がまま言うな！ 今まで肉体の主導権を認めてきたじやろうが！ わしだって

あの金髪の肉棒が入ってくるのを感じておったのじゃぞ！　せめて同じ回数わしにやらせろ！　不公平だぞ！」

長い独り言だった。

「はあ!?　ミナトとかいう女みたいなガキより、トグロの方がずっと男前じやろうが！　はあ!?　き、貴様、角をバカにするのか!?　阿呆が！　六道仙人の姿も知らんのか!?　トグロこそあの爺イに最も近い男じゃ！　女みたいな男など比較対象にすらならぬ！　だいたい、木の葉はわしどころかお前を化け物扱いしとるじやないか!?　何故帰ろうとする!?　ミナトが火影になって里を変える!?　あのガキにそんな力あるわけなからう!?　バカも休み休み言え！」

あんまり長いので、エツチは休止となった。しかし、クラマの独り言がとても新鮮だった。いろいろと事情が分かった。

クラマとクシナの感覚がリンクしているので、クシナが感じればクラマも感じる。クシナのエツチは、クラマにとって好きでもない男に縛りレイプされているようなものである。六道仙人には角が生えていたこと。俺の容姿が六道仙人に似ていること。クラマが俺のことを六道仙人と比較するほど評価していること。そもそもクラマは六道仙人のいる時代に生きていたこと。

クラマが性別で言えば女であり、俺に惚れていたらしいことは知っていた。エツチすると喜ぶし、ある日恥ずかしそうに名前を教えたからな。だが、思ったより人間の女の子らしい思考をするのだなあと思った。年齢で言えばババアだが。

その日から、一週間に一度クシナが俺と寝ることになった。他の日は全てミナト行きだ。クラマとしては、6日対1日でかなり譲歩したと思う。が、クシナはまだ不満らしい。ミナトの方がクラマに理解を見せた。間接的レイプについて、土下座で謝ったらしい。その後も、クラマに軽く一言入れてからクシナとヤツているらしい。俺なんて、ヤった次の日は毎回クシナに土下座しているがな。それでもボコボコに殴られるし。

明らかに、俺とクラマの方が譲歩していると思う。周りにはあまり認めてくれないが。忠誠心の塊の娘は認めてくれる。初、月、ミゾレ、ダ

イナ、カグヤ、サヨコ、マリ、小南、……。なお、小南は逆ハーにも理解がある。彼女も弥彦や長門とやっている。実はかなりエツチが好きで、体も綱手並みにエロい。昼の天使様、夜の淫魔様である。

同盟軍は基本的に雨隠れで生活する。休みの日には各自里に帰ることもあった。また、戦後まもなくでインフラ復旧に人手が不足しているのも、里からの要請があればそちらを優先することもできた。

桃隠れは戦後復興がもう終わっていた。というか必要なかった。地理的に同盟軍の真ん中であり、第三次忍界では全く戦場にならなかったからだ。死者も率で見ると著しく少ない。よって、戦後の主な仕事は他国への支援だった。食料、着物、資源など。修行や研究にはもちろん力を入れたし、砂漠の緑化も継続して行った。あとは、ハーレムで桃色な生活を楽しんだ。

なお、クシナと俺は仲が悪いわけではない。むしろかなりいい。エツチが終わった朝は殴られるが、その後は笑顔で話ができる。くよくよ悩んだりしないのはクシナの美点だ。頭が悪いと言ってはならない。

しかしある日、クシナが俺に一枚の紙を見せてきた。見覚えのある名がズラツと書かれていた。紙の一番上には『クシナとミナトの結婚を認めるか』とあった。つまり、これは署名である。

「どうだってばね。綱手さんも三代目様もあたしの味方だってばね」

クシナはふふんと得意げな顔になった。俺は失笑を堪えつつ口寄せの術を使った。

「クシナ、民主主義ってなんだ？」

「えっ」

俺が口寄せしたのは、100枚近い紙だった。その全てにギツシリと名前が書いていた。紙の一番上には『クシナとトグロの結婚を認めるか』とある。

クシナがチマチマと著名していたのは知っていた。ならばと、こちらも数の力を見せてやることにしたのだ。

木の葉の娘はミナトを狙っている。ミナトには結婚しないで欲しい。火の国の一般層はクシナ、というより九尾を嫌っている。クシナ

が火の国に来ないでほしい。桃隠れはクシナと九尾が好きだ。クシナには傍にいて欲しい。俺と長年コンビを組んできて、2人なら上手くいくとも思っている。

つまり、木の葉と桃隠れで多数決を取れば、圧倒的に俺とクシナを結婚させたい層の方が多いのだ。

クシナは俺の出した紙に目を通し、ガツクリと項垂れた。かと思えば、急に復活した。

「ご、こんなの！ 違うってばね！」

「何が違う？」

「多数決は民主主義じゃないってばね！」

「うん？」

「多数決は民主主義じゃないってばね！」

「つまり、どういうことだってばよ？」

あれ？ 語尾がつかれちゃった？

「多数決は民主主義じゃないってばね！」

「民主主義ってなんだ？」

「多数決は民主主義じゃないってばね！ 数が多いから正しいわけじゃないってばね！」

それは正しい。だが、お前がやろうとした著名は多数決による圧力だ。

「民主主義ってなんだ？」

「数の暴力だってばね！」

答えとしては微妙だが、表現が豊かになったな。学園の成果が無駄にこんなところで出たか。

その後、約30分、民主主義について語り聞かせた。クシナは著名の敗北を悟り、ぐだーっ、と大の字になって倒れた。かわいかった。

ある日の朝、クラマが言ってきた。

「桃太郎って知つとるか？」

驚きだった。前世の昔話がこちらにもあっただなんて。

「え？ あの桃太郎か？」

「どの桃太郎じゃ？」

「いや、うん」

まあ、この世界の作者が日本人で、日本的な風習もたくさんあるから、ありえなくはないが。

俺はクラマに桃太郎の内容を語っていった。お爺さんが山へ柴刈りに、お婆さんが川へ洗濯に。すると川上から大きな桃が流れてくる。お婆さんは驚いてその桃を家に持ち帰った。そこで桃を割ってみると、桃の中から赤ん坊が出てきた。桃から生まれたので桃太郎と名づけ、お爺さんと一緒に育てることにした。

「なんじゃ？ そのぼったもんは」

「え？ 違うの？」

「偽物に騙されおつて。情けない」

今度はクラマが物語を語った。

「お爺さんは山へ馬狩りに。妖艶な奥方は、川へ血洗いに出かけた」

うん。ツツコミどころだらけだな。馬狩りってなんだ？ 爺さんめっちゃ強いのか？ 妖艶な奥方？ お爺さんとのバランスは？ 奥方はなんで血を洗ってんだ？ 妖艶ってそういう意味か？

「桃みたいな実が流れてくるのは一緒じゃ。まあ、もとは白い実じゃったがの。血がついて桃色になった。奥方は桃を家に持ち帰る。ここも一緒じゃな。じゃがの、夫婦は桃を食べるのじゃ。大きい実じゃったが、食べ始めると止まらない旨みがあった。桃はあつという間になくなった。そこで、夫婦は精気が漲ってくるのを感じた。2人は驚いてお互いの顔を見合わせた。そこでさらに驚いた。お互いに若返っていたからじゃ。精力旺盛になった夫婦は、その日から子作りに励む。そうして元気な男の子が産まれる。名前は桃からとって桃太郎。桃太郎は強く、逞しく成長し、やがて鬼退治の旅に出かけた。必殺技は母から学んだチャクラの玉。道中、調子に乗っていた猿犬雉にブチかまして、口寄せ契約を結んだ。そいつら使って鬼をやっつけた。鬼に捕らわれていた娘を家に連れて帰った。母は反対するが、桃太郎は娘と結婚した。それで母を置いて街に引越しまうんだ。バカ息子がよお」

「へえ」

かなり似ているが、全体に生々しいな。それに、母が妙に出しやばっている。というか、ク라마が母に感情移入しすぎている。まさか知り合いか？ 本人のような気さえするのだが。

「桃が実在するとしたらどうする？」

「へ？ どうするって？ そりや食べたいけど」

「なら作れ。わしが作り方を教えてやる」

「うへいつ!？」

マジか。なぜ知ってる？ やっぱ実話!？ 奥方が九尾!？」

「情けない顔をするな。さっさとやれ」

おそらくそうなのだろう。後でク라마が酔っ払っている時にでも確認しよう。

その後俺は、ク라마に言われた通りの物を用意した。大地の実と、雪解け水と、若い娘の血だ。大地の実がある時点で、俺がいないと作れない代物。まさか、桃太郎の父は六道仙人だったりするのだろうか。彼は俺に似ているらしいし、俺に作れる実くらいは彼も作れるだろうから。それも酔っ払った時に聞いてみよう。

桶に入れた雪解け水に、大地の実を浸す。茶色い大地の実が、白く、透けていく。そこに若い娘の血を混ぜる。血が実に染み込み、実はピンク色になっていく。

「特別にわしのチャクラで作ってやろう」

ク라마が実にチャクラを込めていく。実が途端に巨大化していく。パンパンに膨れ、桃のような形になる。ついには桶から飛び出した。

「まあ、こんなもんでいいじゃろう」

ク라마はそう言うと、クシナの体で桃に齧りついた。それはそれは勢いよく。

いつ離れるのかと思ったが、最後まで離れなかった。全部1人で食べってしまった。

「えっ!？ 俺にくれるんじゃないの!？」

「なぜお前にやらにやいかん」

「いや、手伝ったじゃん。男女で食べるって話だったし。というか、食

べたいなら作れって言わなかった？」

クラマは俺の言葉に応じなかった。

しかし独り言を始めた。クシナと喋っているらしかった。

不意に、クシナと人格が入れ替わった。チャクラの衣が無くなり、クシナの地肌がよく見えるようになった。確かにつるつるピカピカになっている。若返っている感じがする。

「なんて言ってた？」

「なんか口寄せして欲しいらしいってばね」

クシナは面倒そうに指を噛み、口寄せの印を結ぶ。

「口寄せの術！」

そして出てきた。金髪の美女が素っ裸で。

「な、何やってるってばね！ あんた！」

クシナが美女の頭をバシンとしばく。しかし叩いた側のクシナが手首を押さえる。

当たり前だ。目の前にいるのはいつもより漲っている九尾なのだから。もつとも、クシナのダメージが彼女にも行くので、手首を押さえているが。

「どうじゃ？ なかなか美人じゃろう？」

「うん。まあいいけど。変化でしょ？」

「愚か者が。その白眼は何のためにある？」

そう言われて、白眼で隅々まで見てみる。

おっぱいと股に目がいくのは仕方のないこと。だがそこで気付いた。あまりにも精巧に変化している。というか変化の術ではできない部分も再現できている。これは、変化ではない？

「やっとなかったか。これはお前達の使う偽物の変化とは違う。もとは、わしのような存在が人間になるのを変化の術と言ったのじゃ」「へえ」

これは驚いたな。でも、前世のことを考えると、変化は狸や狐の得意技だった。ありえなくもないのか？

葉っぱの代わりに桃を使ったのかな？ アレを桃と言っているのかは分からないが。

「よし。ではわし等も子作りするぞ」

「今から？ えっ？ というか子どもできるの!？」

「チツ。情けない。桃太郎の話をもう忘れたのか」

「いや、うん。まあいいけどさ」

クラマの言う桃太郎って、人間が若返る話じゃなかったっけ？
返るのは狐でもいいのか？ というか九尾って狐か？ 若

ヒザシが照らすもの

大蛇丸の改革は概ね成功した。しかし全ての人間を満足させられるわけではない。

既得権益者の中には、改革により不利益を被った者もいた。

最も顕著なのが、うちは一族だった。

今までは、木の葉警備隊という称号を振り回し、その名に恐れる自里の忍びに目を光らせるだけでよかった。犯罪の取り締まりがあつても、命を懸けた戦闘にはほとんど発展しなかった。ダンゾウや大蛇丸など、本当に力ある悪と戦う必要はなかったし、ちよつとした抜け忍との戦闘でも、周囲の忍びの協力を得ることができたからだ。

しかし、里外ではこうはいかない。味方が周りにいない中で、自分の力で困難を乗り越えなければならぬ。戦闘には常に命の危険が付き纏う。ぬるま湯に浸かっていながら、自分達は優秀だと思ひ込んでいた者達は、現実に打ちのめされることになった。

しかし、人間は簡単には非を認められない。プライドの高いうちは一族なら尚更だ。彼等は任務失敗の度に誰かのせいにした。ある時は班員に足を引っ張られたと言い、ある時は無能な上司に難しすぎる任務を押し付けられたと言う。やがて彼等は仲間から嫌煙され、虐めさえ受けるようになった。

そんな時、ふとしたことで不満が爆発し、犯罪に手を染めるのだった。また、戦後間もなくということもあり、抜け忍やスパイがそこら中におり、木の葉を裏切つて彼等の側に就くこともあった。

ヒザシの新警備隊は、ダンゾウの特殊警備隊と協力して問題に当たった。連携はあまり取れない。特に、容疑者の身柄について、特殊警備隊は強引な手を使ってでも自分達の元へ引きずり込んだ。理由があるに違ひなかった。おそらく人体実験のためだろう。特にうちは一族が、積極的に狩られていったからだ。ダンゾウは写輪眼を求めているに違ひない。

ある日、うちは一族とだけ書いた匿名で依頼が来た。

「ダンゾウと大蛇丸が、うちは一族で人体実験をしている証拠を得た。

施設に乗り込んで被害者を奪還し、非人道的行為を行った者達を逮捕して欲しい」

封筒の中にそれを書いた紙と一枚の地図が入っていた。地図には実験施設の場所が記されていた。木の葉ではない。火の国でもない。東草隠れの、木の葉占領地域だった。

ヒザシは単独で施設付近に向かった。表向き医療施設を装っており、中に入ることはできた。すぐに、怪しげな立ち入り禁止区域を見つけた。その付近では、忍びらしき男女6人が医者と患者を装って見張りをしていた。

ヒザシならば、多少腕の立つ6人程度わけはない。が、大事にはしたくない。禁止区域には近づかず、白眼で中を見る。

途端、紙に書かれていたことが真実だと知った。ダンゾウに引き取られた犯罪者、見覚えのある抜け忍、スパイが、薬の実験体になっていた。

「ん？……なっ！」

これだけでも問題だが、なおまずいものを見つけた。分厚い壁で覆われた地下に、別の実験場があった。

液体で満たされた透明な容器が、規則正しく並べられている。合計108ある。その中に、人間の胎児のような生物が浮かんでいる。

その全てがまともに生きているわけではない。ほとんどは死んでいるか死にかけだ。苦しみ、暴れている個体もいる。安定していても、やせ過ぎたり、太り過ぎたり、腐りかけたり、骨格がおかしかったり、身体から別人の顔が浮き出ていたりする。まともな胎児の形をしているのは、10にも満たない。

「なんと、惨い……」

悲惨な光景に心を抉られた。死体に見慣れたヒザシであっても、奇形の胎児の苦しむ姿というのは、悲しいものがあつた。戦争とは違った形で、人間の醜さと犠牲者の悲惨さが凝縮されている。つい最近長男が産まれたから、尚更感じた。

警備隊の人間としても、見てみぬフリはできない。火の国には、非人道的行いを禁止する法律がある。先の忍界大戦の平和条約にも、多

大な苦痛を与える人体実験の禁止が明記されている。

とは言え、大蛇丸やダンゾウと真正面からやりあうのはまずい。内戦になると死者が出すぎるからだ。

里に帰ったヒザシは、ヒルゼンに相談した。ヒルゼンは「共に大蛇丸を説得し、穏便にことを済ませる」と言った。

自来也とフガクが離れるタイミングを見計らい、2人で大蛇丸に迫る。話を聞いた大蛇丸は、あっけらかんとした態度だった。

「ああそれ、あたしが許可を出したのよ」

ヒルゼンもヒザシも、大蛇丸が関わっているに違いないとは思っていた。しかし、焦りが微塵も見えないのは意外だった。まるで知られてもよかったようだ。

「大蛇丸よ。お主は今や火影じゃ。皆がお主を見ておるのじゃぞ。もう少し自覚を持て」

「別に、大したことはしてないわ。人体実験の被験者は敵国のスパイとかこっちの死刑囚よ。一般人には何の関わりもない話」

「孤児もいたようですが？」

「孤児も悪事をすれば犯罪者よ。やつらだって盗みもすれば殺しもするわ」

「だとしてもじゃのう」

「里が強くなれば安全になる。犯罪に手を染めた人間に、ただ処刑するのではなく、国に貢献するチャンスを与えてるのよ。逆に感謝してもらいたいくらいだわ」

「しかし、条約があるぞ」

「やってるのは草隠れよ。だから条約も問題ない」

「それは詭弁ではないですか？」

「言うわねえ。日向ヒザシイ」

大蛇丸はねつとりした笑みを浮かべ、ヒザシを睨む。ヒザシは堂々と大蛇丸の両目を射抜く。

「少し待ってくれぬか」

と、ここでヒルゼンが割って入った。

「ヒザシは知らぬかもしれんが、わしの頃から、草隠れは各里が表に出

せぬ実験の隠れ蓑となっておったのじゃ。木の葉のみならず、雨も、岩も、滝も草隠れで実験しておった。あそこは技術力で生きてきた国じゃし、金もあつたからの。それに、奥撫は闇世界の組織じゃつたが、変な話、それなりに信頼もされておったのじゃ」

「三代目様、何故今その話を？」

「いや何。実験は木の葉だけではなく、雨や砂を関わつとるかもしれないと思うての。そうすると同盟の問題も出てくる」

「お察しの通りよ」

「むっ」

大蛇丸が気だるげに言う。

「信用問題があるから詳しくは言わないけど、あなた達の好きな桃隠れも関わってるわ」

「ぬっ？ 綱手がか？」

「どうかしらね」

「むう」

ヒルゼンは思案顔になる。師として悩んだ。綱手には黒い世界に入って欲しくない。しかし時には必要かもしれない。

「とりあえず、あなたに封筒を送ったうちは一族を名乗る人物が気になるわね。スパイなのか、裏切り者なのか。そっちの方の調査をお願いできるかしら？」

大蛇丸が横目でヒザシを見る。先ほどとは違って余裕ある笑みを浮かべた。

ヒザシは真顔で言った。

「少し、質問をよろしいか？」

「何かしら？」

「四代目様は、孤児も悪事を働けば犯罪者だとおっしゃられた。しかし、産まれてもない子は、犯罪者になりえるのでしょうか」

途端、大蛇丸の雰囲気が変わった。

「何が言いたいのかしら？」

大蛇丸はスッと目を細める。忍びの敵意をヒザシにぶつけながら。

「施設の地下に、透明な容器が並ぶ実験施設がありました。その容器

に入っていたのは、赤ん坊にも満たない小さな胎児でした」
「なんじゃと!？」

ヒルゼンが驚いて大蛇丸を見た。大蛇丸の目がさらに細まっ
ていく。

ついには、観念したように完全に閉じた。

いや、憎々しげな表情になって、ヒザシを睨んだ。

「日向ヒザシイ。あなたを警備部隊隊長に選んだのは失敗だったよ
ね。白眼は見え過ぎる」

「観念なされたか。どうなさるおつもりだ？」

「観念なんてしないわよ。さつき言ったでしょ。草隠れのやってるこ
とだから条約は関係ない」

「あくまで無関係だと？ あそこを管理しているのは木の葉にも関わ
らず？」

「都合のいいことに、敵国はあそこを木の葉の領土だと認めてないの
よ。草隠れに自治権があることになってるの。だから悪いことが
あつたら草隠れの責任つてわけよ」

「……なるほど。ということは、警備部隊の出る幕ではないのかもし
れませんか」

「急に物分かりが悪くなったわね。まあ、そういうことよ」

それでヒザシは引き下がった。悔しそうに眉間を寄せながら。

ヒルゼンは、そんなヒザシに未来の可能性を見た。これが10年前
なら、問題視されることさえなかっただろう。無視か、逆に里で大蛇
丸を支援したかもしれない。

ヒルゼンはヒザシを食事に誘った。一楽というラーメン屋に連れ
て行ったのだった。

「すまぬなヒザシ。力になれんで」

「いえ、そんなことはありません」

「畏まらずともよい。楽にせい。今のわしは引退した爺じゃ」

「は、はあ」

ヒルゼンはここで仕事の話をしなかった。産まれたばかりのヒザ
シの子どもについて尋ね、以後もその話がほとんどだった。自分は仕

事と戦争に忙しくて子どもにかまってやれなかった。お前はたつぷりかわいがってやれよ。ヒルゼンはそう言った。ヒザシは、肩の荷が降りたような気分になって、また明日も頑張ろうと思えたのだった。明くる日の早朝。まだ外が赤暗い時に、ヒザシの家に訪問者があった。

「なぜこのような時間に？」

妻は赤子の世話をしているので、自らが出た。玄関を開ける前に、白眼で訪問者を見た。

20歳前後に見える男だった。ただし、面をつけて正体を隠している。

この男には見覚えがあった。草隠れのタスクだ。ビンゴブツクにA級で載っている抜け忍である。もともと、抜けなければ戦争で殺されるか捕まって処刑されるかしただろうから、それ自体が罪かと言われたら微妙だが。

ヒザシは影分身を1つ作り、妻の下へ送る。自身は、臨戦態勢で構えた。

「何の用だ？」

玄関を開けないまま尋ねる。

予想はできている。このタイミング。草隠れの抜け忍。戦争で木の葉に恨みがある。おそらく、封筒の主に関わっている。ここへ来たのは、自身の勧誘だろう。木の葉で内乱を起こすための。

「見ていただけましたか？ 木の葉の現実を」

「お前が私に封筒を渡したのか？」

「厳密には僕じゃないですが、僕の仲間です」

簡単に口を割ってくれた。ウソの可能性もあるが、チャクラの質や声色からは敵意を感じない。

「お前の目的はなんだ？」

「世界平和です」

「抽象的だな。方法を言え」

「改革と口で言っていますが、木の葉の本質は変わらない。平和から遠い存在であることは、ヒザシさんならば、ご理解いただけただはずで

す。赤子さんと奥さんのことは心配しないでください。僕達が責任をもって守ります」

「話にならない」

「まっ、待って！」

八卦空掌。

ヒザシは話を切って手のひらからチャクラの衝撃を飛ばす。それは玄関を破壊し、その先のタスクへ飛んだ。

タスクも上忍の実力を誇り、さすがに一撃で仕留めることはできなかった。しかし、不意を突かれて対応しきれず、腕に負傷を負った。

この時点で分かったことがある。タスクは敵地の真ん中で気を抜くような間抜けであること。上忍の体術と言っても木の葉最強の日向に比べれば遥かに劣ること。腕を負傷したことでタスクの得意とする起爆クナイの威力は半減したこと。

タスクは会話を諦めたらしく、逃げ始めた。ヒザシの八卦空掌を回避しつつ、後ろに起爆札付きクナイを投げる。それが空中で爆発し、目くらましの煙玉が散布される。

「せっ！ はっ！」

「ぐあっ」

しかし、チャクラを見抜く白眼には通用しない。八卦空掌がタスクの背中を捉え、吹き飛ばす。

この攻撃は、タスクが森に飛ぶように計算していた。街中で暴れられたら一般人に被害が出るし、人質をとられる可能性もあるからだ。

「はあ、はあ。くっ」

「せいっ！」

「ぐおっ」

「チッ」

逃げ足だけはなかなか速い。だが逃がさん。

「ま、待って！ 僕はただ話を！」

「ならば投降しろ！ 逃げるな！」

「くっ、そうすると僕を捕まえるんでしょ！」

「はっ」

返事の代わりに八卦空掌をお見舞いする。バカと話してやる義理は無い。

「ぐっ。分ならず屋があー！」

「むっ？」

突如、タスクが上空に煙玉を投げた。そんなことをすれば目立って木の葉の暗部が飛んでくる。それを知らぬ愚か者ではないはずだが、秘策があるのかもしれない。

ヒザシは勝負を急ぐことにした。

「八卦空壁掌！」

「ひいっ！ がっ、ぐあああああっ！」

日向の遠距離攻撃としては最大の技、八卦空壁掌。尾獣すら吹き飛ばすチャクラの衝撃が、タスクの身体をグチャグチャに打った。

「むっ？」

ところが、吹き飛んだタスクの先で、突如地面が盛り上がった。

中から男が出てきて、タスクを掴み、即座に土の中に戻った。こいつは知らない男だった。

増援か。どうする？ 1人でいけるか？ 罠の可能性は？

スタミナは、まだ大丈夫だ。タスク程度の実力なら、あと4、5人は相手にできる。進むか退くか。

進めば危険だが、さらに敵の深くまで知れる可能性がある。引けば、タスクの情報だけは確実に持ち帰れる。どうする？

一瞬の判断。その時チラッと、実家に置いてきた息子の顔がよぎる。合わせて、昨日のラーメン屋でヒルゼンが語った話も。

「退くか……」

ヒザシは瞬身の術でその場を後にした。

科学の進歩、スーパー大蛇丸ゴツド

戦時中は研究開発に迫られて科学が進歩するものである。戦後1年で、次々とその成果が表に出てくるようになった。

まず、桃園アカデミー技術者コースの天才、則巻ター坊が15歳にして大仕事をやってのけた。発明したのは、チャクラや神経の通った、副作用の緩い義手義足だ。綱手とサソリの協力もあったが、ター坊が最も重要な役割を担った。これにより、ダイナ・イシ等が四肢を取り戻し、忍びとしての任務を再開した。

表向きにはそう発表したのが、実は半年前の時点で“トグロの細胞を利用した”義手義足は発明できていた。桃隠れの忍びにはそちらを配り、一般向けにはふつうの義手義足を販売した。なお、トグロの細胞を利用した義手義足の持ち主は、簡単な木遁を使用することができ。が、使いすぎると副作用がある。

それからやや遅れて、木の葉隠れが千手柱間細胞の移植と木遁の使用に成功する。以前にも成功例が1例だけあったが、他は死亡していた。今回は、優秀な忍びならば死亡だけは防げる域にまで水準が上がった。ダンゾウ等に移植された。

約一月遅れて、桃隠れの月が、綱手の再生医療により視力を取り戻す。また、様々な治療で身体の毒を取り除き、妊娠出産の安全を認められるに至った。排卵はなかなか起こらなかったが、この問題も“桃太郎の桃”により解決した。

草隠れの木の葉実験施設で、いくつかのサンプルが盗まれる事件が起こった。墮撫の科学者、鳥島ボツが事件と共に行方を晦ませており、重要参考人として指名手配された。人体実験に関わる墮撫の科学者にはダンゾウから呪いがかけられており、本来ならすぐさま見つかるはずだった。しかし、ダンゾウが呪いを辿った場所には、大量の血と切り落とされた舌が残されており、鳥島の死体と実験サンプルは見つからなかった。DNA鑑定の結果血と舌は鳥島のものだと分かった。生還して逃走、その途上で死亡、強盗にあつて死亡。全ての可能性を考えて、捜査が続けられることになった。

野原リンが、“精神安定剤”の投与を始めた。

思考が鈍くなったが、その分大人しくなった。暴れる回数も一度の暴走で出る被害も減った。

オビトはとても機嫌がよくなった。カカシとも、いつの間にかラーメン屋で談笑する仲に戻った。

「オビト、うれしそうだな」

「分かるか？ へへっ」

「リンのことだろ？ 教えてくれないか？」

「誰にも言うなよ？ 実は、リンがな。今朝、俺にありがとうって言ったんだ」

「へえ」

オビトはとても気恥ずかしそうに言った。彼とリンの苦勞を知るカカシは、素直に笑ったのだった。

「カカシ、そろそろお前も会えるようになるんじゃないか？」

「本当か？ そりゃあうれしいな」

「へへっ。これもお医者様のおかげだ」

いろんな施設を当たって、ようやく治療に自信を見せてくれた医者だった。オビトはこの医者を中心に信頼し、尊敬した。

決して患者を見捨てない。諦めない。やさしいお医者さん。

しかし、一月もすれば異常が始める。人間は薬に対して耐性ができる。薬の効果は徐々に薄れていく。医者とおビトは悩みながらも、薬の量を増やしていった。

「大丈夫。いつかきつと治るから。科学は日々進歩しているんだ」

「はい。先生」

オビトはまだ医者を信用しきっていた。医療は専門外だからと、完全に医者任せにし、薬の成分を調べることもなかった。医療費がかさんでいくことについても、特に疑問には思わなかった。

しかし、薬を増やしたことで、リンにキツイ副作用が現れ始めた。記憶障害、言語障害、よだれが垂れる、突然倒れる、幻覚を見る、などなど。リンにとっても介護しているオビトにとっても、最もきつかったのは、夜に漏らしてしまうようになったことだった。

初日は、誤魔化そうとした。次に漏らした日は、オビトのせいでお腹を壊したと怒った。さらに次は、とうとう抑えられず泣き叫んだ。リンは、嫌な記憶を消すために薬を求め始めた。用量外の薬である。危険性は知っていたが、もう深くは考えられなかったし、投げやりな気持ちになっていた。

オビトは、そんなリンを必死に止めた。リンは「邪魔するな!」「くれないなら出て行け!」「死ね!」などと叫び、何度も暴力を振るった。が、オビトは折れなかった。

この頃には、薬が精神を落ち着かせる効果はほとんどなくなっていた。薬物依存だけが残った。

近所の子ども達が、リンに対し、「しょんべん垂れ」「怒りんぼおばさん」「算数もできないアホ」「鳥頭」、等々とバカにするようになった。石や空き缶を投げてくることもあった。リンはさらに怒り狂い、周りに当たった。さらに薬を求めるようになった。

オビトは長く我慢していた。できるだけ下手に出て、リンに振るわれる暴力は自分が受けた。ほとんど反撃しなかった。

が、公衆の面前でリンに花火が投げ込まれたことで、ついに爆発した。

「おっ、お前等ああああああ!」

オビトは子どもを捕まえ、縄で縛り、その場でお尻ペンペンなどをした。中には女の悪ガキもいた。

通行人のほとんどは、どちらが悪いかを知っていた。しかし、事情を知らない者には忍者による子どもへの虐待に映った。さらに、悪ガキのバカな親が、悪ガキを庇い始めた。

「あんた! うちの子に何やってんのよ!」

「またうちはか! お前達はいつも問題ばかり起こす!」

「偉ぶるばかりで大事な時には全く役に立たぬ連中め!」

「オビトおおお! そいつ等ぶち殺せええええ!」

リンはさらにヒートアップしてしまった。

「な、なんだって!? 俺達を殺すだって!」

「こいつ達は危険すぎる! 通報だ!」

「警備隊よ早く来てくれえええ！ 忍者が暴れてるうううう！」
住民の声に引かれ、特殊部隊の男2人がやってきた。

いや、実は彼等は初めからオビトを狙って張っていたのだった。ダ
ンゾウから写輪眼捕獲を厳命されており、達成できれば褒美がもらえ
る。オビトが犯罪者気質でないことは知っていたが、リンを庇って暴
れる可能性があるのです、その機会を待っていた。

「貴様！ 何をやっている！」

「大人しく縄につけ！ 殺されたくなければ！」

特殊部隊の2人は乱暴にオビトに飛び掛かった。前のめりに倒し
て後ろ手を縛った。オビトは抵抗をしなかった。あまり大事になる
と、動けないリンが狙われるかもしれないからだ。

ところが男達は、オビトが捕まってから大人しくしていたリンに
も、縄をもつて近づいた。

「ちよっ、やめてよ。私は何もしてないでしょ！」

「なんだその口の利き方は！ 立場が分かってないようだな！」

「あつ」

「いいから大人しくついてこい！」

「リ、リン！ おい貴様等！ その汚い手をリンから退けろ！」

「なんだとお!? 俺達は特殊警備部隊だぞ！ 犯罪者ごときがなんて
口利いてやがる！」

2人は怒り、オビトに殴りかかった。オビトは後ろ手を縛られ、リ
ンを人質に取られているようなものであった。なすがままにやられ
てしまい、事態を聞きつけた警備隊が現れた時には、血まみれの痣だ
らけで気絶していた。

この事件が、うちの怒りを買った。オビトは一族の若きホープで
あり、有名人だった。その人柄も、リンとの状況も、一族にはよく知
られていた。積もり積もったうちの不満が、とうとう爆発した。

後日、特殊部隊の計8人が死体で発見された。うちは一族の若者に
よる襲撃が原因だった。いくつも目撃証言があり、知らぬ存ぜぬは通
用しなかった。しかし、うちは一族は若者を庇った。

特殊部隊も、さらにその報復に動いた。山で修行していたうちは一

族の下忍達3人に、突如襲い掛かった。後に、下忍達は眼をくり抜かれた状態でその場に発見された。下忍は全員10歳前後の子どもだった。当然過激派の襲撃にも関わっていない。皆生きてはいたが、うちは一族の犯人に対する怒りはすさまじいものだった。犯人は不明だったが、うちは一族の多くは特殊部隊によるものと断定した。その後も、うちは一族と特殊部隊の抗争が続いた。全面戦争とはならないが、互いに熱が増していくばかりだった。

フガクは、うちはの過激派を抑えることに邁進した。且つ、大蛇丸に特殊部隊過激派への処罰を要求した。自来也とヒルゼンも同意見だった。

ダンゾウは逆に「内乱分子を一掃し、写輪眼を手に入れるチャンスだ。止める必要はない。むしろ協力しろ」と大蛇丸に言った。

この状況でも、実は、木の葉内でダンゾウに同意する忍びが一定の割合いた。それだけ、里に仇なすものに容赦ない人間がいるということである。うちは一族が嫌われていたのもあった。うちはマダラの裏切りや、個人が奢り高ぶり問題を起こしやすからだけでなく、組織としても、身内鼻負が酷かったり、先の戦争では、写輪眼を奪われる危険性があると言ってあまり前線に行かなかったりした。同じ有力部族でも、里のためにと、積極的に前線に立った千手一族や日向一族と比較すれば対照的である。千手一族の綱手が未だ信頼されているのはこういう理由もあるのだ。日向一族も、ともすればうちは一族以上に内向的だが、戦時の活躍によって里の信頼を勝ち取っていた。

さて、大蛇丸の決断は、お互いに過激派を抑えるというものだった。特殊部隊は大蛇丸が直接指示を出し、ダンゾウを落ち着かせる。うちは一族は、当主であるフガクが過激派を止める。また、問題が起こりそうな時は、第三者である警備隊を積極的に派遣し、両者を止める。大蛇丸はこれらを約束した。

また、このような問題が起こったことへの詫びとして、抗争のある意味発端となった野原リンを、自らが治療するとした。

フガクの頑張りど、ダンゾウが大蛇丸に従ったことによって、抗争は徐々に落ち着いていった。うちはの過激派の一部は抜け忍となっ

た。

野原リンは、大蛇丸が実験場としていた場所の、表向きの方の病院に入れられた。大蛇丸は、自来也、ミナト、オビト、カカシを呼び、まずこう言った。

「薬物中毒になつてるわ。まずは薬を抜かないとね」
「えっ……」

この言葉に誰よりショックを受けたのはオビトだった。彼もさすがに薬の効果を疑っていたが、まだ医者を信じていた。薬の効果はあまりないにしても、現状維持かちよつと快方に向かうと思つていて、悪い方の効果の方が大きいとは思つていなかった。

しかし、大蛇丸はさらに衝撃的な言葉を続ける。

「古い薬を使っていたみたいね。売れ残っているから、あなたがカモだと思つて買わせたのでしようね。忍者は子どももお金を持っているから」

「そ、そんな……」

「あなたも忍びなら、簡単に騙されちゃダメよ。おかしいと思つたら自分で調べること。無理でも誰かに頼みなさい。何事も疑うクセをつけないとね。忍びどころか一般人でもやっていけないわよ」

大蛇丸は、彼には珍しくやわらかい口調で言った。まるで、里の子を思いやっているようである。自来也は驚いて口をぽかんと開けてしまった。悪人がちよつといいことをすればとてもいい人に見える。

オビトは絶望のどん底に落とされたような気分になった。信じていた人に裏切られ、その結果彼が最も大切になっている存在を傷つけてしまった。しかし逆に、自身が信じていなかった人が、今、自身を諭し、最も大切になっている存在を救おうとしている。

「あたしはこういうのに詳しいから、最高級の医療を受けさせられると思うわ」

大蛇丸は得意げに言った。自来也は苦い顔になる。何故彼が詳しいかと言うと、薬を使った人体実験で多くの薬物中毒者を出しているからだろう。

逆にオビトは、大蛇丸に魅力を感じてしまった。現在、彼の心は

ぽっかり空いている。今までの自分が間違いだつたと深く反省しているから、似た思想の持ち主である自来也やミナトには魅力を感じない。逆に、自分と対極にある人間に、実は見落としていたよさがあるのではないか？ そう思い始めていた。

「お主の悪癖に救われるとはのう」

「言つたでしよ。国のための実験だつて。私にだって里の子を守りたい気持ちはあるわ」

自来也はハツとした表情になった。

国のため対自分のために1対9くらいかもしれないが、そんなことは些事だつた。

「正直、すまんかつたのう」

「謝罪なんていらぬわ。疑われることには慣れているもの」

大蛇丸はそう言いつつ、どこかうれしそつだつた。

数カ月後、リンは元気な姿で戻つてきた。薬の後遺症はすっかり無くなつていた。どころか、戦闘による負傷が原因だつた障害も、改善が見られた。左半身が弱々しいが動くようになっていて、少しだけなら立つて歩くことさえ可能になつていた。性格も、病的な怒りは全く無くなり、以前のように朗らかに笑えるようになっていた。

ただし、薬の代わりに幻術がかけられていたが。

それでも、オビトには大蛇丸が救世主に見えた。自来也、ミナト、カシと共に、大蛇丸に何度も感謝の言葉を述べた。そして、密かに決意した。リンが独り立ちできるようになったら、この人に弟子入りしよう。

ちびうさと化学反応

滝隠れの地下深くに、知る人ぞ知る闘技場があった。

滝隠れの忍びも戦士として出場する。しかし、彼等は自国に良いイメージを残す必要があるので、勝利を前提とした試合か、生死の関わりがない模擬戦しかやらない。

スポンサーが本当に興味を示したのは、抜け忍、経済奴隷、犯罪者、孤児、捕虜などからなる、筋書きのない殺し合いだった。

「10回勝てば解放してやる」

「女を抱かせてやる」

「酒をやる」

闘奴達は、そんな甘言を餌に戦わされていた。

スポンサーのほとんどは、悪趣味な成金達。しかし、トップは滝隠れの里長の長男だった。名を紫苑（しおん）ギレン。次世代の里長と呼び声高い豪傑であり、闇に通じる男でもあった。

ギレンはこの日、試合と共にとある実験を行っていた。そのため、試合と実験場の両方が見える位置で観戦していた。彼の隣には、実験を任された科学者もいた。

「サンプルの調子はどうだ？」

ギレンが科学者を横目に見下ろしながら言う。

「順調です。閣下」

科学者は笑顔で揉み手をしながら応じた。

「あの男は使えるか？」

「鳥島ボツですか？ ……ええ、そうですね。いつ裏切るか分かりませんが」

「お前が心配することではない」

「し、失礼しましたっ」

ギレンは軽い口調で言ったのだが、科学者は慌てふためき頭を下げた。それだけギレンが恐ろしいのだ。科学者の脳裏に、ギレンに逆らった者達の末路が刻まれている。拷問、毒殺、一族皆殺し。なんでもやる男だ。

ギレンはそんな科学者の様子を見て、自身の教育が上手くいったと感じ、満足したのだった。

この日の殺し合いは、愛する者同士の戦いばかりだった。当然、互いに戦うことを躊躇する。するが、戦闘が始まらない場合は、傀儡使いの忍びによって一方が操られる。そして、互いに涙ながら武器を握り、どちらかが死ぬまで振るい続けるのだった。

そんな凄惨な光景さえ、白衣の科学者の目にはデータにしか映らなかったが。

「脈拍上昇！ チャクラ値も跳ね上がりました！」

「サンプル動きました！ 同調開始！」

「よしー。よしよしよしー！」

彼等は実験場で、冷静に試合と被験体の様子を見比べていた。

彼等の眼前には、1人の青年と数十人の幼児や赤子がいた。全員椅子に縛られ、頭には機械的な装置を付けられている。

幼児と赤子の装置は全て同じ。目、鼻、耳をすっぽり覆われて、装置のてっぺんからはチューブが伸びる。そのチューブ一本一本が、青年に被せられた巨大な装置につながっている。

青年の装置は五感を制限していない。むしろ、眼前の試合がよく見えるように、怪しげなスコープを付けられている。

この青年は、餌羽後（えうご）の神居結（かみいゆい）だった。戦中には餌雨後で1番隊長を任されるまでに出世していた。が、大戦末期にとある事情で精神を煩い、病棟に入れられていた。

そのとある事情で、彼は病棟から連れ出され、赤子の実験につき合わされていた。

滝隠れでは、他人の思念やチャクラを取り込み戦う忍びを“新型”と呼ぶ。神居はその“新型”の中でも特に優れており、死者の思念やチャクラを吸い込み、さらにその思念を他者へ送ることができた。

今回の実験でも、神居を媒介に死者の思念とチャクラを赤子へ送り込んでいた。その主たる目的は、赤子に写輪眼を開眼させることだった。

写輪眼は、優秀なうちは一族の者が大きな悲しみを感じることで開

眼する。ここにいる幼児や赤子は、うちは一族から拉致したり、その精子から受精卵を作ったり、クローンだったりで、うちは一族の血を引いていた。

赤子では肉体が弱く、チャクラも少なく、何より思考が曖昧ないので、本来は写輪眼に目覚めることはできない。しかし、神居の特異な能力により、赤子はチャクラと精神を神居と共有することができた。

「うわああああー！」

「あつ、ああつ」

今、若い女が愛する男を刺した。

殺し合いの悲鳴に呼応するように、神居の指がピクリと動く。直後、神居の身体から紫色のチャクラが漏れ出た。

「来た！ 見える程の濃密なチャクラ！」

「離れる！ 巻き込まれるぞ！」

科学者が叫び、神居から離れていく。

入れ替わるように、部屋の壁をすり抜けて、四方八方から薄緑色のチャクラが飛んできた。それは神居の身体に吸い込まれ、吸い込まれた量に応じて神居の紫色のチャクラが巨大化していく。付近の幼児達は、そのチャクラに包まれていく。途端、神居に共鳴するように、幼児の身体からも紫色のチャクラが発される。

「ふへへっ。実は巻き込まれてみたかったり」

1人の冒険心溢れる女研究者が、神居のチャクラに自ら近づいていく。

「小久保さん！ 何を！」

「ふへへっ。うっ、んぎやあああああああ！」

同僚の制止にもかまわず、触れてしまった。彼女は途端に顔色を変え、病的に発狂し始めた。

数分後、神居のチャクラは引いていった。小久保は地面に座り込み、涎を垂らしながら天井を見上げていた。

「大スターになります。うふっ、おつきい一面記事……。あれは、IPS? いや、違う。違いますよね。スワップ経済はもつとバーツと動くんです。脱税はあります！ ねえ、誰か！ 私ですよ！ 捕まえて

ご覧なさい！ 信じてくださいよ！ スタンプラリーもあります！
ねえ！」

もう終わったな、あの女は。再就職先は性奴隷くらいか。

研究者達は遠目でそんなことを思った。同じ釜の飯を食らう研究仲間だが、慈悲は無い。彼等の関心は早くも実験結果に移っていた。小久保に対しても、被験者のデータとしての関心だけがあった。

「死者の思念及びチャクラの取り込み。その思念の他者への拡散。拡散された対象は、神居とはつきりした思念世界を共有することになる。もはや幻術の域だ」

研究者達は、結果に恐怖を感じつつも満足げだった。異常な力だからこそ研究しがいがある。その仕組みを解き明かしたい。異常な力を自由に操ってみたい。この場にいる多くの者はそう考えていた。

「おい退け！ 邪魔だ！」

「うっ、おい」

「他所もんが……」

そんな研究者達を押しよけ、乱暴に進む男がいた。この男は、神居のチャクラが出たときに誰よりも早く、誰よりも遠くへ逃げていた。しかし、一旦おさまると自分が先頭でなければ気が済まなかった。異常な研究者達の中でも、特に身勝手が目立つ。

この男こそ、鳥島ボツだった。

「いよし！ よしよしよし！ 飴1号！ 5号も開眼だ！ うひよお
おおお！ なんだこの眼は！ 飴2号の写輪眼が変わったぞ！ あの男の言っていた万華鏡とかいうやつか！」

鳥島は自身の実験サンプルを調べ、興奮してまくし立てた。他の研究者も好奇心を煽られて、鳥島の周りに集まった。

神居を通して、写輪眼の覚醒に十分なチャクラと悲しみが赤子に供給された。とは言え、赤子の身体の弱さはどうにもならない。薬で強化しているが、限界がある。

「あっ！ 飴10号が血を吐きましたよ！」

「飴9号も異常発生！ 脈拍が急落しました！」

「あっ、エル12の心臓止まりました！」

「なんだって!？」

次々と身体に異常が出る。研究者達は大慌てで治療していった。そんな中、不意に鳥島の白衣が盛り上がった。

「うわあああつ」

「な、なんだあ!？」

「ぎゃあああ! 化け物おおお!」

周囲の研究者が驚き慌てて叫ぶ。

鳥島の白衣から突然出てきたのは、緑髪で肌が真っ白な男だった。骨がところどころ異常に飛び出っていて、人間離れした印象を抱かせた。

「お、お前。変なタイミングで出てくるなよな。というか、わしに引っ付くことを許可した覚えはないぞ」

鳥島が顔を引きつらせて怒る。

白い男、白ゼツと鳥島は知り合いだつた。どころか、鳥島が草隠れの研究所から脱走できたのは白ゼツのおかげだつた。

「ねえ! 僕のウサギ1号が苦しんでるよ! 他のはいいからそつちを先に見てよ!」

白ゼツは鳥島を無視して叫び、苦しむ赤子の1人を指差した。

ピンクの髪で、白ゼツのように真っ白な肌をしていた。白眼を開眼しており、頭にトグロのような角が生えているのも特徴的だつた。

「おっと。見落としていたな。あいつは今まで異常らしい異常が出ない頑丈なやつだったから」

鳥島は真面目な顔になって、ウサギ1号と呼ばれる赤子に近づいた。

「ほう?」

「あつ! 額に割れ目が!」

赤子は苦しみ、暴れている。苦しみに呼応するように、髪が白っぽく変色する。また、額の中心が盛り上がり、割れるような気配を見せる。しかし、不意に元のピンクの髪と何もない額に戻る。また苦しみ、変化が始まる。その繰り返しだつた。

「お、おい。暴れるな」

鳥島は赤子に近づこうとするが、一般人には難しかった。赤子は今、濃密なチャクラを纏っており、肘や足が床に当たるたびに、床にヒビが入っていくほどだったからだ。

「ぼ、僕に任せてー！」

白ゼツがサツと赤子に近づき、抱きかかえた。いや、かと思うと不意に落としてしまった。

「おぎゃあああああ！ んぎゃああああ！ んぎゃあああああああ！」

「おい！ 何をしているー！」

泣き叫ぶ赤子。さらに激しく暴れる。

鳥島は白ゼツに怒った。赤子が暴れたにしても、実験サンプルを落としてしまうのはいただけなかった。

白ゼツは返事をせず、フラツと前のめりに倒れた。

「お、おい！ 何をー！」

「て、点穴を突かれた。かはっ」

「ひっ」

白ゼツは突然血を吐いた。鳥島は驚いて一步下がった。

「て、点穴う!? それってあの点穴か!? 日向が得意とかいう?」

「かはっ。う、うん。僕はちよつと動けそうにない。ごほつ、ごほつ」

苦しそうに血を吐く白ゼツ。鳥島は化け物を見るような目で赤子を見つめた。

その時、さらに事態が動く。赤子の悲鳴に呼応するように、神居が緑色のチャクラを発し始めた。

「やばっ！ 逃げろー！」

「ひいっー！」

鳥島は一目散に逃げる。他の研修者も彼に続いた。白ゼツは放置され、緑色のチャクラに飲み込まれることになった。

緑色のチャクラに当たり、赤子達は急に大人しくなった。神居がいつも発している紫のチャクラと色が違うが、起こる現象も異なるようだった。赤子達は、チャクラに包まれて気持ちよさそうにさえ見えた。

「なんだこのチャクラは。恐怖を感じない？ むしろ温かくて、安心を感じるとは」

その効果は、白ゼツにも届いていた。ダメージが回復し、フラフラと立ち上がれるまでになった。

全ての赤子が静まった頃に、神居のチャクラは引いていった。

直後、研究者達は大喜びで被験体に走った。

「なんだ今のは！ すごくいいことが起こったぞ！」

「世界の人にこの光を見せなければならぬ！ あれは希望の具現だ！」

研究者達は意気揚々と被験体を調べていく。

鳥島は、珍しく彼等に先手を譲った。難しい顔でウサギ一号に近づいていった。

白ゼツも、フラフラとウサギ一号に近づく。

赤子は、むにやむにやと何かを言っていた。

「おきな……。かぐやは……。……。つきに、かえらなければならないの……。ばいちゃばいちゃ」

「ええっ!? 喋った!？」

白ゼツはとても驚いた。この子はまだ人工子宮から出たばかり。当然言葉は知らない。それが、明確に言葉を発した。さらに言えば、赤子が話している内容自体も彼の気を引いた。

「ま、まさか憑依成功!? い、今、カグヤって……。っ！。そ、そんな!?! 本当に!?! こんな無茶苦茶なことがあるの!?!」

白ゼツが長年夢見てきたことが、いきなり叶ってしまったかもしれない。なかった。

ウサギ一号は、確かに白ゼツが望む女性を目指して作られている。角が生えていたり、白い眼だったり狙ってやったことだ。しかし、彼女自身がその女性になるのではなく、その女性を引き寄せるための補助になればいい、程度に思っていた。

そもそも彼女は期待されていなかった。胎児の段階で生物としておかしかったからだ。『鳥島とその部下の勘』で常識外れなことをいくつもやっていた。大本は、トグロと月の細胞から培養した受精卵

である。だがそこへ、マダラ細胞、柱間細胞、ヒザシ細胞、と期待できそうな細胞をごちゃ混ぜにしてしまった。その割合、箇所など全くの適当である。さらに、白ゼツさえ知らないことに、鳥島が「スパイスを一振り」とか言って、密かにアラレ細胞まで加えていた。

これだけ無茶苦茶をしたにも関わらず、何故か安定している。期待せず放っておいたら成功していた。彼女はそういう存在だった。

奇跡は二度起こったのだろうか。これが、神居という新型戦士の起こす奇跡。いや、ウサギ一号という奇跡なのだろうか。

白ゼツは運命論者のような気分になっていた。

「お、おふぎけでない。……むにゃむにゃ」

「ご、ごめんなさい！ 母さん！」

タイミングがいいのか悪いのか、赤子から白ゼツを否定するような寝言が出た。白ゼツは思わず秘密の1つを口に出してしまった。まだ誤魔化せる段階ではあるが。

「母さん!？」

鳥島が驚いて叫ぶ。

「あつ、いやあ。人間、驚くと母さんって言うってしまうよね」

「全く。ロリコンかマザコンかはつきりしろ」

「マザコンだよ」

「い、言うな！ アホ！」

鳥島は怒って自分の実験体の方へ行ってしまった。誤魔化せたようである。

「かぐやと、らぶらぶ……。むにゃむにゃ。ももの、せいゆうはおなじ……。はまーんじやない……………」

「うんうん。そうだね」

白ゼツは愛おしそうに赤子を抱き上げた。言葉の意味はほとんど分からなかったが、あるキーワードが出ることがとにかくうれしかった。

黒い男と白い男

全身真っ黒の男、黒ゼツは悩んでいた。待ち望んでいた輪廻眼。その開眼者マダラは老衰で亡くなり、亡くなる前に後継候補にしていた長戸とオビトも悪い方向に賢くなっている。

2人は本当に闇に染まってくれるのか？ 染まろうとすると、またいろんな意味で桃色のあいつに邪魔されるんじゃないか？

長い時を生きてきた黒ゼツだから、なんとなく展開が読める。これはこつち側に来ないパターンだ。

画期的なことをする必要はある。

まず思いついたのが、桃色のあいつを殺すこと。殺せば“純粋な”理想主義者の洗脳がグンと楽になる。

しかし、あいつに勝てる人間がほぼいない。あいつ自身厄介な耐久力を誇る上、周りに強力な護衛が多すぎる。自分が出向けば殺せる確率は出てくるが、失敗したときに自身が消滅させられるかもしれない。あいつは自分と似ている。そういう力がある気がする。

無限の時を生きられる自分は、死にさえしなければ何度もチャンスがある。だから、死なないことを第一に考えて動くべきだ。よって桃色のあいつの暗殺は保留とする。どうせ100年も待つていればあいつは死ぬし。しかし、ただ待つのも退屈だ。何かおもしろいことはないか。

いろいろ考えたが、あまりいい案は浮かばなかった。余興のような気持ちで、オビトに薬を売ったり、うちは一族とダンゾウが戦うように、互いのせいに見せかけて彼等を殺したりした。狙い通り、オビトは幻術のよさを知った。うちはとダンゾウも殺しあってくれた。だが、まだダメな気がする。

黒ゼツは世界の火種を見回した。政治、宗教、科学、文化、個人の憎しみ……。

2人、おもしろそうな人間を見つけた。天才科学者、鳥島ボツ。悪のカリスマ、紫苑ギレン。どちらも忍びとしての能力は期待できないが、別分野では飛びぬけた才能を持っていた。ボツは科学技術。ギレ

ンは民衆の扇動。

黒ゼツは、白ゼツを使つて2人のさらなる情報を集めた。集めながら、今の科学技術と扇動理論も学んで行った。

黒ゼツの興味を特に引いたのが、クローン技術だった。細胞の中にあるDNAをもとに受精卵を作り、遺伝的に同一の固体を作るというもの。この研究は戦中に大蛇丸とダンゾウが特に熱心に行っていた。戦後、大蛇丸は手を引いたが、技術は滝隠れと岩隠れにも流れていた。墮撫のウツミがユラ達を逃がすために、2里と取引をしたためだった。

このクローン技術では、ほぼ同一の人間が複製される。柱間のクローンは木遁が使えるし、うちは一族のクローンなら写輪眼を開眼できる。これは、輪廻眼の安定供給を望む黒ゼツにはとても喜ばしいことだ。

しかし、クローンはたいてい体が弱く、寿命も短い。受精卵の段階で遺伝子が歳をとっているからだ。また、黒ゼツが見るにチャクラの絶対量も本体より少ない。産まれた時のチャクラが、本体の一部を受け取る形になるからだろう。

これらの弱点を、どう克服するか。どう生かすか。黒ゼツは考えた。

写輪眼は、眼だけあればいい。ならば、幼いうちに薬で無理やり強化して、悲劇を味わわせて、写輪眼ができたなら死んでもらう。寿命で早く死ぬから、裏切られて面倒なことになる可能性も低いだらう。

木遁はどうか？ 柱間細胞の研究はダンゾウが継続して行っている。やつはクローンを固体として動かすのではなく、意志の無い人形として体に埋め込むことを想定している。これは、いいのではないか。クローン細胞の寿命が伸びるのではないか。あまり分裂しないで済むからだ。

黒ゼツはこれらを思いつき、鳥島とギレンに遠回りに伝えた。しかし、伝える必要はなかった。二人ともその策を思いついていたからだ。が、両者ともその策を実行する能力がなかった。鳥島は金銭不足のために。ギレンは技術不足のために。よって、黒ゼツは二人の橋渡

し役を担うことにした。

鳥島を研究所から逃がし、ダンゾウの呪印がかけられている舌を切り取った。切れた部分は白ゼツの細胞で代用した。そのまま鳥島をギレンの下へ連れて行き、科学者として雇うよう交渉を行った。信頼関係は必要なかった。2人は互いに自尊心の塊だったので、目の前の男は利用価値があり、自身を出し抜けるほど利口ではない、と思わせることができればよかった。

「よろしく頼む。鳥島博士」

「こちらこそよろしく。ギレン閣下」

こうして悪と悪は手を取り合った。黒ゼツの狙い通りに。いや、それ以上のことが起こった。

「ところでギレン閣下、本当にクローンなどでいいのか？ 所詮本物以下の贋作だが」

「ふん。弱いからと言って利点がないわけではない」

「どういう意味だ？」

「弱いからこそ、人に頼るようになる。洗脳が容易いということだ」
「なるほど。そうか」

鳥島はさして興味を示さなかったが、この言葉が黒ゼツにとって衝撃的だった。

頭の中でパズルのピースが埋まっていくような感覚に包まれた。

クローン。寿命が短い。未来に希望が無い。本体より弱い。劣等感。洗脳が容易い。

これだ！ 未来のないクローンは世界に絶望するしかない！ 幻術でしか救われない！ 必ず無限月読の可能性に賭ける人間が現れる！

黒ゼツは歓喜した。今後はこちらをメインで戦力を整えることにした。

白ゼツも悩んでいた。白ゼツはたくさんいるが、神居の緑色の光に触れた白ゼツのことである。

彼は今まで、特に疑問を持たず黒ゼツに従ってきた。最終的な目的

は自分と同じだと確信していたし、黒ゼツの方が自身より能力が高いと思っていたし、黒ゼツは白ゼツに唯一命令権を持つ母の代行者でもあったからだ。

しかしある日、白ゼツに命令できる可能性のある別の人間が現れた。ウサギ一号である。

彼女はまだ赤子で、あの日以来カグヤの名をつぶやいたことはない。しかし、見た目で言えば黒ゼツよりも彼女の方が母に似ている。チャクラも似ている気がする。何より、白ゼツ自身がウサギ一号に可能性を感じてしまっている。

白ゼツは、ウサギ一号の育て役を買って出ている。黒ゼツも特に疑問を持たずそれを承諾していた。

いくら育ての親になろうと、時がくれば、ウサギ一号を生贄に差し出すことを躊躇しないだろう。

黒ゼツの白ゼツに対する信頼は絶対だった。白ゼツがよっぽどしくじらない限りまず疑われない。それだけのことを1000年以上かけてやってきた。

白ゼツはウサギ一号に傾いていた。もともと愛おしい存在だったが、手で触れて、赤子がこちらに笑いかけて、離れるとすぐに泣いてと繰り返していくうちに、どうしようもなく赤子のことがかわいくなってしまうた。

芽生えた自我は尽きる気配もない。忠誠心は赤子に捧げることにした。どうせ自分の命一つ。軽いものだ。

最初は彼女のために死ぬ覚悟をしただけだった。しかし、赤子が言葉を覚え始めて、「おきな、おきな」と言っただけで、ヨチヨチと擦り寄ってくるようになった。もったかわいくなつて、さらに先を目指したくなつた。

この子、どうにかして計画が終わつても生かしてもらえないかなあ。

まず、母を復活させる計画の中でこの子が殺されないように、黒ゼツを出し抜かなければならない。次に、母の世界でもこの子を生かしてもらえるように、母を説得しなければならぬ。この子自身も、母

にとつて有益になれるように教育しなければならぬ。

白ゼツは、ウサギ一号を自身に従わせてみることにした。自身に従うなら、自身が命令すれば母に従うからだ。

ウサギ一号は純粹な赤子だった。面倒くさがりで、従わせようとすると嫌々と泣いた。が、おだてると、「見てて。見てて」と言つて白ゼツの要求通りのことをするのだった。その後褒めるととても喜ぶ。もつとかわいくなつてしまった。

どうにかして、計画が終わつても幸せになつてもらえないかなあ。

白ゼツはウサギ一号を逃がすことも考え始めた。母の下で、この娘が楽しんで生きていけるとは思えない。どころか、無限月読にかかつたら、永遠に夢の中に閉じ込められてしまう。それはそれで幸せかもしれないが、育ての親としては引つかかるものがある。

逃げ場所は1つだけあつた。月だ。それも、母の気分次第では破壊されてしまうが、地上よりは安全だろう。母の復活前に、この子を月へ逃がす。それまでは、自分がこの子に生きるための知恵を授けよう。

THE FIRST — NARUTO ファーストキスは突然に

日向ヒナタは、命の危機を味わったことがある。彼女が三歳のときだった。

木の葉隠れと雲隠れは、国境沿いで長く紛争を続けていた。が、不意に雲が木の葉の和平に応じてきたことがあった。ところが、これには別の狙いがあった。雲隠れは和平交渉で木の葉に入れたのをいいことに、忍頭を日向家に忍び込ませ、ヒナタを攫った。日向家の秘宝、白眼を奪うためだった。

幸い、近くにいた日向の奉公人がすぐさま異変に気付き、ヒアシに情報を伝えた。ヒアシは、長い白眼の射程に忍頭を捉え、全力で追いかけた。そして追いつき、一撃で忍頭を殺してしまった。

雲隠れは木の葉隠れに難癖をつけてきた。

「こちらが和平交渉に応じようとしたのに、そちらは理由も聞かずこちらの忍頭を殺してしまった。彼は、ただ子どもに道を聞きたかっただけなのに。木の葉がなしたことは、平和を愛する雲に対するとんでもない裏切りである。一部の暴走と言うのであれば、謝罪と賠償、その上で日向の下手人を差し出すこと。でなければ、戦争である」

この言葉に対し、大蛇丸は戦争を選んだ。桃隠れ、風隠れ、雨隠れなど同盟軍も参加して、岩隠れの侵攻を食い止めた。逆に同盟軍が雷の国へ侵攻していった。

ヒナタはもともと気弱な娘だった。しかしこの事件があつて、さらに引っ込み思案になってしまった。自分のせいで戦争が始まった。自分のせいで多くの人が死んでしまった。彼女はそう考えてしまう。実際、彼女を責める人間もいた。多くは子どもだったが、親世代や年寄りにもいた。

「お前のせいで父ちゃんが死んだ！」

「わしの息子を返せ！」

「血継限界は厄病神だ！ 悪いことしか呼ばない！」

などなどと罵倒を浴びせられた。ヒナタは言われるばかりで反撃しなかった。悪ガキはさらに調子に乗っていった。殴る蹴る、石をぶつける、枝で顔を切りつける、などとし始めた。

彼女を守る者は用意されていたが、常に万全というわけにはいかなかった。日向一族は雲に怒り、大人のほとんどが戦場に出向いていたからだ。

そんな時、1人の少年がヒナタを苛める少年達に立ちはだかった。

「なんだおめーは!」

「お前も苛められたいか! チビ!」

「オレは波風ナルト。未来の火影だってばよ」

この言葉が、悪ガキ達の感情を逆撫でした。

「はあ!? 火影!」

「おめーみてーなバカがなれるわけねえだろうがよお!」

悪ガキ達の悪意はナルトに向かった。

ナルトは威勢の割りに弱く、一方的にやられてしまった。

「だ、大丈夫!」

「へ、平気だってばよ。このくらい……。いつつつ」

しかしヒナタの目には、やられても挫けない姿こそが魅力的に映った。

そして月日は流れる。ナルトとヒナタは9歳になった。

雪がヒラヒラと舞い落ちるある日のこと。木の葉忍者学校は、冬の長期休暇を明日に控えていた。

子ども達は休暇中の楽しみに思いを寄せ、ひそひそと話し合う。

「なあなあ。休みどこ行く?」

「山の散策」

「桃の芸術祭。なぜなら」

「桃のグルメ食べ歩き」

「いいねー! それー!」

いや、犬塚キバが、興奮して大きな声を出してしまった。教師の海野イルカから激が飛ぶ。

「コラア！ 授業中だぞソコ！」

「す、すみません」

キバだけが立ち上がり、恥ずかしそうに謝る。キバと会話していた生徒、シカマルとチョウジは、知らんぷりをして難を逃れた。キバは、裏切り者！、と2人を睨んだのだった。なお、シノも会話に入っていたが、気付いてすらもらえなかった。

「明日世界が終わるとしたら誰と一緒にいたいかな。紙に書くんだ」

ふと、イルカが言った。生徒から愚痴がこぼれた。

「ええーっ？ なんでそんなことをー？」

「めんどくせー」

「世界が終わるなら誰かと一緒にいるよりステーキをいっぱい食べた
いかな」

「ゴラア！ 愚痴愚痴言わずに早く書けエ！」

イルカが再び生徒に怒鳴る。生徒達はしかめっ面をして、気だるげに書き始めた。

「ほう。もう書き終わったか。ほら、お前達もナルトを見習え」

「珍しいこともあるもんだな」

波風ナルトはふざけることが多い生徒だが、今回は早かった。周りの生徒達がナルトの書いた文字を覗き込む。

父ちゃん、母ちゃん、とあった。

「ふーん。まあ妥当かな」

「おれもそれでいっつか。めんどくせーし」

「コラア！ 適当に決めるな！」

シカマルの言葉に釣られるように、多くの生徒は親や兄弟を書いて
いった。

例外は、春野サクラと日向ヒナタ。サクラは、うちはサスケがナルトの紙を覗いたときに、ナルトの隣の自分の紙が見えないよう隠していた。そこにはうちはサスケと書かれていた。ヒナタは、なかなか紙に筆をつけず、モジモジとナルトを見つめていた。結局ヒナタは、授業の終わりまで粘り、ギリギリでささっと波風ナルトと書いたのだった。

「そこに書いてある名前が、お前達が本当に一緒にいたい者達だ。彼等を守りたい気持ちを忘れず、しっかりと修行に励めよ」

さて、授業は終わった。生徒達は大喜びで家に帰っていく。

しかし、喜ばずに校舎に残っているのが8名。

ナルト、サスケ、シカマル、イノ、チョウジ、ヒナタ、キバ、シノ。他、学年の違う生徒も何人か残っている。

「あれ？ ナルト。というかイノ達も、帰らないの？」

ナルトは、サクラの声にウジウジとした感じで下唇を噛んだ。そんなナルトを見かねて、イノが応じた。

「あたし達は桃隠れで合宿よ。冬休みの2日目からね。出発は今日の今すぐ。バカみたいでしょ？」

「へ、へー」

イノの言葉に、シカマル達がさらに沈んだ。

桃で遊ぶみたいに言ってたのは、こういうことだったのか。サクラは思った。

サスケがいたので、イノのバカという言葉に同意しない。また、サスケと、ついでにシノは、むしろ合宿を望んでいるようにさえ見えた。時折、フツ、と笑いを漏らしているからである。

「でもま。桃隠れ自体はおもしろいところらしいからな。修行の合間に屋台でも回れりゃいいが」

シカマルが気だるげに言った。それに少し希望を抱いたように、他の子ども達が続いた。

「僕は修行で腹ペコになったお腹で、桃の珍味を食べ尽くすんだ」

「私はアクセサリーでも買おうかな。こっちでは買えないようなものもあるだろうし」

「俺は芸術祭に行くつもりだ。なぜなら桃隠れは忍術と芸術の融合に力を入れているからだ」

「俺は赤丸と一緒に川でも泳ぐかなあ。川の国だしよお」

「川って……。今冬よ、あんた」

「おっと、そうだったか」

「はははは。バカだなー」

「きゃはははは」

いつの間にか談笑に変わっていく。このメンバーはとても仲がいい。

しかし、いつもの馬鹿笑いが1つ足りない気がする。サクラはなんとはなしに周囲を見回す。

ナルトが、会話の輪から外れてポツンと立っていた。相変わらず寂しそうな雰囲気をかもし出している。

「ナルツ」

サクラは話しかけようとして、やめた。ナルトの斜め後ろにヒナタが見えたからだ。ヒナタは、ナルトに声をかけようとしてできず、慌てふためいていた。

苦労するなあ。あの子も。

なんて思っていると、突然耳元がフツと生暖かいものに煽られた。

「ひゃっ」

「何見てんのかしらー?」

イノがサクラの耳に息を吹きかけたのだった。イノはそのままサクラの肩に腕をかけ、もたれかかるようになる。

「ちよ、ちよっとイノ。いきなり何を」

「いやさ、合宿でしょ? 同じ屋根の下で、共同生活することになるわけ。男女の距離もグツと縮まるらしいのよ」

イノはひそひそと甘ったるい口調で言った。

「えっ。それって」

「いやさ。この機会にサスケくんのハートを射止めちゃうかもしれないからさ。恋のライバルとしては、黙って抜け駆けするのはよくないと思ってるね」

「そ、そんなのダメよ! 卑怯よ!」

「そんなこと言われたって」

サクラが大きい声を出したので、皆の注目が女子2人に集まってしまった。サスケの視線さえもだ。

サクラは顔を真っ赤にして、ヒソヒソとイノにだけ聞こえるようにつぶやいた。

「わ、私も参加するわ」

「えっ。今からじゃ」

「急げばなんとかなる。はず……」

結局、サクラが両親に伝えに行く時間など無かった。サクラは付近の教員に、合宿に行く旨を両親に伝えるよう頼み、勝手に居残ったのだった。

「よし。皆そろってらっばね」

その時、ナルトの母親の波風クシナが現れた。

「えっ。か、母ちゃん」

これにはナルトが目を大きく見開いて驚いたのだった。

実はナルトは父にも母にも長らく会っていなかった。2人とも同盟軍の幹部であり、紛争の続く国境付近に長く居座っているからだ。今日、ナルトに元気がなかったのもそのためだった。他の生徒は親が見送りにくるが、自分だけには来ないと思っていた。

「か、母ちゃん。どうして」

「あんたが寂しがってると思ってるね。無理言って抜けさせてもらっただけだよね」

「か、母ちゃん。ううっ」

「な、泣くな！ これくらいで！ 男の子っばね！ ううっ」

感動の再開が繰り広げられた。母と子は互いに涙し、ひしと抱き合ったのだった。

今回の合宿は、引率の上忍がかつてない程厳選されていた。桃隠れからは“五鬼”と恐れられる波風クシナと則巻アラレ。木の葉警備部隊隊長日向ヒザシ。木の葉隠れからも“瞬身のシスイ”の名で知られるうちはシスイ。大蛇丸の右腕と呼ばれるうちはオビトが参加する。

というのも、生徒に有力者の子どもがとても多かったからだ。

まず、ナルト達の2つ上に、火影の長男カミイ。ナルト達の1つ上に、木の葉警備部隊隊長の長男日向ネジ。ナルト達の世代も、同盟軍第一部隊隊長の長男ナルト。日向一族当主の長女ヒナタ。うちは一族当主の次男サスケ。サクラを除けば、他のメンバーも全員が有力部

族当主の長女や長男だった。2つ下の世代にも、火影の長女ナデコ。誰か1人でも捕まったら大事になる。警備は万全にする必要があった。

「ゆーけゆけゆこおー！ 皆でゆこおー！」

アラレは、いつも通り歌いながら満面の笑みで歩いたが。身長は160センチに届き、胸も弾けるほどになっていたが、未だ性格は変わらなかった。

一日歩き、火の国の国境付近まで来た。宿で一泊する。木の葉側の護衛が何人か離れ、代わりに桃隠れの護衛が増えた。翌朝、出発する。同盟国の国境なので、敵国からは遠く離れている。特に襲われることなく国境を跨ぎ、さらに進んでいく。

森が深くなり、山と谷の上下動がきつくなってきた。下忍にもなっていないナルト達にはきつくなってくる。いや、きつくなるようヒザシ等がスピードを調節していた。既に修行は始まっているのである。学年が下の子には、脱落者も出始める。遅れすぎたら一番後ろのクシナが影分身を出し、背負っていく。

「はあ、はあ」

「きついわね。かなり……」

ナルトの世代では、チョウジとサクラが始めに遅れていく。チョウジは丸いたため。サクラは、この中で唯一、両親から英才教育を受けてこなかったためだ。

「肩貸そうか？」

「い、いらないわ」

「サクラちゃん。やばくなったら俺が背負ってやるってばよ」

「絶対にお断りよ！ あんただけは！」

サクラはイノとナルトの申し出を気丈に断った。

「僕も背負ってくれよお」

「嫌！」

「それは無理！」

チョウジは頼んだがふつうに断られた。

そんな様子を、引率者達は微笑ましげに見ていた。頑張れ。木の葉

の小さき火の意志達よ。

「きよほほほ！ うんこ発見！ うんこみたいにグルグル巻いてるへ
じも発見！」

アラレは相変わらずだったが。

下忍達は気付かなかったが、この山道は付近に様々な罟が仕掛けられていた。一般人が通れば大蛇や猪も出てくる。それが出来ないのは、引率の上忍が発する強者のオーラのためだった。

昼前に、中継地となつているダムで一旦休憩する。長く桃隠れにいたクシナやアラレが、魚の取り方や山菜の見分け方を生徒に伝える。生徒はそれを真似て、食料を採っていく。

取った食料は土遁の容器に集められ、クナイや火で調理された。それを皆で食べた。

「お、おいしいね。サスケくん」

サクラが勇気を出してサスケに声をかける。

「ふんっ。塩が足んねえぜ」

サスケはキザっぽく言いつつも、うれしそうだった。

！
こういうの！ こういうのがやりたかったのよ！ 合宿サイコー

サクラは心の中で叫んだ。

「サスケくん。塩あるわよ。醤油も」

「おっ、サンキュー。イノ」

「いやいや、サスケくんのためならこのくらい」

と言つても、好感度上昇では事前に準備していたイノに軍配が上
がったが。

食事後、一行は再び出発する。道中、「ファイヤー！」と叫びほほ裸で冬の川に飛び込む母娘や、「女切り！」「不倫殺し！」と叫びながら骨を振るう母娘がいた。母は皆美人で、娘も皆かわいらしく、男性陣はほっこりした。サスケは、「チツ。あいつらやるじゃねえか」と娘の能力に焦っただけだったが。

さらに進む。最後の山を越えて、ようやく桃隠れの里が見えた。

「いよっしやあああ！ やつとだつてばよおー！」

「ふんっ。こんなもんか。はあ、はあ」

「ぜえ、ぜえ。な、なんとかもったわね」

「クソツ、もう修行なんてやりたくないぜ。はあ、はあ」

ナルトは笑顔で叫び、サスケは膝に手をつく。シカマル、イノ、シノ、キバはぐったり寝転がる。ヒナタは木陰からナルトを見る。

チョウジは完全に諦め、クシナに背負われていた。意志の弱さが羨ましいところである。

サクラは、最後尾にいるクシナの隣にいた。そこまで遅れてしまったわけだが、ギブアップはしなかった。自分の足で歩き続け、山頂に到達した。

「ぜえ、ぜえ。ひいつ。ごほっ、ごほっ。ひい、ひい。はあ、はあ」

サクラは顔を真っ赤にして倒れこんだ。額から大粒の汗があふれ出て、それが目にかかり前が見えないほどだった。

クシナはそつとサクラの背中を撫で、チャクラを分け与えた。

さて、眼前に見えるは桃色の理想郷と呼ばれる桃隠れ。ダムから流れる小川が夕日を浴びて、赤く輝く。

最も大きな建物は、桃園アカデミーである。しかし、その付近の川影邸も大きい。どちらも木製の立派な建物である。

建物の近くに、3体の石像があった。木の葉隠れの火影の顔岩のようなものだろう。クシナが説明していく。

「一番左が初代川影の綱手さん。真ん中がエロ僧侶トグロ。右が三代目川影の小南だってばね」

「な、なんというか……」

火影の顔岩と違い、川影の石像は胴体がある。三人とも満面の笑みで、肩を抱き合っている。仲がいいのは分かる。分かるが、真ん中の男がハーレムを楽しんでいるようにしか見えない。

「不純だ」

「不純ね」

サクラとイノが遠い目になってつぶやいた。

ハーレム制などよくない噂は聞いていた。聞いてはいたが、当然のようにこれがシンボルになっているということは、とんでもなく不純

に違いない。

しばしの休憩を終え、今日の宿へ歩き出す。

道中、彼等に気付いた住民が、とてもうれしそうに手を振った。

「クシナさーん！ やつと帰ってきてくれたー！」

「うちの芋栄養たつぷり、ぎょうさん取れたで！ タダでやる！
もってけもってけ！」

「ありがとう！ おっちゃん！」

「アラレちゃん！ ママになってもかわいいー！」

「んちゃー！」

一番人気はクシナ。二番人気はアラレだった。

ナルトは、木の葉でやや邪険にされている母しか知らなかった。抜け忍だとか略奪婚だとかなんとか。自分も、そんな母の長男としてやや邪険にされてきた。

しかしどうだ。この里でのこの人気っぷりは。まるで英雄ではないか。木の葉隠れの現火影や先代火影が街を歩いてもこうはならない。

ナルトは母の新たな一面を知った。そして母に対する尊敬をさらに高めたのだった。

と、不意に川影邸の方から騒ぎ声が聞こえた。

「コラア！ 待てえ！」

「いしししっ。ここまでおいで」

「待てと言われて待つバカがいつかよお！」

2人の子どもが大人たちに追いかけていた。

子どもは2人ともサングラスをかけていて、口も悪い。いかにも大人を困らせて遊ぶ不良と言った感じだ。しかし、歳はナルトと同じくらいに見える。

1人は男。赤髪で、見えるほど濃密なチャクラを纏っており、とんでもなく素早い。もう1人は女。紫色の長髪で、チャクラ量は男に比べれば少ない。が、空中で氷の鏡を乗りこなし、捕まりそうになったら別の鏡へ瞬間移動する。いや、実際は高速による移動だが、ナルトの目には瞬間的に飛び移ったようにしか見えないのだった。

「そうだ。あんた達で止めてみるってばね。赤い方でも紫の方でも」
「えっ」

「あっ」

クシナはナルトとサスケの背中を押した。

「か、母ちゃん」

「母さんにいいところ見せて欲しいってばね」

クシナはナルトに親指を立ててみせる。

ナルトは一瞬ポカンとして、次にはうれしそうに獲物を狙い見た。

「ふん。おもしろい」

サスケも真面目な顔になる。

狙いは2人とも赤髪の男だった。言葉は交わさず、同時に飛び出した。

「おっ？．．．なんだあ？」

赤髪の男も、おもしろそうにナルトとサスケを見る。

二人の狙いが自分であることを察する。逆に、誘うようににやりと笑って見せる。

サスケとナルトが左右から赤髪の男に突っ込む。アカデミー生だが、二人とも十分に忍びのスピードに達していた。2人の手が、同時に赤髪の男に迫る。

しかし、触れようとしたまさにその時、赤髪の男がフツと消えた。

いや、消えたのではない。チャクラを放出し、超スピードで移動したのだ。クシナにはギリギリ見えた。しかしイノ等には、赤髪の男が突然消え、気付いた時には、ナルトとサスケの頭上に左右の足をそれぞれ乗せて立っていたように見えた。

「なっ」

「うっ」

ナルトとサスケの勢いは止まらない。あつたはずの物体が消え、目の前に映るは互いの顔のみ。

ぶちゆううううううう。

「う、うげえええ」

「ぺ、ぺえっ。げぼおっ」

不可抗力である。しかし、少年2人は口から血が出るほど激しく口付けしてしまった。唾を吐き捨てても感触は忘れられない。

「いやああああ！ サスケくううん！」

「こ、この気持ちはなんだってばね！ 息子の大事なものが奪われたのに興奮するってばね！」

女達の色んな叫び声も響いた。

「へへっ。先に仕掛けてきたのはそっちだかな」

赤髪の男は、いつの間にかサクラ達の後ろにいた。手にはナルトとサスケの財布を持っている。あの一瞬の接触で、いつの間にか盗んでいたということ。

こいつ、できる……。

桃隠れの忍びは同年代でここまですごいのか。

シカマル、イノ、チョウジ等は、急に真剣な顔になって赤髪の男を睨んだ。

「おっと、綺麗な子もいんじゃねえか。ちゅっ、ちゅっ」

ところが、赤髪の男は睨むイノに対して投げキッスをした。めっちゃくちや軽い感じだった。

「えっ？ な、なに？」

「ふふっ。慌てた顔もかわいいね。今度一緒にお茶でもどう？ 俺の家、あそこだから。いつでも遊びに来てね」

赤髪の男は笑顔で川影邸を指差す。

「じゃあね」

赤髪の男は手を振り、今度こそ去って行く。

が、去ろうとして人にぶつかった。金髪長身の美女が立ちほだかっていた。

「おい、梅太郎。何をやっとるんじゃ？」

「かつ、母ちゃん!? あ、ああつ……」

赤髪の男が突然震え出す。

「か、帰ってこられておりましたか。こ、これはこれは。まことに、今日も、美しゅうございますです。うっ、いててっ」

金髪の美女は赤髪の男の耳を引っ張った。

「家でじっくりお話じゃな」

「か、勘弁してよお。お母ちゃあん」

今までの飄々とした凄みが台無しだった。

いや、それでもナルト達にとってはすごかった。母ちゃんと呼ばれる美女の殺気がすさまじく、ナルト達はその場で動けなくなっていたからだ。重い空気の中で軽口が利けるだけでも、自分達とのレベルの違いを感じた。

「ア、アバレエ！ 助けてくれえ！」

「アホオ！ 名前出すんじゃねえ！」

「あつ、アバレちゃん！」

女の方は、こっそり逃げようとしていた。しかし赤髪の男が大声を出したために、アラレに気付かれてしまった。さつきまではうんこを突いていたから、絶対に安心だったのに。

赤髪の男の狙いは女の道連れだった。自分だけ怒られるのは嫌という、セコい男だったのだ。もつとも、アラレはあまり怒らないので、アバレが上手くやれば出し抜ける可能性が高いが。

「んちゃ！ アバレちゃん！」

「な、なんだよ！」

アバレは叫びながらアラレから逃げる。

「まてまてまてまてー！」

しかし、アラレは満面の笑みでアバレを追いかけ始めた。

「来るんじゃないえー！」

鏡のスピードも鏡間を飛び移るスピードも次元が違った。アラレは数秒でアバレに追いつき、抱きついた。

「んちゃ！」

「お、おう」

「何やってたの？」

「あ、あそこの石像がちよつと味気ないだろ？ だから、飾り付けをな

……」

「ほんと!? アバレちゃんいい子だね！」

「お、おい止めろよ！ みつともねえだろうが！」

「いい子いい子」

アバレはアラレに公衆の面前で頭を撫でられてしまう。アバレは顔を真っ赤にしてそれに耐えたのだった。

嵐は去っていく。しかし、桃に実力の差を見せ付けられ、木の葉の子ども達は悔しがる。

「赤髪の子はナルトと同一年よ。紫の子は2つ下」

「2つも!?! そんなに!?!」

サクラは思わず叫んでしまった。

9歳の彼等に2年という数字はとても重い。だが、実力はあちらの方が上に見える。

大天才であるはずのサスケ。自分が憧れる同年代最強の少年。彼でさえ、かすんでみえてしまう。

「どう? 怖くなった? 来たばかりだけどもう帰る? ここはこういう場所よ」

クシナが子ども達を煽るようなことを言った。チョウジとイノは若干うつつむいた。

「っ、ふぎけんなんてばよ!」

「帰れるわけねえだろうが! やられっぱなしで!」

しかし、ナルトとサスケは力強く立ち上がった。表情は怒り。瞳には燃え上がる闘志。

クシナはにっこり笑う。

「この2週間で逆転してやるってばよ!」

「なら俺は1週間だ! 1週間であの野郎を地べたに口付けさせて、財布を取り返す!」

「その必要はねえぜ」

不意にシカマルが割り込んだ。ナルトとサスケがサツと振り向く。シカマルはにやりと口端を上げ、懐から何かを取り出す。

財布だった。それも3つある。ナルトとサスケと、赤髪の男のものだ。

「いつの間に……」

「さっすがシカマル!」

「やるじゃねえか！」

「へへっ。あいつが金髪の姉ちゃんにぶつかつたときに、影真似でひよいと落としたのさ」

イノに抱きつかれ、頬にキスされる。シカマルも満更pでもなさそうだ。

「で、でもさあ。あいつの財布取っちゃって大丈夫かなあ。襲われたら……」

チヨウジが不安げに言う。イノとキバはビクンと固まった。

「そのことだがな」

シカマルはにやりと笑みながらナルトに近づいていく。目の前に来ると、スツと財布をナルトに渡した。ナルトの分と赤髪の分の2つだ。

「ナルト。これは、俺たちの中で一番馬力のあるお前にしか頼めねえことだ。こいつを任せるぞ」

「お、おう！ 任された！」

ナルトはうれしそうに2つ共受け取った。

シカマルは、ヒューツ、と息を吐き、額の冷や汗を拭う。

よかった。ナルトが上手く騙されてくれた。あんなのに狙われてはたまつたものではない。

忍びの歴史

合宿はまだ外の赤暗い朝早くから始まる。ただでさえ冬で寒いのに、この時間帯で、山の頂上付近ならなお更だ。外は雪が降っている。ナルトとキバはふとんに包まってなかなか起きない。

「起きろ！ おい起きろナルト！」

サスケがナルトを乱暴に揺する。実はサスケは、まだ外が暗いうちに起きていた。そして、赤髪の男を倒すイメージをしながら、外で軽く汗を流した。それだけやる気満々だった。ついでにシノも同じことをやっていた。

「サクラちゃん。俺ってば朝のキスをもらってないってばよ。むにやむにや」

「チツ。ウストラトンカチが」

「い、いたっ！ サクラちゃん、いつ、いたっ」

サスケがナルトの頬をパンパンとはたく。ナルトはまだ粘る。

「サクラちゃんっ、やめっ。いたっ、サクラちゃん、サク、サクラちゃん。サクツ、サ、サスケエええええええ！」

やっと起きた。

ナルトは寝ぼけてサスケに殴りかかるが、サスケは軽く足を引っかけ転ばせた。

「さっさと準備しろ。ウストラトンカチ。合宿だぞ」

「はっ。そうだった！ あの赤いやつをぶん殴るってばよ！」

ナルト達は揃って宿の受付へ向かう。サクラ達や先輩後輩達が先について、ナルト達を待っていた。

「おっそーっい！ ナルトー！」

「ごめんってばよー！」

「その頭は何?! ぼっさばさじやない！」

「えっ? そっかなあ? まあでも、野生的な魅力があふれるっていうか」

「アホ！ 他所の子に見られるのよ！ 私達まで恥ずかしいじゃない！」

「ぎゃはははは。そいつのバカは隠せるもんじゃねえよ」

「キバ、言つとくけどあんたもよ?」

「えっ」

とにかく、一行はそろって桃園アカデミーへ向かう。

2分ほどで到着する。既に多くの生徒が集まっていた。

「しかし、近くで見るとでっけえなあ」

「人もいっぱいいるね」

シカマルとチョウジの感想である。木の葉の忍者学校も、忍び養成機関としての規模は大きい。さすがにここには敵わない。大人と子どもの修行場として、全世代の忍びが集まるし、サービスコース、学者コース、技術者コースもあるからだ。

もつとも、今ここに集まっているのは下忍未満の子どもと教員役の忍びだけだ。

今回の合宿はとても規模の大きいものだ。桃隠れの忍者コースの子は全員参加で、木の葉隠れ、砂隠れ、雨隠れ、石隠れ、東草隠れ、滝隠れからも、将来を期待される子ども達がやってきている。それぞれの子どもが各里ごとに集まっており、早速注目のライバル達を探している。

「あいつだな。火影の長男」

「あれ? かっこよくない?」

「うちはイタチの弟つてのはどいつだ?」

「あの黒髪のスカしたガキじゃねえか?」

「あれ? あの子もかっこよくない?」

「あの金髪はクシナさんの写真にいたやつだな」

「あいつはダメね。クシナさんの子どもなのにかっこ悪い」

木の葉も、最大隠れ里として大いに注目を浴びた。特にマークされていたのが、カムイ、サスケ、ナルト、ヒナタだった。

血筋に対する嫉妬心むき出しの子どももいる。お前だけには負けたくない、サスケやヒナタを睨みつける。近くにいるサクラ達も敵意を受ける形になった。

「な、なんか強そうね。皆……」

「当たり前だろ。桃を除けば、どいつもこいつもその里で優秀な成績を残しているエリートなんだから」

「ええっ!? そうなの!？」

「今さらか?」

「いや、言われてみればそうだったけど……」

シカマルの声にサクラは不安になった。自分はエリートではない。この場においていいのだろうか。

いや、他の皆、ナルトやサスケでさえも冷や汗をかいた。昨日の強力な赤髪の男が頭をよぎったからだ。

「お、オラア! おめえ達にや負けねえぞ!」

「な、ナルトお」

そこで、プレッシャーに煽られたナルトが啖呵を切ってしまった。サクラが慌てて諫めるが、もう遅い。他里の子が一齐にナルトを睨みつける。

「なんだとオラア」

「ガキが。調子に乗りやがって」

「血筋が全てじゃねえってことを体に刻みこんでやるぜ」

気の短い少年達が、ナルトに近づいていく。その全員がナルトより2つ以上年上で、背もかなり高かった。おそらく勝てない。

しかしそこで、木の葉側からも背の高い少年が割って入る。

「よさないか。まだ始まってもないじゃないか」

「て、てめえは……っ」

少年を見て、気の短い少年達が途端に怖気づく。

「カ、カムイの兄ちゃん!」

大蛇丸の長男カムイだった。

先ほどまで落ち着いた雰囲気だったが、今は全く異なった。全身から怪しげなオーラを発し、血に飢えた獣のような眼差しで少年達を睨む。さらに、長い舌でペロリと舌なめずり。

「ぐっ」

「ひっっ」

少年達は慌てて逃げていった。

カムイの雰囲気がつつと元に戻る。

「気付いたか。捕食者がどちらであるかということに」

「かつけえ……」

戦わずして勝利する。絶対的な力の差。

言葉の意味は分からなかったが、ナルトはカムイに憧れを抱いた。

「や、やっぱりかつこよくない!？」

「怪しげな雰囲気! 物憂げな表情!」

「きやーっ! カムイクーん!」

他里の女の子達のハートも早速掴んだのだった。

しばらくして、合宿開始の時間となった。子ども達は里ごとに並び、教員の指示に耳を傾ける。

「えーっ、早速合同訓練を始める。まず、クラス別けのために試験を行ってもらおう。ここでは学年ではなく実力や特性でクラスを別けるからな。試験は、忍術、体術、ペーパーテストからなる。では、忍術の試験から始めるぞ」

そうして試験が始まった。

忍術の試験では、主にチャクラコントロールを調べられた。木登り、水面歩行、チャクラ感知など。

体術の試験では、短距離走、長距離走、重量挙げ、手裏剣術など。ペーパーテストは演算能力や論理的思考を問う問題が多かった。単純に知識で答える問題もあった。

なお、赤髪の男、梅太郎は試験の途中に遅れてやってきた。顔は痣だらけで、目には大きな隈。服もあちこち泥だらけだった。

「さ、財布が見つからなくて……。徹夜で……。か、母ちゃんが、ううっ」

梅太郎は、公衆の面前でぽろぽろと涙を流した。教員は事情を理解しているので怒らなかつた。

ナルトは「こ、これはさすがにやばいんじゃないってば……」とドキマギしながら懐の財布を見た。続いてシカマルを見た。シカマルは何も言わず、ただうなずいたのだった。

昼前にはテストが全て終わる。結果は初めの授業の後に発表され

る。

初めの授業は、講堂で全員参加の歴史だった。授業の前に、川影の小南が出てきた。簡単な挨拶の後、合宿の狙いについて語った。

「皆も忍びになる子ですから、試験中は他里の情報を集め、自身のライバルとなる子に目星をつけたことでしょう。負けたくない気持ちは成長を促します。存分に競争してください。一方で、忍びの基礎は、たった2週間で身につけられるものではありません。重要なのは合宿が終わってからです。それを理解した上で、ここでしか得られないものは何かを考えながら日々を過ごしてください。忍びならば自分で答えを見つけることも必要ですが、厳密にはあなた方はまだ忍びではありませんから、授業を通して大人からアドバイスをします。と言っても受身ではいけませんよ。こちらから与える言葉をヒントにして、自分なりの解答を作ってみてください。では、初めの授業お願います」

小南は一礼し、去っていく。軽く拍手がわく。

ナルトとキバは彼女が何を言っているかチンプンカンプンで、美人だとかおっぱい大きいとか考えていた。

歴史は学者コースのフジタカが壇上に立った。いつものんびりした笑顔を浮かべている男だが、この場には柄の悪いガキがいっぱいいるので、睨まれてバツが悪そうだった。

授業のテーマは『これからの戦争』だった。フジタカとしては『これからの平和』という題にしたかったが、柄の悪いガキは平和という名詞だけで拒絶反応が出るので、仕方なく重い言葉を使ったのだ。た。

「試験お疲れ様でした。結果が気になってらっしゃる方も多いでしょう。そこで、というわけではないのですが、授業に関係しているので、第一問の解答から始めたいと思います」

歴史は嫌われやすい教科だ。テストに絡めて興味を引くのはフジタカの得意技だった。

「問題は、『現在の一国一里制度はどのようにしてできたか。部族制、千手一族、五大国、の三つの言葉を使って書け』というものでした。で

は、そうですね。当ててみましょうか」

フジタカは桃隠れの生徒を探した。1人の生徒と目が合う。その生徒はとても苦い顔になった。

「すみません。当てやすいので私の長男に答えてもらいます。トウヤくん、お願いします」

「ぐっ」

トウヤはナルトと同じ年だった。学年が上の連中に「親子鬣肩かよ」睨まれ、気分はよくない。

しかし、反発すると余計に睨まれるだろう。それが分かっているからサツと立ち上がって答える。

「えーっと、もともと忍者は部族ごとに固まってやっていた。近所だとしても、他部族は敵。むしろ、近所だからこそ殺し合いが多く、より憎しみあっていた。が、これではいつまで経っても殺し合いから逃れられない。嫌気がさした千手一族の当主、千手柱間は、うちは一族の当主、うちはマダラと手を結んだ。当時力の強かった千手とうちはが手を組めば、どこの部族も手が出せなくなり、平和になるという目論見だった。柱間の思想に共感し、日向、猿飛、奈良など、今の木の葉にいる部族も集まってきた。そうやって、木の葉隠れの里ができた。実際、木の葉隠れは一時の平和を作った。それを見て、他の部族も里という制度を真似ていった。五大国にそれぞれ忍び里ができた。一国一里にしたのは、いろいろ理由が考えられるが、一番は依頼主を国で区切るためだろうな。そうやって管理しないと、同国の政権争いに巻き込まれてしまうから。……っと、こんな感じでいいですか？」

トウヤは恥ずかしそうに言った。フジタカが笑顔で頷いたのを見て、そそくさと座った。

桃隠れの子ども達から拍手と歓声がわいた。黄色い歓声が多かった。トウヤがイケメンだからだ。

「はい。ありがとうございます。満点でもいいのですが、うちは採点が厳しいので、30点満点で20点くらいでしょうか」

本来はもう少し点がもらえるが、フジタカは息子を逆鬣肩して低めに採点しているので20点になるのだった。

「えー、また知人で悪いのですが、補足をお願いします。カムイクンお願いします」

その瞬間、場がざわめいた。

えっ。知り合いなの？ どのカムイ？

女子達が口々に疑念を述べる。彼はのほほんとした一般人とは対極の存在なはずである。しかし“大蛇丸の息子”は、温和な表情で「はい」とうなずき、立ち上がった。

ほんとに知り合い!? というかあんな顔するの!?

「トウヤの解答でも悪くはありません。が、あえて付け足すなら、全ての里が平和的に手を結んだわけではないということ。むしろ、力あるものが統治するという力の論理によって、支配勢力を増やしていった場合が多いです。もちろん、木の葉に対抗するためにそうせざるを得なかった面もあります。ですから、纏めるなら、隣人との平和を望む者と、大国に蹂躪されなかったために勢力拡大を望む者の思惑が一致し、力の論理によって里を作った、という感じでしょうか?」

「ええ。すばらしいです。満点の解答です。ありがとうございますました」

フジタカがカムイに拍手をする。木の葉、桃、からも大きな拍手が巻き起こる。カムイは控えめに一礼して着席した。その仕草がさらに女子達のハートをつかんだのだった。

「きやーっ! 博識!」

「あんなにすごいのに偉ぶったりしない! なんて完璧なの!」

「すげえってばよ」

ナルトはさらに尊敬を深めた。カムイの言っている内容自体は分からなかったが。

「俺も2年経てば」

サスケはカムイをライバル視しているので、ギリと歯を噛んだ。

イノは他の女子と一緒にキヤーキヤー言った。それをサクラに咎められた。

「ちよつと。他の男の人に色目使っちゃダメでしょ?」

「悪い? かつこいい先輩をかつこいいと思うのは当然でしょ? だ

いたいあんたもそう思ってたんでしょ？ 純情ぶってんじゃないわよ」
イノは開き直り、逆にサクラに詰め寄った。

さて、授業は進んでいく。フジタカは、木の葉隠れ、砂隠れ、雨隠れ、石隠れ、桃隠れ、東草隠れの順に里の成り立ちを説明していった。次いで、どのようなように同盟軍が誕生したかを語った。ダンゾウ、日向一族、現風影の青年団、が元々トグロと険悪な関係だったことも隠さず語った。もつとも、どのようにその関係を改善したかにより重きを置いたが。

なお、この時点でナルトとキバは眠ってしまった。

同盟軍の話が終わり、ようやく本題となった。

「第三次忍界大戦は、同盟軍の力によって終結しました。同盟軍は世界最強の力を誇ります。力の論理でいえば、どこの組織も逆らえませんが、岩、雲、霧が同時に手を結ぶようなことがあったとしてもです。実際、世界には一時的な平和が訪れました。しかし、その同盟軍によっても、完全な平和は実現できませんでした。つまり、力の論理だけでは防げない戦いがあるのです。その戦いをどう防ぐか。どう民を守っていくか。それが皆さん若い世代の課題です。方法はいろいろ考えられるでしょう。さらなる力で押さえつけるのか。監視の目を強固にするのか。話し合いで理解を求めるのか。新術や新技術の開発が、新たな可能性を生むこともあるでしょう。もちろん、未来は誰にも分かりません。私が挙げたどれもが不正解かもしれませんが、しかし、歴史の中にヒントが隠されていることもあるでしょう」

ふと、「ふああー」と大きな欠伸が聞こえた。なおも「ふああー。ふああー」と続く。欠伸というよりイビキらしい。犯人はアバレだった。ナルトの「サクラちゃん、もう食べられないってばよ」という寝言も続く。梅太郎からは「お、お母様」の声も。

現在、ナルト、キバ、梅太郎、アバレの4人が盛大に眠っていた。サクラとイノが、それぞれナルトとキバをぶん殴った。梅太郎とアバレは、桃隠れの娘が起こした。

「ひゃああつ！ サクラちゃんが急に母ちゃんに！」

「おい赤丸！ お前俺の肉食ったな！」

「ひいひいっ！ イナリ寿司で許してえ！」

「カチコミか！ どの組のもんだオラア！」

それぞれ寝ぼけを披露しながら起きた。

フジタカは困り顔で講義を再開した。

「お疲れでしょうか。では、こうしましょう。今から問題を出しますから、皆さん答えを考えてみてください。周りと相談してもかまいません。いえ、各里で1つずつ答えを出すことにしましょう。後で代表者に発表してもらいます。ただし、答えを知っているトウヤクんとカムイくんは無しでお願いします。では、問題です。忍びの始祖、六道仙人。1000年以上前に生きていたかもしれない伝説の人物とされています。しかし実は、彼の思想や、彼がどうやって平和を実現しようとしたかを知る方法があります。それはどのようなものでしょうか。お答えください。15分さし上げます。ではどうぞ」

それぞれの里ごとに話し合うことになった。

カムイがいなくなったので、木の葉は代表者の選出に揉めた。カムイがやれやれと出てきて、日向ネジを代表に指名した。

カムイと同年代の子がカムイに詰め寄った。

「なっ、あいつ年下じゃねえか」

「こんな話し合いでいちいちケンカしているやつに代表の資格はない」

「何!？」

「おいカムイ！ お前最近調子に乗りすぎだろ！」

「俺に文句があるのか？」

カムイが同年代の子を軽く睨んだ。彼等は途端におとなしくなつて、カムイの言葉に従った。

ネジは各学年で10分話し合うように言った。残り5分でそれぞれの意見を出し合い、自分が纏めるとも。

「ねえサクラ。あんたなら分かる？」

イノはまずサクラに尋ねた。他のメンバーも聞き耳を立てた。ペーパーテストの成績はいつも彼女が一番いいと知っているからだ。シカマルが真面目に受ければ逆転するが、彼は滅多に真面目に受けな

い。

「分からないわねえ。1000年前のことでしょ？ 昔は文書があったのしょうけど、時が経つにつれて偽の文書が出回っていくでしょう？ どうやって本物を見分けるのか」

「そっか。あんたでも分かんないのかあ」

イノはため息を吐いた。サクラは、むむっ、と眉間を寄せていた。「っーかさあ。これ忍者と何の関係があるわけ？ 俺たち修行しに来たんだってばよ」

「そうだよなあ。勉強なんてかったりーぜ。歴史とか知って何になるって話だぜ」

ナルトとキバは早くも思考を放棄し、愚痴を言っていた。

「だからバカなのよ。あんた達は」

イノがつぶやいた。

「なんだとお！」

キバがイノに食って掛かり、それをチョウジが止めた。

「シカマル。分かる？」

チョウジはシカマルに尋ねた。シカマルはポケットと天井を見ながら考えていた。

「いや、分からん」

「そっか。シカマルにも無理なのか」

「むきー！ こんなの考えて何になるってばよ！ 答えだけ知ったらいいってばよー！」

「そんなこと言っつて、どうせ答えを聞いても覚える気ないでしょ？」

「そ、それは……」

サクラのツツコミを、ナルトは笑って誤魔化す。キバがナルトをバカにして笑い、イノが「あんたもよ」と釘をさす。いつものパターンだった。

その時、桃隠れ方面から歓声が上がった。

「それだ！」

「よくぞ閃いた！」

「チツ。正解かもな」

「たまには褒めてやる。正解だったらな」

「でも、卑怯です！ こいつはお母様がクラマさんなので！」

「ふっふっふ。もつと褒めてくれてもいいんだぜ？ だーっはっはっはっはー！」

梅太郎が正解を思いついたらしい。盛大に笑っていた。

あいつ、バカっぽいと思っていたのに、勉強まで……。

このままでは、自分達はたった一人に戦闘も勉強も完敗してしまふ。ナルトの中で焦りのようなものが生まれた。

「シカマル！」

ナルトは叫んだ。このメンバーで最も頭が回る男に答えを見つけてもらうために。

「チツ。めんどくせーが、やるしかねえな」

シカマルは床に座り込み、胡坐をかいた。本気モードである。

イノ達もシカマルを祈るような気持ちで見つめた。ナルトと同じく、全員合わせても梅太郎一人の能力に劣るというのは耐えがたかった。

10分後、シカマルは額から汗をかきながら息を吐いた。

「ふう。情報が足りないが、勘でいくしかないか」

ネジの周囲に集まり、学年ごとに答えを述べていった。シカマルの案が全面的に採用された。

代表者がフジタカの周りに集まり、答えを紙に書いていった。

雨と東草の解答は同じような感じだった。残っている文書や口伝から、地道に本物を探すというもの。

砂の解答は風影の長女テマリが行った。

「世の中には死人を蘇らせる術がある。それで六道仙人本人か、近い人間を蘇らせればいいのさ」

周りからは「そんなのありかよ！」「木の葉の卑劣な術のことだな！」という声が上がった。

桃は現川影の長男が答えた。

「世の中には尾獣つてのが9体いる。彼等は六道仙人の時代から生きていて、六道仙人のことをよく知っている。だから彼等に聞けばいい

い」

周りからは「そんなのありかよ!」「本当にいるのか!?!」という声が上がった。

木の葉からは日向ネジ。

「六道仙人は月を作った。我々は未だ月に到達していない。よって、あそこには六道仙人の残した遺跡が手付かずのまま残っているはずだ。それを調べればいい」

周りからは「そんなのありかよ!」「すげえ!」これは正しい!」「待て! 遺跡があるとは限らないぞ!」という声が上がった。

一番反響が大きいのは木の葉の解答だった。誰でも知っている知識を使い、なかなか思いつかないアイディアを出した。頭の回転のよさが子ども達の心を捉えた。

フジタカは、全てが正解だと言った。特に木の葉の案が素晴らしいとも。

そして講義が再開する。現実的には、桃隠れの案と雨隠れの案を併用して研究を進めていつている。そうして分かった新事実がある。という話になる。

「六道仙人の生きていた頃、実は、チャクラを扱う手段のことを、忍術ではなく忍宗と呼んでいたのです。2つの違いは、戦う術か、平和を実現するための思想か、とさえばいいでしょうか。チャクラ自体も、もとは人と人の心をつなぐためのものであったそうです。と言っても、心と心を直接繋ぐ術だけが、正しい忍宗の技というわけではありません。技である必要もありません。講義の初めの話を覚えていますか? 千手柱間が、うちはマダラと手を結んだときに言った言葉です。腸（はらわた）を見せ合うことができれば、戦いなんてしなくなる。実際、柱間とマダラは互いが互いの平和を望む心を理解し合い、手を結ぶに至りました。これです! 実は、六道仙人の考え方は、今の時代にも通じることだったのです! おもしろいのは、滝隠れで、思念を感知する忍びのことを“新型”と呼んでいることでしょうか。本当は“旧型”の忍びと呼ぶべきなのかもしれませんね。それが悪いという意味ではなく」

その時、鐘が鳴った。授業終了を知らせる合図だった。

「ちようどいい時間に終わりました。では、講義はおしまいです。皆さんこれから2週間頑張ってください」

そうして長い講義は終わった。

生徒達はしんどそうに伸びをしたり、講義の感想を言い合ったりした。女子はカムイに対する感想が多かったが。

しばらくの後、5人の教員が講堂にやってきた。手には数十枚の紙を持っていた。名前を呼び、それを一枚ずつ生徒に手渡していく。試験結果が書かれていた。

「いよっしやあああ！ 初の400点超え！」

「チツ。負けたか」

「あんなに勉強したのに……」

己の結果を知った生徒が、様々な反応を見せる。

ナルト、サクラ、イノ、シカマル、チョウジ、キバは、もらった場所では結果を見なかった。一斉に見せ合うことにしていたからだ。

「まだ見てないわよね？ セーので見せ合うわよ」

「き、緊張するってばよ」

ナルト達がごくりと唾を飲み込む。

「セーのっ！」

イノの超えに合わせ、一斉に成績表を出す。

「こ、これは……」

「読みづらい。えーっと、Dが2つでFが1つ。この場合、どうなるんだってばよ」

「単純に足し算でいいんじゃないかねえか？ それぞれ点数も書いてるだろ」

「えーっと、三桁の足し算はちよっとお」

「バカねえ全く。貸してみなさい」

結果は以下の通りだった。

名前	忍術	体術	紙試験	合計
ナルト	121	143	17	281
サクラ	155	85	108	348

イノ	118	117	84	319
シカマル	115	114	191	420
チヨウジ	116	115	65	296
キバ	113	141	18	272

「いよっしゃあ！ 勉強でナルトに勝ったぜえ！」

「総合的には負けてるけどね。勉強も目くそ鼻くそだし」

「い、言わないでくれ」

「というかシカマル！ あのテストで200点近く取れたの!? アカデミーどころか下忍レベル超えてんじゃないの!?!」

「まぐれだ。気にすんな」

キバ、シカマルに、イノ、サクラがそれぞれツッコんだ。

ナルトはいつもより成績が悪いことにガツカリした。紙試験の比率が高いせいでとシカマルに慰められた。

サクラは逆にいつもよりかなり成績がいいことに喜んだ。紙試験もいいが、忍術がこの中で断トツ一番だ。チャクラコントロールの試験がほとんどだったので、実践で強いかどうかは分からないが。

チヨウジとシカマルは「シカマル。珍しく本気出したんだね」「ま、こんな時くらいはな」というやり取りもした。

サスケは6人の成績を覗き見て、苦しい顔になった。総合でシカマルに負け、サクラともあまり変わらない。しかし、忍術と体術の合計で見ると、自分がある程度離してトップである。自尊心は守られた。

シノも内心はサスケと同じような反応だった。誰も見てくれないが。

ヒナタは、自分の成績を見て理由なくとりあえず落ち込み、次いでナルトの成績からいいところを探した。その結果以下のような感想になった。ナルトくんはやっぱり体術がすごい。私はダメだな。姑息にも偶然高い点を取っちゃった。

サスケ、シノ、ヒナタの成績は以下の通りである。

サスケ	141	151	78	370
シノ	131	136	94	361
ヒナタ	174	135	83	392

さて、木の葉隠れのメンバーには成績の気になる男がいた。桃隠れの梅太郎である。

おそらく自分達より上だろう。しかし、その差がどれほどかを知っておきたい。試験の数値が全てではないにしても。

「こつからじや見えないってばよ」

「でも、わざわざ聞きに行くのもねえ」

ナルトとサクラが遠目に梅太郎を見ながら言う。

梅太郎は桃の仲間と成績を見せ合っていた。そして、不意に崩れ落ちた。

「う、うわあああ！ 母ちゃんに殺されるう！」

どうやら結果は芳しくなかったらしい。サクラはホツと一息ついた。ナルトは難しい顔だ。ライバルは強いほうが盛り上がると思っているからだ。

「えっ!？」

と、そこで不意に、ヒナタが声を漏らした。ナルト達の視線がヒナタへ向いた。

ヒナタは目の周りに血管を浮き上がらせて、梅太郎の方を見ている。白眼で梅太郎の成績を見たのだろう。

「ヒナタ、どうしたってばよ！」

「見たのね！ あいつの成績！」

「ヒナタ。俺にも教えろ」

ナルト、サクラ、サスケがヒナタに詰め寄った。

ヒナタは、言わないほうがいいかもしれないと思った。

「ヒナタ、教えてくれってばよ！」

が、ナルトに見つめられたので、話してしまうことにした。

「た、たぶんだけど」

本当は完全に見えていたが、一言断りを入れた。こういう性格なのである。

「それでいいってばよ！」

「に、忍術、243」

「に、200う!？」

「体術、301」

「なっ!? 300う!?」

「紙試験、51」

「51い!?」

忍術と体術の飛びぬけた成績は、木の葉の全てのメンバーにとって衝撃的だった。勉強の数字はナルトとキバにとって衝撃的だった。

「ごめんさいー!」

ヒナタは何故か謝り、走って逃げていった。梅太郎のことが衝撃的過ぎて、誰も追いかけることができなかつた。

しかも、梅太郎は今、ガックシと両手両膝をついているのである。いつもはもつと点が取れるということ。実際取れるはずだ。試験中の彼は、徹夜と母からのお仕置きでボロボロだったのだから。

「テストなんてどうでもいいじゃねえか。おめーいつから真面目ちゃんになったんだ?」

アバレが梅太郎に近づいた。

「か、母ちゃんが、同じ年だったイタチさんに勝てないと八つ裂きにするって……」

「へえ。あいつ何点だったんだ?」

「598」

「うぷつ。たった3点差じゃねえか! 間抜けだなあ!」

「く、くそーっ! 徹夜さえ無ければ! もう20点は確実に取れたのにい!」

イタチの名前に、サスケが衝撃を受けた。

憧れの兄。しかし、父はいつも兄と自分を比べ、兄ならもつとできたように言う。

それが、全くの事実だった。兄は桃の化け物連中と渡り合っていた。しかし、自分はぬるい木の葉で悦に入っている道化だったのだ。「くそっ!」

サスケは地団駄踏み、講堂から出て行った。

素晴らしき桃色の青春

桃隠れでは労働と修業が一体になっている。

ナルト達は、水汲み、薪割り、狩り、火起こし、山菜採集などの肉体労働を、トレーニングを意識しながら行った。集めた食材などは、サービスコースのメイド達に届けた。

日が傾きかけた頃、生徒達は1から8までの番号を書いた紙を渡された。番号ごとのチームになってゲームを行うという。ダム近くの大広場で、それぞれの番号ごとに別れて集まった。木の葉隠れでは、ナルトとヒナタが1、サスケとサクラが2、イノとカムイが3、シカマルとシノが4、……、などとなった。指導役と他の里の生徒を合わせて、各数字に15人集まった。

「ナ、ナルトくん。頑張ろうね」

不意に、ヒナタがナルトに言った。

発言にはかなりの勇気を要したが、ナルトはサクラとサスケの方を見たまま動かなかつた。声が小さくて聞こえなかつたようだ。

不意に、ナルトもつぶやいた。

「くうー。サスケのやつ、羨ましいってばよお」

「えっ」

ヒナタは固まってしまった。

ナルトがサクラを好んでいることは知っていた。しかし、目の前にいる自分を完全に無視して、サクラばかり見るのはショックだった。

ヒナタの目が徐々に潤んでいく。

「はい注目。今から「シュキ」というゲームを説明するよ」

1番の組にあてがわれた指導役が、パンパンと手をたたいた。メガネをかけた若い男だった。強そうには見えない。

「ルールは簡単。あの辺りに盛り上がった土俵が4つあるだろう？」

メガネの男は盛り上がった円形の土を指差す。それぞれ直系50mくらいで、高さは50センチくらいあった。

また、土俵には7個のボールが半分だけ埋められていた。ボールの1つは土俵のど真ん中に埋められていて、色は赤。残り6つは、真ん

中のボールを中心とした正六角形を描くように埋められていた。正六角形の一边は約10m。ボールの色は青。

「攻撃と守備に別れて行う。攻撃側は、時間内に赤いボールを持っていれば3点。青いボールを持っていれば1点。守備側は、ホールドによって攻撃側を捕まえる。女が男を捕まえれば2点。他は1点。ホールドは攻撃側1人につき守備側2人まで。攻撃と守備は代わりばんこで5回ずつ。時間は一回の攻守につき1分で、休憩も1分。始めの合図の時点で、守備側は正六角形の外接円の内側にいなければならぬ。内側ならどこでもいい。攻撃側は土俵の外ならどこでもいい。始めの合図で攻撃側が土俵に上がる。守備側攻撃側ともに、それ以降土俵の外に出てはならない。土俵内は自由に動ける。守備側は埋められたボールに触れてはならない。抜き取ったボールは自由にしている。攻撃側守備側ともに、打撃、投げ技、忍術などは全て禁止。破ったらそれぞれ減点1。悪質な場合は退場もあるよ。おっと、例外的に、女性が男性のホールドを外すための打撃なら許されるよ。うん、こんなものかな。何か質問は？」

メガネの男が尋ねる。

赤髪の少年がそろそろと手を挙げた。目堀が深く、額に愛の刺青があるのも特徴的だった。

「はい。砂隠れの我愛羅くん」

「僕の名前を？」

「有力者のデータは全て入ってるからね」

メガネの男は得意げに頭を指で叩いた。

「ホールドとはどんなものなの？」

「うん。いい質問だ。1度僕達でやって見せるからそれを参考にしてね。他に質問は？」

質問は出なかった。

いや、ナルトがムスツとした顔で言った。

「ゲームはいいんだけどさあ。これどうやってチーム別けしたんだってばよ」

「当然、実力が均等になるようにさ。僕も含めてね」

「ええーっ、お前も入んの!？」

「失礼なやつだなあ。僕は上忍だよ?」

「上忍って確か、一番偉いやつ!? お前が!？」

「全く。クシナさんともあろう方がどういう教育をしてんだか」

「か、母ちゃんは関係ねえだろお!」

ナルトは怒鳴り、メガネ男に対しギチギチと歯を噛みしめる。そこで、ピンク髪の少女が2人の間に割って入った。

「カブトさん。他にやることはありませんでしょう。まずは自己紹介とそれぞれの実力の確認を」

少女はゲームの事情を理解しているらしかった。おそらく桃隠れ出身だろう。

「ああ、ユリ。そうだね。でもちよつと待ってくれ。そろそろ実演の時間だ。君も来るかい?」

「えっ!? い、いえ、私にそんな実力は……」

カブトは周囲を見渡し、他の指導役の進行状況をチェックした。他の指導役は腕で丸印をつくり、カブトに準備完了を知らせる。カブトが口笛を吹く。指導役が土俵の1つに集まっていく。

「なんであいつが……」

何故か、指導役の中に梅太郎もいた。既に教員レベルだというのだろうか。ナルトのライバル心や嫉妬心がメラメラ燃えていく。

「呼ばれたやつは出てこーい! カムイ、テマリ、正重、新一、哀、アバレ、モモカ、ココア、サン、レモン、トウヤ、雪芽、吹雪丸、エンジ、雪乃!」

カブトの言葉でそろそろ生徒が集まっていく。ほぼ桃隠れだが、木の葉と砂と雨隠れの生徒もいた。実はカムイ等は、以前に桃隠れの合宿に参加したことがあった。だからこのゲームを知っている。知り合いがいたのもそのためだ。

「なんか、ピンクっぽい髪の毛のやつがいっぱいだってばよ」

ナルトの感想だ。桃隠れにはピンク率が高かった。赤や紫も多いが、それもピンクっぽい言葉に含んでいる。

「うちはお父様を筆頭に、赤髪の毛のうずまき一族が多くいますからね。」

それに、長門さんとサソリさんも赤髪ですし。ミゾレさんやアラレさんは藤色ですし」

近くにいたユリが答えた。かく言う彼女もピンクである。

サクラと同じ髪色で、顔もなかなか美少女だったので、ナルトはドキリとしてしまった。

「ふ、ふーん、ってばよお」

ナルトは緊張を誤魔化すように言った。

そこで、不意に誰かがナルトの袖を引っ張った。

「ナ、ナルトくん！ 試合始まるよー！」

ヒナタだった。

「わ、わりいー！」

ナルトはニカリと笑い、試合に目を向けた。

ナルトの視線の先にいるのは、やはり梅太郎。今は攻撃側だった。

審判役はカブトの分身。

「始めー！」

その分身の合図で試合が始まった。攻撃側が一斉に中に入る。

その瞬間、梅太郎の姿がパツと消える。ナルトは彼を見失ってしまった。

「クソツッ！ 速いってばよー！」

「ウラウラウラアア！」

梅太郎の声だけが聞こえた。他の指導役もとてももすばやい。見えるのは生徒達だけだ。

「ホールド！」

「うっ」

「ホールド！」

「うわっ」

と、2人の女指導役が、攻撃側男子の1人に次々と抱きついた。少年の前からと後ろからで、手足を使ってガツチリホールド。男子はもがくが、どうにもならない。

それ以上に、とても羨ましい。

「こ、これがホールド。すげえってばよお」

さすがは桃色の里。ナルトのみならず男子達は思った（サスケ等除く）。

ナルトは思わず鼻血を垂らしてしまった。ヒナタがティツシユを取り出し、サツとナルトの目を覆った。

「うわっ!?! なんだ!?!」

「ご、ごめん。間違えちゃったっ」

ヒナタは謝り、今度はティツシユをナルトの鼻の下につけた。さすがに鼻に突っ込むまではやらない。

さて、そうこうしているうちに一回の攻撃は終わる。

カブトの分身が点数を計算する。

守備側は、5人の女子が男子に抱きついていて。攻撃側は、1つの赤ボールと2つの青ボールを持っている。

「攻撃5点!・ 守備9点!」

カブトの分身が言った。

とりあえず、ルールはだいたい分かった。ナルトは右の拳を左の手のひらに打った。

「あれ? 守備側は10点じゃ……」

ふと、ヒナタがつぶやいた。

「雪乃くんは男なのですわ」

「ええっ!?!」

ユリの言葉に、ナルトとヒナタが衝撃を受けた。どこからどう見ても女である。美少女と言っていていい顔で、服装も女物の着物だった。

カブトが1番チームの輪に戻る。全員で自己紹介をしていく。

終わると、軽く“シユキ”の練習をする。カブトが中心になって競技のポイントを伝える。

「ボールを持っている人をホールドしたら、そのボールを奪って土俵の外に投げ捨てること。それができないと相手に点が入っちゃうからね」

「なるほど」

体を使った練習で、ナルトもルールを覚えることができた。本当のところを言うと、口頭の時点ではチンプンカンプンだった。

今日は4チームずつに別れて、各チーム3戦ずつのリーグ戦。結果がよかった順に、夕食、風呂、寝室などが豪華になる。特に、1位のチームは寝室が男女兼用である。さすがは桃色の里であった。

ナルトの初めの対戦相手は2番チームだった。サスケとサクラのいるところだ。

「サ、サクラちゃん。これはゲームだってばね。恨みっこなしってばね」

「うげえ、ナルトお。サ、サスケくうん！ けどものから私を守ってえ」

「オレは本気で勝ちにいく。お前も真面目にやれよ」

「ご、ごめん。サスケくうん」

サクラは落ち込んだ。ヒナタもナルトの後ろで落ち込んだ。

さて、試合が始まる。ナルトは守備側でサスケは攻撃側だった。

合図と共に、2番チームの指導役の男が真ん中の赤ボールに突っ込んだ。ナルト達にはほぼ見えない。が、カブトが防いだらしく、気付いた時には指導役はカブトに捕まっていた。後ろから抱きつく形で。そこにユリが突っ込み、前からもホールドした。2番チームの指導役は「クソツ」と言ったが、にやけ面だった。

「チツ」

遅れて、サスケがナルト近くの青ボールに突っ込んだ。

「サスケエー」

ナルトが意気揚々と迎え撃つ。

互いに細かくステップを踏み、一方は捕まえようとし、一方は逃れようとする。

「ぎゃあー」

ふと、サクラの悲鳴が聞こえた。ナルトはそちらに気を取られてしまふ。その隙にサスケがナルトを突破する。

「あっ」

「ふん」

サスケはボールを蹴り、味方にパスをした。そのまま逃げていく。「クソツ！」

ナルトは悔しがりつつ、サクラの方を見る。サクラはお尻を地面につけて座り込んでいた。チャンスのはずだが、サクラの前にいる我愛羅は、なぜかサクラに謝っていた。

「ご、ごめん。母さんが……」

「母さん？」

「1番チーム減点1！ 忍術の使用禁止！」

審判役のカブトの分身が言った。どうやら我愛羅が忍術を使ってしまったらしい。

サクラは立ち上がり、サツと我愛羅から逃げた。

「むふふっ！ 逃がさないってばよ！ サクラちゃん！」

ナルトはスケベな笑みを浮かべてサクラへと駆けた。

体術の実力はナルトの方が上なので、簡単に追いつく。

「うわっ。サ、サスケくうん」

「ふっふっふ。覚悟お！」

ナルトはよだれを垂らしながらサクラに飛びつく。

サクラは目を潤ませ、身をかがめる。かと思ったら、急に拳を握り締め、歯を食いしばった。

「しゃーんなろー！ー！」

サクラは叫び、体重の乗った右ストレートを放った。

「へっ？」

拳が、ナルトの顔面に深くめり込んだ。

「ぶへえええっ!？」

ナルトは鼻血を出しながら吹っ飛んでいった。大ダメージである。一発で行動不能になってしまった。

などなどがあり、結局2組が勝った。

ナルト、ヒナタ、我愛羅が精彩をかき、足を引っ張った。特に我愛羅が減点を食らいまくった。逆に、サスケとサクラはよかった。

「サスケに負けたってばよお。いつつつ」

「ご、ごめんなさい。私のせいだ」

「僕もごめん。母さんが女の子に触れちゃダメって言うんだ。勝手に砂が……」

それぞれが1組の輪に戻り、反省を述べた。
カブトが困り顔でまとめた。

「しようがない。我愛羅は男のみを相手してくれ。それと、女の子に近づかれないように注意だね。ナルトは周りをよく見るように。自分勝手に動き回ると仲間の迷惑にもなるよ。ヒナタはどうしたんだい？ 君らしくもない」

「すみません。迷惑をかけます」

「分かったってばよ」

「ご、ごめんなさい。次は頑張ります」

我愛羅、ナルト、ヒナタの順で応じる。

しかし、次の3番チーム戦も、その次の4番チーム戦も、この3人が足を引つ張った。結局1組チームは全敗してしまった。逆に2番チームは全勝だった。

ゲームの後、皆で食堂に向かった。食事はサービスコースの学生達が提供するが、ゲームの結果がよかった組ほど、成績のいい学生の料理を食べられるのだった。食材自体もこちらの方が高級である。

とは言え、皆、修行とゲームで疲れているので、なんでもかんでもおいしい。男子達はガツガツと食べていった。女子達も、人によってはおしとやかでない。一番食べていた女子はヒナタだった。日中のストレスをぶつけるように、食材を胃袋に詰め込んでいった。

食事の後、結果のよかった組から順番に風呂に入った。

風呂を待つ間、ナルトは“シユキ”の練習をするために、我愛羅とヒナタを呼んだ。“シユキ”は毎日行われると言っていた。これ以上足を引つ張りたくなかった。我愛羅とヒナタもうなずいた。我愛羅は単純にうれしそうに。ヒナタは顔を赤くして、鼻息荒く。

まず、ナルトとヒナタの対一。

「行きますー！」

「通さねえぞー！」

「くっ」

ナルトとヒナタでは、若干ナルトの方が体術が上だった。

ヒナタは追い詰められ、抱きつかれた。

「ほいつ」

「ひゃあんっ」

「ふふふ。捕まえたってばよ」

「捕まっちゃった……」

ヒナタはとてもドキドキした。目の前にナルトの顔。ナルトの胸が自分の胸に当たっている。

我愛羅は状況を察し、ヒナタにぱちぱちと拍手を送った。

「ヒナタ。女子は男子に捕まりそうになったら殴ってもいいんだってばよ」

「う、うん」

ナルトから助言があって、もう一度。

「行くってばよ！」

「う、うん」

ナルトが突っ込み、ヒナタが柔拳で構える。

「そりゃっ」

「えっ、えいつ」

ナルトが飛び込む。ヒナタは掌底を繰り出す。ナルト相手に本気は出せず、へろへろだ。

「甘いつてばよ！」

「ひゃっ、ひゃあああんっ！」

そして、また抱きつかれてしまった。甘ったるい嬌声が星空に響いた。

次いで、ナルト對我愛羅。

こちらはとてもいい勝負だった。あえて言うなら、若干我愛羅が優勢だった。

「やるじゃねえかってばよ！」

「あ、ありがとう」

「でも、どうしてゲームでは砂を使ったってば？ ずるしなくても」

「それは……」

我愛羅は悩んだ。言ってもいいものかどうか。父や姉からは、無闇に口に出すなど言われている。自分でもあまり知られたくないと思

う。

が、何故かナルトになら知られても構わないと思った。ヒナタも悪い子には見えない。

「実は、僕の中には母さんが……」

我愛羅は語っていく。

我愛羅が6歳の頃、砂隠れは謎の集団から襲撃を受けた。敵は皆が写輪眼を持っており、とても強力な幻術を使った。風影の護衛達がなすすべなくやられ、その一部は敵の操り人形になった。

敵の幻術を受けないためには、敵の眼を見なければ良かった。しかし、それはこちらが目を閉ざして戦うことを意味する。それができる忍びは多くない。その上、感知が得意な忍びは、敵に優先的に狩られていた。敵は綿密に計画を練っていたのだろう。残っている感知ができる忍びは、風影含めて極僅かだった。

そんな状況で、我愛羅は感知ができる人間の1人だった。まだ6歳で力は弱い、生死がかかっている場所で贅沢は言っていられなかった。我愛羅は戦場に立ち、仲間に敵の居場所を指示する形で風影側を援護した。

それでも風影側は不利だった。不意に、我愛羅の母が「この子と私の思考をつなぐ！ そうすれば！」と言った。風影は混乱したが、我愛羅の母は止まらなかつた。尾獣に使うような封印術を己に使い、身体をまるごと我愛羅に封印してしまった。

我愛羅と母は精神を共有し、チャクラも共有した。我愛羅の感知能力と母のすさまじい馬力が合わさり、幻術使い達を蹴散らしていた。

そして現在に至る。

「つまり、どういうことだつてばよ？」

ナルトの感想である。ヒナタも途中からよく分からなかつた。

「僕の中には母さんがいるんだ。女の子に触れようとすると、砂が出てきて邪魔するんだ。結婚するまで待ちなさいって」

「よく分かんないけど、それじゃあ手もつなげないつてばよ」

「いつもはここまで口出ししないんだ。でも、桃隠れに来てから母さ

んの様子がおかしいんだ」

話はよく分からないが、我愛羅は女の子に触れないらしい。試しにヒナタが触れようとすると、ふつうに触れた。

「触れたってばよー。 どういうことだってばよー」

ナルトが我愛羅に怒った。

「ご、ごめん。でも、こういうのなら構わないって母さんが。抱きつくのはダメらしいけど」

その後も、3人で“シユキ”の練習を続けていった。

ナルトがヒナタに抱きつくたび、ヒナタは嬌声をあげた。逆にヒナタがナルトに抱きつくとき、「ご、ごめん!」、と謝つてすぐに離してしまうのだった。我愛羅がヒナタに抱きつくとき、ヒナタが我愛羅に抱きつくときとすると、砂が出てきて邪魔をした。

練習に盛り上がっていたので、風呂に入るのが遅れてしまった。

我愛羅とナルトは2人で風呂に入ろうとした。ところが、そこにカブト、雪乃、白がいた。雪乃と白は雪一族の血を引いており、女顔。髪も長かった。カブトも女顔であり、メガネを外すと印象が全く違った。

「ご、ごめん!」

「間違っただってばよー!」

ナルトと我愛羅は急いでもう1つの風呂場へ走った。

中に入ると、カブトっぽい背格好で、カブトと同じメガネをかけた女性がいた。修道着を着ていた。

「あら? 君達こっちは……」

ナルトも我愛羅も慌てていたので、彼女のことをカブトだと思った。

彼女の他にも、吹雪丸という少女がいた。雪一族の娘であり美少女だが、武士に憧れていて、いつも男性の格好をしていた。髪も短かった。この時パンツ一枚だったが、男子にその姿を見られても何とも思わなかった。

「焦っただってばよお」

「僕も。驚いたよ」

ナルトと我愛羅はようやく風呂に浸かることができた。大きくため息を吐いた。

その時、1人の少女がとても焦っていた。ヒナタである。ナ、ナ、ナルトくん。我愛羅くんも。ど、ど、どうしてここに！心の中で叫んだ。彼女はナルトの気配を察した瞬間、水の中に潜っていた。怒るとかそういう思考は全くなかった。

わ、私、間違えちゃったのかなあ!? もう！ 私のバカバカ！で、でも、ノノウさんも吹雪丸ちゃんもいたような？ どういうこと!? あれ？ もしかして、ナ、ナルトくんが間違えちゃったの!? ヒナタはブクブクと泡を吐きながら、水に潜り続けていた。

「いえーっい。てばよお」

ところが、そんなヒナタに全裸のナルトが近づいてきた。ナルトは泳いでいたのだった。

「ま、まずい！ ナルトー！」

不意に我愛羅が叫んだ。内側にいる母の声で、間違いに気付いたからだった。

「ん？ どうかしたってば？」

ナルトは泳ぐのをやめ、立ち上がった。ちようどのヒナタの真上であり、両足はヒナタの胸と股に乗った。

「あれ？ おつかしいなあ。足元がむにゅってなるってばよ」

ナルトは足元を見た。そして気付いた。ヒナタが自分の下にいて、ダラダラと鼻血を流していることに。

「ヒナタ!? なぜここに!?」

ナルトの絶叫が女風呂に響いた。ナルトは慌てて飛びのいた。

ヒナタは起き上がってこなかった。興奮のあまり気絶していたからだ。水を飲んでいたので、ノノウが慌てて治療した。

月に移って、お仕置きされちゃう

白ゼツはウサギ一号に暗殺者としての教育を施した。6年間自らが鍛え、常人の域を十分に超えたところで、滝隠れの下忍と模擬戦をさせた。

結果、忍術も体術も、ウサギ一号が圧倒した。結末は予想通りだったか、実力は期待以上だった。この世で一番と思えるほどの隔絶した才能。やはり母の生まれ変わりかもしれない。

しかし、ウサギ一号には暗殺者として致命的な弱点があった。感受性が強すぎることだ。相手にダメージを与えると、自分も痛いと感じてしまう。人殺しどころか、獣の狩りでさえ悶え苦しんでしまう。自分が殺さずとも、近くで人が死ねば発狂してしまう。

黒ゼツが言った。

「そいつがあと3年しても使えないようだったら、ギレンに貸してやって写輪眼量産の媒体に使え」

実は、神居結(かみいゆい)は度重なる実験で衰弱しきっていた。もうほとんど死者の念を呼び寄せることができなくなっていた。しかし、ウサギ一号にはそれができた。

白ゼツは焦った。かわいいウサギ一号が人体実験で廃人になる姿は見たくない。それまでたった3年しか時間が残されていない。

白ゼツは、ウサギ一号が人殺しに発狂しないように、様々な手段を試してみた。ある時は、無我の境地を目指して、共に滝に打たれたり、座禅を組んだりした。結果は逆に、ウサギ一号の感知能力が上がってしまった。またある時は、卑劣で有名な二代目火影の自伝を読ませた。自己犠牲と平和の精神を学んでしまった。またある時は、滝隠れの教科書を読ませた。様々な知恵を身につけ、愛のすばらしさを知ってしまった。

もう何もかもが逆効果だった。ウサギ一号は暗殺者と対極の生き方に憧れ、それが取り返しのつかないところまで来てしまった。もはや、黒ゼツの部下になることは不可能。人体実験をさせないためには、逃がすしかない。黒ゼツには死んだとでも伝えればいい。

白ゼツは黒ゼツの目を盗み、アジトを脱出した。目的地は月。浮いて月に行くのではない。地球には月に行くためのワープ装置がある。以前それを通して月に行き、外道魔像を盗んだことがあった。今回もそれを通るのだ。

月には大筒木ハムラの子孫がいる。ハムラは六道仙人こと大筒木ハゴロモの弟である。この兄弟は、絶大な力におぼれた自らの母を封印し、月に閉じ込めた。外道魔像はその母の一部である。ハムラは母が復活しないように、己の子孫を管理者として月に住ませた。

以上から、ハムラの子孫が外道魔像を盗んだ存在を覚えているなら、白ゼツを許しはしないだろう。しかし、以前見たハムラの子孫は温厚だった。もちろん中には危険な連中もいるが、少なくとも月を統治するハムラの直系の子孫は平和的だった。彼等ならば、自分はともかくウサギ一号を殺しはしないだろう。

白ゼツは特に理由を言わず、ウサギ一号をある洞窟に連れ出した。その奥に月へのワープ空間があった。

以前来た時と違い、トラップがいくつも仕掛けられていた。外道魔像を盗まれたことに気付いた連中が仕掛けたのだろう。ほとんどは幻術系のトラップだった。白ゼツには解除が難しかったが、ウサギ一号にはわけもなかった。

もう少しでワープ空間にたどりつく時、不意にウサギ一号が言った。

「おきな、一緒に月に来るんだよね」

ウサギ一号はギュツと白ゼツの手を握り締めた。

「なんでそれを？」

白ゼツは言っている最中にも理由に思い当たった。ウサギ一号は感受性がとても強い。他人の思考だって読むことができる。それで自分が胸に秘めている情報を盗み見たのだろう。

「おきな、あれ（私の意味）はおきなと一緒になら」

ウサギ一号は両目の白眼で白ゼツを見つめた。

この子にウソは通用しない。ならば、本気で思うしかない。

「うん。僕も一緒に月に行くよ。ひよっとしたら命を狙われるかもし

れないけど、その時はまた逃げればいいさ。一緒にね」

白ゼツは自分に言い聞かせるように言った。

「うんー」

ウサギ一号は笑顔で頷いたのだった。

さて、2人は月にワープした。出てきたのは湖の中。湖を出ると、森の中。空は新鮮な空気に満たされている。

実は月では、地中に人の住める巨大な空間があった。水も自然もあれば、重力も人工太陽もあった。恐るべきハムラとハゴロモの力である。

白ゼツの記憶と、ウサギ一号の感知能力で、ハムラの直系の子孫がどこにいるのかはだいたい分かった。2人は歩いてそこへ向かった。

しかし、街が見えかけたところで事件が起こった。

「く、苦しい」

「どうしたの!?!」

突然ウサギ一号が苦しみ始めたのだった。

「ち、近くで人がいっぱい死んだ。はあ、はあ、はあ、はあ。入ってくる。死の苦痛と絶望が。はあ、はあ、はあ。ううっ」

「し、しっかりと。一旦森に帰ろう」

白ゼツはウサギ一号を連れて森に帰っていった。

実は月では、数年前から、ハムラの直系の子孫である宗家の人間と、分家の人間との間で戦争が始まっていた。理由はハムラ思想の解釈の違いだった。

宗家側の方が数が多いが、分家側には転生眼という世界を作り変えるほどの力を持つ秘宝があった。

戦争はウサギ一号にとって苦痛でしかない。人が死んだ数だけ苦しんでしまう。しかし、地球に戻れば黒ゼツが自分達の命を狙ってくるだろう。白ゼツは、月にある森で隠れながら暮らすことを選んだ。そうして約一カ月が過ぎた。不意に、宗家側の人間が大勢で森にやってきた。ほとんどが子どもだった。それを追うように分家の人間もやってきた。こちらは戦闘訓練を積んだ大人ばかりだった。

ウサギ一号の感知により、彼等が森へ来た理由は分かった。

宗家の子どもは、戦争で分家が一般居住区への無差別攻撃を始めたので、地球へ逃げようとしていた。分家の人間は逃げることにすら許さず、子どもでさえも1人残さず殺そうとしていた。

理由を知って、ウサギ一号の表情が変わった。怒り、憎しみ。負の感情が抑えられなくなった。

「殺す。殺す。あいつらめ！ あいつらめあいつらめ！」

そして、動き始めてしまった。

「お、落ち着くんだ。君に戦いは無理だ」

「うううっ！ この！ 分家のクソ野郎が！ 苦しい！ くううっ！
くたばれエ！」

白ゼツが諫めるが、ウサギ一号のチャクラは高まっていくばかりだった。

体を張って止めようと、ウサギ一号に抱きついた。が、わけもなく引きずられた。ウサギ一号は、神居結のように死者のチャクラを引き寄せ、吸収していた。死者の無念、怒り、悲しみと共振するように、凶悪なチャクラを溢れんばかりに漲らせていた。

「な、なんだあいつは！」

「変なのがいるぞ！ 心してかかれ！」

とうとう敵にも見つかってしまった。分家の戦闘員20人近くがドツと押し寄せた。

もう逃亡も間に合わない。白ゼツは力なくウサギ一号を手放した。

ウサギ一号は、雄たけびを上げながら敵に突っ込んでいった。

「うおおおおお！ 分家の能無し外道がああああ！」

「なっ！ 速い！」

「なんだこのチャクラは?！」

20対1だが、いい勝負だった。むしろウサギ一号が押していた。敵の全員が、地球でいう中忍や上忍の実力者だったにも関わらずだ。

敵はウサギ一号に恐れをなし、引いていった。ウサギ一号は粘り強く彼等を追いかけた。

「死ねえ！ 死ねええええええ！」

「くっ、化けもんがああああ！ くはあっ！」

「ぐはあつ！ 死ねえ！ 化けもんがああああ！」

ウサギ一号は、狂戦士となっても他人の思念を直接的に感じるらなかった。敵の断末魔と同じ言葉を自らも叫び、血の涙を流しながら人を殺していた。

やがてウサギ一号の周りから敵はいなくなった。しかし、宗家の人間はいた。

「あ、ありがとう」

宗家の子ども一人が、ウサギ一号に礼を言った。ウサギ一号は黙って子どもを見た。未だ怒りに歪んだ顔だった。

嫌な予感がした。白ゼツはウサギ一号に向かって叫んだ。

「ウサギ！ その子は敵じゃない！」

白ゼツの言葉は届かない。ウサギ一号はにやりと悪そうな笑みを浮かべた。

まるで、先ほどまでの分家の人間と同じように。

「そ、宗家の人間は死ねええええ！」

ウサギ一号は、憎いはずの敵の思想まで自分のものとしてしまっていた。

善悪関係なしに死者の遺志を引き受けてしまうようだ。長き時を生きてきた白ゼツも、こんな現象は知らなかった。

「うわあああ！」

悲劇は起こった。目の前の少女に救われたはずの子どもは、目の前の少女によって凄惨な八つ裂きにされてしまった。

「うわあああ！ いたあああああ！」

ウサギ一号はやはり子どもと同じように叫んだ。しかし発狂の仕方は今までより激しかった。

「お姉ちゃんが何故僕を！ 痛い痛い痛い！ 何故だ何故だ何故だああああ！」

ウサギ一号は叫び、自らの体をかきむしった。かと思うと、歯で己の指を噛み千切った。

白ゼツがザツと分析する。自傷しているのは、殺した子どもの感情に共感し、己を憎んだからだろう。まるで自分一人で憎しみの連鎖を

表現しているようだ。

ともかく、このままではウサギ一号が危ない。止められるのは、自分しかない。

「や、やめるんだ！ ウサギ！」

白ゼツはウサギ一号に近づいていく。そして、精一杯の気持ちを込めて、抱きついた。

「あっ」

ところが、飛び込んだそのタイミングで、ウサギ一号の手刀にばっさり切られてしまった。

白ゼツは真つ二つになって崩れ落ちた。しかし彼は気付いた。今、自分が死んだとしたら、その思念はウサギ一号に吸い込まれる。自分の愛が届けば、ウサギ一号は自らの体を大事にしてくれるのではないか。

白ゼツはスツと目をつぶり、祈った。君がいつまでも無事でいけますように。

そして、祈りは届いた。

「お、おきな……」

ウサギ一号はハツと我に返った。しかし、自分が最も愛した存在は、無残な姿で横たわっていた。それをやったのが自分である。

こんなに自分を愛してくれた白ゼツなのに。ずっとずっと一緒にいたかったのに。自分はなんてことをしてしまったんだ。

「う、うわあああああー」

ウサギ一号は悲観にくれた。目と鼻からいっぱいに涙を流し、空へ向かって吼えた。

感情に呼応するように、身体に変化が表れ始めた。

髪が白く変色し、額が割れていく。割れた額に第三の眼が現れる。輪廻眼と写輪眼の両方の特徴を併せ持つ、輪廻写輪眼だった。

このタイミングで輪廻写輪眼が開眼した奇跡。と同時に、輪廻眼自体も数々の奇跡を起こす力がある。

その1つが、魂の呼び戻しであった。

「おきな、おきな」

ウサギ一号はほぼ無意識に莫大な力を使い、白ゼツを復活させた。
「あれ？ 僕は死んだはずじゃ……」

「おきな！ おきなあああ！」

白ゼツは健康体に戻り、パツと体を起こす。そこへウサギ一号が抱きついた。

「どういうこと？ 君も死んじゃったの？ でもここは……」

感動の再開。しかしそれも長くはなかった。

ウサギ一号から逃げた分家の人間が増援を連れて戻ってきたからだ。彼等はウサギ一号が宗家の用意した秘密兵器だと考え、最大級の警戒をしていた。自身らの秘宝、転生眼まで持ち出して。

「転生眼発動！」

その声の直後、転生眼から莫大なエネルギー波が発せられ、ウサギ一号と白ゼツを襲った。

「きゃあああああ！」

「ぐぎやっ」

ウサギ一号は吹き飛ばされる。白ゼツは粉々に砕け散った。

「おきな、おきなあ」

ウサギ一号はダメージを受けたが、輪廻眼の力や生まれ持った特性によりあつという間に回復していく。

そして、再び白ゼツを生き返らせようとチャクラを高める。

「化け物が！ 転生眼発動！」

ところが、それも転生眼から発された莫大なエネルギーに邪魔をされてしまう。

「ううっ。じゃ、邪魔をするなああああ！」

そうして再びウサギ一号と分家の人間の戦いが始まった。

ウサギ一号は輪廻眼により遥かにパワーアップしていたが、世界を変えるほどの力を持つ転生眼には敵わなかった。ほぼ一方的に攻撃され、ダメージが蓄積されていった。

ウサギ一号は自らのチャクラだけでは足りなくなり、死者のチャクラを意図的に集め始めた。が、それでも転生眼には勝てなかった。生者のチャクラも集め始めた。自分に向かってくる分家の人間のみな

ず、逃げ惑う宗家の人間も。しかし、それでも転生眼には敵わなかった。

「木遁、花樹界降臨」

柱間の技を使っても。

「輪墓・辺獄」

マダラの技を使っても。

「んちゃあああ！」

アラレの技を使っても。

「転生眼発動！」

その一言で覆い潰される。技は全てチャクラごと吸い取られる。

どうして！ どうして勝てないの！ どうしてあれの邪魔をするの！

約1時間後、ウサギ一号はとうとう大地に伏せた。下半身を無残にもぎ取られた状態だった。

「ようやくくたばったか。化けもんが」

ウサギ一号の周りに分家の人間が近づいていく。

しかし、ウサギ一号はまだ死んでいなかった。下半身も自動で再生を始めていた。

「力が、力が欲しい」

ウサギ一号は両手で弱々しく印を結んでいく。

リミッターを解除しなければならぬ。あらゆる手段を講じなければ白ゼツを救うことはできない。

「なんだと!? まだ生きてやがるのか!? 転生眼発動！」

再び襲ってくる莫大なエネルギー波。しかし、ほぼ同時にウサギ一号の技も発動した。

口寄せ、外道魔像。

チャクラの母の抜け殻が、再び月へと戻った。しかし、新たな中身を伴って。

「力だ！ この力だあ！」

ウサギ一号は外道魔像の頭頂部に立ち、叫んだ。

「なっ！ 転生眼発動！」

「そればっかりか！ 分家のクズ共が！」

「くうっ！ 外道魔像か！ ならばこちらは、ハムラ様の魔像を動かす！」

戦いは第3ラウンドへ。

外道魔像の力を得て、ウサギ一号の攻撃は分家の人間に届くようになった。それに対して、分家の人間はハムラの姿を模した巨大な魔像で対抗した。

勝負は拮抗した。ウサギ一号も無尽蔵と言えるチャクラとスタミナを得たが、ハムラの魔像も同じく無尽蔵と言える回復能力を有していた。

しかし、ウサギ一号は、相手を殺してしまうとその思念を取り込んでしまうという特性を残したままだった。分家の人間が死ぬたび、ウサギ一号の動きが鈍った。

「チャンスだ！ 転生眼発動！」
「くっ」

ウサギ一号は劣勢に立たされる。

「分家の者よ！ 一時休戦と行かんか！ そやつは我々にとっても敵！」

さらに、宗家の者が分家側で参戦してしまう。

「どういつもこいつも！」

「なんだって!? どういうことだ!？」

「外道魔像は地上の人間に奪われていた！ つまり、あれを使っている人間は地上人（ちじょうびと）ぞ！」

「どのみちろくな奴じゃねーんだ！ 見つけ次第転生眼ビームで殺せ！」

「どうして！ どうしてそんなあれを悪く言うの!? あれが何をしたらって言うの!？」

その時、ぞわりと冷たい物を感じた。外道魔像の奥底に眠る、すさまじい力。これを使えば目の前の連中を倒せるかもしれない。だが、逆に自分が魔像に取り込まれてしまう恐怖もある。

取り込め、わらわを。その体に。

声が聞こえた。チラと女の姿が見えた。まるで、自分を大人にしたような女だった。

取り込め。そうすれば全て上手くいく。

「う、うるさいうるさいいいいいい！」

ウサギ一号は声を拒絶し、無造作に暴れ始めた。

劣勢は変わらない。分家の人間は相変わらず転生眼で攻撃してくる。ハムラの魔像は何度破壊しても再生し、以前と変わらない力で襲い掛かってくる。そこに宗家の人間まで加わった。女の声もうざつたい。集中力が乱される。

もう、なんのために戦っているのか分からない。自分は戦いが大嫌いなのに。

「もうやめて！ 撃ちたくない！ 撃たせないで！」

ウサギ一号は、口元にアラレのチャクラ砲を溜めながら言った。口は動かないので、思念を飛ばして伝えた。

「ならばお前が死ぬえええええ！」

だが、思いは届かなかった。思いも力も届かなかった。

どうして!?! どうして分かってくれないの!?! どうしてこんなことになったの!?!

ウサギ一号は顔を涙でグシャグシャに濡らした。分家の人間は変わらず攻撃してきた。

「う、うわあああああああ！」

ウサギ一号は、半ば投げやり到最后の術を使うことにした。

莫大なチャクラである。これを自爆させれば、白ゼツを殺し、自分を苦しめた連中を一網打尽にできる。死者達の憎しみが、全員殺せと促す。

ご、ごめん。おきな……。

しかし、ウサギ一号にはそれができなかつた。

外道・輪廻天生の術。

ウサギ一号は、むしろ全て生き返らしてしまうことにした。

憎しみの連鎖を止める。愛によって平和を導く。咄嗟の判断だったが、それが正しい答えだと思った。

「ぜえ、ぜえ、はあ、はあ」

この術は、使用者の寿命を著しく縮めるものだ。

ウサギ一号はほぼ不死身であり、今は外道魔像の力が加わっている
ので、白ゼツを一人を生き返らせるくらいならわけはなかった。が、
月の住民を一気に生き返らせたことで、さすがに魂を浄土に引きずら
れ始めた。その苦しみが身体を襲った。

チャクラも術でほとんど失ってしまった。外道魔像のチャクラを
含めてだ。

「よく分からんが、チャンスだ！ とどめの転生眼発動！」

しかし、ウサギ一号の願いは目の前の敵に届かなかった。

自分は放っておいても死ぬだろう。だが、自分の命を使うことで、
目の前の人間から人殺しの意志を奪いたかった。死ぬ前に平和な世
界が見たかった。それすらも叶わないのだろうか。

「どうして……。あれはただ、皆が……」

ウサギ一号は外道魔像の頭頂で崩れ落ちる。涙を流し、前のめりに
倒れる。

そこへ、転生眼の莫大なエネルギー波が向かってきた。ウサギ一号
はもはや指一つ動かすことすら叶わない。死を覚悟した。

おきなと同じ死に方で、おきなと同じところに……。

しかし、最後の痛みはいつまで経っても襲ってこなかった。

代わりに、爺さんの声が聞こえた。

「感謝する、娘よ。おかげでようやく母の苦しみが分かったやもしれ
ん。兄者とわしが気付けておれば、あるいは母も……」

ウサギ一号には、爺さんを見上げる力も残されていなかった。しか
し、なんとなくその者が誰か察することができたのだった。

竹取物語

就寝前に1番チームで集まり、カブトから講義を受けた。堅苦しいものではなく、雑談形式であり、ナルトにとってはとっつきやすかった。

「ナルト。第三次忍界大戦について、岩隠れと桃隠れの戦いはどうやって終わったか覚えてる？」

「え？ ……うーん。忘れたってばよお」

「我愛羅は？」

「えっと、確かアラレさんが土影に勝って、岩隠れが桃隠れに降参したのではなかったですか？」

「ほぼ正解。厳密には岩隠れは暁に降参したんだ。暁は今は桃隠れに吸収されたから、それほど間違いつてわけでもないけどね。だけど、ここで注目して欲しいのは名前や結果じゃない。むしろ過程。どうやってその結果にこぎつけたか」

「つまり、どういうことだってばよっ」

カブトはため息をつきそうになった。が、耐えた。真面目に聞いているのだからバカにはいけない。

「例えばだけど、アラレさんが土影に勝ったとしても、土影を殺していたらどうなったと思う？ 戦争は終わったと思う？」

「えっ？ 戦いに勝つんだから一緒だってばよ」

「ヒナタ。何か意見は？」

「た、たぶんですが、土影を殺してしまっていたら、弔い合戦になっていたかと」

「うん。僕もそう思う」

「弔い合戦ってなんだってばよ？」

「仲間を殺された復讐に戦う、みたいな意味」

「ええーっ!? どうしてってばよ！ 負けたなら潔く負けを認めるってばよー！」

「ナルト。人間は感情で動く生き物なんだ。例えば、君が目の前で親を殺されたらどうする？ その殺した相手に、参りましたって降参で

きるっ。」

「そ、そんなのありえないってばよ！」

「つまり、そういうことなんだ」

「つまり、どういうことだってばよ？」

「え？」

カブトは頭を抱えそうになった。が、こらえた。ナルトは今、彼には珍しく真面目なのだ。

「ナルトくん。土影は岩隠れの忍びにとってお父さんみたいなもの。だから殺されたら許せないの」

「ええーっ。そうなのかってばよ!? でも、うちの火影は父ちゃんって感じはしないってばよ」

ヒナタが説明してくれた。ナルトはなんとなく理解したようだった。

カブトはメガネをくいとあげて雰囲気を整えた。そして次の問題を投げかけた。

「今の話に関わるけど、“シユキ”ってゲームがどうして毎日行われるか分かるかい?」

「え? 修行になるからじゃないかってば」

「どうして殴り合いじゃなくて、捕まえるゲームにしたと思う?」

「今までの話を考えると、殺すよりも捕まえたほうがいいからですか?」

「そう、正解。我愛羅くんすばらしい」

「いや、そんな」

カブトが拍手をすると、我愛羅は照れたように頭をかいた。

「つまり、どういうことだってばよ?」

しかし、ナルトは相変わらずだった。

カブトもさすがにこの反応に慣れた。表情を変えずくいとメガネをあげた。

「戦争は相手を殺すばかりじゃない。むしろ捕まえたほうが、情報を取れたり、人質に使えたりするのさ。殺してしまったら、相手に憎まれて戦争を終わらせるのが難しくなるしね」

「なるほどー」

今度は納得してくれたようだった。カブトはホッと息を吐いた。「他にも“シユキ”には利点がある。打撃がないからケガをしにくい。チーム戦で他里の人間と仲良くなれる。人がごった返すから、目だけでは足りず、五感全てで気配を感じながら動く練習になる。とかね」

体のふれあいで男女が仲良くなれる、という理由もあるが、カブトは言わなかった。

また、視覚以外の五感で気配を感知するのは、写輪眼対策を意識したことだった。桃隠れの上忍は、写輪眼を持つ幻術使いが砂隠れを襲ったことを聞かされていた。その対策として“シユキ”に力を入れるという話もだ。

なお、“シユキ”の考案者はトグロであり、名前はだい“しゆき”ホールドから取ったのだった。

ここまで話して、少し休憩を挟む。ナルトに情報を整理する時間を与えるためだった。ナルトはうーんと唸っていた。ヒナタが甲斐甲斐しく説明し、ナルトは徐々に理解していった。

再び講義が始まった。

「今日の昼、これからの戦争というテーマで講義があつたね。あそこではあえて答えを言っていなかったけど、これからの戦いは諜報戦になるのさ。僕たち同盟軍が圧倒的な力を持つ限り、力と力のぶつかり合いのような戦争は起こらない。敵は真正面からの戦いを諦め、闇に潜む。僕達が油断しているとところを襲ってくるようになる」

「つまり、どういう」

「例えば、君が敵の上忍を殺せと命じられたら、どうする？」

「ええっ。さすがに無理だつてばよ」

「正面からは無理かもしれないけど、毒を盛れば殺せるかもしれないだろ？」

「ええっ!? 毒は嫌いだってばよ!」

「いや、例えばの話なんだ。毒を盛れば殺せるかもしれないだろ？」

「え? うーん」

「殺せるかもしれないだろ?」

カブトは笑顔でナルトを睨んだ。

「う、うん。殺せるってばよ」

ナルトは気圧された。冷や汗をかきながら笑顔でうなずいた。

「そういう、言ってみれば、卑怯な手を使ってくるのさ。これからの忍びはね」

トグロがいれば、本来の忍びだとツツコミを入れただろう。

「ええ!? そんなやつ許せねえ! ボコボコにしてやるってばよ!」

「うん。ボコボコにしたいのは分かるよ。でもね、卑怯な手から身を守るためには、ただ強いだけではダメなのさ。敵の情報を集めることと、敵の行動を予測することが必要になる」

「ええ!? なんで!?!」

「奥の手つてのは、知らないから厄介なんだ。知ってる奥の手は事前に対策が取れる」

「つまり、どういうことだってばよ?」

「敵が料理に毒を盛っていたとしても、どの皿に毒が入っているか知っていれば怖くないってこと」

「うわっ、確かに!」

何故この例で納得できるのに、初めから理解できないのだろうか。カブトには不思議だった。

カブトはチラと時計を見た。

「そろそろ時間だね。続きは明日にしよう。明日の講義は、どうやって敵の情報を集めるか。また、どうやって敵の行動を予測するかだよ。解散の前に宿題を出すよ」

「ええーっ。いらないうってばよお」

「もし、自分が最も弱い忍びだったら何をするか。逆に、最も強い忍びだったら何をするか。この2つを考えてきてね」

「弱い忍び? おれってば世界一強い忍びになりたいんだってばよ」

「この宿題は、敵の行動を予測する方法に関係しているよ。そんなに一生懸命考えなくていいから、自分が思う答えを出してきてね」

「ねえ、メガネの兄ちゃん。おれってば」

「僕は薬師カブト。この名前は覚えておいた方がいい。将来の川影の名だよ」

「うわっ。すっげえ自信だつてばよお」

カブトは笑顔で去っていった。内心とても苛立っていたが。

翌日も朝早くから修行をした。

体術やチャクラコントロールの修行は、木の葉とあまり変わらなかった。トグロと綱手が木の葉の忍者学校を出ているためである。毒や解剖の授業は、桃が木の葉に比べて甘かった。大蛇丸の方針で、木の葉は幼い頃から残虐な実験に慣れるような教育を受けているからだ。

修行内容自体はあまり変わらないが、能力は明らかに桃隠れが他の里より高かった。梅太郎やアバレなど飛び抜けた存在を抜きにしても、平均値が高い。ハーレムで、優秀な遺伝子を受け継ぐ子が多いというのはその理由の1つだろう。しかし、それだけでもない。桃隠れの子は修行することに慣れていて、ご飯を食べるような感覚で、働き、修行する。

トグロに言わせれば、これを実現していたのが共栄主義だった。共産主義では縁起が悪いので、共栄である。

ここは、ボケ老人でも孤児でも安心して暮らせることを目指した理想郷である。ここで暮らすのにお金は必要ない。金がなくとも、皆が助け合って生きている。むしろ、お金は助け合いの意識を薄れさせてしまうとトグロは考えている。

助け合いの意識は、揺りかごから墓場までがモットーである。桃隠れでは、子どもの頃から大人と共に学び、働く。逆に言えば、大人が子どもと共に学び、働く。子どもは大人に憧れ、大人は子どもを守りたいと思う。これが社会への信頼や帰属意識につながる。働くと言つても、資本主義のような主人と部下という関係ではない。皆仲間、いや家族である。家族を搾取することはないから、孤児でも安心して働ける。もちろん、中には弱いものいじめをする悪ガキもいるが、彼等は笑顔の大人たちによって痛みを知らされることになる。

また、学園は入学の時点で専門コースを設けている。子どものうち

から分業社会に組み込むことで、助け合いの意識を促すことに役立つ
ている。前世日本ならば、子どもの可能性を潰すと批判が出るかもし
れない。が、この里では全く非難されない。職業や地位に対する憧れ
が薄いからだ。逆に、心が重視されている。一種の宗教のような形
で、トグロ、綱手、サソリのような生き方をするのが理想になって
いる。この思想を支えているのも共栄主義だ。前世日本で子どもに
将来の夢と聞けば、金と名声が手に入るスポーツ選手や医者の方が多
く上がるだろう。しかし、ここでは金や名声が手に入る職業はない。
人気を得るには、善行を積むしかない。さすがに川影になれば金も名
声も手に入るかもしれないが、川影になれる能力があるなら、その地
位に就かずとも金も名声も手に入れることができる。

以上のような話は、合宿の講義でも教えることだ。さすがに、桃隠
れの思想だけを持ち上げはしない。他文化への理解というテーマで、
火の国、風の国、川の国、とそれぞれの特徴を述べていく中、さらつ
と桃隠れの社会構造についても触れる感じだ。もつとも、ナルトやキ
バが振り分けられた初等クラスでは、言っても理解できないので教え
ない。

その日の夕方、前日と同じく“シユキ”を行った。練習の甲斐あつ
てナルト達の動きはよくなつており、前日のようにあからさまに足を
引つ張ることはなかった。それでも3連敗だったが。今回は当たつ
た組が悪かった。5番チーム、6番チーム、7番チームとの対戦だつ
たが、5番チームは指導役が綱手の長男繩也で、メンバーに日向家始
まつて以来の天才と言われる日向ネジがいた。6番チームは指導役
が梅太郎で、メンバーに梅太郎の妹である忍（しのぶ）がいた。7番
チームは指導役がカグヤー族の竹でメンバーにアバレがいた。

この日も、風呂の前に“シユキ”の練習をした。

軽く汗をかいた後、早めに終わらせた。ナルトが宿題を用意してい
ないことに気付いたからだ。3人は土俵の端っこに腰をかけた。
「最も弱い忍びつて、どういうことだつてばよ？　なんでそんなの考
えるつてばよ？」

「たぶんカブトさんは、弱いから戦つても勝てないつて言いたいんだ

と思う。それでも忍びびとして生きるには、何をしたらいいかって」
ヒナタは前日の話の流れを理解していた。敵の行動を予測するには、自分が敵の立場になって考えてみればいい。おそらく今日はそういう話になるだろう。

今の敵は木の葉連合に比べて弱い。だったらどう動いてくるか。それを予測するために、極端な例だが、自分が最も弱かったらどう動くかを考えてみるというのだろう。

「そんなの知らないってばよ！ 弱いなら修行して強くなればいいってばよ！」

「う、うん」

「それも1つの正解だと思うよ。ナルトくん」

と、我愛羅が割って入った。

「え？ こんなんでいいの？」

「たぶん、あまり深く考えないほうがいい。いろんな意見が出たほうが、カブトさんも助かるだろうから」

「どういうことってばよお」

「これは、敵の行動を予測する訓練なんだ。人は同じ状況に置かれても、別々のことを考える。だから、いろんな人がいろんな予測をした方がいい。例えば、ナルトくんのような敵がいたとしたら、ナルトくんがその敵の行動を予測すれば当たりやすい。僕に似た敵がいれば、僕が行動を予測すれば当たりやすい。たぶん今日の講義はそういう話になる」

「え？ ええーっ！ なんでそんなの分かるんだってばよ！」

「なんとなくだけどね」

我愛羅も前日の話の流れを理解していた。

実は我愛羅とヒナタは、桃隠れに来たことが何度かあった。親がトグロと親しいからだ。合宿に参加したことはなかったが、トグロや他の教員に指導を受けたことはあった。

「あれ？ なんだらう？」

不意に、ヒナタが夜空を指差した。

「ん？ あれって何？」

「ほら、あそこ。何か光ってる」

ヒナタは月の近くを指差していた。我愛羅とナルトには何も見えない。

「何も見えねえってばよ」

「ヒナタは目がいいからね」

ヒナタの目が良すぎるため見えるのだろう。我愛羅とナルトはそう結論付けた。

しかし、ヒナタにはかなり光って見えていた。我愛羅やナルトに見えないとは思えない。不思議に思い、白眼で光る何かの正体を探ってみた。

「えっ、そんな……」

見た瞬間、ポカンと口を開けてしまった。

光の正体は、見たこともないほど濃密なチャクラだったからだ。しかも、チャクラの感じが、自分達日向一族と似ている。より厳密に言えば、自分や父など日向宗家に似ている。

これはただごとではない。ヒナタはさらなら情報を得るべく、眼にチャクラを込めていく。

「ど、どうかしたってば?」

「たぶん、日向一族の関わる何かが落ちてきてる」

「え? 日向ってヒナタの苗字の」

「うん」

ヒナタはじいっと光を見る。中心だけ、少し色が違う。濃密なチャクラが何かを包んでいる。その何かを知りたいが、今はまだ遠い。光は遙か上空。距離は100km以上ある。

「我愛羅くん。急いでカブトさん呼んできてくれないかな? 私達だけじゃ対処できないかもしれない」

「え? 危険なものなの?」

「まだ分からないけど、可能性はある」

「う、うん。分かった」

約3分後、我愛羅はカブトを連れて戻ってきた。

その頃には、光は地上付近まで落ちていて、ヒナタにも中心にある

何かが見えていた。

「とても濃密なチャクラの塊が落ちてきています。中心に私と同じ年くらいの女の子がいます。チャクラの気配から、濃密なチャクラの術者も、中にいる子も、日向の血を引いていると思います」

「日向か。ならトグロさんの子か、日向家の誰かの子だと思うけど、油断はできないね」

話している間にも、光が近くの山に落ちる。近くと言っても距離は10km弱ある。

「じゃあ、僕とヒナタで探ってくるよ」

「分かったってばよ」

カブトはヒナタを連れて光へと走っていく。ナルトはこの場に残るフリをしたが、しばらくの後、二人を追いかけ始めた。

「ナ、ナルトくん！ 危険だよ！」

「平気だってばよ！ 俺ってば体術はアカデミーでも上の方なんだからだよ！」

「ナ、ナルトくん！」

我愛羅もナルトが心配でついていった。

夜で視界が悪く、ナルトは何度も木や石につまずいた。あわや大怪我という勢いの時もあったが、いつも我愛羅の砂が守ってくれた。

ヒナタとカブトは夜でもわけなく走っていた。ナルト達は徐々に離され、ついには見失ってしまった。もつとも、そこまで走った時には、我愛羅にもヒナタの言っていたチャクラの塊を感知できるようになっていた。ヒナタは見えないが、そのチャクラの塊を目指して移動することはできた。

途中で罨があったり川があったりしたが、カルラの知識と砂の壁でなんとかあった。最後の方には、ほとんどずっと我愛羅の砂に乗って飛んで移動した。

そして目的地に到着する。先にカブトとヒナタも来ていた。

「よおってばよー！」

「来ちゃったか。もちろん尾行には気付いていたけどね」

「うー、ごめんなさい」

我愛羅がおどおどと謝った。ナルトの意識は既に光の正体に移っている。

「た、竹エ! 竹が光ってるってばよ!」

4人の目の前に、光る竹があった。竹は根元からてっぺんまで薄っすら輝いている。が、一箇所だけはつきりと眩しく輝いている。ヒナタが言うには、そこに女の子がいるらしい。それも、なぜか手の平サイズまで小さくなっているとか。

ナルトが竹に触れようとする。

「うわっ」

が、眼に見えない壁に弾かれた。

「強力な結界だよ。僕でも通れない。でも、なぜかヒナタは通れるんだよね。たぶん、白眼の力を持つ人しか通れない仕組みなんだと思う」

カブトが腕を組みながら言った。我愛羅がそつと手を近づけると、やはり弾かれた。

ヒナタが恐る恐る近づくと、何もなく竹へ到達できた。

「カブトさん。どうします? 女の子」

「うーん。君が竹割っちゃうかい? 今、空海さんは長期任務に行ってるんだよね。木の葉からヒアシさんやヒザシさんを連れてくるにも時間がかかるし。その間、女の子を竹に入れたままにして、死んじやったりしたら困るから。畏の気配はないんでしょ?」

「はい。むしろ、暖かい感じがします。女の子もとても気持ちよさそうに眠っていて」

「じゃあ、割っちゃって。ああ、ナルトと我愛羅は離れててね。僕はこの場で君たちを守るつもりはないよ」

「わ、分かっているってばよ」

ナルトと我愛羅が50m近く離れる。ヒナタがゆっくり竹に近づき、クナイを構える。クナイをチャクラで強化していく。

「やあっ!」

そして、ぱっさり切った。

「えっ? きゃっ」

その瞬間、竹がワツと光の粒に変わった。それら光の粒は、ヒナタに飛び込んでいく。ヒナタは全身を光に包まれて眩しく輝いた。

「ヒナタ！ ぐっ」

カブトがヒナタに近づくが、先ほどと同じく結界のようなものに弾かれる。

カブトは尻もちをつき、呆然とヒナタを見つめる。

「しまった。僕としたことが」

「ヒナタあー！」

ナルトがヒナタへ走っていく。が、カブトに後ろから羽交い絞めにされ、押さえられた。

「は、離すつてばよー！」

「危険だ。今は近づかない方がいい」

「危険つて、だったらヒナタは!?!」

「わ、私は平気だよ。ナルトくん」

光の中からヒナタの声が聞こえた。それに呼応するように、光は消えていった。

竹も跡形もなく消えている。竹自体がチャクラの塊だったようだ。

ヒナタは、手のひらに3寸ばかりの女兒を乗せていた。女兒はすやすやと吐息を立てて横になっていた。短いピンクの髪と、額から出た2つの角が特徴的で、顔はとてもかわいらしかった。

「ヒナタ！ 大丈夫か!」

「うん」

「何か変化は?」

カブトが尋ねる。ヒナタは言いづらそうに眉を寄せた。
が、ぼそぼそと語っていく。

「あの、さっきの光は、ご先祖様のチャクラが込められています」

「ご先祖様? 日向家の? 君の両親ではなく?」

「はい。ずっと昔の、もう亡くなった方です」

「そんな方が? どうして今頃?」

「理由は教えてくれませんでした。ただ、この子を頼むと言われました。争いのない場所で育ててくれと」

「うーん。いまいち意図が分からないなあ。ちよつと、僕だけで決めるのは辛いかもしれない。川影様に聞いてみよう」
そうして4人は川影邸に向かった。

忍界転生 無職になつても本気出す

無職になつて約3年後のこと。仕事の手伝いを分身に任せ、遊び呆けていた俺は、この星の地下の至る所に張り巡らされている人工の穴に気付いた。自然物にしては距離が長すぎる。数が多すぎる。また、俺が土遁で地面を彫る時と似たような特徴が壁の表面に現れている。

この地下道を使えば、いつでも軍隊を敵国のご真ん中に送り届けることができる。自分が使うならいいが、敵が使うなら厄介極まりない。地震や地盤沈下の心配もある。よって俺は、川の国の地下を徹底的に調べ、怪しい空洞を片っ端から潰していった。

川の国の地下整備だけで1年かかった。その後、同盟国の木の葉や砂からも地下調査と整備の依頼がきた。チャクラ量的にも感知能力的にも、この任務に最も適するのは俺だった。時間に余裕があるので、任務を請け負った。ただし、チャクラ補給役としてクシナやカルラを借りたり、嫁に慰めに来てもらったが。暗い地下で働き続けると気が滅入るから許してもらいたい。

しかし、ちようどその頃雲隠れとの戦争が始まった。任務は一旦先延ばしとなった。

戦争は楽に勝てたが、その後の統治でややてこずった。暗殺、自爆テロ、人質事件が度々起こった。さらに、雲隠れは兵器開発にも積極的で、チャクラを使ったビーム砲や戦闘機を作ろうとしていた。やつらは「人の夢の邪魔をするな!」「科学の進歩は人類の未来のために!」などと言っていたが、敵国が人殺しの道具を作るのをわざわざ待ってやる必要はない。大蛇丸等と協議し、科学者を脅し、木の葉に閉じ込めた。そこで、従うなら木の葉で兵器を開発させた。

紛争がやや納まったところで、同盟国の地下の整備を再開した。しかし、1年ほどで、写輪眼を持つ幻術使いが風影を襲う事件が起こった。多くの砂の忍びが死に、カルラが我愛羅の中に封印されてしまった。

俺は地下整備をまた延期し、写輪眼対策と幻術使いの組織の調査を急ぐことにした。感知が得意な小南と長門を連れて、世界中を歩き

回った。怪しげな場所を片っ端から調べた。

滝隠れと湯隠れの国境付近で、紫髪の少女が暴れているという情報が入った。早速そこへ行ってみると、アラレそっくりの4歳くらいの女兒がいた。商人を脅し、金と食い物を奪っていた。

俺が木遁で捕まえ、女兒を尋問した。名はアバレ。歳は知らない。鳥島の研究所で戦闘訓練を受けていた。暴れまわって手がつけられないので放り出された。などなどと語ってもらった。その後、大蛇丸に頼んで木の葉の研究所で遺伝子検査してもらった。結果、彼女がアラレのクローンであることが分かった。ただし、脳に関わる遺伝子をちよつとだけいじっていたが。

「おそらく、アラレの間の抜けた性格が兵士には不向きだから、荒っぽい性格にしようとしたのね。鳥島はそういう男よ。その結果、荒っぽくなりすぎたっていうのも、いかにも彼って感じ」

大蛇丸は言った。

鳥島が生きていること。生きて非道な人体実験を続けていること。それが知れたのはよかった。

大蛇丸の研究仲間だった鳥島は、クローン技術も各種移植技術も持っている。ひよつとしたら、写輪眼の量産にも成功しているかもしれない。そうなると、砂隠れを襲った幻術使いに鳥島が関わっている可能性すら出てくる。問題は、どこにいるかだ。

なお、アバレはアラレの妹として桃隠れが育てることにした。

その後も、幻術使いの調査を続けた。出端を挫くように、綱手がまた妊娠した。これを契機に川影を辞めると言い出した。

「いつまで働かせる気だあ。そろそろ隠居してもいいだろうがよお」
本人が辞める気満々だったので、降りてもらって、川影選挙を行うことにした。

有力候補は、五鬼と呼ばれる俺、長門、サソリ、クシナ、アラレだった。

俺は、幻術使いや地下道の調査の任務があるので影になるのは難しい。クシナも、同盟軍の幹部として働き、雲隠れの統治で住民の不満を抑えるのにかなり役立っていたので今回はパス。サソリは未だ風

影暗殺を気にしており、絶対に組織の顔にはならないという。長門は人気がないから選挙で選ばれないし、幻術使いとの戦闘で輪廻眼が有効なので、俺の傍にいて欲しい。アラレはほよよ過ぎる。

その後、皆で意見を出し合って、小南を次の川影に選ぶことにした。彼女は感知が得意で、幻術使い探しに役立つが、能力は攻めよりも守りに向いている。十分な罫を用意した守りの戦いならば、五鬼に劣らない力を発揮できる。幻術使いが桃隠れに来る可能性があることを考えると、桃隠れの守りも万全にしなければならぬ。などが理由だ。

内向けにも、彼女が川影になるのは悪くない。力よりも人望が大事であることや、今の時代は感知が重要であることを教えられる。問題は外交だ。彼女が川影では、ある程度舐められるだろう。しかし、今は同盟軍という大きな囲いがあるので、脅しはあまり必要ないと思われる。

小南がいなくなって、男2人で歩き回るのは辛かった。癒し要員として、シズネに来てもらうことにした。

単に癒しだけに期待したわけではない。彼女は医療に長ける。毒の治療ができるし、理系の知識で怪しげな実験の内容を調べることができる。綱手の付き人だったので、メイドとしても有能。さらに、とても純情で、俺や長門が体に触れる度に「あひいつ！」と叫ぶからおもしろい。これだけ揃ったすばらしい人材だったのだ。

もちろん、綱手もシズネが有能であることは知っているので、当初は手放したがるなかった。粘り強い交渉が必要だった。結局「美少年を見つけたら私へ送ること」との条件で決着が着いた。

その後、霧隠れの調査から始めた。早速、美男子を見つけた。名前は白。両親はなしで、年齢は9。雪一族の少年らしく、女顔で氷遁が使えた。綱手に送るべく、交渉を始めることにした。

俺も長門も僧侶に変化した。

「うちには雪一族の仲間がいっぱいいるんだ！ 家族になれるんだよ！ 幸せいっぱい笑顔いっぱい！ 来ちゃいなよ！」

「家族？」

「白、知らない男に付いて行つてはダメだと教えたはずだが？」

交渉中に、目つきの悪い、口元を包帯で巻いて隠しているの青年が現れた。大きな刀を持っており、その刀が有名だったので正体も分かった。

「霧隠れの抜け忍、ザブザだな」

「そういうお前等は、タダの僧侶じゃねえな？」

「俺もこいつも孤児院経営者だ。こういう子どもの扱いには慣れてる」

「ふん。臭えんだよ！　そういう善人ぶつたことを言うやつはな！」

ザブザは俺に切りかかってきた。俺はいつも通り分身を出し、分身に戦わせているうちに地面に潜った。タイミングを見計らい、地中から木遁でザブザを捕まえた。

「ザブザさん！」

「チツ、木遁か。ツイテねえぜ。まさかこんなところで桃の鬼に会うとはな」

俺はザブザと白を共に捕虜にした。木分身を出して2人とも桃隠れに送った。2人の扱いは綱手に任せる。

霧隠れを調査していると、地中を移動している最中に敵の襲撃を受けた。初めてのことであった。

俺と長門の相手にはならなかったが、やや不穏なものを感じた。

その後も、敵の襲撃が何度かあり、こちらが見えているとしか思えない罠が仕掛けられていることもあった。

これ以上近づくのは危険かもしれない。進むにしても戦力を整えてから。

なんて思っていると、霧隠れが軍隊を用意して桃隠れに攻め込んできた。

「そちらの二代目川影と五鬼の長門が我等の土地を嗅ぎ回っている！

明確な敵意ありと判断する！」

俺も長門も慌てて桃隠れに戻り、防衛戦に務めた。同盟軍の力があつて楽に勝てたが、少なくとも死者が出ってしまった。

和平交渉で「今後、桃隠れの人間の領内立ち入りを禁じる」「うずま

キトグロと長門を3年間国内謹慎とする」という内容にサインして、戦争は終わった。条約の通り、霧隠れの調査は一時中断することにした。ここは今までで一番怪しいが、幻術使いや鳥島がいる証拠は何一つ掴めていない。本当は何も関係ないかもしれない。この状況で、また調査が霧隠れにバレて、戦争が起こって人が死ぬことはさすがに認められない。

条約の通り、俺と長門は3年間桃隠れで過ごした。どうせだから教育と防衛強化に力を入れた。家族サービスも頑張ってみた。エツチなサービスも。

若くして上忍の力を持つ新世代の子が次々と出てきた。ノノウの一番弟子カブト。綱手の長男縄也。綱手の弟子シズネ。俺と綱手の長女楓。俺とクラマの長男梅太郎。俺と初の長女新芽。などなど。本当に木の葉を追い抜いてしまっくんじゃないかという勢いだ。

俺の子どもは、ほとんどがいい子に育った。ただ、梅太郎はアバレと波長が合うようで、8歳頃に不良化してしまった。俺の自伝を聞かせても、「羨ましい！ 大冒険！ ハーレム！」、と俗っぽいことばかりに注目してしまった。

3年が経ち、再び俺と長門と癒しの娘達で国外の調査を始めた。戦争にならないように、草隠れや滝隠れから始めることにした。特に草隠れは、怪しい実験場がいくつもあるので要注意だった。

その年の終わりに、急にヒアシに呼び出された。日向本家に行ってみると、日向っぽいチャクラを持つ盲目の連中が大勢来ていた。

「まさか！ 白眼を盗まれたのか!？」

「いえ、違うのです。私は大筒木サヌキと言うものでして」

俺が叫ぶと、盲目軍団の代表らしき男が語り始めた。

驚くべき内容だった。

かつてこの星では、十尾という化け物が暴れまわっていた。六道仙人こと大筒木ハゴロモとその弟大筒木ハムラは、協力して十尾を月に封印した。その後、ハゴロモは地上へ戻り、人々へ忍宗を伝え、チャクラの平和利用と世界の安寧を目指した。ハムラとその子孫は月へ残り、十尾が復活しないように見張ることにした。また、ハムラはハ

ゴロモと1つの約束をした。ハムラの子孫は月で1000年待つ。その後、地上でハゴロモの目指した世界平和が実現できているかどうか確かめるために、地上へ降りると。

日向一族はハムラの直系の子孫であり、数百年前に先遣隊として地球に降りた。そのことは月で有名であり、地上では日向宗家にだけ代々伝えられてきた。ヒアシも知っていた。また、あと約10年で、約束の1000年になる。

しかし、数年前のことである。

ハムラの「1000年後、地上へ降りる」という言葉の意味について、解釈の違いが問題となった。議論がやがてケンカになり、ケンカも日増しに熱を帯びていった。ついには、ハムラの宗家と分家の一門で、殺し合いが始まってしまった。宗家側は、単に地上に降りて平和かどうかを確認するだけのつもりだった。もちろん、捨て置けぬほど酷い連中がいた場合は、懲らしめるつもりだったが。分家側は、地上が平和でなかった場合、世界を壊して人間を絶滅させ、ハムラの子孫だけで新しい国作りを始めるべきだと主張した。権力者が悪なら下の者も全員殺してしまえという無茶苦茶な発想である。現状、地上は戦争ばかりだったから、本当に滅ぼしてしまうつもりだったらしい。

当然、分家に従う者は少なかった。武力衝突があっても、宗家側が圧倒的に有利だった。

しかしある時、分家は宗家を罫に嵌め、秘宝転生眼を盗み出してしまった。この秘宝は、大筒木ハムラが開眼した転生眼を抜き取り、そこに子孫の白眼を付着させ、さらに力を高めたものである。十尾復活の阻止や、月の人工自然物の維持のために作られていた。月の大筒木一族が全員盲目なのは、生まれてすぐに目を抜き取り、秘宝転生眼に捧げているためだ。

しかし分家は、その秘宝の力を革命に使った。大虐殺が起こった。宗家の人間は次から次へと殺されていった。追い詰められた宗家は、子どもを地上へ逃がそうとした。分家はその子どもでさえも、無慈悲に皆殺しにしようとした。このままでは宗家側の断絶も時間の問題だった。

しかし数日前、月に謎の少女が現れた。ハムラの力とハゴロモの力を併せ持つ、悪魔のような存在だった。十尾の抜け殻である外道魔像を口寄せし、分家宗家関係なく虐殺していった。

転生眼のあらゆる能力を活用し、分家と宗家が協力までして、少女に対抗した。それだけの相手だったが、なんとか追い詰めることができた。少女はついに倒れ伏した。分家が転生眼の力で止めを刺そうとした。

しかしそこで、大筒木ハムラ本人、または生まれ変わりが現れ、その攻撃を阻止した。

「我々は固まってしまった。分家の者でさえ、あの方を前に粗相をすることはできなかつた」

サヌキが言った。畏敬の念がひしひしと感じられた。

ハムラは黙って分家の人間に近づいていった。スツと秘宝転生眼に手を伸ばし、「返してもらおうぞ」、と言って、秘宝の中心にある自身の転生眼だけを抜き取った。その後、少女と外道魔像を回収し、どこかへ飛んでいった。

「お、お待ちください！」

「ハムラ様のですか！」

「ついてくるな。答えはお前達が出せ」

ハムラはそう言って、宗家の者も分家の者も拒んだ。分家の者が飛んで追いかけてようとしたが、結界に阻まれて近づけなかつた。

戦争を再開するか、和解するか。宗家と分家でにらみ合いが始まった。

「ハムラ様は転生眼を抜き取られた。やはり、世界を滅ぼすことなど望まれてはいなかつた」

「あ、あんなの偽者だ！ 本物だという証拠などない！」

「感じただろう!? あの力はハムラ様以外にありえない！」

「いや、むしろあの化け物娘の変化じゃないか!？」

「そ、その通りだ！ なんとということだ!？ 外道魔像に続き転生眼まで奪われてしまった！ もうおしまいだ！」

結局、分家の一部の者はまた戦いを選んでしまった。しかし、分家

でも半分近くは、先ほどの人間がハムラ本人だと信じ、宗家の味方についた。分家側に秘宝転生眼がなくなったことと合わせて、戦力差は完全に逆転した。

さらにこの時、ハムラは月に奇跡を起こしていた。数時間以内に死んだ月の人間が、分家宗家問わず皆生き返っていたのだ。これにより、さらに多くの分家の者が、あの時現れたハムラが本物だと信じた。ハムラの願いが戦いではなく平和であることも知った。

よって、さらに多くの分家の人間が宗家側についた。残った分家側革命因子は初めの1割以下だった。宗家側はあつという間に戦線を盛り返していき、分家側は完全に追い詰められた。

ちやうど宗家がやったように、分家の人間も地上へ逃げようとし始めた。

ここで、宗家側の意見が割れた。危険因子は根絶やしにしなければならぬと考える者。子どもだけは逃がしてもいいと考える者。大人も子どもも逃げるなら追わなくていいと考える者。

「私は、子どもだけは生かしてやることにしました。しかし、大人の全てを殺すことは難しく、一部を地上へ逃がしてしまいました。そんな大人が子どもにも危険思想を植え付け、第二の革命勢力を育むと思うと、心苦しく。こうして、我々も地上へやってきたのです」

衝撃的過ぎて、しばらく固まってしまった。眼を捧げるとか、ハゴロモに弟がいたとか、尾獣っぽい名前の子とか。忍者関係ないファンタジー詰め込み過ぎでしょ！ NARUTOの作者さん（ナルトが産まれてマンガのタイトルを思い出した）！

もう1つ、サヌキは重要なことを言った。日向の血を濃く受け継ぐ白眼を、ハムラの血が濃い人間に移植すると、転生眼へと変化してしまうらしい。その力は輪廻眼に勝るとも劣らない。

この眼が悪の手に渡ると、非常に危険なことになる。よって、日向ヒアシ、ヒザシ、ヒナタ、ネジ、ハナビの警備を厳重にすることとした。

俺の日向の血はそれほど強くないらしい。だからたぶん、俺の白眼も娘の白眼も転生眼になる心配はない。白眼自体が貴重だから、奪わ

れる可能性は依然残るが。

俺は、この情報を共有するべく桃隠れに戻った。ちようど向こうも俺を探していたらしく、急いで川影邸に来るように言われた。

その場に、カブト、ナルト、ヒナタ、我愛羅、小南がいた。このメンバーの共通点が分からない。

「そっちの用は急ぎか？ こっちは重大だが、後でもいい」

「こっちも後でいいわ。そちらからどうぞ」

「かまわないが、小南、カブト、ヒナタ以外は去ってくれ」

我愛羅がささつと出て行く。ナルトは不満げだが出て行った。

俺はヒアシの家で聞いた話を3人に伝えた。

3人とも「厄介な」という反応だった。ヒナタは子どもなのでまだ月の話は聞かされていなかったようだ。

「一番怖いのは、転生眼誕生の条件が明確であることね」

小南が言った。

「そうだな。分家の人間と鳥島が手を組むようなことがあったら……」

俺の言葉に、ヒナタが不安そうな顔になる。俺も正直怖い。

クローン技術で転生眼量産なんてこともありえる。輪廻眼と同等の力がそこら中に行き渡ったら、本当に世界は終わってしまうかもしれない。それだけは阻止しなければならぬ。

いや、阻止できるのか？ まだまだ鳥島が見つかる気配すらない。

最悪の状況に備え、こちらも転生眼を用意しておいた方がいいのではないか？ 誰が白眼をハムラの子孫に渡すかという問題が出てくるが。

気分が暗くなったところで、次に小南側の話を聞くことにした。

小南が紙飛行機でナルトを呼んだ。ナルトは一羽のピンクのウサギを手を持ってきた。

しかしこのウサギ、何かが変化している。俺の白眼は細部の微妙な違い見抜けるからな。チャクラの流れも不自然だし。

「変化解いていいってばよ。イチゴ」

「うん」

ウサギがしやべり、ドロンと煙になった。煙が引くと、とてもかわいらしいピンク髪の少女が現れた。両目には白眼。

身長30cm程度。しかし赤ちゃんというわけではなく、5頭身程度ある。明らかに不自然だ。これもまた、変化の姿なのか？ しかし、チャクラの流れは正常だ。

というか、こいつ角があるじゃねえか。ピンク髪、角、白眼って、完全に俺の子じゃねえか！ 顔もどことなく月に似てるし！ 月と俺の子のモモカにはもつと似てるし！

「俺の子か」

「やっぱりそう思う？」

俺がつぶやくと、小南が同意した。が、少女本人とナルトは反発した。

「あれはナルトとヒナタの子なの！」

「そうだってばよ！ この子はヒナタのすごい爺ちゃんに預けられたんだってばよ！ お前は関係ない！」

「ヒナタの爺ちゃんって、生きてたか？」

父方の祖父は俺が殺した。母方は生きているのか？

俺はヒナタを見る。ヒナタは首を横に振った。

「私の遠い祖先の、ええつと、ナルトくんに聞かせちゃっていいのかなあ」

ヒナタはとても苦しい顔になった。彼女がナルトを好きだとは聞いている。その彼をのけ者にするのは辛いのだろう。

「ヒナタ！ 俺がいるうちに言ってくれってばよ！」

「そうだ！ あれも知りたい！」

というか『あれ』ってなんだってばよ。わたしがあたしになるように、われがあれになつてんのか？ ナルトの『ってばよ』も不自然だし。なんで遺伝してんだこんな口癖が。

結局、ナルトだけ出てもらった。イチゴとやらをヒナタが抱えた。そこで、ヒナタが切り出した。

「私の遠い祖先の、たぶん先ほどの話に出たハムラ様だと思います。この子を私に託したのは」

「なに!? そんなのありえるのか!？」

分家と宗家の戦争に突然割って入った爺さん。その爺さんが、子どもをヒナタに託す理由があるのか？

子育てが面倒になった？ そういう感じなのか？

「理由は教えてくれませんでした。ただ、争いのない場所で育ててくれと。それだけ言われました」

「理由くらい教えてくれたっていいのにな。争いが無いってのは、確かにここは理想的かもしれないが。今のところは、だがな。火種がそこかしこに燻っているから」

「そうですね。今は月の戦闘が終わったようですから、月の方が安全な気さえします」

「月!?! 月に行くのか!?!」

突然イチゴが乗ってきた。月という言葉が気になるらしい。

「そう言えば、この子自身から情報を集めればいいじゃないか。月に何か気になるものがあるのか?」

「よく分からないけど、月に行きたいって気持ちは強い! あそこにあれを待っている人がいる気がする!」

「男か?」

「いや、そんなあ」

娘は両手で胸を隠してクネクネする。この反応、男だな。

でもどうということだ? 気がするってというのは。

「この子、記憶喪失か?」

俺が小南に尋ねる。小南は頷いた。

「イチゴは、月に返らなければならぬの。ばいちゃばいちゃー」
イチゴが演戯っぽく言った。さりげなくアラレの真似をして。声も似てるなあ。

「こいつ、アラレと仲がいいのか?」

「いえ、いつもはウサギの姿になってもらってるんです。あまり知られない方がいいから」

「ふーん」

勝手に聞いて覚えたのかな? アラレの声はでかくよく通るから、

聞き取りやすいだろうし。

ウサギの姿になるのは、どうなんだろうな。別に隠す必要あるか？
確かに身長を小さくした術か何かは不思議だが、そこまで注意すべき術でもないと思う。転生眼や写輪眼に比べればな。出生については、ここは孤児が集まる場所だ。「両親はいない」「故郷は知らない」と言っても、あまり疑われない。というか、この見た目は俺の子だろう。「何にせよ、まあもらつとくよ。俺の子として育てるんだろ？」
「え？」

「ん？ 違うのか？」

「そ、その」

「もしかして、お前が親になる気か？」

「いえ、その……」

ヒナタは言いかけてうつむいた。

本当に親になる気だったようだ。しかし、ヒナタ自身がまだ9歳の子ども。しかも日向の跡取りで、修行に忙しく、命を狙われる危険もある。

いくら、ハムラに託されたかもしれないと言ってもなあ。もうボケ老人かもしれないし。

N I N J A の仕事

うさぎイチゴを名乗る娘は、月から降ってきたらしい。もとは身長3寸くらいだったが、3日で30センチまで伸びたそう。3に縁のある娘だ。

本人はナルトとヒナタの子になりたがっていて、ナルトとヒナタもその気だった。が、さすがに親になるには未熟過ぎる。子どもの意向は無視することにした。遺伝子検査をして、俺に近かったら俺の子になってもらい、日向に近かったら日向に預ける。もともと、見た目と雰囲気から、俺と月の子にしか思えないが。

おそらくこの子も、アバレのように非道な科学者の研究所で生まれたのだろう。そんな子が何故月に行つて、ハムラによつて小さくされ、ヒナタに預けられたかは分からない。後で月に行つて調べようと思う。

年始に、毎年恒例の同盟国会議がある。そこに大蛇丸が来るので、その時にイチゴの髪の毛のサンプルを渡し、遺伝子検査を頼むことにした。

今年の開催地は木の葉の火影邸だった。

久しぶりに木の葉へ来た。街を散歩してみると、住人はいつも通り冷たかった。

「抜け忍が偉くなったもんだな」

「ハーレムは楽しいか？ 小児愛者」

相変わらず、嫉妬と憎しみを晒け出したいようだ。大蛇丸の改革はすばらしいが、人間はなかなか変わらない。

今年の会議はいつになく豪華な顔ぶれとなった。重要な議題があるからだ。

同盟軍の盟主、火の国木の葉隠れからは、火影の大蛇丸。上役の自来也、並びうちはフガク。大蛇丸の弟子うちはオビト。日向家当主の日向ヒアシ。

川の国桃隠れからは、川影の小南。孤児院経営者である俺。遊撃隊隊長サソリ。川の国大名の長女にして遊撃隊2番隊隊長の天宮マリ。

天才科学者則卷ター坊。

風の国砂隠れからは、風影。風影の次男にして体内にカルラを宿す我愛羅。

石隠れから、里長の伊予(いよ)カン。誓いの国の大名である皇(すめらぎ)カグヤ。

雨隠れからは、里長にして同盟軍総指揮である山椒魚の半蔵。半蔵の長男正就(まさつぐ)。

草隠れからは、福の国の大名にして東草隠れの里長である、草薙(くさなぎ)オリヒメ。

滝隠れからは、去年里長に就任した紫苑(しおん)ギレン。餌羽後の戦闘隊長、桑土呂志夜(くわとろしや)こと、富の国の大名、大君(おおきみ)キシハル。

また、雲隠れよりクシナの親友二位ユギト。岩隠れより俺の愛人募ツチ。霧隠れより鬼人ザブザ。

特別招待客は、月の統治者にしてハムラの直系の子孫大筒木サヌキ。

最初にして最大の議題が、大筒木サヌキの口から語られる。

手短に月で何があったかを説明し、分家の生き残りが地上へ逃げたことを言う。

「彼等の狙いは、地上人の滅亡です。詳しくは言えませんが、転生眼を量産できてしまえば、最終戦争は絵空事でなくなってしまいます」

サヌキの話に、初めて聞いた者は衝撃を受けたようだった。

大蛇丸が代わって続ける。

「この話が真実であることは、あたしが保障するわ。あたしは実際に月に行って調べてきた」

大蛇丸、綱手、サソリ等は、事実を確かめるために月に行った。山中一族の心転身や、自身の幻術まで使って本当かどうか調べたので、大蛇丸もサヌキの言葉を信じられたようだ。

「そして現在、写輪眼の量産に成功している組織がある。そこなら転生眼の量産も可能かもしれない。悠長に待っている暇はないのよ。私は、同盟軍による大規模な諜報機関の設立を提案する」

大蛇丸がドンと机に拳を打った。

砂隠れ、桃隠れ、雨隠れ、石隠れ、東草隠れは拍手で賛成を示す。事前に決めていた流れだった。

「問題がある」

志夜ことキシハルが手を上げた。

「どうぞ。富の国の大名様」

「ここには岩隠れや霧隠れを代表できる人間が来ていない。それに、海の向こうには大小様々な島があり、海賊もいれば、雪の国のような大国もある。大筒木ハムラの分家が本当に地球人の滅亡を狙っている、幻術使いの組織と手を組んだとしても、やつらが我々以外の国にいた場合は手が出せない」

当然の疑問だった。

「そうだとしても、放っておくわけにはいかないわ。世界をしらみつぶしに調べ上げる必要がある。できる限り戦争は避けるけど、ある程度はやむをえないとも考えておくべきでしょうね」

これも、木の葉、桃、砂、雨、石、草、は事前に同意を得ている。問題は滝隠れと募ツチとユギトとザブザか。

「それは同意しかねる。連中が本当に世界を破壊できるかどうか分からない。そんな連中に振り回されて自国の民を犠牲にすることはできない」

まず、滝隠れのギレンが否定した。

「うちは、戦争で負けて既に調べつくされているからねえ」

ユギトはどちらでもいいらしい。彼女が言うように、雲は既に同盟軍によって重要な研究所を潰されていて、諜報が来てもさして困らないからだろう。

「俺のところは政権を潰さねえと始まらねえ。が、俺が政権を取りやあ怪しいやつは見逃さねえぜ」

ザブザは革命する気満々の男だ。霧隠れは現状最も怪しいので、それくらい荒治療してもいいかもしれない。できるだけ人死にを少なくするには、トップだけ挿げ替えられれば一番いいが。

「爺いはどうだろうなあ。むしろイカれた連中を利用してやるって言

い出しそうだな。うんそうだろうな」

募ツチも否定的だ。彼女に岩隠れを動かす力はないので、この場では土影の動きを予想してもらう。また、土影に多少顔が利くので、後で交渉役になってもらう。

「だが、オオノキは物の道理が分からぬ男ではない。あいつは損得で動く。同盟軍が力で脅し、金か技術かの蜜を用意すれば、乗ってくるだろう」

半蔵が募ツチに言った。

「ああ、そうかもしんねえな。うんそうだろうな」

募ツチも頷いた。

となれば、問題が残るのは滝隠れのみ。

皆の視線がギレンに向かう。

「残念だが、やはり賛同することはできないな。せめて証拠を提示してもらいたい。本当に世界が消滅の危機だと分かったならば、もちろん同盟軍への協力もやぶさかではない」

ギレンは再び否定した。

「大名様は、何か意見はあるかしら？」

大蛇丸がキシハルに問う。

「うむ。こちらとしては、あからさまに足並みを乱す真似はしたくない。有志を募るのはどうだろうか？ 餌羽後と同じような形で」

キシハルがギレンに尋ねた。

しかしこの2人、本当は滅茶苦茶仲が悪いんだが、この場ではおくびにも出さないのはさすがだな。公私をわきまえているというか。

「大名様が独立軍をお作りになるのなら、我々から邪魔立てする道理はありません。ただし、協力は約束できません」

「報酬ははずむつもりだ」

「任務という形でしたら引き受けましょう。それに見合う報酬があるのなら」

滝隠れも一応は決着が着いただろうか。

思ったよりとんとん拍子で決まったな。まあ、同盟軍で力のある木の葉、桃、砂、が事前に同意を得ていたからなんだろうけど。

その後、諜報機関の編成の話が長々と続いた。人員は主に同盟軍から引き抜く。感知や情報操作が得意な忍びを選び、新たな部隊を作っていく。木の葉からは、日向、油女、犬塚、うちは等の名前がよく挙げられた。桃からは、俺と長門とサソリを軸に、遊撃隊のメンバーから多く選出した。砂隠れは桃と被るがサソリとその部下達が適任だ。石隠れは、サヨコとその部下がハニートラップを仕掛けるらしい。味わってみたいものだ。草隠れは主に科学者を派遣する。技術的なアプローチで捜査に協力するようだ。滝隠れは元餌羽後メンバーから、感知にも使える“新型”の忍びを多く選出した。

雲隠れのユギトは、今まで通り治安維持に努めてもらったらいい。岩隠れの募ツチは交渉だけ頑張ってくれたらいい。2人に多くは望まない。

月の大筒木一族には大いに協力してもらおう。彼等は目が見えないのをチャクラ感知で補っている。よって全員が高い感知能力を持っている。一般に、自分に似た存在ほど感じ取りやすいので、血の近い分家を感じするのは他の者より容易だろう。戦闘能力も申し分ない。聞くところによると、宗家も分家も全員がハムラの子孫であり、地上と交わることがほぼなく(完全になかったわけではない)、近親婚万歳だったようだ。よって彼等には、平均すると50%弱ハムラの血が流れている。強さもそれ相応だろう。

捜査には大名や商人にも協力を求める。人体実験にはお金が必要だ。実験装置にも、人材にも。お金の流れを追うことで、組織を探し当てることができるかもしれない。資材の流れ自体を追うのも効果的だ。また、優秀な人間は高級酒や美女を好むので、そちら方面でもアプローチできるかもしれない。以上から、情報提供者は大勢いた方がいい。

次に、霧隠れのクーデターの話になる。これは、戦力に余裕のある木の葉と桃とザブザによる話し合いとなる。主な議題は、どうすれば人死にが少なくて済むか。木の葉と桃はどの程度戦力を送ればいいのか。

ザブザが霧隠れを抜けたのは、水影が急に人が変わったように残忍になったためである。そのザブザが言うには、彼が霧隠れを抜ける時に、彼以外にも水影の変貌に疑問を抱く者が多くいたようだ。その疑問を抱いた連中を、味方につけられるかどうか。それが、クーデターとその後の統治の成功を左右する。

ザブザ側の戦力は、ザブザと鬼兄弟（桃隠れには関係ない）と白と水月とその他子ども達のみ。ザブザは上忍の下位程度の実力で、白と水月は中忍程度。他は下忍かそれ未満だ。とてもではないが水影には勝てない。水影は三尾の人柱力だ。間違いなく上忍上位の実力者だろう。

天敵である俺ならば、おそらく楽に勝てる。周りの護衛も、長門と協力すれば勝てるだろう。そもそも同盟軍を導入すれば占領も難しくくない。しかし、正面切つての戦いは死人が出すぎるから、ザブザに扇動を頑張ってもらいたいのだ。

お金で動く忍びはお金で雇い、女で動く忍びはエロ女を紹介すればいい。しかし、最も重要なのはザブザの男気に違いない。

話し合いの結果、ザブザはまず、資金集めとして大企業を乗っ取ることになった。やり玉に上がったのがガトーコーポレーション。黒い噂が絶えない会社なので、卑劣な手で陥れても批判が出にくいだろうという目論見だ。

この3日後、諜報機関NINJAが設立された。

NINJAは早速各国で諜報活動を始める。自分で調べるだけでなく、野次馬根性のある一般人に情報提供を求めたり、商人に資産の流れを調べさせたりもする。ここでは大名の名で従わせることもあった。

初日からNINJAに死人が出た。同盟国内外から、平和を乱す行為だと非難された。予想できたことだ。しかし、耐えなければならぬ。世界を終わらせることが目的であり、その力を持つかもしれない連中を、野放しにすることはできない。

さらに3日後、俺はアバレ、アラレ、長門、ヒザシ、サヌキを率いて岩隠れに交渉に行った。彼等を連れしたのは「こんな化け物連中を量

産しようとしている組織を放っておいていいのか」という論調で脅しをかけるためである。

募ツチの人形で土影邸へひとつ飛び。多数の護衛に囲まれながら面談へ。

サヌキを中心に、簡単にハムラの分家の危険性を説明し、捕獲の協力を要請した。

「世界を終わらせるなんてイカれた連中に味方するはずがないじゃぜ。ただ、そんな訳のわからん連中にかこつけて、敵国のスパイを受け入れるなんてのは道理が通らんぜ」

「火影、川影、風影、3人の長男を岩隠れに留学させよう。我々はそれだけの覚悟がある」

「なんじゃと!?!」

要するに人質をあげようと言うのである。敵国の将来の指導者を洗脳したり、身体情報を得るチャンスでもある。

正直こちらも苦しい。が、子どもが殺される可能性は限りなく低いと思う。殺してしまえば戦争になることは必至。損得で動くオオノキならそんなことはしないはずだ。

「こちらの人間も月に行かせろ。まず事実関係を調べさせろ。話はそれからじゃぜ」

しかし、どうしても交渉は纏まらなかった。相手の言うことも一理あるから仕方ない。

さらに数週間後、うさぎイチゴの遺伝子解析の結果が出た。やはり俺と月の子だった。ただ、妙な反応をする細胞があるらしく、おそらく人為的な手が加わっている。大蛇丸曰く、アバレのように鳥島の実験体である可能性が高い。

ゴキブリは1匹見たら30匹はいるように思えという。赤ちゃんをゴキブリ扱いしたくはないが、俺が確保した実験体だけで2人もいるのだから、鳥島の元には数十か数百かいると考えた方がいいかもしれない。さすがに数百もいたら、金の流れですぐに分かるかもしれないが。

N I N J A 発足から1カ月後、ようやくハムラ分家の足取りをつか

めた。見つけたのは木の葉の油女一族。場所は滝隠れと湯隠れの間。ここ数日、付近で殺人事件や作物の収奪事件が相次いでおり、虫を使つて張つていた。当たりだった。